

---

# IS インフィニット・ストラトス ~ 神の子と謳われし男 ~

黒翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス〜神の子と謳われし男〜

### 【Nコード】

N9964T

### 【作者名】

黒翼

### 【あらすじ】

神の子と呼ばれた一人の男。変幻自在の力で何をするのか。

またまた衝動的に始めた作品です。オリ展開、独自解釈等があるかもです。駄文です。

## プロローグ(前書き)

『もう一人の十刃』が追いついてきたので、3作目です。  
よければ見てください。一応不定期更新の予定です。

## プロローグ

某隠された家。

「準備はできた。こいつを忘れてたらシャレにならんからな」

一人の男がその部屋にはいた。

「さて、そろそろ行くとしますか」

その男の首には赤と白の小さなボールが着いたネックレスがあった。

~~~~~

「お、電話だ。もしもし、なんだ？ 束」

「やつほー、りゅーくん！ 今日からあそこに行くって聞いたからお祝いに電話したんだぜい！」

「……誰に聞いた？ 俺は教えていないんだが」

「愛しの束さんを甘く見ちゃいけないよ？ あそこのデータベースにクラッキングでちょちよいのちよいだ！」

「人のこと言える立場じゃねえけどな、余計なことするな」

「えー。りゅーくん、あれが完成してから連絡くれないんだもん。だから関わりそうなところすべてにクラッキングで情報を集めたんだよ」

「お前はなにがしたいんだよ……」

「何って」

「俺にストーキングと思われたら今度ぶん殴りに行くからな」

「……………悪い虫がつかないように調べ上げたんだよ」

「ちょっと待て。今の間は何だ？　そして結局ストーキングだろ。よしわかった。今度会ったらぶん殴る」

「りゅーくんの一撃って思っている以上に痛いんだよ！？　あんなの受けたらいくら東さんでもただじゃすまないよ！？」

「そんなもの、最初からわかりきっている。ただ、俺の機嫌を損ねるようなことをしたのはお前だ。東さん？」

「ゴメンよりゅーくん、機嫌直して」

「えー。考えておく……かも」

「かもなの！？　どうにかならないかな？　りゅーくん」

「そろそろ時間なんで、切りますね」

「ああっ！　ちょっと待って！　伝えておくことがあって連絡したんだよ！」

「で、用件は？」

「東さん自ら、世界にりゅーくんのことニュースにしてあげるから」

「……は？」

「なにもないまま行かせるのはあれだから、東さんから全世界にりゅーくんのことを説明してあげる」

「………」

「どうしたの？ りゅーくん。あまりの嬉しさに言葉が出ない？ あとねえ、待ち合わせの場所にはちーちゃんがいるから！」

「千冬がいるのか………？」

「そっだよ」

「……やっぱりテメエはぶん殴る」

「ええっ！？ なんで!?!？」

「一つ、余計なことをしたから。二つ、千冬を使ったから」

「ちーちゃんに会えば喜ぶと思ったのにー」

「確かに久しぶりに千冬に合えるのは嬉しいさ。 だがな、千冬を俺の機嫌取りに使ったのが気にいらねえ」

「誤解だつて！ 純粹に喜んでくれるかと思つたんだよ！ 誤解だからね！ ……ピッ！」

「アイツが純粹つて。 束の野郎……、覚悟しとけよ……。 って、やべっ、時間がギリギリだ」

俺は、八神竜牙やがみりゅうがは荷物を持って家を飛び出した。

## 第1話 学園到着（前書き）

さらに変更。家族構成を変更させました。



## 第1話 学園到着

S i d e 〱 千冬〱

「まったく、束め……。一体誰を迎えに行けと……」

腐れ縁の束から連絡が来たと思っただけなら迎えにこいだ。だが、最後のセリフが気になるな……。 「とっても懐かしい顔だよ」だ。

いや、まさかあの人ははずがない。 そうであつたら嬉しいが……。

そして着いた空港。 巨大モニターにはニュースになっていた。

『篠ノ之博士からの声名です！ 先日の一大ニュース、『ISを動かせる男、織斑一夏少年』に引き続き、二人目のISを動かせる男が存在するようです！ 篠ノ之博士から送られてきた音声をどうぞ』

束め、一体何をしている……。

『私が見つけた『ISを動かせる男』、名前は八神竜牙』

え……？

『彼はIS学園に行くことになってるから。 もしも彼になにかあったら、そいつは覚悟しておいた方がいいよ。 彼に恋する人間がいるからね。 彼女たちを敵に回したら、世界が壊されるかもね。』

じゃあね。 バイビー！』

「ふざけんな……！！！！！！」

突如聞こえた叫び声。 この声は……もしかして……！

S i d e 〱 千冬 〱 o u t

S i d e 〱 竜牙 〱

『彼はIS学園に行くことになってるから。 もしも彼になにかあったら、そいつは覚悟しておいた方がいいよ。 彼に恋する人間がいるからね。 彼女たちを敵に回したら、世界が壊されるかもね。』

じゃあね。 バイビー！』

「ふざけんな……！！！！」

俺の心からの叫び。

「あ、やべっ」

急いで隠れる。 今の叫びで俺のほうに注目が集まったが、速攻で隠れる。

俺が隠れた場所に視線が集められたが、しばらくしたら視線が外れた。

「あぶねえあぶねえ……」

そんなことよりも千冬を探さなければ……。

「竜牙さん……?」

探す手間が省けたようだ。

「久しぶりだな、千冬」

その瞬間、千冬に抱きつかれた。

「心配させないでください……」

泣いている様な声で、俺にささやく千冬。

「変わったな、千冬……」

「あなたのせいですよ……。今まで何をしていたんですか!」

「……なあ千冬」

「なんですか?」

「そろそろ離れてくれねえか? 周りの視線が痛い」

「っ! すいません……」

「さて、行くうぜ。話なら聞くから」

「はい」

俺は千冬が乗ってきた車に乗り込んだ。

「竜牙さん、あなたは今までどこに行っていたんですか?」

「その前にさあ、千冬。敬語やめてくれねえか? 前にも言った

よな？」

「いえ、ですが……」

「俺は千冬よりも年下なんだし、なんか変だ」

「あなたを敬語で呼ばないところちが変なんですよ」

「……わかったよ。俺の負けだ」

「で、今までどこに行っていたんですか？」

「世界を回っていた」

「世界を……ですか……？ 一体何のために……？」

「わかってるんだろ？ 家族を探すためだ。両親がが残したこいつと共に」

俺の家族は7年前に謎の失踪をした。原因と居場所は今でも不明だ。両親がいなくなった日に残されていたのが俺のISのコアになっているものと、大量のデータ。俺はこのデータを基に齡8歳からIS作成に取り掛かった。

「完成したんですか？」

「まあな。二人が残してくれたデータを参考に、俺自身が考案したデータも組み込んだ。完成まで6年半かかったがな」

「しかし、小学校に通いながら、たった一人でISを造っていただ

なんて……。未だに信じられないです」

「俺が世界を回り始めたのが6年の終わりだったけか。あのまま学校に通い続けながらコイツを作っていたら未だに完成してねえよ」

「それも理由の一つですか？」

「まあ、そうだな」

「それと東が言っていたことなんですけど……」

「あー、アレか……。まあ、事実だな」

「あなたと言う人は……。人の心配をなんだと思っているんですか！」

「悪かったって。で、まだ俺のことが好きなのか？」

「っ！？ あ、あ、あなたって言う人は、い、いきなりなんて事を言い出すんですか！」

「いや、千冬の反応見てたらさ、そう思えてな。今の俺の状況、なんかハーレム状態なんだよ、俺は……」

「ハーレム！？ あなたはなんてことを！」

「いやさ、世界回ってたら、姉貴の友達とかに出会ってさ……。しばらく一緒に住んでりしてたら寝込みを襲われた」

「……つまり、肉体関係を持つ人がいると……？」

「ああ……。東が言った意味はそれが関係すると思う……」

あの人たちは全員強い。とにかく強い。ISがあるうとなかろうと関係無しに強い。

「……一つ訊いていいですか？」

「……なんだ？」

「そ、その、東とは、し、したのですか……？」

「してない。そもそも東とは連絡くらいしかしてなかったからな」

「そ、そうですか……」

ほっとしたような千冬。

「そ、それと、これからは教師と生徒の関係ですので……」

「わかってるさ。織斑先生」

「なにか違和感が……」

「気にしたら負けだ。と言うことは敬語じゃなくなる？ よっしやー」

「……竜牙さん、あなたはどれだけ私の敬語が嫌なんですか？」

「千冬って強いイメージだからさ、敬語を遣われるとなんか変なん

だよ」

「あなたより強くはありませんよ」

「気持ちの問題だ」

「そんなことは……」

「千冬は一人で一夏をずっと護ってきたんだ。気持ちでは俺よりも、俺の知る誰よりも強い」

そんなこんなでIS学園に着いたわけなんだが、今俺私服。制服は荷物の中。

「更衣室かなんかってない？」

「あ、そうでしたね。私は外で見張っているので、車の中で着替えてください」

「覗き厳禁な」

「わ、わかっています！」

千冬は車外に出た。周りの気配を気にしつつも、手短に着替える。千冬はそわそわしていたが、気になっていたようだ。

「着替え完了。どうだ？」

「似合っています」

「行くつぜ？」

「そうですね」

俺は千冬の後ろについて歩き出す。

「そついえば俺のクラスってどこだ？ 一夏と一緒にか？」

「はい。 1年1組。 私が担任をしています」

「了解」

千冬が担任ね……。

しばらくあるいたら口調、呼び方が変わり、教室に着いた。 仕事  
モードって感じか？

「八神、私が呼んだら入ってこい」

「了解」

Side〜竜牙〜out

Side〜一夏〜

入学式の次の日、千冬姉は遅れて教室に現れた。

「あ、織斑先生、お迎えの方は……」

「廊下にいる」



誰かを迎えに行っていたようだ。 転校生？

「今日は理由があつて遅れてきたものを紹介する。 八神、入れ」

なんか千冬姉の言い方がおかしかったような……。 しかも八神つて……。

「失礼しまーす」

え……？

「八神、挨拶をしろ」

「八神竜牙だ。 訳ありで遅れてきた。 世界で二人目のISを使える男だ。 よろしく頼む」

クラスが静まり返る。 そして……

「「「「「きゃあああああああ！！！！」「」「」「」

女子の叫び。 本当にうるさいな。

「二人目の男子！ しかもイケメン！」

「しかもうちのクラス！」

「クール系！ 護ってもらいたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった〜〜！」

本当にうるさい。どこにそんな元気があるんだって……

「竜牙の兄貴!?!」

「うるさい、黙れ!」

パシンッ!

バキッ!

俺の頭に千冬姉の出席簿アタックと兄貴のチョップ。兄貴のチョップの音、変だったぞ……?」

「久しぶりだな、一夏!」

「お、おう……。竜牙の兄貴……!」

「八神、馬鹿との会話の途中で悪いが、空いている席に座れ!」

「りょうかーい!」

兄貴はそのまま窓側の列の一番後ろの席に座った。

「これでSHRを終了する!」

千冬姉は教室を出て行った。

兄貴もISが使えたなんて……。

Side〜一夏〜out



## 第1話 学園到着（後書き）

竜牙はハーレムをすでに築き上げちゃってます。

これから増える予定でもありません。

感想等、お願いします。

## 設定（前書き）

竜牙の名前とキャラが思いつかなかった結果、結局こうなりました。

## 設定

### 【名前】

やがみりゅうが  
八神竜牙

### 【見た目】

家庭教師ヒットマンREBORN!の獄寺隼人（10年後）見たいな感じ。

### 【プロフィール】

誕生日：9月9日

身長：175cm

体重：58kg

銀髪。

年上に対するフラグ建設が得意（無意識）だが、様々のことに鋭いので、気づいている。

そのおかげでハーレム構成中。寝こみを襲われた経験あり。

一人称は基本『俺』。しゃべりに定まりがなく、ころころと変わることもある。

小学校からすべてにおいてトップで、何でもできた、様々な記録を打ち出したことから『神の子』と呼ばれたりしていた。

小学校6年に世界を回る為に一夏たちの下を去る。その間にISは完成した。

### 【専用IS】

エンペラー  
神帝

### 【説明】

様々なフォームチェンジができる（実質フォームチェンジするのは

全ポケモンの中の一部だけ)。

待機状態はモンスターボールの形をしたネックレス。

フォルムチェンジできるポケモンを呼び出すことができる。

## 設定（後書き）

実に噛み合わない。

そう思うのは作者だけではないはず……。

ISも竜牙もドチート……。



## 第2話 宣戦布告(前書き)

竜牙のイメージキャラ。 REBORN!の結果は獄寺ですが、他にもいいものがあつたのでは? と思う作者です。

## 第2話 宣戦布告

Side(竜牙)

SHR終了後、俺は一夏の席にまで行った。

「久しいな、一夏」

「久しぶり、兄貴」

「だから兄貴は止めろって」

「兄貴は兄貴だ」

「はぁ……」

ため息が出る。なんで俺の思惑通りに行かない奴らばかりなんだろうか……？

「で、お前はなんでISなんで動かしてるんだよ」

「なんでだろ？」

「この馬鹿……!!」

バコッ!

「グハッ!」

俺のデコピン。 え？音が普通じゃないって？ 気にしたら負けだ。

あまりの音に周りの女子が何事かどこっち見てるし。 いや、さっきからずっと見てるのか。

「おー大丈夫か？ 一夏？」

「大丈夫なわけないだろ！？ 兄貴の一撃ってメチャクチャいてえんだから！」

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「あゝあ？」

なんだよこの金髪は。

一夏は素っ頓狂な声だしてんじゃねえよ。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。 訊いているけど………どっとう用件だ？」

「何の用だよ。 用件をとっつとって消えうせる」

「まあ！ なんですよ、そのお返事。 わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「興味ないし（弱者に）」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

セシリアとか言うふざけた女。 うぜえな。

「あ、質問いいか？」

「ふん。 下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。 よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたつ。 聞き耳を立てていた女子がずっこけた。

「この馬鹿……！」

ズドンッ！

本気のデコピンで一夏は沈んだ。

「いいか馬鹿。 代表候補生ってのはな、国家代表IS操縦者の候補として選ばれる一応エリートだ。 お前は単語で想像することすらできなくなったのか？ お前はしばらく見ないうちにそこまでの馬鹿に成り下がったのか？」

「……………」

「いい加減起きろや、馬鹿が！」

ビシッ！ビシッ！ビシッ！  
連続ビンタで意識を取り戻した一夏。

「はっ！ いや、違う！ 違うんだ！ 簡単なことだったから見落としていただけだ！」

「簡単ならなおさら見落とすな！」

「あ、あの」

「何だ！？」

「なぜこのわたくしが話しかけてあげているのに、貴方方の世界で遊ばないでくださいます？ そもそも、本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……………」

「……………馬鹿にしていますの？」

テメエが幸運だって言ったんだろ。自分の発言に責任もてや。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はズレですわ」

「この馬鹿に期待するだけ無駄だ」

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたがたのよ  
うな人間にも優しくしてあげますわよ」

本当にうぜえな。　ここが学校とかじゃなかったらコイツを沈めて  
るのに……。

「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれた  
ら教えて差し上げてもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教  
官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれなら俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなた達も教官を倒したって言うの？」

「うん、まあ。たぶん」

「ちなみに俺はやってないぞ。　やるだけ無駄だって聞いた」

「たぶん！？ やってない！？ どういう意味かしら！？」

「まあ落ち着け」

「こ、これが落ち着いていられ」

キーンコーンカーンコーン。  
話を割ったのは授業開始のチャイム。

「っ……！ またあとで来ますわ！ よくって！？」

来るな。 意識を沈めるぞ。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

俺のここでの初授業は千冬の授業だった。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス対抗戦？ なんだそりゃ？

「クラス代表とはそのままの意味だ。 対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。 ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。 一度決ま

ると一年間変更はないからそのつもりで」

「はいつ。 織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「私は八神君がいいと思います！」

「私は八神君に賛成です！」

メンドクセエナ。

「では候補者は織斑、八神……他にはいないか？ 自薦他薦は問わんぞ」

「お、俺！？」

立ち上がったのは一夏。 推薦されたんだ。 諦める。

「織斑。 席に着け、邪魔だ。 さて、他にはいないのか？ いないなら締め切るぞ」

「ちよつ、ちよつと待った！ 俺はそんなのやらな」

「自薦他薦は問わないといった。 他薦されたものに拒否権などない。 選ばれた以上は覚悟をしる」

諦めるよ一夏。 お前が千冬に逆らえるはずがねえだろ。

バンッ！



「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

チツ。 またこの尼か。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルセツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

うぜえええ！

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。 それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サカスをする気は毛頭ございませんわ！」

ちなみにイギリスも島国です。

そこで少しだけ震える千冬を見つけた。

「（千冬、耐える）」

「（竜牙さん、しかし……）」

「（俺だって耐えてるんだよ。 まあ、一夏が耐え切れるかは心配だけどな）」

「（……わかりました）」

アイコンタクト終了。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

一回黙れや、この金髪ロールが！

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない自体、わたくしにとって耐え難い苦痛で」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

やっぱり耐え切れなかったか……。

「（悪い千冬。一夏に便乗する）」

「（そうしてください。私も祖国を侮辱されているのでイラついているんです）」

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「金髪ロールのセシリア・オルコットさんよお。貴様が先に俺たちの祖国を侮辱したんだろうが」

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけどわざと負けたりしたらわたくしの小間使い  
いえ、奴隷にしますわよ」

「ならお前が負けたら一度だけ俺の命令に従ってもらおう」

「いいですよ！ そんなことありえませんがね！」

「侮るなよ。俺たちは簡単に負けるほど柔じゃない」

「そう？ 何にせよちょうどいいですね。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

「ハンデはどれくらいつける？」

「一夏がそう言った瞬間、クラスから爆笑が巻き起こった。」

「お、織斑君それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「ならいい……」

「オルコット。織斑はともかく八神にはハンデをつけてもらえ」

「ど、どうしてですよ!？」

「貴様如きが、八神に勝つなど天地がひっくり返ってもありはしない。それに、今の八神ならなおさらだ。なら宣言しよう。オルコット、お前は八神に一撃も入れることなく敗北する」

「過大評価し過ぎだっつて」

「過大評価ではない。紛れもない事実だ」

「結構です！ ハンデなどいりませんわ！」

せっかく千冬が教えたのに……。

「それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑、八神、オルコットはそれぞれ準備しておくように。では授業を始める」

俺の、俺と神帝の、<sup>エンペラー</sup>ここでの初陣だ。粹がった女を完膚なきまでに叩きのめす。

そして放課後、

「ああ、織斑君、八神君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

山田先生が教室に入ってきた。

「なんですか？」

「えつとですね、寮の部屋割りが決まりました」

そう言っつて部屋番号の書かれた紙とキーを渡す山田先生。

「俺の部屋っつて決まっつてないんじゃないんですか？ 前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらっつて話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです。政府特例もあつて、とにかく寮に入れることを最優先にしてみました。一ヶ月もすれば別の部屋が用意できるので、しばらく我慢してください」

「わかりました。　　そういえば竜牙の兄貴っつて部屋決まっつてるんですか？」

一夏が訊いていた。

「八神君は部屋割りが合わなかったので織斑先生と同室になります」  
マジで？

「なら俺は一度家に帰って荷物を……」

「織斑の荷物は既に準備してある。生活必需品だけだがな。着替えと、携帯の充電器があればいいだろう」

さすがは千冬。大雑把だ。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとってください。ちなみに各部屋にはシャワーもありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと織斑君達は今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

「お前はそこまで落ちぶれてしまったのか……。俺は…グスツ…  
兄貴としても恥ずかしい……」

「え？ ちょっと泣かないで！俺が惨めになってくるから！」

ウソ泣きの演技。

「そうと感じているのなら勉強しろ。馬鹿」

「え？ ウソ泣き！？ またやられた！」

「で、俺らが風呂に入れないのは、同年代の女子と入るわけにはい

「かんだろっ」

「あ、なるほど……」

「おっ、織斑君っ、女子とお風呂は入りたいんですか！？ だっ、ダメですよー！」

「い、いや、入りたくないです」

「えっと、それじゃ私達は会議があるので、これで。織斑君達、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃだめですよ」

確か、校舎から寮まで50メートルくらいしかなかったような。どうすれば道草をくうんだ？

俺は疑問を抱きながら部屋に入った。

Side↳竜牙↳out

## 第2話 宣戦布告（後書き）

セシリア死亡フラグ（死にませんけどね）。

フラグは予測してください。

感想等、お願いします。



第3話 篠ノ之騒ぎ(前書き)

ちよつと変更しました。

### 第3話 篠ノ之騒ぎ

Side 〱 竜牙

「千冬と同じ部屋ねえ……。どうすればいいんだ？」

しばらくは千冬と同じ部屋になった俺。大して気にしてないが、千冬がね。

「さてと、神帝の確認でも(〰〰〰)」

神帝の調整でもしようと思ったら、電話。しかもこの着歌はあいつらのうちの誰かだ。

「もしもし竜牙君？」

「あ、なのはか。なんだ？」

「竜牙君に何かあったような気がして、気になってね」

「具体的にどんな？」

「女の子がいつぱい集まってる感じ」

「お前はなんだ？ 予知でもできるのか？」

「さすがに予知はできないよ。ただ、竜牙君のことには鋭いかな」

「鋭すぎだ。まあ、IS学園に転入したかな」

「……聞いてないよ？」

「言っていないけど？」

「心配するじゃない。ちゃんと連絡くらいしてよね」

「あー悪い。で、フェイトたちは元気か？」

「うん、元気だよ。みんな心配してるんだから偶には連絡する」と。  
「いいね？」

「了解」

なのはって怒るとマジで怖い。なるべく逆らわないようにしている俺。なのはがそこまで怖くなるほど怒ることは少ないけど。

「竜牙さん、戻りました」

「……竜牙君、今の女の人の声、誰？」

「千冬だよ。部屋割りが間に合わなかったらしくてな。しばらくは相部屋だとさ」

「へえ……。わかってると思うけど、襲っちゃダメだよ」

「んなことはわかりきってる。そんなことするつもりはないがな。逆に襲われそうだし」

「ふふ、あるかもね。されたことあるしね」

「おめえらがしたんだろうが」

「あれは竜牙君も悪いんだよ？」

「なんでだよ……」

「だって告白してもスルーなんだもの」

「お前らみたいな奴に同時に告白されてすぐに答えなんて出るか。俺はみんな好きなんだから」

「わかってるよ。じゃあね竜牙君。ちゃんと連絡してね」

「わかってるって。じゃあな。おやすみ」

「おやすみ、竜牙君（ピッ！）」

なのはとの電話終了。で、千冬の視線が怖い。大して怖くはないけど。

「竜牙さん。今の電話は一体……」

「なのはだ。姉貴の友達。俺が好きな人の一人」

「そうですか……。では彼女がそうなんですか？」

「ああ。その内の一人だ」

「それと気になったのですが、竜牙さんが襲われるかもとは誰を指

していったのですか？」

「お前以外に誰がいるんだよ」

「な、な、なんてことを言い出すんですか！　そ、そんなこと……」

「絶対にないってか？　俺はそうは思えないが？　俺からはないってことは言っておくさ」

顔を真っ赤にした千冬。　ギャップすげえな。

「んじゃ、俺はISの確認するんで」

「竜牙さんのISは？」

「これだ」

服の下に隠れていた赤と白のボールがついたネックレスを見せる。

「それがそうなんですな」

「ああ。俺が作り上げたIS『エンペラー神帝』だ」

「お手並み、拝見させて頂きます」

「見てろ。最高のISの力をな」

俺のIS『神帝』は世界最高のISと自負している。

「あ、そうだ。サーナイト、紅茶頼む」

待機状態の神帝から光が放たれ、サーナイトが現れる。

「えーと、竜牙さん？ あれは一体……」

「俺のISは特別でな。 あんなのを呼び出せるんだよ」

まだ見せてないので詳しいことは伏せておく。

「ちなみにアイツはサーナイトだ」

サーナイトには紅茶を持ってこさせたり、お茶を出してもらったり、物を運んだりするときに手伝ってもらったり、俺のお手伝いをよくさせている。

「さてと、とつとと終わらせるか」

カタカタカタカタ……。 束以上のタイピングでどんどん進める。

サーナイトが持ってきた紅茶を飲みながらも作業を進める。

「あ、サーナイト、千冬にも紅茶」

いかんいかん。 すっかり千冬の分を忘れていた。

「昔の二つ名は健在ですね」

俺の手並みを見てそう述べた。

「二つ名？ あー、そんなのあったな」

「『神の子』八神竜牙。小学生につける二つ名ではないですが、あなたにはぴつたりです」

「神の子ねえ」

そんな二つ名があつた。小学生につけるあだ名じゃねえって。せめて『神童』ならまだわかるが、『神の子』ってのは行き過ぎだろ。

「終了っ」と

「さすがですね。話しながらもペースを落とすことなく終わらせるなんて」

「それはどうも。そういえばシャワーとかどうする？」

「私は遅くなることが多いので後にさせてもらいます」

「んじゃ、そういついこと。後はなんかあるか？」

「いえ、特には」

「そんじゃあ、俺、シャワー浴びていいか？」

「どうぞ」

シャワーを浴びてから俺はすぐに寝た。

翌朝。

「お前は箒に何をしたんだ？」

俺の目の前には明らかに不機嫌な幼馴染ので束の妹、篠ノ之箒と夏がいる。

「い、いや、何もしてない」

「で、何したんだ？ 何されたんだ？」

「無視かよ!？」

「コイツに襲われたか？ こいつにそんな度胸はないと思うがな」

「誰が襲うか！ へんな事を言わないでくれ」

「こいつが悪いんです！ コイツが!」

「相変わらずなのね、コイツは」

フラグメーカーで超鈍感。これが俺の中の「夏への二つ名」あ、もう一個あった。 シスコン。

「なあ、兄貴……」



「何だ？」

「今ヘンなこと考えてなかった？」

「至って普通のことを考えていたつもりだが？ てか人の思考を読めるようになったのか？」

「いや、なんとなく」

なんだ、ただの勘か。 残念。

「大変ですな。 このアホに関わる人みんな」

「そうですね」

「ん？ なにが？」

「「はああ……」」

「どうした？ ため息なんてついて」

「お前が気にするだけ無駄だ。 俺先行くわ」

教室へと向かった。

Side↳竜牙↳out

Side↳一夏↳

なんとかなると思った勉強が一切わからない。単語はある程度わかるが、根本的に理解不能の箇所もある。で、頼みの綱の兄貴はと言つと……

「ぐう……」

大絶賛昼寝中だ。しかも千冬姉の前で。さっきから注意する気配が見られない。正確にはやるだけ無駄。やると回避か受け止められるかカウンターされる。小学校のときに兄貴の被害にあった先生が結構いる。

「あ、あの、織斑先生」

「なんだ？」

「八神君を起こさなくてもいいんですか？」

やっぱり誰かが突っ込んだ。

「コイツのISの知識はこの学園の誰よりも豊富と言つのもあるが、まあ見てろ」

千冬姉が兄貴に出席簿を投げる。普通は投げませんよ？ 振り下ろすんです。振り下ろさない理由、簡単です。反撃を受けるからです。

バシッ！

兄貴が寝たまま飛んできた出席簿を打ち返す。みんな啞然として

いる。

「ごういうことだ。 試しに誰かやってみるか？」

「私やってみたい！」

誰だ、こんな無謀なことをするチャレンジャーは。 その女子は兄貴の席まで行き、肩に触れようとした瞬間、その手を掴み、捻った。

「いたたたたっ！」

「……ん？ どしたの？」

「や、八神君、は、放して」

とりあえずその女子の手を放す。

「なんでごうなつてんの？ ああ、そういうことか。 誰か忠告しなかったの？ 特に一夏に幕に干……織斑先生」

完全に名前と呼ぼうとしたよね。

「したが、ソイツは無謀なチャレンジャーだったただけだ」

「なるほど。 じゃあ、おやすみ……ぐう……」

「」「」「寝るの早っ！」「」「」

兄貴が机に顔を埋めてすぐに寝息が聞こえた。

「……えー、授業を再開する」

一度寝た兄貴は放置しておくのが一番いい。安全だから。

授業終了後、女子に囲まれた。兄貴はまだ寝ている。

「ねえねえ、織斑君さあ！」

「はいはい、質問しつもん！」

「今日のお昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

今『もう出遅れるわけにはいかないわ！』って聞こえたのは、気のせいじゃないんだろうな。あ、兄貴眺めてる人もいるや。

「いや、一度に訊かれても」

俺で商売をする女子もいるし。

「千冬お姉さまって自宅ではどんな感じなの！？」

「え。 案外だらしな」

パンツ！

ズガンツ！

「休み時間は終わりだ。 散れ」

「一夏よお。 いくら実の姉でも人のプライベートを勝手に話すの

はダメだろ」

「「「「「いつの間にか起きたの!?!?!?!」」」」」

「いや、知り合いのプライベートを話そうとする馬鹿な族の気配を感じたから消しゴム投げて黙らせようと、今起きた」

消しゴムである音出るの!?! 痛かったんだけど、柔らかかったよ  
うな感じはしたのはそのせいかな。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ?」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意する  
そうだ」

「????」

俺がちんぷんかんぷんでいると、教室中がざわめいた。

「せ、専用機!?! 一年の、しかもこの時期に!?!」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」

「ああ……。いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

何が羨ましいのかさっぱりだ。

「八神、この馬鹿に説明してやれ」

「うーす。 ISのコアを作ることは篠ノ之束以外にはできず、今現在世界にあるISのコアは467個。 篠ノ之束は一定数以上のコアを作ること拒絶していて、国家や組織などは割り振られたコアを使用して開発などを行っている」

「大分省略されているが、そういうことだ。 本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。 が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。 理解できたか？」

「な、なんとなく……」

整理すると、ISのコアは世界に467個しかなく、コアは篠ノ之博士以外は作れなくて、今は作ってない。 で、俺は特別待遇で実験体。

なんとなくわかった。

「あれ？ そういうことなら兄貴は？」

「八神はすでに持っている」

「……え！？」「……」

「これだ」

赤と白のボールがついたネットレス。

「……ええええええええ！」「……」

女子の絶叫。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

女子の一人がこの空気の中でおずおずと千冬姉に質問した。……まあ、篠ノ之なんて名字、そうそうないしいつかはバレるよな。

「そうだ。篠ノ之はアイツの妹だ」

個人情報バラしていいのか。

「ええええーっ！ す、すごい！ このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？ やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？ 今度ISの操縦教えてよっ」  
授業中なのに筭の元に女子が群がる。

「あの人は関係ない！」

突然の大声。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何も無い」

「そっだぜ」。東の妹の筭が天才だったら、一夏はとてつもなく

強いつてことになるぞ。 実際、一夏は弱いし、箒は天才でもない。 有名人の身内ってだけで人を判断するな。 この話は終わり」

話に割って入ったのは兄貴で、そのままこの場の空気を鎮圧させた。

「さて、授業を始めるぞ。 山田先生、号令」

「は、はいっ！」

山田先生も箒のことが気になっていたようだが、ちゃんと授業を始めた。

S i d e 一 夏 一 o u t



### 第3話 篠ノ之騒ぎ（後書き）

アニメしか見てないのでなのはたちの口調とかが変わるかもしれない。  
せん。

神帝は便利です。普通に使えます。呼び出されたポケモンはそのままの力も使えます。サイコキネシスや火炎放射などできます。  
ます。

感想等お願いしますm( ) ( ) m

## 第4話 訓練

Side 竜牙

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていませんわ。ただでしょうけど」

また来たか。この金髪縦ロール。

「まあ？ 一応勝負は見えていますけど？ さすがにフェアではありませんものね」

「？ なんで？」

「あら、ご存じないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて。この女は代表候補生。つまり、一応は専用機を持っている」「一応ではありませんわ！」

「へー」

「……馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーなと思ったただけけど。どうすげーのかはわからないが。それに兄貴も持ってるし」

「ちなみに、俺のISは世界最高と自負しているからな」

「よっぽど自惚れているようですね」

「お前が言つな。それに事実だ。俺なら訓練機でも貴様如きになら普通に勝てるぞ」

「減らず口を……。いいですわ、当日が楽しみですわ。このクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

ついでにうざい奴と言つことも憶えておいてやるつ。

「どづいづことだ」

「いや、どづいづことって言われても……」

放課後、剣道場にて一夏は幕にフルボッコにされていた。

「どづしてここまで弱くなっている!？」

「受験勉強してたから、かな？」

「……中学では何部に所属していた？」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

「なおす」

「はい？」

「鍛えなおす！ IS以前の問題だ！ これから毎日、放課後に私が稽古をつけてやる！」

「面白そうだから俺も参加する」

「お願いします。この軟弱者を鍛えましょう」

「さてさて一夏くん。今から俺とやりましょうか。10分で俺の体の一部に竹刀を触れさせることができたらお前の勝ち。できなければ俺の勝ち。やるぞ」

「竜牙さん、防具は……」

「着るだけ無駄。今の一夏が俺に触れるなんて天地がひっくり返ってもありえない」

「それもそうですね」

「さて、やるぞ一夏。遊んでやる」

「いくら兄貴でも容赦しねえぜ！」

意気込んで突っ込んでくる一夏。その精神はいいんだけどな……。

で、10分後、一夏は剣道場に延びていた。

「弱いな、弱すぎる。俺を動かすこともできんのか」

俺は10分間一歩も動いていない。一夏の攻撃をすべて受け流し反撃の繰り返しで、結局、一夏は10分間全力で動き続きたが、服に触れることはできなかった。

「す、すい……」

「息も切らさずに10分間凌いじやった……」

観客がうるさいねえ。

「さすがですね。勝てる気がしません」

「俺がどんな生活をしてきたと思っているんだ」

フェイトやシグナムとの模擬戦。マジでやばかった。アレは死ぬる。おかげでここまで強くなったんだが。

「えーと、……なんかすいません」

「気にしたら負けだ」

「そついつことしておきます」

はあ。それにしても弱すぎだ。

S i d e ～ 竜 牙 ～ o u t

S i d e ～ 一 夏 ～

そして翌週の月曜日。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

山田先生が第三アリーナ・Aピットに駆け足でやってきた。この人見てるとこっちが本気でハラハラする。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す～～は～～、す～～は～～」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

マジで止めたよ、この人。

「……ぶはあっ！ ま、まだですかあ？」

パンツ！

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

「千冬姉……」

パンツ！

「織斑先生と呼べ。 学習しろ。 さもなくば死ね」

とても教育者とは思えない言葉だ。

「そ、そ、それですねっ！ 来ました！ 織斑くんの専用IS！」

え？

「織斑、すぐに準備をしろ。 アリーナを使用できる時間は限られているからな。 ぶっつけ本番でのにしろ」

はい？

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。 一夏」

あの？

「あの女に目に物を見せてやれ」

なに？

「「「早く！」「「「

四人の声が重なる。

ごごんっ、鈍い音がして、ピット搬入口が開く。

そこに『白』がいた。

「これが……」

「はい！ 織斑君の専用IS「白式」です！」

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

せかされて純白のISに触れる。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をする」

千冬姉の言葉通り、装甲を開いているIS 白式に体を任せる。解像度を一気に上げたかのようなクリアな感覚が視覚を中心に広がって、全身に行き渡る。各種センサーが告げてくる値は、どれも普段から見ているかのように理解できる。

「あ」

戦闘待機状態のISを感知。 操縦者セシリア・オルコット。  
ISネーム『ブルー・ティアーズ』。 戦闘タイプ中遠距離射撃型。 特殊装備あり。

「ハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

千冬姉の微妙な声の震えに気づいた。 ああ、心配してくれて  
いるんだ。

「大丈夫、千冬姉。いける」



「そうか」

ほっとしたような声に聞こえた。

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

ゲート解放まであと2 / 05718422秒  
いる。

『敵』がそこに

Side ~ 夏 ~ out

## 第4話 訓練(後書き)

今回は一夏VSセシリアです。

竜牙のIS、神帝のバトルもあるかもです(戦闘シーンが一番ダメですが……)。

感想等お願いしますm( ) ( ) m

第5話 クラス代表決定戦！ ―夏VSセシリア（前書き）

結局竜牙の戦闘は次回になりました。

## 第5話 クラス代表決定戦！ 一夏VSセシリア

S i d e 一夏

「あら、逃げずに来ましたのね」

相変わらず腰に手を当てたポーズが様になっている。

セシリアが纏うのは、青色の機体『ブルー・ティアーズ』。

特徴的なフィン・アーマーを4枚背に従え、どこかの王族騎士のよ  
うな気高さを感じさせる。

それを駆るセシリアの手には二メートルを超す長大な銃器、六七口  
径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』が握られていた。

アリーナ・ステージの直径は200メートル。すでに試合開始の  
鐘はなっているので、いつ撃つて来てもおかしくない。

「最後のチャンスをおげますわ」

「チャンスって?」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロ  
ボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、  
許してあげないこともなくってよ」

警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフテ  
イーロックの解除を確認。

ハイパーセンサーが告げた。

「そういうのはチャンスとは言わないな」

「そう？ 残念ですわ。 それなら」

警告！ 敵IS射撃体勢に移行。 トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね！」

耳をつんざくような独特の音。 それと同時に走った閃光が刹那、俺の体を撃ち抜いた。

「うおっ!?!」

バリアー貫通、ダメージ46、シールドエネルギー残量、5  
21。 実体ダメージ、レベル低。

「さあ、踊りなさい。 わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲<sup>フルツ</sup>で！」

俺の武器は『近接ブレード』と書かれた装備しかなかった。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で挑もうだなんて………笑止ですわ！」

「せつてせむね」

「 二十七分。 持った方ですわね。 褒めて差し上げますわ」

「そりゃどうも……」

シールドエネルギーの残量は67。 実体ダメージ中破。 武器は  
かろうじて使えている。

「このブルー・ティアーズを前に、初見でこうまで耐えたのはあなた  
が初めてですわね」

フィン状の自立起動兵器はややこしいことに『ブルー・ティアーズ』  
というらしい。

「では、閉幕と参りましょう」

セシリアの命令により、ブルー・ティアーズ 以降ビットもし  
くはBT が二機多角的な直線機動で接近してくる。

「くっ……!」

上下に回ったそれらビットがレーザーを放ってくる。それをころうじて防御、回避する。

「左足、いただきますわ」

まずい! 装甲を失っているそこに攻撃を喰らえば、必ず『絶対防御』が発動する。そうしたらシールドエネルギーは残量0。俺の負けになる。なら。一か八か

「ぜあああつ!!!」

俺の体はセシリアのライフル銃身に正面からぶつかった。その衝撃で砲口が逸れ、とどめの一撃を免れる。

「なっ……!?! 無茶苦茶しますわね。けれど、無駄な足掻きっ!」

セシリアは距離をとり、空いている左手を横に振る。それまで周囲の空間に待機していたビットが俺に向かって飛んできた。

よし、わかってきたぞ。

レーザーをくぐり抜け、一閃。ビットを一機撃墜した。

「なんですって!?!」

驚愕するセシリアに向けて、俺は上段打突の構えで斬り込む。

「くっ……!!」

後方に回避するセシリア、そしてまたそのまま右手を振るう。そしてビット2と3が飛んでくる。

「この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない！ しかも

」

軌道を先読みし、ビット2の後部推進器を破壊して落とす。これで二機！

「その時、お前はそれ以外の攻撃が出来ない。制御に集中させているからだ。そうだろ？」

「……………!!」

図星だな。残りビットは後二機。しかも軌道は読めた。あれは必ず俺の反応が一番遅い角度を狙ってくる。俺はやつと見え始めた勝利に、僅かに胸を躍らせた。

Side〜一夏〜out

Side〜竜牙〜

「なあ、織斑先生よお」

「なんだ八神」

「一夏、どっしり思っ〜」



「浮かれているな」

「やっぱり？」

「ああ。さつきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

「へえええ……。さすがご姉弟ですねー。そんな細かいところまでわかるなんて」

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」

「あー、照れてるんですかー？ 照れてるんですねー？」  
「……………」

ぎりりりりっ。千冬が山田先生にヘッドロックをかけていた。

「いたたたたたっっ!!」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！ わかりました！ わかりましたから、離しあううっっ!!」

俺は千冬たちを横目に見ていた感想を述べた。

「はあ……。でもまあ、よくここまで持った方だな」

モニターを見ると、一夏は展開されていたビットをし、セシリアに接近していた。

『おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ!』

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマーの突起が外れ、動いた。それは『弾道型』のビットだった。

ドカアアアッ!!

一夏は爆発に包まれた。

「ふん」

「タイミングがいいな」

「機体に救われたな、馬鹿者め」

煙が吹き飛ばされ、その中心には、純白の機体があった。

真の姿で。

S i d e 〱 竜牙 〱 o u t

S i d e 〱 一夏 〱

「ま、まさか……一次移行!? あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの!?!」

俺の専用機となった白式は、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的などこか中世の鎧を思わせるデザインへと変わっている。

そして、何よりも変わった武器は……

近接特化ブレード・《雪片式型》。

雪片。かつて千冬姉が振るっていた刀の名称。刀に型成した形名。それが雪片。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

3年前も、6年前も、そしておそらく15年前も。あの人はいつでも俺の姉だ。でもそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしよう。これからは

「俺も、俺の家族を守る」

「……は？ あなた、何を言って」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

元日本代表の、その弟。それが不出来では、格好が付かない。そう、あの格好いい千冬姉が格好が付かないなんて、冗談もいいところだ。しかも、笑えない。

「というか、逆に笑われるだろ」

「だからさっきから何の話を……ああもう、面倒ですわー！」

弾頭を再装填されたビットが二機、セシリアの命令で飛んでくる。  
だが

(見える……！)

ギンツ  
！

横一闪。両断されたビットは、けれど慣性のまま俺の横を通り過ぎて、そして爆ぜた。

「おおおおっ！」

俺の手の中でエネルギーがその密度を増していくのを感じる。刹那、雪片式型の刀身が光を帯び、より強い力の存在を俺に伝えてきた。

(いける……！)

懐に飛び込んだ俺は、下段から上段への逆袈裟払いを放つ。

が、その斬撃が当たる直前に決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。 勝者 セシリア・オルコット』

……え？

「あれ……？」

たぶん俺は全力で「なんで？」という顔をしていたことだろう。それは俺だけでなく、ギャラリーも「なんで？」と言う表情をしていた。

ただ二人、兄貴と千冬姉は「やれやれ」という顔をしている。何が起こったかわからないまま、試合は終了して、結果俺は負けた。

S i d e ー 夏 ー o u t

第5話 クラス代表決定戦！ 一夏VSセシリア（後書き）

長くなりそうなので竜牙の戦闘は次回です。  
感想等、お願いします。

## 第6話 クラス代表決定！

Side 竜牙

結局一夏は負けた。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

「武器の特性を考えずに使うから負けるんだよ。馬鹿。暇があったら訓練しろ」

「……はい」

「で、俺の試合はいつになるんだ？」

「一時間後の予定だ。それまでに準備をしておけ」

「了解」

一時間か、暇だな。

「俺ってこの馬鹿と闘う必要ないんだよな？」

「あの天狗女に勝てばな」

「じゃあ100%ないわ。面倒事が減ってよかったよかった」

俺が緒の程度の奴に負けることは天地がひっくり返ってもありえな

い。

それからの一時間、俺は軽く寝ていた。

「時間が。行くぞ、<sup>エンペラー</sup>『神帝』フォーム・ミュウツー」

俺が展開したのはミュウツーの力を持つフォーム。白っぽいボディに紫の尻尾。  
本来ならもつと弱いフォームを選択したところだが、今回はそうはいかない。

「それが、兄貴のIS……」

「ああ。行ってくる」

俺がゲートに出て、少ししたらセシリアが現れた。

「『神帝』立派な名前のこと」

「名前とコイツの能力はぴったりだがな。わかるか？ 初心者の一夏に追い詰められた代表候補生さん」

「油断しただけですわ！ 問題ありませんわ！」

油断しただけダメだろうが。

「じゃあ始めようぜ。すぐに終わらせてやる」

今までの憂さ晴らしも含めて、相手をしてやるよ。



「減らず口を……！　あなたの世界最高とやらをわたくしに見せてみなさい！」

セシリアはレーザーを放ってくるが、俺には効かない。

「サイコキネシス」

レーザーは光に包まれ霧散する。

「なんですって！？」

「この程度か……」

俺は両手に青い球体を創りだし、セシリアに向かって放ち、直撃する。

「くっ……！！」

「サイコカッター」

紫の斬撃を飛ばす。

「そんなもの！」

避けられるが、連続で放つ。　始めは避けれていたが、あまりの数にあたり始めていた。

「お得意のビットも出さずに終わりか？　大したことないな」

挑発。

「行きなさい、ティアーズ！」

乗ったし。まあ、すぐに破壊するんだがな。  
サイコキネシスで、すべてのビットを捕らえ、そのまま破壊する。

「一体何が……」

「じゃあな、天狗。こいつの最強で終わらせてやるよ。サイコ  
ブレイク！」

実体化した念波がセシリアに襲い掛かる。非殺傷設定にしてある  
から悪くても気絶だな。

『試合終了。 勝者 八神竜牙』

セシリアはサイコブレイクの威力に耐えられず気絶したようだった。  
俺はサイコキネシスでビットにまで運んでおいた。

「終わったぞ」

「早かったな。 まあ、当然だな」

千冬は声を掛けるが、一夏、篝、山田先生はポカンとしている。  
俺は神帝を解除する。

「いつまで口を開けるつもりだ？」

「す、すげえ！」

「さすがです、竜牙さん」

「まあ、あれはさすがにやりすぎちまったがな」

苦笑する俺。だが、一度着いた火はなかなか消えない。

「兄貴！ 俺を鍛えてくれ！」

「竜牙さん、私もお願いします！」

「え」

「頼む兄貴！」

「お願いします、竜牙さん！」

「はああ……。わあったよ」

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

こうして、クラス代表決定戦は幕を閉じた。

そして翌日のSHR。

「では、一年一組代表は織斑一夏くん、その補佐に八神竜牙君に決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

一夏は暗い顔をしていた。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？俺よりも竜牙の方が適任だと思っんですが」

「悪いな、一夏。俺は辞退した。その代わりに補佐はしてやる」

「交換条件になってない！」

「敗者が何を言う。弱者は強者に従え」

「それじゃあオルコットさんは？」

「わたくしも辞退したからですわ」

「なんてことをしてくれたんだ！」

「「うるさい」「」

バシンッ！

ズガンッ！

千冬の出席簿と俺の消しゴムが同時に火を噴いた。

「で、でも千冬姉！」

「織斑先生と呼べ、いい加減学べ」

「……すみません」

「諦める一夏」

「うう……」

「クラス代表は織斑一夏、依存はないな」

「一夏以外のクラスメイトが返事をした。」

S i d e ㄱ 竜牙 ㄱ o u t

## 第6話 クラス代表決定！（後書き）

竜牙の初陣フォルムはミュウツーでした。

他のフォルムもよかったです。初陣は圧倒的に思ったら、伝説系のポケモンがいいと思いましたが、ミュウツーになりました。それではまた次回。

第7話 パーティー（前書き）

なんとか二話投稿できました。

## 第7話 パーティー

Side 〱 竜牙

「ではこれよりISの基本的な飛行実践を実践してもらおう。織斑、八神、オルコット。試しに飛んでみせる」

俺たちは今、千冬の授業を受けている。

「早くしろ。 熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

ふと横を見ると一夏は急かされていた。どのフォームにしようか。

「どうした八神。 早く展開しろ」

「失礼。 ちょっと待て。 ……決めた」

俺はカイリユーフォームで展開する。

「あれ？ 兄貴、昨日と姿が違う？」

「竜牙さん、その姿は一体……」

「ああ、言ってなかったな。 俺のIS『神帝』は複数のフォームが存在するんだよ」

「……………は？」「……………」





「それを説明するとお前の頭がパンクするから止めとけ」

「わかった。説明しなくていい」

「そう、残念ですわ」

こいつも一夏の毒牙にやられたようだ。相変わらずのフラグ建設能力だな。……俺も人のことは言えんが。あの試合の後、何かと一夏の特訓の相手を買おうとしているが、俺がいるので俺の指導下に納まった。

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りて来い！」

筈はセシリアと話しているのが気になるのか。山田先生のインカムを奪ってまで叫ぶほどか？

「織斑、八神、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から10センチだ。八神は地表から1センチだ」

「了解。俺は先に行くから」

一気に急降下。地表スレスレの1ミリのところで止まって見せた。

「さすがだな」

クラスメイトは拍手をしている。

次に来たのはセシリア。さすが代表候補生、難なくクリア。そして最後の一夏は

ギョーンッ

ズドオオンッ！！

……墜落した。見事にグラウンドにクレーターを作り上げた。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

「情けないぞ、一夏。昨日練習したばかりではないか」

昨日練習したけど、マスターしたわけじゃねえよ。

「大体だな一夏、お前というやつは昔から」

「大丈夫ですか、一夏さん？ お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

「……ISを装備していて怪我などするわけないだろう……」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ。常識でしょ？」

箒とセシリアの口論勃発。

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりはマシですわ」

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやっている」

「織斑、武装を展開しろ。八神は……」

「俺のISに武装はないんでパス」

「八神は見ている」

「了解」

「でははじめろ」

一夏は雪片式型を展開する。

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

だよなあ。

「オルコット、武装を展開しろ」

一秒と経たずに展開、射撃可能まで完了していた。

「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズはやめろ。

横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な

」

「直せ。いいな」

「……はい」

千冬は基本的絶対だ。

「オルコット、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

手の中の光はなかなか像を結ばず、空中をさまよっている。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。                    ああ、もっっ！《インターセプター》！」

初心者用の手段であるため、代表候補生であるセシリアにとっては相当屈辱的なことだろう。

「……何秒かかっている。            お前は、実践でも相手に待ってもらおうのか？」

「じ、実践では近接の間合いに入らせません！            ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。            織斑との試合で簡単に懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その……」

正論を言われたので反論できるはずがない。

俺は懐に入っていないし。飛ぶ攻撃を選んで闘ったんだし。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

自業自。

「がんばれ、一夏」

ポケモンに手助けさせるのもありなんだけどな。

「というわけでっ！ 織斑くんクラス代表決定おめでとっ！」

「おめでとっ！」

クラッカーが乱射される。寮の食堂で騒いでいいのか？  
俺の隣で一夏がブルーになっていた。

「クラス代表、がんばれよ。一夏」

「元はと言えば兄貴が辞退なんてするから！」

「俺は補佐役になってんだからいい加減黙れ」

「兄貴の方が適任なのに！」

「諦める。もう決まったことだ」

「絶対見返してやる」

「無理」

一夏はさらにブルーになった。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君と数多の姿を持つ噂のISを駆る八神竜牙君にインタビューをしましに来ました〜！」

周りはオーとさらに盛り上がる。

「あ、私は二年の黛<sup>黒</sup>薫子<sup>みかほろこ</sup>。よろしくね。新聞部副部長やってます」

そうですか。

「ではまず織斑君！ クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「まあ、なんとというか、頑張ります」

「えー。もつといいコメントちょうだいよ。俺に障るとヤケドするぜ、とか！」

随分と古いセリフで。

「自分、不器用ですから」

これも古い。

「うーん、じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとしてするなよ。」

「じゃあ、次に八神君、あのISの正体は！」

「トップシークレット。教えるわけにはいかんな」

「うーん、それは残念だけど、今は織斑先生と同じ部屋に住んでいるようですが、織斑先生はどのような生活を？」

「個人情報だから教えるわけにはいかない。別に教えてもいいけど、後悔するのはあんたらだぜ？」

「えー。セシリアちゃんもコメント頂戴」

逃げたな。



「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

満更でもないんじゃないか？

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかというと、それはつまり」

「ああ、長そつだからいいや。写真だけちよつだい」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造をしておくから。よし、織斑君に惚れたからってことにしよう」

お、真実をいきなり言い当てた。

「なつ、な、ななつ……！？」

「じゃ、俺戻るから」

「え？」

すでにフーディンはレポートの準備はできている。

「じゃあな」

俺は食堂から消えた。

あのパーティーは10時過ぎまで続いたらしい。

S i d e ~ 龍牙 ~ o u t

## 第7話 パーティー（後書き）

中国娘は次回の登場。

これからは神帝の能力を多用させるつもりです。

感想等お願いしますm(´`)(´` )m

## 第8話 中国代表候補生

S i d e 一 夏

「ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？今の時期に？」

今はまだ4月。このIS学園への転入は条件が厳しい。試験はもちろん、国の推薦がないとできないようになってい

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

セシリア・オルコットは今朝もまた、腰に手を当てたポーズが似合う。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろうか？ 騒ぐほどのことでもあるまい」

篤がいつの間にか俺のそばに来ていた。

「どんなやつなんだろうな」

「む……気になるのか？」

「ん？ ああ、少しは」

「ふん……」

「今の一夏は女を気にするほどの余裕があるのか？ 来月はクラス対抗戦があるんだぞ」

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！ 一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。 男たるものそのような弱気でどうする」

「負けたら罰ゲームな」

「織斑くんが勝つとクラスのみんなが幸せだよ」

セシリア、篝、兄貴、クラスメイトの順で好きなことを言っていく。

「織斑くん、がんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持っているクラスは一組と四組だけだから余裕だよ」

「その情報、古いよ」

教室の入り口から声が聞こえた。

「二組も専用気持ちでクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？ お前、鈴か？」

「お、懐かしいな」

「そうよ。 中国代表候補生、鳳鈴音。 今日には宣戦布告に来たつてわけ」

「何格好付けてるんだ？ すげえ似合わないぞ」

「数年会わないだけで随分と壊れたな」

「んなつ……！？ なんてことを言うのよ、アンタらは！」

「おい」

あ。

「なによ！？」

バシンッ！ 鬼教官こと千冬姉の登場。

「もうSHRの時間だ。 教室に戻れ」

「千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。 さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。 邪

「魔だ」

「す、すみません……」

昔から千冬姉のことが苦手のようだ。

「またあとで来るからね！ 逃げないでよ、一夏！ それに竜牙  
「！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

二組に向かって猛ダッシュ。昔のままの鈴だ。

「っていつかアイツ、ISの操縦者だったのか。初めて知った」

なんとなく口に出したのがまずかった。

「……一夏、今は誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだった  
な？」

「い、一夏さん！？ あの子とはどういう関係で  
「

クラスからの集中砲火。 ああ、馬鹿……。

バシンバシンバシンバシン！

「席に着け、馬鹿者ども」

千冬姉の出席簿が火を噴いた。兄貴はすでに席に戻っていた。

S i d e ー 一 夏 ー o u t

S i d e ー 竜 牙 ー

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休みの幕とセシリアの一夏への開口一番。

「なんでだよ……」

この二人は、午前中だけで山田先生に注意五回、千冬に三回叩かれている。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですね。行って差し上げないこともなくってよ」

「お前らはツンデレ攻めでもしてんのか？」

「「「してない(ませんわ)！」」」



「そっすか」

「こういうときだけ息が合うんだよな、こいつら。」

「待ってたわよ、一夏！ 竜牙！」

「まあ、とりあえずそこをどいてくれ。 食券出せないし、普通に  
通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。 わかってるわよ」

「のびるぞ」

「わ、わかってるわよ！ 大体、アンタを待っていたんでしょうが  
！ 何で早く来ないのよ」

「なんでこいつらは全員素直じゃねえんだよ……」。

「それにしても久しぶりだな。 ちょうど丸一年ぶりか。 元気に  
してたか？」

「俺は3年ぶりか。 相変わらずのチンチクリンだな」

「誰がチンチクリンよ！ アンタらこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どっぴい希望だよ」

「一夏、注文の品が出てきたぞ。 向こうのテーブルが空いている  
から行くぞ」

俺が促して移動する。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですね！　一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってたっしやるの!?!?」

「べ、べべ、別に私は付き合ってるわけじゃ……」

「そうですね。　なんでそんな話になるんだ。　ただの幼馴染だよ」

「幼馴染み……?」

「あー、えつとだな。　箒が引越したのが小四の終わりごろだっただろ?　鈴が転校してきたのが小五の頭だよ。　で、中一の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ぶりぐらいだな」

「で、こっちが箒。　ほら、前に話したろ?　小学校からの幼馴染で、俺の通ってた剣道場の娘」

「初めまして。　これからよろしくね」

「ああ。　こちらこそ」

「ンンンッ！　私の存在を忘れてしまったては困りますわ。　中国代表候補生、凰鈴音さん?」

「……誰?」

「なっ!? わ、わたくしはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットですよ!? まさかご存じないの?」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……!?!?」

怒りで顔を赤くするセシリア。

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ!」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

相変わらずの自信家だな。

「……………」

「い、言ってくれますわね……………」

筈は無言で箸を止め、セシリアは震えながら拳を握り締めていた。

「一夏と竜牙ってどっちがクラス代表なの?」

「一夏だ」

「お、おう。成り行きでな」

「竜牙じゃないのよね…………?」

「ああ」

「よっしゃあー!!」

「うるさいぞ」

「だってあんたに勝てるわけじゃない！ 昔も一度も勝てなかったのに、しかも絶対アンタ強くなってるでしょ!？」

「当たり前」

「そつえば鈴って兄貴にコテンパンにされてたっけ？」

「ああ。俺が昼寝し取るときとかに不意打ちしてきたけど、結局一度もまともに攻撃受けたことなかったっけ」

「……相変わらずですね」

「久しぶりに会って、思い出したくもないコイツの二つ名を思い出したわよ……」

「二つ名？」

「あー、セシリアは知らなかったけ。小学校のときにつけられた兄貴の二つ名があったんだよ」

「『神の子』八神竜牙」

「夏、鈴、篝の声が重なる。」

「私達がいた学校では竜牙さんを知らない人はいなかったほどの有名な人だった」

「兄貴は伝説みたいに語られてたからな」

「コイツ、本当に化け物よ。こいつがいるクラスは行事においてすべてトップになったんだから」

まあ、事実だしな。俺がいたクラスは各行事で取った賞状や優勝旗が必ずあった。特に運動会は俺が出た種目はすべて1位。6年連続総合優勝に導き、6年連続でMVP的立ち位置になった。

「」「」「」

「おいコラ。自分で言い始めて、勝手に落ち込むな」

「だって、なあ……?」

「ですね……」

「だよな……」

そしてまた三人声を合わせて言った。

「」「兄貴あなた(アンタ)のせいで何人も人の心が折られたんだから」  
「」

俺と違うクラスになった人は、俺に闘争心をむき出してくるものもいたが、中には諦め、心を折られた人もいたそうだ。

「納得できましたわ……」

なんかセシリアまで納得してるし。

「あ、今日面白い特訓するから鈴も来るか？」

いいこと思いついた。 正当な八つ当たりが。

「え、遠慮しておくわ」

「そうか。 それは残念だ」

ふと、一夏たちを見ると少しおびえている。

「どうした？ 一夏に箒に鈴にセシリア」

「……なんでもない！」「……」

速攻で否定。 まあ、どうせ俺が笑ってるんだろっとな。

「じゃ、放課後な」

Side〜竜牙〜out

第8話 中国代表候補生（後書き）

それでは次回。

## 第9話 ポケモンと特訓（前書き）

フリーダムさんの意見を参考に、ポケモンと特訓をさせてみました。



## 第9話 ポケモンと特訓

Side ㄱ 竜牙

「戦闘訓練するぞ」

鈴が編入してきた日の放課後、アリーナに俺、一夏、篤、セシリアがいる。

「相手は兄貴か？」

「今からやる相手は俺じゃない」

「では、お相手はどなたですか？」

「相手はこいつらだ」

待機状態の神帝が光り放たれる。出てきたのはピカチュウ、ユキワラシ、デスマスの三匹。

「え？ これ？」

「小さいからって油断すんなよ。そこまで強くはないが、今の前からなら、おそらく普通に張り合えるはずだから」

最終的にはミュウツーとかを相手にしてもらうつもりだし。……  
いつになるか知らんけど…。

「さて、ルールは簡単だ。こいつらの攻撃に10分間耐えるか、

三匹を戦闘不能にさせることだ」

ピカチュウ、ユキワラシ、デスマスは戦闘態勢に移った。

「じゃ、始め」

「ピカッ！」

「ユキキッ！」

「デスッ！」

ピカチュウは10万ボルト、ユキワラシはこごえるかぜ、デスマスはシャドーボールを放つ。お、結構マジですな。ま、非殺傷設定になってるから最悪怪我だけで済むし。それに対して三人の方は逃げてますな。まあ、セシリアはそろそろ反撃に移るかな？

「なんか知らねえけど、とにかくあの変なのを倒せばいいんだよね……。だったら！」

お、一夏が先に動いた。それと、変なの言うな。怒るぞ。神帝の中のポケモンたちが。

「あんなちっこいのに負けては、セシリア・オルコットの名が廃りますわ！」

「一夏たちには負けられん！」

続いてセシリア、箒が動き出した。なかなかいい動きだ。避けられるようになってきている。セシリアはさすがと言うところだが、

一夏と算は相変わらずの喰らっている。それに三匹の方も被弾率が上がってきたな。さすがに進化前では無理があるか。

で、10分後、三匹のともやられていた。

「終了だ。三匹とも倒すとはな。なかなかよかったぞ」

「兄貴、質問」

「何だ？」

どうせこいつらのことだと思っが。

「この変なの何？」

「変なの言うな。こいつ等は神帝のフォルムの媒介となるやつらだ。ポケモンと呼んでる」

「ポケモン……ですか」

「じゃ、次いこうか」

「次？」

「ああ。この三匹は下の部類に入るポケモンたちだ。今からやる相手はこの三匹のより強いから」

俺は三匹を戻し、新たにモウカザルとジュプトルを呼び出す。

「こいつらはモウカザルとジュプトルだ。一応中の部類だ。結

構速いから10分間逃げる。もしこいつらから逃げ切れたら上の部類に入る奴と5分間バトってもらうから。じゃ、始め」

「……え?」

「ジユプ!」

「ウキヤ!」

ジユプトルはエナジーボール、モウカザルはマツハパンチって、予想以上にマジみたい。セシリアと箒に向かって飛んでいったエナジーボールは避けられたが、ジユプトルは高速移動で急接近し、リーフブレードで二人を圧倒していた。で、一夏にモウカザルのマツハパンチが入ってぶっ飛ばされていた。

「……さすがにやりすぎたか?」

で、10分後。

「……」

一夏、箒、セシリアは延びていた。俺の隣でジユプトルとモウカザルが疲れを見せていたが立っていた。

「大丈夫か?」

「だ、大丈夫じゃねえ……」

「は、速い……」

「行き成りはなしですわ……」

三人とも不満を口にしていた。

「ジュプトル、モウカザルお疲れさん。　ロズレイド、アロマセラピー」

二匹を戻し、ロズレイドを呼び出し、アロマセラピーを指示する。

「少しはマシになったはずだ」

「あ、ああ……」

「不思議な感じだ……」

「安らぎますわ……」

「今日はこれで終了だ。　明日からはワンマンでポケモンとバトルしてもらおう。　以上」

俺はロズレイドを戻し、アリーナを後にした。

現在は部屋。

「どうですか？　一夏は」

「千冬か。　不意打ち的な感じで始めた俺も悪いんだが、モウカザルにボコボコにされていた。　まあ、速さに慣れればいけるだろう」

一夏はモウカザルの連撃に防戦一方で、モウカザルにあたった攻撃

は一夏自身が受けた攻撃の一刻にも満たなかった。 箒とセシリアはジュプトルの高速移動から放たれる技に、これまた防戦一方だった。 二人であったこともあるから、ジュプトルはダメージを受けていたが、ギガドレインやドレインパンチで回復をしたため、やらなかった。

「まあ、ポケモンと戦い続ければいずれ強くなるさ。 それにあいつらは伸びると思うし」

そうですか。 と言い、千冬との話を切り上げた。

ワンマンの相手をどいつにしようか……。 数が多すぎるから悩むんだよな……。

もう悩むの止めてノリでいいや。 その方が楽だ。

そして翌日、クラス対抗戦の日程表が張り出され、一回戦の一夏の相手は鈴だった。

そしてなぜか鈴は不機嫌になっていた。

Side 〱 竜牙 〱 out

## 第9話 ポケモンと特訓（後書き）

どうでしたか？

種族値を基準にしてみました。作者の願望でジュプトルたちがリ  
ンチさせました。さすがにやりすぎな気がして不安な作者です。  
感想や意見、お願いしますm（| |）m

## 第10話 クラス対抗戦

Side ㄱ 竜牙

五月。不機嫌になった鈴は相変わらず不機嫌だ。

「来週からクラス対抗戦だ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、特訓は実質今日が最後だ」

ポコポコにされる一夏たちがしばらく見れなくなるのは残念だが。

「今日は俺と模擬戦だ。三対一のな」

アリーナに入る。

「待ってたわよ、一夏！」

何で鈴がいるんだよ。

「貴様、どうやってここに」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

「あたしは関係者よ。一夏と竜牙関係者。だから問題無しね」

ふざけんな。

「一夏、反省した？」



「へ？なにが？」

「だ、か、らっ！ あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんたねえ……じゃあなに、女の子が放っておいてっいたら放っておくわけ！？」

「おう」

コイツは馬鹿だろ。だから唐変朴なんだよ。

「謝りなさいよ！」

「だから、なんでだよ！ 約束覚えてただろうが！」

「あつきれた。まだそんな寝言言ってるんの！？ 約束の意味が違うのよ！」

「説明してくれたら謝るっつーの！」

「せ、説明したくないからこうして来てるんでしょうが！」

こいつらは何で喧嘩してんだ？

「じゃあこうしましょう！ 来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方に何なんでも1つ言うことを聞かせられるってことでいいわね！？」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうつからな！」

「せ、説明は、その……」

「なんだ？ やめるならやめてもいいぞ？」

「誰がやめるのよ！ アンタこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ！」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！ この朴念仁！ 間抜け！ アホ！ 馬鹿はアンタよ！」

「うるさい、貧乳」

「一夏、アウトー！ チンチクリンに胸の事言っちゃダメだろ。」

ドガアアンツ！！

「い、言ったわね……。言っではならないことを、言ったわね！」

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』！？ 今の『も』よ！ いつだってアンタが悪いのよ！」

相変わらず唯我独尊の鈴だ。特に一夏に対しての。

「ちょっとは手加減してあげようと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね……。いいわよ、希望通りにしてあげる。全力で叩きのめしてあげる」

そのまま鈴は出て行った。

「よし、やるぞ。 模擬戦」

模擬戦が終わったときに一夏だけがのびていたことを報告しよう。

試合当日、第二アリーナ第一試合。 相手は鈴。

鈴の機体は『甲龍ツェンロン』というらしい。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され、今は一夏と鈴が空中で向き合っている。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

神帝の非殺傷設定を取り除き、最大攻撃でやればすべてが無に変わる。 神の全力は空間切り裂くからな。 『殺さない程度にいたぶることは可能』なのだろう。 で、鈴は代表候補生。 それだけの技量は持ち合わせているはずだ。

『それでは両者、試合を開始してください』

一夏と鈴が動いた。

ガギインッ！！

一夏は鈴とぶつかり合う。 異形な形の青龍刀をバトンのようにまわしながら斬り込んでいる。 が、一夏はそれを見事に捌いている。 ポケモン達との特訓が役に立ったな。

ドンッ！！

あれは確か……

「なんだあれは……？」

モニターを見ている筈がつぶやいた。

「『衝撃砲』ですわね。 空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す、第三世代型兵器ですわ」

見る限りでは砲身は見えず、射角に制限がないようだ。 ハイパーセンサーがなければ今頃やられてんじゃね？

「本気で行くからな」

ふと一夏がそんなことを言った。

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……。とっ、とにかくつ、格の違いつてのを見せてあげるわよ！」

一夏は瞬時加速を使い、鈴に急接近する。瞬時加速は出し所さえ間違わなければ代表候補生と渡り合えるものだ。おそらく千冬が教えたのだろう。

ズドオオオオオンツ！

一夏の雪平式型の刃が届きそうになった瞬間、突然アリーナ全体に走った。

S i d e 〱 竜牙 〱 o u t

第10話 クラス対抗戦（後書き）

次回にリリカルなのはのキャラを介入させる予定です。  
それではまた。

第11話 襲撃者と来訪者（前書き）

前の話を少しだけ変えたところがあるので、見直していない方は一度見直すが、そのまま見て、納得してください。

## 第11話 襲撃者と来訪者

Side ㄱ 竜牙

「織斑先生、俺が対処します。 ISの使用許可を」

「そうしたいのだが、これを見る」

「遮断シールドがレベル4に設定され、しかもすべての扉がロックされている……か。 問題ない。 俺と神帝に距離も時間も関係ない」

「わかった。 許可する」

「わたくしにも使用許可を！」

「オルコットは下がれ。 八神の邪魔だ」

「俺は行く。 フーディン、テレポートだ」

フーディンを呼び出しテレポートで遮断シールドを越えて、アリーナに現れる。

「神帝、フォームガブリアス」

藍色のボディのフォームになる。

「一夏、鈴、ここからは俺がやる」



「わかった」

「フリーデイン、一夏たちをピットに飛ばせ」

「ブジュツ！」

一夏と鈴はアリーナから消えた。

「フリーデイン、戻れ」

俺の隣にいたフリーデインは神帝に戻る。

「……なかなか利口じゃねえか。人の話の邪魔しねえなんてよお。だがな、俺の世界を傷つけた。その償いはテメエの死だ！ 無人機！」

コイツは無人機だ。フリーデインが見破ってくれた。頭のいい奴は助かる。俺の指示なしでも動いてくれるからな。

「コイツはどうする？」

オープン・チャンネルで訊く。

「コアは破壊しないようにしろ」

「了解」

俺はそれと同時に、殺傷設定にして動き出す。ガブリアスは速さと攻撃力はかなりの高さにある。

「ドラゴンクロー」

攻撃力に速度が加わり、貫通力は上昇する。  
無人機の全身装甲のISの腕を一撃で切り落とす。

「ドラゴンダイブ」

勢いのあるタツクル。効果により敵ISは動きが鈍くなる。

「ストーンエッジ」

俺の周囲に鋭く上がった岩が浮き上がり、敵ISに飛ばす。  
敵ISは僅かに装甲を削っただけだったが、その巨体が大きくふらつく。

「さすがに硬いか。だが、これで終わりだ」

非殺傷設定に戻し、俺は上空に飛び上がる。このフォームで放てる最高威力の物理攻撃を与えるために。

「ギガインパクト!」

全力のタツクル。敵ISは吹き飛ばされ、アリーナの壁面に衝突し、起動を停止した。

「戻るか……」

《上空に不明機が七機

警戒》

神帝のアラームを発する。

上空を見ると、ISではない何かが浮遊していた。見た目はカプセル状の円錐型で色は水色。詳細不明の機械の塊がアリーナ上空に七機浮遊していた。

《熱源確認。レーザー来ます》

戦意ありか。

「フォームチェン、彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け！」は？」

なんか聞いたことがあるような声なきが……

「石化の槍、ミストルティン！」

空間に魔方陣が浮かび上がり、そこから7本の光が不明機を貫いた。そして、すべてアリーナに落ちた。

「……は？」

落ちてきた機械を見ると僅かにだが石が付いているように見える。

「……一体何が？」

アリーナの外に出ると、見たことのある女性が接近していた。

「……姉貴？」

「久しぶりやな、竜牙」

甲冑に黒い翼が生え、帽子を被った懐かしい顔。それは7年前に失踪した家族の一人、俺の実姉、八神はやてだった。

「フーデイン、テレポート」

とにかく戻る。

「織斑先生、姉貴が戻ってきた」

「はやてがか!?!」

「久しぶりです、千冬さん」

「本当にはやてなんだな?」

「はい。迷惑かけました……。すみません……」

「せっかくの再開だ。二人でゆっくりと話せ」

「そうさせてもらおう」

「千冬さん、おおきに」

俺たちはピットを出た。

そして今は屋上。

「なあ姉貴、今までどこ行ってたんだよ……。父さんと母さんは?」

「3年前に別れてからは知らんや。……ゴメンな」

「3年前って、なんでもっと早く帰ってこなかったんだよ」

久しぶりに会った身内に次々と俺が抱えていた不満の言葉が浮かぶ。

「……私やって帰ろうと思ったよ。せやけど家に行っても誰もおらんから手がかりがなかったんや」

入れ違いか……？

「なのはたちにも連絡してないのはどういっことなんだよ！みんな心配してたんだぞ！」

「なのはちゃんたちには連絡しようとも思ったんやけど、連絡しづらくてな……」

「……とにかく……無事でよかった……」

「竜牙……」

涙が溢れる。今まで溜め込んでいたものが流れるように溢れた。

俺が流した、7年ぶりの涙だった。

それから数分間、姉貴の胸で泣き続けた。

「もう大丈夫か？ 竜牙」

「……悪い。服汚した」

「気にせんでええよ。可愛い弟の成長した姿も見れたし、珍しいとこ見せてもらったし」

「……超恥ずかしい……」。

「で、姉貴、そのISはどうしたんだ!？」

もう自棄だ。

「これか？ 3年前に別れたときに渡されたんや。名前は『リインフォース』。まだ未完成やから数発広域砲撃を行うだけでエネルギー切れになってしまるのが問題やな」

「……コアは父さんたちが作った奴か？」

「おそらくね」

両親が作ったコアならおそらくやれる。

「そいつを改造する。三日で仕上げる」

「改造？ 竜牙、そんなことできるん？」

「俺をなめるな。俺一人で神帝を完成させたんだ。その程度造作もない」

「そんなこと言つとたな、あの二人。竜牙にデータを残したって」

「あの人が残したものだ。完璧に仕上げた。じゃないと親の名が廃るしな」

「あの二人も喜ぶやろうな」

「話が逸れた。そいつを第五世代に仕上げる」

「ほんならまかせた。そういえば昔みたいにお姉ちゃんとは呼んでくれんの？」

「誰が呼ぶか。弟残して黙っていなくなった姉なんか」

「酷くない？」

「酷くない」

まったくもって酷くはない。

「じゃあ、改めて、おかえり」

「ただいま、竜牙」

「さて、あいつらに連絡しとくか」

俺は携帯を取り出し、なのはに電話する。

『どうしたの？ 竜牙君』

「今日姉貴が帰ってきたから連絡しとこうとな」

『はやてちゃんが見つかったの！？』

「ああ。学園に来たんだ。姉貴に代わるよ。ほら姉貴。懐かしのお友達だ」

Side↳竜牙↳out

Side↳はやて〜

「ん？ お友達？ もしも『久しぶり、はやてちゃん！』なのはちゃん！？」

『さて、はやてちゃん。今までどこに行ってたのかな？ O・H A・N A・S H I I しようか？』

「な、なのはちゃん！？ 怖い、ほんとゴメンって！ ちゃんと話すからその……」

『ダメだよ、はやてちゃん。幼い弟を独りぼっちにして、姉であるはやてちゃんは両親と一緒にいなくなっちゃうんだから。竜牙君、それ以来一度も泣いたことなかったんだよ？ 心から笑ったことなかったんだよ？ たった一人で頑張ってたんだよ？』

竜牙、頑張ってたんやな……。

「……ゴメンな、なのはちゃん……」

『私よりも竜牙君に言わなきゃね。竜牙君のことだから、赦してくれてると思うけどね』



「竜牙、数年見なかっただけでいい男になってたよ」

弟じゃなかったら惚れそうなほどに。

『私達、竜牙君に惚れちゃったしね』

「はい？」

今なんて……？

『フェイトちゃんもシグナムさんも、はやてちゃんがいない間に竜牙君に惚れちゃったんだよね』

「ホンマニ？」

『嘘じゃないよ。それに竜牙君には悪いことしたし。あ、竜牙君に聞いてみれば？』

「なのはちゃん？一応聞くんやけど、何したん？」

『ゴメンネ、はやてちゃん。竜牙君の寝込み、襲っちゃった』

「……嘘？」

『嘘じゃないよ。竜牙君に聞いてみれば？』

「あとで聞くわ……」

信じられへん……。

『とにかく、無事でよかったよ。おかえり、はやてちゃん』

「ただいま、なのはちゃん」

『フエイトちゃんたちにもちゃんと伝えとかないとダメだからね』

「わかってるよ。じゃあ、また」

『またね、はやてちゃん。会えるのが楽しみだよ』

通話は切れた。

Side～はやて～out

第11話 襲撃者と来訪者（後書き）

姉、はやて登場です。それと第五世代型ISも登場です。  
なのはキャラのしゃべりがおかしいですかね？  
アニメを見たただけなので不安です。  
感想等、お願いします。

第12話 姉と弟（前書き）

連続投稿です。

## 第12話 姉と弟

Side ㄱ 竜牙

「ほい。ありがとう」

なのはと会話が終わったようで、携帯が返される。

「どうだった？」

「懐かしかったわ。それと竜牙」

「なに？」

「なのはちゃんに寝込み襲われたって本当なん？」

なのは、言ったのか……。

「事実だよ。補足するとなのはだけじゃなくてフェイトとシグナムも、だ」

「ウソオ!? フェイトちゃんならまだしも、あのシグナムも!？」

「マジ。ビックリしたなあ、あれは。目が覚めたら体の自由が利かなかったんだから」

あれはマジでびびった。なのはたちに渡したISの力で俺の身動きできなくされたんだから。

「……竜牙はそのうちの誰と付き合ってるん？」

「三人とも、俺の彼女だ」

「……それでいいのか？」

「三人がそれでいいって言ってるんだからいいんじゃない？」

なんか話し合ったらしいけど……。

「せつかくの再開なのになんか残念やわ……」

「そう言うな。　　そういえば、どうしてここに来たんだ？」

「ニユースでIS学園にいたのはわかったんやけど、どうしたらいいか考えていてな、そんなときに今日のアレがあったから、来たってわけや」

「流れに乗って侵入しようってことか」

「そういうこと。　　少なからずここに居座るつもりやぞ？」

「マジで？」

「マジで」

「大丈夫なのか？」

「安心せい。　　話ならつけるし、伊達にお父さんたちと一緒にいたわけやない。　　ISの知識はばっちりや」

「そうですね。あ、第五世代のことは言つなよ。面倒なことになるから」

「わかったわかった。一応なのはちゃんたたちのことも黙っておくわ」

「助かる。じゃ、俺は部屋に戻るけど、姉貴は千冬と話してこれば？」

「そうするわ。あ、案内よろしく」

「了解」

俺は部屋に戻ると既に千冬が戻っていて、姉貴と千冬は話していた。やっと部屋の調整がいたらしく、俺は自分の荷物をまとめて新しい部屋に移動している最中だ。

「お、箒と一夏だ」

なにやら話しているようだが、なぜか廊下で話している。

「……わ、私が優勝したら」

かなり大きい声なので箒の声が聞こえてきた。優勝ってことは来月の学年個人別トーナメントのことか？

「っ、付き合ってもらっ！」

うわあ、なんか現実味のない告白だなあ。だって俺出るし。

「……部屋に行こう」

一応見なかったことにして、俺は部屋に移動した。

「一人で二人部屋を独占するのも悪くねえな」

広い。とにかく広い。特に千冬に気を使わなくていいから余計にありがたい。

「さて、取り掛かるか」

俺は姉貴の未完成のIS『リインフォース』の待機状態は起動時にあった杖の先端をそのままネットワークレスと同じような感じた。

俺に合わせて設定されたパソコンにメタグロスをクリックさせる。メタグロスは並みのパソコンよりも頭脳がいい。メタグロスに計算とか手伝ってもらった方が作業が速く進むためリンクさせる。

問題は部屋が思いつきり狭くなることなんだよな。メタグロスってでかいから。

「……超広域の砲撃型のISか。しかも一発一発が超威力。ふざけたISだな……人のこと言えんけど……」

俺たちの家系が作るISはすべて馬鹿げてるんじゃないのか？ なのはたちに渡した奴も十分馬鹿げてるし。……俺が作ったんだけど。

「制御人格と出力調整、攻撃用のエネルギーバイパスと非殺傷設定の構築、他にもやるのが山積みだな。メタグロス、無理させるが頑張ってくれよ」



あまりにも出鱈目な威力なため、というか第五世代型のISには非殺傷設定を組み込ませている。それに使いすぎる高出力砲撃のための攻撃用エネルギーの確保が絶対条件だ。カートリッジシステムの導入もいいが、今は止めておこう。これほどの超威力砲撃だとISと体への負担が予測できない。導入させるなら様子を見てからだ。

それから三時間、作業を続けてから寝た。

S i d e 〉 竜 牙 〉 o u t

## 第12話 姉と弟（後書き）

この作品での第五世代型ISは『意思を持つIS』です。ぞっく  
り言つとりリカルなのはのデバイスです。感想等お願いします。

第13話 買い物(前書き)

俺は何がしたかったんだ？  
書いてから気づいた作者です。

## 第13話 買い物

Side 〱 竜牙

六月頭の日曜日。

「じゃ、行くか」

「はい」

俺は千冬と買い物に来てます。  
なぜこうなったかというと、

「竜牙さん、少しいいですか？」

千冬が俺の部屋に来たのだ。 しかも通常時モード。

「珍しいな。 どうした？」

「あ、あの、日曜に買い物に付き合ってもらいたくてですね……」

「別にいいけど」

偶には息抜きも必要だ。

「で、では、レゾナンスの大型モニターの前に10時に集合ということだ」

「了解」

以上回想終了。

一緒に出なかったのは千冬なりの対処法なんだよな。こんな千冬が女子どもに見つかれば確実にうるさくなる。『こんな』というのはいつものスーツ姿ではなく、可愛いワンピース姿だからだ。最初に見たときはびびった。「千冬……なのか？」って聞いちゃまったし。服が違うだけで変わりすぎだって。

「で、何を買った？」

「あ、はい。はやての服でも買おうかと」

「なぜに姉貴の？」

「はやては荷物をあまり持ってこなかったようで、服が少ないようだったので欲しいと」

「それと千冬が姉貴の服買ったのになんていう繋がりか？」

「私も自分で買いに行けと言ったのですが、竜牙と楽しんでこいと  
言われてしまって」

姉貴、今度殴る。

「それに、貴方の彼女たちのことも聞きました……」

「あの馬鹿姉が……」

よし、殴ろう。絶対殴ろう。

「千冬なら大丈夫だと思うが、一応言っとく。ばらしたら打ん殴る」

「わかっています。ただ、彼女たちと一度会ってみたいと思っ  
して」

「うーん……揃ってはキツイか？ あいつらにも用事とかがあるはずだから……いや、いけるか？」

俺が「会いたい」とか言えば簡単に来そうな気がする。……惚気  
と言いたければ言うといい。

「まあ、言ってみるぞ」

「ありがとうございます」

「……なあ」

「なんですか」

「見られてないか？」

「見られてますね」

「だよなあ」

ふと周りを見ると、俺たちに視線が向けられているのがわかった。男女両方の視線が感じられる。

「千冬、見られてるぞ」

「いえ、竜牙さんが見られているんです」

正確には俺も千冬も見られているんだけどな。

方や第一回モンド・グロツソの『ブリュンヒルデ』。方や世界でISを使える男。

実際、そのことに気づいているかは知らんが、確実に見られている。

「……気にしないようにしよう」

「……そうしましょう」

気にしたら負けだ。絶対に。

「店には着いたはいいが、姉貴はどんな服着るんだ？」

「一応聞いてきましたが、適当に買っておけばいいかと」

「だな。そういえば姉貴ってどうするんだ？」

未だに姉貴の処遇が決まっていない。ちなみに今は千冬の部屋に居候中だ。

「教師になることが決まりました」

「マジで？」

「事実です」

正直嫌だ。あの人、ノリいいからいらんことをしゃべりそうで怖い。……なんかあったら殴ろう。

「それならスーツとかそのあたりの仕事着も買うのか？」

「それは大丈夫です。既に頼んでありますので」

「オーダーメイドか。ならとつと買おう。この空間にいるのは正直辛い」

ちよいちよい俺に女の視線が向けられるからキツイ。

「わかりました。聞いたことを参考に4、5着見繕いましょう」

「了解」

千冬はメモを見ながら馬鹿な姉の服を見繕っていった。

「そういえばそれって誰が払うの？」

「今は私が払いましたが、後々払ってもらいます。はやてがそう言っていましたので」

「立替か。千冬が払っていたら俺が立て替えていたところだ」

「わざわざそんなことしなくてもいいですよ」



「いや、そうでもしねえと俺の気が納まらん」

「そうですか。では、はやての服も買い終わったので行きましょ  
う」

「そうしよう。女の冷たい視線がいい加減うざくなってきたし」

この空間にいた時間はおよそ30分。よく耐えたな、俺。

「次は？」

「日用雑貨を少しみていこうかと」

「ついでに俺も買うか」

たしかシャンプーが切れていた。あ、そうだ。

「千冬、12時にここ集合で」

「一時間もかかりませんが」

ちなみに今は11時にもう少しでなろうとしている。

「ちょっと用を思い出してな。悪いけど、12時まで時間つぶし  
ててくれ」

「……わかりました」

「じゃ」

俺は少し急いで不足品を買って、その後に来たのはアクセサリシリーズ。  
ヨップ。  
用はここだ。     なんとなくだけどプレゼントでもしようと考え付いたわけだ。

S i d e へ 竜 牙 へ o u t

S i d e へ 千 冬 へ

竜牙さんと買い物に来て、雑貨品を見ようとしたら「用がある」と言っただけに行ってしまった。  
すでに買うものは買ってしまったので暇で仕様がなし。     しかもまだ12時まで40分近くもある。

「その彼女！俺と遊びに行かない？」

「……黙れ。     私の前から失せろ」

「怒る姿も綺麗だね。     遊びに行こうよ。     退屈はさせないからさ。     ね？」

「失せろといっているんだ」

「つれないねえ。     お金とかも俺が出すし、絶対に楽しませるからさ」

そう言っただけ男は手を伸ばしてきた。     そして、その手が私に触れる

前に、私が逆に掴み締め上げた。

「いででででっ!?!?」

「失せると忠告したはずだ。そして私に触れようとするな。もう一度言う。私の前から失せろ」

「は、はいっ!」

男は走り去っていった。

溜息がこぼれる。

「人気の少ないところに行こう……」

これ以上ここにいたらまたアホが来そうだからな。

S i d e 〱 千冬 〱 o u t

S i d e 〱 竜牙 〱

「もうすぐ12時か。急がねえとな」

買うものを買って今走っている。

「遊び行こうよ!」

「俺達が絶対に楽しませるからさ!」

俺が待ち合わせに指定した場所には男数人で千冬をナンパしている  
哀れな男3人がいた。

「人の連れに手え出してんじゃねえよ！」

手近にいた男を蹴り飛ばす。

「な、なんだテメエは！」

「俺はそいつの連れだ。手え出してんじゃねえよ。今すぐ立ち  
去れば怪我はしないで済むぜ？」

「ガキが！ 生意気言ってんじゃねえよ！」

せつかく忠告したのにな。

「はああ……歯食い縛れよ」

と言いつつも腹を蹴って瞬殺。 我ながら卑劣な言動だ。

「「「お、覚えてるよ！」「」」

やられ役雑魚の台詞を言いながら走り去っていった。

「誰が覚えるか」

千冬に視線を向ける。

「今ので8回目ですよ」

「……マジで？」

「時間で8回？　どんだけナンパされんの？」

「嘘を言っただけになるんですか。　まったく……それで、用はなんだっただすか？」

「あー。　それは後のお楽しみだ」

「……それでは期待させていただきます」

「飯食い行こうぜ。　待たせたんだし、奢る」

「では、お言葉に甘えて食べさせていただきますましよう」

立ち寄った店は、高級感漂う料理屋だ。　だけど値段はそこまで高くない。　見る限りでは、一番高くても5000円程度だった。

で、そこでの出費は1万ほどだった。　ま、値段気にせず食べたんだから二人でも当たり前前だな。

そして帰り道。　そこまで人のいない道。　なぜってか？　周りの視線があるからだよ。

「はい、これ。　さっき言ってた奴」

俺が渡したのは綺麗に包装された箱。

「俺からのプレゼントだ。受け取れ」

「ありがとうございます。しかしなぜプレゼントを？」

「なんとなくだな。特に理由はないな。ま、気に入るかどうかは知らんけどな」

「……開けても、いいですか？」

「いいぜ」

箱から出てきたのはシルバーのネックレス。もっと高いのでもよかつただけど、生憎今はそこまで金がない。後で補給をしなければ。

「掛けてみてくれ」

「……掛けてははくれませんか？」

千冬に上目遣いでそんなこと言われたら断れねえじゃんか。……  
千冬のイメージが変わっていく。

「わかった。貸してみ」

ネックレスを受け取った俺は千冬の首に掛ける。

「どうですか？」

「俺はいいと思うぜ。似合ってる」

「ありがとうございます。では、これは私からのお礼です」

千冬の唇が、俺のそれに触れる。

「へ？」

「わ、私からのお礼です／＼」

顔を真っ赤にして俯いている。俺も絶対顔が赤い。

「……………」

「……………」

ヤバイ。なにか言わなければいけない気がする。

「……………やっぱり変わったな。千冬のイメージが今日完全に変わったし」

「……………キスについてはなにも触れないんですね」

「……………いや、なに言っているかわかんねえし……………その、なんだ。まさかされるとは思わなかったし……………」

予想外。完全な不意打ち。しかもあの千冬が。そして千冬はなにか決心したように口を開いた。

「私は貴方のことを昔から好きでした。悩みましたが私は、他に彼女がいても気にしません。だから」

俺は幻でも見ているのか？ 聴いているのか？ あの千冬が？ 強くてカッコイイあの千冬が？

「 だから私と、付き合ってくれませんか？」

正面から、俺の目をしっかりと見据えての告白。

「今すぐには言いません。 私は待ちます。 いつまでも、答えを聞くまでは」

揺るがない千冬の瞳。 ああ、本気なんだ。 勝手にいなくなった俺を、変わらず好きでいてくれた。

「では、私は先に帰ります。 ネックレス、ありがとうございました」

千冬は学園へ向けて足を進めていった。

俺はその場から10分ほど動けなかった。

そして、俺がIS学園の自室に戻ったのは、それから2時間たった、午後3時ごろだった。

そして部屋について3時間半、俺はベッドの上でただ呆然と思い耽



っていた。

「やっと落ち着いてきたな……」

五時間以上、俺は混乱し続けていた。

「さすがに飯は食おう……」

俺は立ち上がり、食堂へと足を運ばせる。

俺はいつもよりも少なめの量にもらった定食を受け取り、席を探す。

「おい。 兄貴！ こつちこつち！」

声の主は一夏だった。 特に断る理由もないのでその席に行った。

「？ どうしたんだ？ 兄貴。 いつもより少ないじゃん」

「ちよつと食欲がなくてな。 徹夜が響いているんだろ」

ちなみに嘘だ。 昼のアレのせいです。

「へえー。 珍しいわね。 アンタが徹夜なんて」

「ちよつとな」

「なあ、あそこの群れはなんだ？」

「トランプでもやってるんじゃないの？ それか占い」

目を向けると女子の群れがあった。しかもかなり盛り上がっている。

「えええっ!?!? そ、それ、マジで!?!?」

「マジで!?!?」

「うそー!?!? きゃー、どごしどごし!?!?」

うるさい……。。

「あ つ!?!? 織斑君と八神君だ!?!?」

「えう、うそ!?!? どごし!?!?」

「ねえねえ、あの噂ってほんと もがっ!?!?」

噂……?!

「い、いや、なんでもないの。 なんでもないのよ。 あははは……」

「 バカ!?!? 秘密って言ったでしょうが!?!?」

「いや、でも本人だし……」

もしかしてあれのことか?!

「噂って??!?」

「う、うん!? なんのことかな!?」

「ひ、人の噂も365日って言うよね!」

「な、何言ってるのよ! 49日だってば!」

いや違うから。

「何か隠してない?」

「そんなこと?」

「あるわけ?」

「ないよ!?!」

見事な連携、からの撤退。 てか撤退早くね?

「そういえばさ、クラス対抗戦のときの襲撃あつたじゃんか。そのときに兄貴「俺の世界を傷つけた」って言うてじゃん。それってどついう意味?」

そんなのこつ言つたつけ? ……言つたな。

「ああ、確かにそんなこつ言つてたわね」

「俺の中の護りたいものとか、考えとか、自分に関わる『自分の中の世界』があつてな。それで、アレは俺の仲間を傷つけた。だから、『自分の世界が汚された。傷つけられた』ってこと」

「なんだかよくわかんねえな」

「つまり、自分の中の世界があって、それが乱されたってことなの」

「あまり言ったことかわってなくね？」

「いいのよ、そんなことは！　なんとなくでも理解できれば！」

「それもそうだな。　あ」

「あ」

「あつてなによ、あつて。　あ」

最初に一夏、次に箒、最後に鈴が言った。

「よ、よお、箒」

「な、なんだ一夏か」

「……………」

「……………」

あー。　あれか。　箒の告白か。　それでこれか。

「何、あんたたち何かあったわけ？」

「「いや！　別になにも！」」

なにやってんだよ、こいつらは。

「なんその『明らかに何かありました』って反応。わざとやってんの?」

「そんなわけないだろ……」

「俺戻るわ」

こいつらと話していると気が楽になったが、いらんことをしゃべりそうなので戻ることにした。

そして、その日はシャワーを浴びてすぐに寝た。

Side〜竜牙〜out

第13話 買い物（後書き）

長かったですね。

そしてもう一度言います。

何がしたかったんだ？

千冬さんのキャラ崩壊？です。

告白です。

えー、感想など、お願いします。

第14話 転校生(前書き)

前回のアレが不安を招いて仕方がない作者です。

キャラ崩壊するかもしれないなくてキーワードにも入れたのに、本当にキャラ崩壊させてみると、ここまで不安になるとは……

## 第14話 転校生

Side(竜牙)

「やっぱりハツキ社製のがいいかなあ」

「え？ そう？ ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

月曜の朝、クラス中の女子たちが手にカタログを持って談笑していた。

「そつえば織斑君と八神君のISスーツってどこのなの？」

「あー。特注品だって。男のスーツがないから、どっかのラボが作ったらしいよ。えーと、もとはイングリッド社のストレートアームモデルって聞いている」

よく覚えてんな。

「俺はちよつと特別製だな。IS展開と同時にスーツも展開されるんだよ」



「え？ それってエネルギー消費が激しいんじゃない？」

「だから言っただろ？ 特別だった」

ISもISスーツも俺特製の特別性だ。

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、縦者の動きをダイレクトに各部位へ伝達、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができます。あ、衝撃は消えませんが」

さすがは先生。 わかっている。

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。 …… って、や、山ちゃん？」

「山ぴー見直した！」

「今日が皆さんのスーツの申込日開始ですからね。 ちゃんと予習してきてあるんです。 えへん。 …… って、や、山ぴー？」

入学してから約二ヶ月。 既に山田先生には8つぐらいの愛称が出来ていた。

「あー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃないじゃん」

「まーやんは真面目っ子だなあ」

「ま、まーやんって……」

「あれ？ マヤマヤの方が良かった？ マヤマヤ」

「そ、それもちよつと……」

「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す？」

「あ、あれはやめてくださいー！」

即答。 ヤマヤと言うあだ名にトラウマでもあるようだ。

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。 わかりましたか？ わかりましたね？」

返事はしたけどわかってないだろ。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

ざわざわしていた教室が一瞬で静まり返る。

もつとも、俺はそんなことより昨日のことが頭に残って仕方がなかった。 普通にするくらいなら支障はないが頭に残る。

そして、千冬の胸元には昨日プレゼントしたネックレスが掛かっていた。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。 訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。 各人

のISSスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだらう」

構おうよ。仮にここには男子が二人いるんだから。

「では山田先生、ホームルームを」

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しかも2名です！」

「「ええええええええっ!?!?!」」

このクラスに転校生来過ぎだろ。

「そして、新しい先生も紹介します！」

姉貴か。

「失礼します」

「……………」

「失礼します」

入ってきた転校生を見て、クラスが固まった。その一人が男の格好をしていたからだ。

「シャルル・デュノアです。 フランスからきました。 この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願います」

なーんか、おかしくね？

「お、男？」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

」

「きゃ……」

「はい？」

あー、ヤバイ。

「きゃああああ っ！」

「男子！ 三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった〜〜！」

「あー、騒ぐな。 静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。 まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

「……挨拶をしるラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ドイツ軍人だな。千冬がドイツ軍にいたのを一応知ってる。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

もう少しなんか言おうよ。

「あ、あの以上……………ですか？」

「以上だ」

そんなこんなで一夏と目が合うドイツ軍人。

「！ 貴様が」

なんかヤバクね？

そしてドイツ軍人の腕が振り上げられた。

「！!?」

「なにしようとしてんだ？ ドイツ軍人は初対面の相手に殴るのが挨拶なのか？」

振り上げられた腕は振り下ろされなかった。否、振り下ろせなかった。なぜなら、サーナイトを呼び出し、サイコネシスを指示したからだ。

「貴様は！」

「動こうとしても無駄だぜ？ たかが人間如きがサイコネシスを振りほどくのは不可能だ」

「竜牙、解放したり」

「了解。サーナイト、戻れ」

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか。それに貴様もだ。八神竜牙」

「宣戦布告？」

「あー……ゴホンゴホン！ では八神先生、挨拶を」

「はい。私は八神はやてです。そこにいる竜牙の姉で、専用機持ちです。みなさん、よろしゅう」

「ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同で模擬戦闘を行う。解散！！」

さっさと移動するか。

「八神、デュノアの面倒を見てやれ。織斑では心配だ」

「君が八神君？ 僕は」

「話は後、移動優先だ。女子が着替え始めるから」

俺はシャルルの手を取り移動を開始した（本来ならレポートを使いたいところだが、こいつに道とか教えないといけないから使っていない）。今は移動しながら説明している。

「男子は空いているアリーナの更衣室で着替える。これから実習のたびにこの移動だから早く慣れる。移動が面倒だから」

「う、うん……」

「どうした、トイレか？」

「夏がたずねる。」

「トイレ……っ違うよ！」

「そうか。それは何より」

「急ぐぞ」

速度を落とさず移動している。

「ああっ、転校生発見！」

「しかも織斑君たちとも一緒！」

「いたっ、こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

いつからここは武家屋敷になったんだ。

「織斑君の黒髪や八神君の銀髪もいいけど、金髪ってのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああつ！ 見て見て！ 八神君と手！ 手繋いでる！」

「日本に生まれてよかった！ ありがとうお母さん！ 今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

いや、毎回しっかりしたのをあげるよ。

「な、なに？ 何でみんな騒いでるの？」

「男子が俺達だけだからだろ」

「……？」

やっぱりおかしくね？

「いや、普通に珍しいだろ。 ISを操縦できる男子なんて今のところ俺達しかいないんだかる？」



「あつ！                    ああ、うん。                    そうだね」

なーんで間が開くのかねえ。

「ま、何にしてもよろしくな。                    俺は織斑一夏。                    一夏って呼んでくれ」

「俺は八神竜牙だ。                    適当に呼んでくれ」

「うん。                    よろしくね一夏、竜牙。                    僕のこともシャルルでいいよ」

「わかった、シャルル」

「よろしく」

俺たちは捕まることなく校舎を抜けた。

「じゃ、俺先行くから。                    急げよ」

「おう」

「？                    う、うん」

俺は先に第二グラウンドへと向かい、普通に間に合った。

ちなみに、一夏とシャルルに盗聴器をこっそりつけていたのは俺だけの秘密だ。

Side→竜牙→out



第14話 転校生（後書き）

連続投稿でした。

なぜかこの作品が一番案が出てくる。

感想等、お願いします。

## 第15話 実習

Side(竜牙)

盗聴器から聞こえる声で俺はシャルルへの違和感が増していた。  
そして一夏たち登場。

「遅い！」

バシーン！

「くだらんことを考えている暇があったらとつとと列に並べ！」

よく響くな。

で、一夏たちのほうを見ると、セシリア、鈴に絡まれていた。

お前ら馬鹿だろ。千冬の授業でそんなことしてたら……あーあ、  
ご愁傷様。

バシーン！

ほら叩かれた。

「では、本日から格闘戦及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同実習のため、いつもの倍の人数だ。

「くうっ……。 なにかというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

鈴は呪文を唱えている。

「今日は戦闘を実演してもらおう。 ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。 鳳！ オルコット！」

「な、なぜわたくしまで！？」

完全なとばっちりだ。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。 いいから前に出る」

文句を言いつつも二人は前に出てるんだよな。

「お前ら少しはやる気を出せ。 アイツにいいところを見せられるぞ？」

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！ 専用機持ちの！」

うわ、単純。

「それで、相手はどちらに？ わたくしは別に鈴さんとの勝負でも構いませんが？」

「ふふん。 こっちのセリフ。 返り討ちよ」

「慌てるなバカども。 対戦相手は」

キイイイン……。

「あああーっ！ ど、どいてくださいっ！」

ドカーン！

一夏の元に山田先生が墜落した。

白式の展開は間に合ったようだが、一夏が山田先生の胸を掴んでいる。

セシリアと鈴が激昂して、一夏を亡き者にしよう……説明してる場合じゃなくね？

俺が動こうとしたら山田先生が鈴のブーメランを撃ち落した。 お、なかなかやるな。

「山田先生はああみえて元代表候補生だからな。 今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔の話ですよ。 それに代表候補生どまりでしたし……」

「さて小娘どもいつまで惚けている。 さっさと始めるぞ」

「え？あの二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちなら直ぐに負ける」

負けるといわれたのがよほど悔しいのか、二人は瞳に闘志をたぎらせる。

「では、はじめ！」

号令と同時にセシリアと鈴が飛翔する。

「手加減はしませんわ！」

「アタシも手加減は無し！」

「い、行きます！」

「さて、今の間に……そうだな。ちようどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説を試してみせろ」

「あつ、はい」

「山田先生が使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代最後の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェア持ち、七カ国

でライセンス生産、十二カ国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替えを両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サイドパーティーが多い事でも知られています」

長い説明だな。

「ああ、いったんそこまでいい。……終わるぞ」

結局鈴とセシリアは負けた。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように。山田先生、もう一戦やれるか？」

「は、はい。あまりダメージを受けなかったので大丈夫です」

「八神、出て来い」

「俺っすか」

「山田先生と模擬戦をしろ」

「了解。あ、俺が戦わなきゃダメですか？」

「お前が戦わなければ誰がやる」

わかってるくせによく言っよ。



「山田先生くらいならコイツで十分かな。来い、バシャーモ！」  
神帝からバシャーモが出てくる。

「な、なにあれ……？」

「見たことない生物なんだけど……」

「そういえばさつきもこんなのがなかったっけ？」

そう言えば一夏たちにしかポケモンを実際に見せたことはなかったな。

まあ朝にサーナイト見せたけど。

「俺がやらなくてもこいつが相手をしますよ」

「面白い。そいつの実力、見せてもらおう。山田先生、準備はできてますか？」

「は、はい！」

「バシャーモ、お前の力を見せてやれ」

「バシャーッ！」

「では、始め！」

実に奇妙な模擬戦が始まった。既に山田先生は空中に漂っている。

「バシャーモ、お前のやりたいように暴れな。ただし、プラスト

バーンは使つなよ」

俺の一言でバシャーモは火炎放射を山田先生に放った。

「へえ……避けれるんだ。やるじゃん」

山田先生はバシャーモに五十一口径アサルトライフル《レッドバレット》で射撃をするが、回避されるかバシャーモの放つ熱によって溶かされていった。

そしてバシャーモは跳んだ。バシャーモは数メートル上空の山田先生にあつという間に辿り着き、そのままブレイズキックを当てた。山田先生の装甲は少し焦げていた。

「くっ……こんな攻撃もできるんですね……」

ここまで届かないとでも思っていたんだろうな。バシャーモの跳躍力はとんでもないからな。アレくらいなら普通に届く。

「バシャーモ、終わらせろ」

俺が告げる。そしてバシャーモは炎を纏う。炎タイプの技で高威力の技「フレアドライブ」だ。そして、山田先生に炎の突進を喰らわせる。威力のせいかな、山田先生はそのまま落ちてくる。バシャーモはたぶん無理だな。反動があるし。

「ピジョットー！」

大きな鳥、ピジョットを呼び出し、落下してくる山田先生を助ける。

「お疲れ、バシャーモ、ピジョット。 戻れ」

山田先生を下ろしたピジョットと、戦闘終わりのバシャーモを戻す。

「山田先生、どこか火傷してませんか？」

「だ、大丈夫です。 あれ バシャーモ、でしたっけ？ 強い  
ですね」

「当たり前」

俺が監修したんだ。 弱いわけがない。 ……弱いのもいるけど。

「さて、あれは八神だけの特権だからほっとくように。 では専用  
機持ちは織斑、八神、オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、凰  
だな。 八神はこっちに来い、八人グループになって実習を行う。  
各グループリーダーは八神以外の専用機持ちがやること。 いいな  
？では分かれる」

ほっとくなよ、ってかやらせたのアンタじゃんか。

「で、何で俺は呼ばれてるんですか？」

「ちょっと待て。 この馬鹿者どもが……。 出席番号順に一人ず  
つ各グループに入れ！ 順番はさっき言った通り。 次にもたつく  
ようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

鶴の一声。 あっという間にグループが出来上がった。

「お前は技術、知識共に学園トップだ。　ISが作れるほどにな

「嫌味か？」

「事実ではないか。　それにまだデータも取れてないんだろう？」

「何で知ってるんだ？」

「はやてに聞いた」

「姉貴、また余計なこと言ったのか……」

「お前ははやてのISのデータの確認でもしろ」

「了解。　じゃあ、俺たちはしばらくこの空間から消えるんで

終わる頃には戻ってくる」

「わかった。　遅れるなよ」

「了解」

さて、反転世界に行くか。

フォルムグラティナを右腕のみで部分展開し、次元の渦を作る。

「姉貴！　こっちこい！」

「こら竜牙！　いくら姉弟でも私は教師やで！　八神先生と呼ばんか！」

「誰が呼ぶか！ 姉貴は姉貴だ！ とつととデータ取るからついでかい」

「まったく、誰が竜牙をこんなに可愛げなくしたんやるか……」

「あんたらだよ。ポケてねえで行くぞ」

「はいはい。ほんなら千冬さん、あとお願いしますわ」

「とつとと行け」

俺は次元の渦から反転世界へと入った。

「竜牙、なんとなくついてきたんやけど、ここは？」

「ここは反転世界。現実世界の裏側にくつつくもう一つの世界だ。で、こいつがこの世界の王だ」

俺は現実世界では呼び出たくない大型のポケモン、ギラティナを呼び出す。

「デカツ！ てか、竜牙が従えてるなら竜牙はこの世界の神か！」

「まあそついうこと。あとここでの注意点。重力がばらばらなのと、たまに漂う黒い雲は吸うな。毒だから。それと、浮いてる泡には触れるなよ。脆くてすぐに割れる」

「割れたらどうなるん？」

「現実世界に影響する。例えば、泡に一夏が映ってたとして、そ

れを割れば一夏に衝撃が伝えられるってことだ。　ギラティナ、安全なところまで案内してくれ」

「ギユラアアア!!」

「じゃ、姉貴乗っつけてくれ。　時間にも限りがあるからさ」

「わかった」

俺と姉貴はギラティナに乗って移動し、足場以外ほとんどないエリアにまで来た。

「いくで、リインフォース！」

《All right》

姉貴は騎士甲冑に黒い翼と言う、墮天使?の姿になる。

「よし。　ここならかなり暴れても大丈夫だから、砲撃していいよ。データ取の為に」

「ターゲットとかあると嬉しいんやけど……」

「ターゲットねえ……あ、いい手があった」

クロバット、オオスバメ、トゲキッスを呼び出す。

「影分身を作って飛ばしてくれ。　お前たちはここで休んでいてくれ」

「まずは適当にデカイの数発行ってみよか」

空中に漂う影分身。

「来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ！ フレーズヴェルゲ  
！」

大出力ではないようで、放たれたのは一本の砲撃。

着弾から一気に範囲が広がる。

「うわぁ、とんでもねえな、これ」

「じゃ、次いこか」

コイツの砲撃とてつもねえほどにヤバイな。

「無詠唱砲撃ってないのか？」

「ないことはないけど、弱かったりするぞ？」

「アンタさ、教師なんだからさ、その技の威力で模擬戦とかしたら  
どうなるかわかるよね？」

「崩壊するやろっね」

「おらっと言っちな、おらっ」と

「じゃ、無詠唱の技、行ってみますか」

影分身が再び漂う。

「クラウド・ソラス！」

直射型か。しかもこれも高威力じゃねえか。地面に当たって衝撃波って、どんだけの性能だよ。

「じゃ、次！」



「では、午前の授業はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班ごとに集合すること。専用機持ち訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

戻るとちょうど終わるところで、一夏たちは肩で息をしていた。

「あー……。あんなに重いとは……」

あー、そういうことか。訓練機を運んだ後か。

「一夏、IS使えばいいのに」

「……その手があった」

「馬鹿だろお前」

これでも専用機持ちって……。

「シャルル、着替えに行こうぜ。俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけないしよ」

「え、ええつと……僕はちょっと機体の微調整をしていくから、先に行つて着替えてよ。時間がかかるかもしれないから、待つてなくていいからね」

「ん？ いや、別に待つてても平気だぞ？ 俺は待つのに慣れ

」

「い、いいからいいから！ 僕が平気じゃないから！ ね？ 先に教室に戻つててね？」

「お、おう。 わかった」

やっぱり何かがおかしい。 判断材料がまだ少ないか。

S i d e へ 竜 牙 へ o u t

第15話 実習（後書き）

ポケモンの鳴き声が今一わからない……  
感想等願います。

## 第16話 昼食と同居人

Side 〱 竜牙

「……どういことだ」

「ん？」

昼休み、俺たちは屋上で昼食を取っていた。

「天气がいいから屋上で食べるって話だったろ？」

「そうではなくてだな……！」

箒は視線を横にずらす。そこにいるのはセシリア、鈴、シャルル、俺だ。

一夏に誘われたときは迷ったけど面白そうだから来たわけだ。それに「箒に誘われたから」って言った瞬間に気づいたし。盗聴器もありだが、こういうのは直に見たほうが面白い。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食ったほうがうまいだろ。それにシャルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろうし」

「そ、それはそうだが……竜牙さんはわかっていたくせに……（ボソッ）」

小声で訴える箒。そんなこと当たり前じゃん。

「はい一夏。アンタの分」

タッパーを投げる鈴。

「おお、酢豚だ！」

「そ。今朝作ったのよ。アンタ前に食べたいって言ってたでしょよ」

なぜ酢豚だけなんだ？

「コホンコホン。一夏さん、わたくしも今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの。よろしければおひとつどうぞ」

見た目はいいんだけどな。前に文句言ってやったが変わったかどうかは知らん。

「お、おう。あとでもらうよ」

「……学習したか？」

「こ、今回は大丈夫ですわ！」

「……ちなみに試食したか？」

「いえ、してませんわ」

「はいアウト。前にも言ったよな？自分で味を確かめろって。というところで、自分で一個食って見せる」

「は、はい……」

そう言っつてサンドイッチを口に運ぶ。  
今回はアウトかセーフか……。

「だ、大丈夫でしたわ」

本当か？

「よし。一夏、食べ」

「おう」

一夏はサンドイッチを口に運んだ。

「お、本当に今回はまともだ」

さらっと酷いこと言っつたよな。

「ええと、本当に僕が同席してもよかつたのかな？」

俺が違和感を持つ三人目の男、シャルルは尋常じゃないほどに遠慮深い。

俺が来たときのように他のクラスから女子共が押しかけて来たんだが、よくもまあこんなセリフをいえるもんだ。だつてよ、

『僕のようなものために咲き誇る花の一時を奪うことは出来ません。こつして甘い芳香に包まれているだけで、もつすでに酔つてしまいそうなのですから』

これだぜ？ 絶対に言いたくないセリフだ。そのとき手を握られていた三年は失神してたし。

俺のとき？ 俺は無視か、こんなセリフを言っただけ。

『アンタ誰？』とか、『うざいよ』とか、『ちよっと邪魔』

とかだっただけ。 女子涙目になってたし。

「いやいや、男同士仲良くしようぜ。 わからいことがあったらなんでも聞いてくれ。 ISは兄貴で」

「人任せにしてんじゃねえよ。 別にいいけど。 おっと、俺も弁当食わなきゃな」

「「「え!?!」「」」

一夏、箒、鈴が声をあげる。

「なんだよ、三人揃って」

「それってもしかしなくても弁当?」

「さっき言ったよな?」

「「「一口くれ(ください)!!」「」」

「やだ」

「「「何で!?!」「」」

「俺の分減るし、それに俺の料理うまくねえだろ」

「」「嘘つけ!」「」

「み、みんなどうしたの?」

「そうですね。　竜牙さんがお弁当を出したあたりから変ですわよ?」

「」「だって兄貴(竜牙さん)(竜牙)の料理ものすごい美味しいもん!」「」

声を揃えるな、うるさい。

「だって見た目いいし」

「味は一流の料理店並に美味しいから」

「まさに完璧」

「それは本当ですか?」

「僕、ちょっと食べてみたいなあ」

「何でこうなるんだよ。　俺の飯がなくなるだろうが」

「それならみんなでおかずを交換したらどう?」

「」「」「シャルル(デュノア)(デュノアさん)、ナイス!」「」「」



「俺は遠慮する」

「……………え？　なんで!?」……………

「面倒くさいし、一夏と筈は中身一緒だし、鈴の酢豚の味知ってるし、セシリアは今回は成功したとはいえ、なんか食いたくないから」

「……………」……………

四人揃って沈黙する。

「気が向いたら作ってやるよ。いつになるかは知らんがな。　　ま  
あシャルルは食えるチャンスはあるかもな」

「え、なんで？」

「だってよ、お前の部屋は俺が一夏の部屋だろ？　　もし俺の部屋だ  
つたら一番食えるチャンスはあるな」

「デュノアずるいぞ!」

「そつよそつよ!」

「でも、まだ部屋割り聞いたわけじゃないからどうなるかはわから  
ないけどね」

今のうちに少しでも弁当を食べておく。

「あ!　少し減ってる!」

「竜牙、ホントお願い！」

「嫌だ」

俺は次々に口に運んでいく。

「……食べたい……」「」「」

「うるさいな。 ったく……。 てかお前らは食わなくてもいいのか？ 時間にも限りはあるんだぜ？」

まあ、神の力を使えば時を越えるからな。 時間を止めることも可能だ。 使わんけど。

「「うちそうさん」

「「「「うー……」「」「」

一夏、箒、セシリア、鈴はものすごく落ち込んでる。

「シャルル、こいつらほつといて食べよ？ 時間ねえから」

「あ、うん。 そうするよ」

俺は離れたところで姉貴のIS『リインフォース』のデータを見る。あまり大きい問題はないが、繊細な砲撃はできない。……まあ、あの馬鹿げた広域砲には関係ないけど。 だって範囲が広すぎるもん。 相手が狙撃型だったら無敵だな。

「試してみるか……」

現在はその日の夜。 俺の部屋ではなく一夏の部屋。

「改めてよろしくね、一夏、竜牙」

「おう」

「おう。 ってかなんで俺の部屋に来てんだよ。 シャルルは兄貴の部屋だよな？」

「別にいいじゃん。 如何わしい物があるわけでもあるまい」

「まあいいけど。 お茶入れたから飲んでくれ」

「紅茶とはずいぶん違うんだね。 不思議な感じ。 でもおいしいよ」

「気に入ってもらえたようでなによりだ。 今度機会があったら抹茶でも飲み行こうぜ」

「抹茶ってあの畳の上で飲むやつだよな？ 特別な技能がいるって聞いたことがあるけど、一夏や竜牙はいれるの？」

「抹茶は『たてる』って言うんだぜ。 いや、俺も略式のしか飲んだことない。 今は駅前に抹茶カフェっていうのがあるんだよ。 コーヒーみたいな感覚で飲めるやつな」

「ふうん。 そうなんだ。 じゃあ今度誘ってよ。 一度飲んでみたかったんだ」

「おう。 ついでに色々案内するぜ。 せっかくだし今週末の日曜にでも出かけるか」

「本当？ 嬉しいなあ。 ありがとう、一夏」

「兄貴も行こうぜ」

「悪いな一夏。 俺は用があるからパス」

「そうなんだ。 あ、そういうは一夏はいつも放課後にISの特訓してるって聞いたけど、そうなの？」

「ああ。 俺は他のみんなから遅れているから、兄貴に手伝ってもらってるんだ」

「僕も加わっていいかな？ 専用機があるから少しくらいは役に立てると思うんだ。 どうか？」

シャルルは絶対に勘違いしているはずだな。 俺が普通に教えていると勘違いしているはずだ。

「俺は別に構わないが？」

「シャルル、今からでもやめておいたほうがいい。 兄貴の特訓は普通じゃないから」

「夏、貴様は俺の楽しみを邪魔するのか？」

「？ 僕はそれでも構わないよ」

はい落ちた。

あ、後で千冬たちにも連絡しとかないとな。  
確実に来るだろうし。

なのはたちはたぶん

Side へ 竜牙 へ out

第16話 昼食と同居人（後書き）

シャルは竜牙と同室にしました。

これからの展開は今の所二択です。

予想してみても？

ではまた次回に。

第17話 疾風の正体（前書き）

すみません。 体調崩して更新遅れました。  
それに、話の順番も間違えました。 本当にすみません。

## 第17話 疾風の正体

Side 竜牙

シャルルが転校してきて5日が立っている。

「一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

今日は土曜日で、アリーナに人が多いので、残念ながらポケモンたちは控えてもらっている。

そして、ポケモンの特訓を受けたシャルルが今、一夏に教えている。

「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが……」

「知識として知っているだけって感じかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「うっ……、『瞬時加速』も読まれてたしな……」

「白式は近接格闘だけだからな。射撃武器の特性をより深く把握してないと勝てんぞ」

「特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「直線的か……うーん」

「あ、でも瞬時加速中はあまり無理に軌道を変えない方がいいよ。」



空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折したりするからね」

「……なるほど」

ちなみに、俺の技術力で瞬時加速の軌道変化を無反動でさせることは可能だ。

「一夏の『白式』って後付武装がないんだよね？」

「ああ、何回か調べてもらったんだけど、拡張領域が空いていないらしい。だから量子変換は無理だって言われた」

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ」

「ちなみに『零落白夜』がそうだから」

「へえ〜」

「じゃあ、射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ」

シャルルが一夏に渡したのは、五五口径アサルトライフル《ヴェント》だった。

「え？ 他の奴の装備って使えないじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用許諾すれば、登録してある人全員が使えるんだよ。一夏と白式に使用許可を出したから、試しに撃ってみて」

「お、おう」

そういえば他三人を忘れていたな。 篤、セシリア、鈴は端っこの方で俺たちの光景を見ている。 で、シャルルに教わる一夏にぶつぶつと文句を言っている。 男に対してそれはだめだろ。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

周囲が騒がしくなり、そこにいたのはドイツ代表候補生ラウラ・ポ―デヴィツヒだった。

「おい」

解放回線か。

「……なんだよ」

「貴様等も専用機だそうだな。 ならば話が早い。 私と戦え」

「いやだ。 理由がねえよ」

「貴様になくても私にはある」

一夏には思い当たるのはあるんだが、俺は何だ？

一夏は第二回IS世界大会『モンド・グロツソ』の決勝戦当日に――

夏が誘拐されて、決勝戦を棄権して一夏を助けた。そのときにドイツから情報提供されたため、その借りを返すためにドイツ軍の教官を勤めた。千冬に聞いた話だと、あいつはドイツ軍にいたころの教え子らしく、千冬に異常なほどに惚れ込んでいるらしい。そんなときにあいつに余計なことを言ったらしい。この余計なことが俺に関わるのだろうか？

「貴様がいなければ教官の大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を　　貴様の存在を認めない」

一夏に関しては正解。

「また今度な」

「ふん。ならば　　戦わざるを得ないようにしてやる！」

実弾砲を発射してきた。

ゴガギンッ！

シャルルが割り込み、シールドでラウラの一撃を止めた。

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「貴様……」

「やめろ。ラウラ・ボーデヴィッヒ。といっても、指一本動か

せないだろうがな」

「八神、竜牙……!!」

俺はサーナイトとムーマージの二体から放たれるサイコネシスによつてラウラは拘束されている。

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え!』

騒ぎを聞きつけた担当の教師の声のアリーナに響く。

「……ふん。今日は引こつ」

めんどくせえな。ラウラは戦闘状態を解除してアリーナゲートへと去って行っていた。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ」

「あいつに地獄を見せてやるつか……」

「「やめてあげて!」」

俺の独り言に一夏とシャルルに突っ込まれた。

「さすがにボーデヴィツヒさんでもかわいそうだよ」

「兄貴は今絶対にポケモンでボーデヴィツヒをリンチしようと考え

ただろ？」

「リンチはしようとは考えてなかったけど、伝説級のポケモンで絶望を見せてやるのかなとは考えたが……」

ルギアとかホウオウとかミュウツーとかデオキシスとかの伝説級のポケモンでな。

「絶対駄目だから！ 絶対に死んじゃうから！」

「死なない程度にするに決まってるだろ？」

そんなことしたらあいつらが悲しむからな。

「も、もうあがるつか！ 4時を過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉館時間だしね！」

無理やり切り上げたな。

「お、おう！ そうだな！ あ、銃サンキョ。色々と参考になった」

「それなら良かった。えっと……じゃあ、先に着替えて戻っててまーたこれだ。

「たまには一緒に着替えようぜ」

「い、いや」

「つれないことを言うなよ」

「つれないっていつか、どうして一夏は僕と着替えたいの？」

「というかどうしてシャルルは俺と着替えたがらないんだ？」

「どうしてって……その、は、恥ずかしいから……」

「慣れれば大丈夫。さあ、一緒に着替えようぜ」

「いや、えっと、えーと……」

シャルルの視線は中をさまよっている。

「俺が聞くがなんで一夏は男と着替えたがるんだ？」

「なんでって、そりゃあ男同士親睦を深めようとか……」

「それは悪いこととは言わん。だがな、人が嫌がっているのにしつこく誘い続けるお前は俺から見るとただの変態だぞ」

「変態じゃない！」

「黙れ変人。じゃ、俺はこの馬鹿連れて先に行くから」

「あ、うん」

ケーシィを呼び出しテレポートする。

「到着。一夏、着替えて戻るぞ」

「お、おう」

数分も経たずに

「よし、着替え終わり」

男の着替えは早いものだ。

「あの一、織斑君と八神君、デュノア君はいますかー？」

「はい？ えーと、織斑と八神はいます」

山田先生のようにだ。

「入っても大丈夫ですかー？ まだ着替え中だったりしますー？」

「大丈夫ですよ。着替えは済んでいます」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

「デュノア君は一緒ではないんですか？ 今日は織斑君たちと実習しているって聞いてましたけど」

「あ、まだアリーナの方にいます。もうピットまで戻ってきたか  
もしれませんが、どうかしましたか？ 大事な話なら呼んできま  
すけど」

「ああ、いえ、そんなに大事な話でもないですから、伝えといてく  
ださい。 ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになり

ます。結局時間帯別にすると色々問題が起きそうだったので、男子は週に二回の使用日を設けることにしました」

「本当ですか！」

風呂か。久しいな。

「嬉しいです。助かります。ありがとうございます、山田先生  
！」

「い、いえ、仕事ですから……」

ちやっかり手を握ってるし。

「いやいや、山田先生のおかげですよ。本当にありがとうございます  
ます」

「そ、そうですね。そう言われると照れちゃいますね。あはは…  
…」

なんでそこまで熱くなれる……。

「……一夏、何してるの？」

シャルルが来た。

「まだ更衣室にいたんだ。それで、先生の手を握って何してるの  
？」

「あ、いや。なんでもない」



先生の手をやつと放す一夏。

「……先に戻ってっていったよね」

「お、おう。 すまん」

「悪いな。 この馬鹿がノロくてな」

シャルルの言葉に棘がある。 気のせいではない。

「喜べシャルル。 今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」

「そう」

「ああ、そういうえば織斑君と八神君にはもう一件用事があるんです。 職員室まで来てくれますか？」

どうせ俺のIS『エンペラー神帝』についてだろうな。

「わかりました」

「了解。 あーシャルル、長くなるかもしれないから先にシャワー使ってくれ」

「うん。 わかった」

「じゃ山田先生、行きましようか」

「……………。はあっ……………」

寮の自室に一人だけとなったところでシャルルは吐き出すように息を漏らした。

(何をイライラしているんだか……………)

さっきの更衣室の態度が今になって恥ずかしい。きっと竜牙たちも面食らっていたに違いないと思うと、ますます落ち込み拍車がかかる。

(……………。シャワーでもして気分を変えよう)

「大して時間かからなかったな」

俺への用というのはやはり神帝についてだった。

IS委員会から俺のISについての情報提供が申し出されていたが俺は拒否した。このデータが漏れたところで造れはしない。だが、親が残したこいつを他人に、しかも欲望に吞まれた大人なんかに教えるつもりは毛頭ない。まあ、第三世代型くらいのデータを売って金にしているんだが……………。ま、世界が強行手段に出るのなら、俺は一切の容赦なく神の裁きを与えるがな。

「ただいま。……シャルルはシャワーか」

シャワールームから水音が聞こえていたからすぐにわかった。

「そういや、ボディーソープが切れてたっけか」

俺はクローゼットから予備のボディーソープを取り出す。

(とりあえず洗面所において声掛ければいいか)

そう考えて俺は洗面所に入った。

ガチャ。

ちょうどシャルルが替えのボディーソープを探そうと出てきたみたいだ。

「ちょうどいい。シャルル、替えの」

「り、り、りゅう……が……？」

シャワールームから出てきたのは見たことのない女子だった。だが俺はすぐに彼女が誰かわかった。そして最初に思った感情は驚きではなく、やっぱりと納得した。

「……替えはここに置いとくから、ゆっくりしろよ。シャルル」

「う、うん……」

俺はシャワールームから出た。

やっぱりシャルルは女だった。おそらくはデュノアの差し金というところか……。

ガチャ……

「あ、上がったよ……」

「早かったな。もう少しゆっくりしてもよかったのに」

「そ、そういうわけにはいかないよ。そ、それに、ばれちゃったしね……」

「そんなことが。ま、話さなくてもいいから。特に気になるわけでもないし、多少の予想はつくしな」

「……どんな？」

「どうせデュノア社の差し金だろ？ 第三世代型のISが未だに開発できず、経済危機。そして、希少種の俺たちのデータを盗んでこいってところだろ？」

「……すごいね。あたりだよ」

「ま、お前が訓練中に視線が俺と一夏によく行っていたし、ポケモンたちの戦闘データも取っていたのはわかっていたからな」

「気づいていたのにどうして止めなかったの……？」

「ポケモンたちのデータが流れたところで、第三世代型すら完成できないやつらが手にしたところで宝の持ち腐れだ。そもそも、俺のデータを取ったところですから無駄なんだよ」

「無駄？」

「お前も知るように俺のIS神帝は普通じゃない。東が作ったコアでこいつのコピーを作ってもほぼ確実に起動できない」

「起動できない？」

「特別に教えてやるよ。俺のIS神帝は

エンペラー

第七世代だ」

「第七世代！？ 世界中でやっと第三世代型のISの開発が始まっているのに!？」

「ああ。第七世代型……いや、第五世代型以上のISは今確認されている467機に使用されているISのコアでは、第五世代以上のISを作ることとはほぼ不可能だ」

「ほぼ不可能ってことはできないことはないんだ」

「ああ。だが、第五世代以上のISはコアとの相性も重要なんだよ。同調率が低ければ結局無駄だ」

同調率が最低でも80%以上でないとは起動はしない。普通のコアで作ったら10%行けばいい方だな。

「へえ……」

「あ、ノリで言っちゃったが、このこと誰かに話したら、容赦なくデュノア諸共この世から消すから」

「わ、わかったよ」

「あ、ついでに姉貴のISは第五世代だから。そのことも言ったら駄目だから。後々めんどいからさ」

「わかったよ。竜牙がこんなことまで話してくれたなら、僕も言おうかな」

「ん？別にいいぞ？俺は単にノリで言っただけだし、口止めしたから嫌なら言わなくてもいいんだぞ？俺は大して興味ないし」

「僕は言いたいから言っただよ」

「そうですか。なら、聴こうか。シャルル・デュノアになった訳を、本人の口から」

「うん。僕はここに男装して来た理由は実家からそうしろって言われてね」

「デユノア社の社長か。　だが、実の娘だろ？」

「僕はね、愛人の子なんだ」

「なるほどな。　納得した。　続けてくれ」

「うん。　引き取られたのが二年前。　ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。　それで色々と検査をする過程でISの適応が高いことがわかって、非公式ではあったけどデユノア社のテストパイロットやることになってね」

「父にあったのは二回くらい。　会話は数回くらいかな。　普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本低に呼ばれてね。　あのときはひどかったなあ。　本妻に人に殴られたよ。　『泥棒猫の娘が！』ってね。　母さんもちょっとくらい教えてくれてたら、あんなに戸惑わなかったのにな」

「それから少し経って、デユノア社は経営危機に陥った。　デユノア社も第三世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第二世代最後発だからね。　圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。　それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。　そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でIS開発許可も剥奪するって流れになったの」

「で、ここに来たのはさっきの推測通り、データを盗んでこいつて話か。　それと広告塔ってところか」

「……うん。　それに同じ男なら特異ケースと接触しやすいだろう

つてこともあるよ」「

ふぎけやがって……。

「でも、僕は竜牙にはれちゃったから、本国に呼び戻されるかな。デュノア社はまあ、……僕にはどうでもいいことかな」

「お前はそれでいいのか？」

「僕には選択できないから仕方がないよ」

「なら、お前はこの生活が楽しいか？」

「楽しいわけないよ……。だってみんなを騙して生活してるんだから……」

「お前は自由に生きたいか？」

「だからそれができたら僕はこんなことしてないよ！ 僕だってしなくてこんなことしてるわけじゃないんだ！ 僕だって普通に生きたいんだ！ 遊びたいんだ！ だけど！ したくてもできないって、さつきから言ってるじゃないか！」

シャルルは怒鳴った。だが、俺から出たのは笑みだった。

「それがお前の本心だな？」

「当たり前だよ！」

「なら、俺が居場所を作ってやる。デュノアの呪縛からも解放し



てやる。世界から護ってやる。抗う為の力もくれてやる」

「……………へ？」

「俺が親になってやるよ。シャルル」

「……………親……………？」

「ああ。親ってのはさすがに無理があるか。そうだな、兄ってところでどうだ？」

「ありがとう、竜牙。でも、どうやって？」

「デユノア社にはお前のISと第三世代型ISのデータを少しやれば、確実にお前を手放すだろうな。お前の父親は絶対に手放す。

まあ、お前の人生だ。お前が決める」

「僕は、竜牙の方がいいな」

「そうか。じゃ、近いうちにデユノア社に掛け合うか。じゃ、シャルル。明日、俺に付き合え。俺の家に行く。俺に関わりの深い人たちが集まるからそんなときに紹介する」

「ありがとう竜牙……………」

シャルルの瞳に涙が溜まっているのが見えた。

「……………シャルル泣きな。俺がすべて受け止めてやる」

「う、うわあああああん!!」

シャルルが泣く。　今まで溜めていた鬱憤を晴らすかのように、大粒の涙を流して。

しばらくしてシャルルは泣き止んだ。

「もついいの？」

「……うん」

「じゃ、今日はここで食べるか。　特別に俺の料理だ。　といても、簡単なものだけだな」

「竜牙が作ってくれるなら、僕はそれでいいよ」

「じゃ、ちょっと待ってな。　すぐに作るから」

その後、俺は料理を作り、シャルル……いや、シャルロットに振舞って、千冬たちに連絡しておいた。　ちなみに、千冬には口止めはしてある。

S i d e 〱 竜牙 〱 o u t



第17話 疾風の正体（後書き）

次回は前17話の「お話」です。

少し内容が変わるので、二度手間をかけてすみません。

第18話 お話（前書き）

少し内容を変えました。  
本当に申し訳ありませんでした。

## 第18話 お話

Side 竜牙

「じゃ、俺はメンテしてるから終わったら呼んでくれ。あ、姉貴とシャルロットは部屋で休んでくれ」

「「「「「わかった」「」「」「」」」」」

今この場には俺の姉貴と彼女のなのは、フェイト、シグナム、彼女になるかもしれない千冬、妹になるシャルロットがいる。なぜこうなったかというところ……

「送信つと。あの文でいいだろう」

月曜に俺が送信したメールの内容は共通していて、『今週末の日曜に会えないか？ 話がしたいって人がいるから』だ。返信されたのは送信してから一分も経っていない。どんだけ早いんだよ。で、メールの内容は

『話がしたい人？ 別にいいよ』となのは。

『竜牙のためなら用事をキャンセルして会いに行くよ』とフェイト。

『珍しいな。竜牙からそんな言葉が聞けるとは。私は別に構わ

ない』とシグナム。

やっぱりだけど、本当に予定キャンセルしてまで来るんだ。フェイトはそれでいいのか？

それへの返信は『じゃあISとか準備しておいてくれ。10時ごろに迎えに行くから』。

そしてまた一分も経たず、つてか三十秒も経ってないんじゃないか？ 返信されてきた。そしてその内容はどことなく似ていた。

『ありがとう。待ってるから』となのは。

『ありがとう竜牙。ちゃんと迎えに来てよね』とフェイト。

『それは助かる。ありがとう竜牙。では、その日を待つとしよう』とシグナム。

これでよし、と。

後は千冬に連絡して終わりだ。千冬への答えはどうしたかって？俺は返事はしたよ？ ちょっと前に。

返事はこうだ。『俺は千冬がそれでいいのならそれでもいい。だが、俺の独断で付き合うわけにはいかない。あいつらの意思もある。あいつらと話して納得すればだ』だ。

今思えばやっぱり恥ずかしいな。

そして日曜。

「少し待っていてくれ。すぐにみんな迎え行ってくるから」

まずは姉貴と千冬とシャルロットを俺の家に招く。もちろんテレポートでだ。

そして次はなのは。

「なのはは準備できてるか？」

「うん。大丈夫だよ。あ、ヴィヴィオも連れてってもいいかな？」

「別にいいぞ。ヴィヴィオはなのはがいないと泣いちゃうしな」

「ありがと、竜牙君」

なのはが拾った女の子、ヴィヴィオも連れて。

次にフェイト。

「フェイト、迎えに来たぞ」

「あ、竜牙。久しぶり」

「そういえば久しぶりか。アルフは？」

アルフというのはフェイトが飼っている犬のことだ。



「今は寝てるよ。　行こ、竜牙」

「そうだな。　待たせてるし」

そして最後にシグナム。

「久しぶりだな、シグナム」

「ああ。　本当に久しぶりだ」

「あ、竜牙！　シグナム泣かしたら赦さねえかな！」

「わかったわかった。　毎回同じこと言うな」

「久しぶりね竜牙君。　今度は私の料理食べてっよね。　大分上達したんだから」

「マジすか。　それは楽しみつすね。　お、ザフィーラじゃん。　相変わらずでかいな」

ザフィーラというのはシグナムたちの家にいる狼だ。

「じゃ、行くか。　待たせてるから」

「そうだな」

「シャマルさん、ヴィータ、ザフィーラではまた」

「また来いよ〜」

「料理、ちゃんと食べにきてくださいね」

「了解」

テレポート。

「到着」

「久しぶりです、はやて」

「ホンマ久しぶりやなあ、シグナム……またでかくなって」

「止めてくれ姉貴。話が進まないから」

「スマンスマン。で、話ってなんや?」

「まずは、シャルロットについてだ。妹にしようと思うんだが、みんなはどうだ?」

ちなみに、シャルロットの詳しいことは教えてある。

「竜牙君がそれでいいなら私はそれでいいよ」

「私もそれでいいよ」

「この娘はいい瞳をしている。私も賛同する」

「私は竜牙とシャルロットちゃんの意味が同じなら止めへんし、養子に引き取ってもええで」

「私には言う権利はないですね。ただ、私は竜牙さんがそれでいいのなら構いません」

「あっさり終わったな」

「……えーっと、よろしくお願いします?」

「なぜに疑問形? まあいいや。詳しいことは後々話そうぜ」

「う、うん!」

回想終了。そして現在に至る。

「久しぶりにこいつらのメンテだ。完璧に仕上げやる」

《よろしくお願いします。  
クリエイター 創造者》

「レイジングハート、バルディッシュ、レヴァンティン、あいつらを守ってくれてありがとな」

《マスターを守るために生まれたのが私たちなのですから》

《当たり前だ、龍》

《それが我が役目。当然だ》

「頼もしいな。じゃ、始めるぜ」

俺はメンテを始めた。

S i d e 〱 竜牙 〱 o u t

S i d e 〱 なのは 〱

なにこの人、ものすごい美人さんだよ！  
しかもどこか見たことがあるような……。

「私は高町なのはです。よろしくお願いします。えーっと」

「織斑千冬だ」

「「え!?!」」

今織斑千冬って言ったよね？

「もしかしてモンドグロツソ初代ブリュンヒルデのあの織斑千冬さん?」

「そつだが……」

「ほう。今度一度手合わせを願いたいものだ」

「シグナム、何言ってるの!?!」

「そうだよ！ 私だってやりたい！」

「なのはまで……」

ごめんね、フエイトちゃん。でもこれは譲れないよ。だってあの織斑千冬さんと戦えるかもしれないんだよ？ 絶対に言ってみなきゃ損だって！

「悪いが機体がない。今日はできない」

「あ、竜牙君に作ってもらえばいいんじゃない？」

「竜牙なら作ってくれるかも」

「私たちのものも竜牙が自分のISを後回しにして作ってくれたものだしな」

あれがなかったら6年半もかからなかったはずなのに、本当にやさしいよ。竜牙君は。

「……そろそろ本題に入っていいか？」

そうだった。今回の目的忘れてた。

「はい」

「びっぞ」

「構わない」

「では、今回私が三人に話がしたいといったのは竜牙さんについてだ」

また竜牙君のこと？

S i d e 〱 な の は 〱 o u t

S i d e 〱 竜牙〱

「話は終わったのか？」

「ああ。終わった」

「で、どうだった？」

俺の言葉でなのは、フェイト、シグナムが微笑む。

「これからよろしくお願いします。 竜牙さん」

「よろしく、千冬。 なのはたちはそれでよかったのか？」

「私たちが決めることじゃないよ。 だって私たちは竜牙君と付き合ってるんだから、竜牙君がいいならそれでいいんだよ」

「それでも、その相手にもよるけどね」

「まあだから、これからも増えるなら私たちの誰かに顔合わせさせること」

「わかったよ。 やっぱり優しいな、お前らは」

「そ、そうかな？」

「そうだって。 あ、それとこれ。 メンテ終わったぞ」

俺はなのはにレイジングハート、フェイトにバルディッシュ、シグナムにレヴァンティンを渡す。

「メンテの三ヶ月から六カ月後の間に無理したら俺に言えよ。 第五世代は繊細なんだからさ」

「うん。 わかったよ」

「ありがとう、竜牙」

「承知している」

「ちょっと待ってください。 第五世代とはどういうことですか？」

「そういえば千冬には教えてなかったな。 てか知ってるのは俺とその三人と姉貴と束だけだから無理もないか。 第五世代は意思を持つISのことだ。 ちなみに俺のISは第五世代ではないから」

「ではあなたのISの世代は一体何なのですか？」

「第七世代。 あ、誰にも言うなよ？ 面倒だから」

「「「「「竜牙（君）（さん）らしいね（ですね）（な）「「「「」

「竜牙く「うわああああん!!!」 ヴィヴィオ!？」

突然の泣き声。

「なんや!？」

「ど、どうしたの!？」

姉貴とシャルロットが部屋から出てくる。

「サーナイトも限界か」

俺は急いでヴィヴィオのいる部屋に入る。

「ヴィヴィオ、悪かったな。だから泣き止め」

サーナイトを戻して俺はヴィヴィオを抱っこする。

「ぱ、パパ？」

「……パパ!？」

俺、姉貴、千冬、シャルロットの声が重なる。

どういうことだ？ 前は「お兄ちゃん」て呼んでたよな？

「パパってどういうことだい？ ヴィヴィオ、教えてくれるかな？」

「グスツ……なのはママがお兄ちゃんのことをそう呼びなさいって  
いってたの」





竜牙はなのはを連れて部屋に籠っちゃったけど、何があったんだろ？

「えー……これはどういう状況だ？」

千冬さん、私も初めは驚きました。O・H・A・N・A・S・H・Iはたぶんなのはの影響だと思うけど、いつも優しい竜牙があんなに怖い笑顔を浮かべるんだから。シグナムも顔が引き攣ってるし、私もだと思っから。

あ、思い出したら震えてきた……。

「大丈夫だ……たぶん。すぐに出てくるはずと思いたいな」

「はああああ……」

今回は早く終わったようで、5分ほどで出てきた。

だけど竜牙は深いため息をついているんだけど、どうしたんだろう？

「あのー竜牙？ なのはは？」

「あいつならベッドで寝てるぞ」

部屋を覗いてみるとベッドの上で俯せで一切動かないなのはの姿があった。それに加えて部屋が少し荒れていた。

「……竜牙さん、あなたはなのはに何をしたのですか？」

やっぱり気になるよね。

「単なる取調べと名のついた軽い精神破壊」  
マインドクラッシュ

なのは、大丈夫かな……？

「竜牙、なぜ高町にしたのだ？」

「いやな、俺が見なかつた間にヴィヴィオに俺のことを「パパ」と呼ぶように仕向けたからなんだよ」

「別にいいじゃない（構わないだろ）？」

「お前らはヴィヴィオに「ママ」って呼ばれてるからそう言えるんだよ。俺はまだ15だぞ。それでパパはないだろ……」

「……」  
「竜牙さんは十分大人に見える（よ）（ますよ）」「」「」

「高校生でこれはないって。　　ったく、ヴィヴィオに訂正をかけておかなければ……」

そういつて竜牙はヴィヴィオのいる部屋に向かっていった。  
ただどきつと無駄だろうな。

S i d e ～ フ ェ イ ト ～ o u t

S i d e ～ 竜牙～

「悪いなヴィヴィオ、遅くなっちゃまって。 だけどよく待ってたな。 偉いぞ」

そついつて俺はヴィヴィオの頭を撫でる。

「えへへ」

「ヴィヴィオ、俺のことはパパと呼ぶな」

「なんで？ パパはヴィヴィオのこと嫌いな？」

「嫌いじゃないよ。 ただ、パパって呼ぶのだけは止めてほしいんだ」

「パパって呼んじゃだめなの？」

赤と緑のオッドアイに涙が溢れてくる。

「あ、泣くなヴィヴィオ」

「パパって呼んでいいなら我慢する……」

うわ、ジョーカー切ってきやがった。

「……………」

「そろそろ諦めたらどうですか？」

「千冬、そう言っつがこっちはいろいろとやばいんだって。 ばれた

らとんでもない事に……………」

女子共にこのことが知れ渡ったらどうなるかは火を見るより明らか。  
確実に騒ぎになる。

「う……うう……」

ヴィヴィオの瞳にさっきよりも涙が増している。

「わ、わかった！ わかったから泣くな！」

「グスツ……パパって呼んでもいいの？」

「いいから泣くな。 な？」

俺は弱い……。

「パパ大好き！！！！」

飛びついてくるヴィヴィオ。俺はそのまま抱っこする。

「竜牙さんも女の涙には弱いようですね」

「それを言っな……」

「でもそれって特定された、だよな」

「小さい女の子には本当に弱いな」

「お前らは俺をどうしたいんだよ……」



そのセリフを言った瞬間、姉貴、千冬、フェイト、シグナム、シャルロットの声が聞こえた気がした。

「今起こしてくるから少し待ってな」

俺はヴィヴィオを降ろしてなのはが死んでいる（死んでないから）部屋に籠る。

「タブンネ、癒しの波動してから癒しの鈴」

癒しの波動でなのはの体力が回復される。

そして心地良い鈴の音が奏でられる。

「うー、酷いよ竜牙君。ちゃんと話したのに……」

精神は癒しの鈴で治療済みだ。

「お前のせいで結局パパと呼ばれるようになったじゃねえか」

「別にいいじゃない。パパって呼ばれても」

「もう一回O・H A・N A・S H Iが必要みたいだな」

「ごめんなさい」

「ヴィヴィオが待ってるから行くぞ」

「あ、うん」

その後、この場にいる全員（ヴィヴィオは除外）にこの家に自由に出入りできるように鍵と、ケーシィのコピーを渡しといた。……  
テレポート要員に。  
そして、シャルロット優先に、シャルロットと千冬の第五世代型を造り始めた。

S i d e 〱 竜牙 〱 o u t



第18話 お話(後書き)

……しまった。どうやってシャルにフラグを立てよう……。  
本気で悩んできた……。。

第19話 黒い雨と騒動

S i d e 〱 竜牙

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、ウソはついてないでしょうね!？」

月曜の朝、教室に向かっていた俺たちに聞こえる声（廊下まで）。

「何の騒ぎだ？」

「なんだ？」

「さあ？」

隣にいるのは一夏とシャルロット（男装ver.）である。

「本当だつてば! この噂、学園中で持ちきりなのよ? 月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と交際でき」

「俺がどうしたつて?」

「「「きゃああっ!?!」「」「」

一夏が話しかけなければ聞けましたよ。

「で、何の話だったんだ? 俺の名前が出ていたみたいだけど」

「う、うん？ そうだっけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですね！ わたくしも自分の席につきませんと」

女子が散っていった。

「……なんなんだ？」

「さあ……？」

「真相は一夏がいなければわかっていました」

Side～竜牙～out

Side～篝～

（な、なぜこのように……）

今噂になっているのは『学年別トーナメント優勝者は織斑一夏と交際できる』だ。

誰かのせいかは知らないが、竜牙さんとシャルルも噂になっているが、私にはどうでもいい。

（あの約束は私だけであるっ！）

大声で言ってしまったのが間違いだっただのであろうか。  
今では学園中に知れ渡っている。

(まずい、これは非常にまずい……)

(と、とにかく、優勝だ。優勝すれば問題ない。今回はあのとき  
のようには )

(あの時とは違う。大丈夫。大丈夫……なはずだ)

そんな思いに更けていた。

Side) 箒) out

Side) 竜牙)

「本当に遠いな。 あれって一夏じゃね？」

トイレの帰り、視線の先にいるのは一夏。 なぜか隠れている。  
視線をずらすと、千冬とラウラが口論?していた。

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません  
ん」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファクションかなにかと勘違  
いしている。 そのような程度の低い者達に教官が時間を割かれる  
など」

「　　そこまでにしておけよ、小娘」

「っ…………！」

今一流れがつかめない。

「少し見ない間に偉くなったな。　十五歳で既に選ばれた人間取りとは恐れ入る」

「わ、私は…………」

厳しいねえ…………内容知らんけど。

「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「……………」

千冬はラウラを急かす。

「その男子二人。盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」

「な、なんでそうなるんだよ！千冬ね　　」

ばしーん！

「学校では織斑先生と呼べ」

「は、はい…………」

「気づいてたんだ」

「当たり前だ。本気で気配を消していたなら気づけなかっただろうがな」

「そら、走れ劣等生。このままじゃお前は月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」

「わかってるって……」

「そうか。それならいい」

「じゃあ、教室に戻ります」

「おう。急げよ。ああ、それと織斑」

「はい？」

「廊下は走るな。……とは言わん。ばれないように走れ」

「了解」

「じゃ、俺はテレポートしますかね」

「あ、ずる」

俺はテレポートした。

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

なぜ一夏に聞く。

「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと」

「第三アリーナだ」

「「わあっ!?!」」

そこにいたのは筈だった。

「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

「お、おう。すまん」

「ごめんなさい。いきなりなことではびっくりしちゃって」

「あ、いや、別に責めているのではないが……」

頭を下げるシャルルに、氣勢を削がれたようだ。

「ともかく、だ。第三アリーナへ向かうぞ。今日は使用人数が  
少ないと聞いている。空間が空いていればポケモンたちも出せる

だろう」

「勝手に話を進めるな。まあ、空間があれば出せるだろう」

そこで異変に気づく。さっきから廊下を走っている生徒がいる。どうやら騒ぎは第三アリーナで起きているらしい。

「なんだ？」

「何かあったのかな？ こっちで先に様子を見ていく？」

観客席へのゲート。確かに、早く確認はできるな。

「誰かが模擬戦をしているみたいだね。でもそれにしては様子が

」

ドゴオンッ！

「「「「！？」」「」」

突然の爆音。そしてそこにいたのは

「鈴！ セシリア！」

ラウラ・ボーデヴィツヒが鈴とセシリアを圧倒していた。しかも二人のISはかなりダメージを受けているようだった。

「何をしているんだ？ お、おい！」

一方的な暴虐が始まり、



「ああああっ！」

シールドエネルギーはあっという間に減って、機体維持警告域を超え、操縦者生命危険域へと到達する。これ以上ダメージが増加しISが強制解除されることがあれば、そのときは生命に関わる。

しかしラウラは攻撃の手を止めない。

普段と変わらない無表情が確かな愉悦に口元を歪めたのを見た瞬間、一夏が行動を起こした。

「一夏、待て！」

「おおおおっ！」

しかし遅かった。

白式を展開し、『零落白夜』を発動させ、アリーナのバリアーを切り裂いた。同時に瞬時加速を使い、ラウラへ突撃していった。

「その手を離せ！！！」

「ふん……感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

零落白夜のエネルギー刃が届く寸前で、びたつと一夏の体が止まる。

「な、なんだ！？ くそっ、体がっ……！！」

今回は何もしていない。これがAICか。

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の1つでしかない。消えろ」

「ここで一夏に消えられても、こっちが困るんだよな」

バクフーンの火炎放射がラウラに向かって放たれる。回避したラウラ。再び動き出した一夏。

「竜牙、こっちは大丈夫だよ」

「了解。来いよ、ラウラ・ボーデヴィツヒ。相手してやる」

ま、俺はやらねえけどな。

バクフーンを戻してサーナイトを出す。今回はサイコネシスではなく、まもるでお遊びだ。

「ふざけるなあああ!!」

瞬時加速の体勢に入ったが、飛び出す瞬間に陰が割り込んだ。

ガギンツ!

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉!？」

割り込んできたのは千冬。しかもその手にはIS用近接ブレードが握られていた。IS起動してないのに。

「模擬戦をやるのは構わん。

が、アリーナのバリアーまで

破壊する事態にならねば教師として黙認しかねる。この戦いの

決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るのなら」

「織斑、デュノア、八神、お前たちもそれでいいな？」

「あ、ああ」

素で答える一夏。

「教師には『はい』と答える。 馬鹿者」

「は、はい!」

「僕もそれで構いません」

「それでいい」

俺とシャルルの声を聞いて、千冬は改めてアリーナ内すべての生徒に向けていった。

「では、学年別トーナメントまで私闘を一切を禁止する。 解散!」

パンツ!と千冬が強く手を叩いた。

Side 〱 竜牙 〱 out



第19話 黒い雨と騒動（後書き）

感想などお願いします。

第20話 怪我人とタッグ？（前書き）

ポケモンの口調はなんとなくです。

第20話 怪我人とタッグ？

Side 竜牙

「……………」

「……………」

場所は保健室。時間は第三アリーナの一件から一時間が経過していた。

ベットの上では鈴とセシリアがむっすーとした顔で視線をあらぬ方向へと向けていた。

「別に助けられなくてもよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「よく言っな。あいつに手も足も出ずにボコボコにされていたくせに」

「「うっ……………！」「」

痛いところを突かれて固まる二人。

「お前らなあ……………。はあ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」

「こんなのけがのうちに入らな いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味  
っ！」

馬鹿だな。 ただの馬鹿だな。

「バカつてなによバカつて！ バカ！」

「一夏さんこそ大バカですわ！」

一夏も同じことを考えていたようだ。 ってか一夏つて簡単に思考  
読まれるよな。

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「お帰りシャルル。 どうせならサーナイトとかに行かせりゃよか  
ったのに」

「いいいいいよ。 僕が好きで行ったことだから」

シャルロットが飲み物を買って戻ってきた。 てか、サーナイトは  
俺の指示なら確実に実行してくれるからわざわざ行かなくても本当  
によかったのに。 それと、シャルロットの台詞は一夏は聞き取れ  
なかつたみたいだが、それ鈴たちも聞き取れたようだ。

「ななな何言ってるのか、全っ然っわかんないわね！ こここ  
ここれだから欧州人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！ そ、そういう邪推をされるといさ  
さか気分を害しますわねっ！」



これでも気づかない馬鹿な一夏。　これだから唐変朴て言われるんだよ。

「はい、ウーロン茶と紅茶。　とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきましたきましようっ！」

ひったくるように受け取って、ごくごくと飲み干した。

「ま、先生も落ち着いたら帰ってもいいって言ってるし、しばらく休んだら」

ドドドドドドドドッ………！！

「な、なんだ？　何の音だ？」

廊下から地鳴りが聞こえる。　しかも近づいてきている。

ドカーン！　と保健室の扉が吹き飛んだ。　扉って飛ぶんだな。　というより俺に向かって飛んできている。

「ぎげん　な　よー！」

飛んできた扉にローリングソバット。　そして、蹴り返された扉のカウンターを食らった女子が数名いた。

「まったく、危ねえだろうが」

「「「どこが!?!」「」」

こんなもん飛ばされたら、飛ばした側も飛ばされた側も危ないっての。

「で、なんの用だ? わざわざ来たってことはなんかあったんだろ?」

そうだったと思い出したのか女子が流れ込んでくる。

「織斑君!」

「八神君!」

「デユノア君!」

女子の軍勢が手を伸ばしてくる。

「な、な、なんなんだ!?!」

「だからなんだよ……」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちょっと落ち着いて」

「「「「これ!」「」」」

女子の軍勢が出してきたのは出してきたのは学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

「な。なにになに……?」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人一組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』」

「ああ、そこまでいいから！とにかくっ！」

「私と組もう、織斑君！」

「私と組みましょう、八神君！」

「私と組んで、デュノア君！」

女子は男子と組もうって考えか。

「俺は無理。シャルルは一夏と組むから無理」

「八神君は？」

「俺はソロ出場ってことだから無理」

「なんで八神君だけ一人なの？」

「一夏たちは納得したようだが、こいつらはわかってないようだ。」

「俺は特別」

「こう言っとけばなんとかなる……はず。」

「なんか……」

「納得……」

「できないよね……」

なんとかならなかった。

「ま、俺は無理でシャルルと一夏も無理だから、別をあたれ」

「まあ、そういつことなら……」

「他の女子と組まれるよりかはいいし……」

「男同士って絵になるし……ごほんごほん」

最後の奴にはO・H A・N A・S H Iが必要になるかもな。

「あ、あの、竜牙」

「一夏っ!」

「一夏さんっ!」

鈴とセシリアが一夏に飛び出した。

「あ、あたしと組みなさいよ! 幼馴染でしょうが!」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと!」

こいつら怪我人だよな？ それに無理だろ。

「ダメですよ」

ほら来たよ山田先生。

「お二人のISの状態をさっき確認しましたがけど、ダメージレベルがCを超えています。当分は修理に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

「うっ、ぐっ……！ わ、わかりました……」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！ 不本意ですが！ トーナメント参加は辞退します……」

やっぱりな。あれだけ食らってるんだ。ダメージレベルがCを超えないほっがおかしい。

「一夏、IS基本理論の蓄積経験についての注意事項第三だよ」

一夏、覚えてなかったのか？

「『ISは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積することで、より進化した状態へと自ら移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼動も含まれ、ISのダメージがレベルCを超えた状態で起動させるとその不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、それらは逆に平常時での稼動に悪影響を及ぼすことがある』」

「おお、それだ！ さすがはシャルル！」

「……一夏、お前には勉強がもっと必要だな」

「え、！？マジで！？」

「あの程度覚えてなかったんだから当たり前」

「……………な、何だってラウラとバトルすることになったんだ？」

あ、現実逃避始めやがった。

「え、いや、それは……………」

「ま、まあ、なんと言いますか……………女のプライドを侮辱されたから、  
ですわね」

「？ふうん？」

一夏のことを言われたんだ。

「ああ。もしかして一夏のことを」

「あああつ！デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですね！まったくです！おほほほほ！」

シャルロット、そう思っても言っちゃ駄目だぞ。

「こらこら、やめろって。シャルルが困ってるだろうが。それ  
にさっきから怪我人のくせに体を動かさすぎだぞ。ホレ」

「夏は怪我人の肩をを指でつつく。」

「「びぐっ……」」

変な声（笑）。

「……………」

「……………」

「あ……すまん。 そんなに痛いとは思わなかった。 悪い」

「夏の死亡（死なないだろうけど）フラグが立ったな。」

「い、い、いちかあ……あんたねえ……………」

「あ、あと、で……おぼえてらっしやい……………」

全快したらボコられるだろうな。

夕食後、現在は部屋。

「あのね、お兄ちゃん」

「なんだ？」

あの日以来、二人っきりのときはシャルロットは俺のことをお兄ちゃんと呼ぶようになった。

「遅くなっちゃったけど、助けてくれてありがとう」

「ああ。逆にこっちに悪いだろ。正体知らない一夏と組ませちまったんだから。まあ、あいつならたとえお前の正体を知っても誰にも言わないだらけどな」

「一夏は優しいからね」

「そういえばさあ、シャルロットはずっと男子口調だよな」

「う、うん。僕 私もそう思っただけど、ここに来る前に」



正体がばれないように』って、徹底的に覚えさせられたからね。簡単には直らないかも」

覚えさせられたの台詞に俺はデュノアの野郎への嫌悪感が沸いた。まだデュノア社には話してないが、俺は交渉のときへの不安が過ぎった。

「ふーん。じゃ、無理しなくてもいいんじゃない？」

「へ？」

「正直、デュノアへの嫌悪感はあるが、過ぎてしまったことだからどうしようもない。だけど、今のお前が今の状況で満足するなら俺は咎めはしない」

「……それなら僕は、焦らなくてもいいかな。だって、僕はもうあの人の駒じゃない。だけど、この生活に慣れちゃったから、少しずつ、ゆっくりと戻していくことにするよ」

「そうか。なら俺はお前をサポートするだけだ」

そしてふと気づく。互いに制服であることに。

「あー着替えるか。俺は部屋から出てるわ」

「い、いいよ、そんなの。お兄ちゃんに悪いし、僕は気にしないから……」

「うーん……俺は反転世界に行くてるわ」

「反転……世界？」

「俺たちが今ここにいる世界が現実世界。で、その現実世界の裏側にびったりくっついた掟破りの世界、それが反転世界だ」

「僕は気にしないって言ったのに……」

「あーそれだけが理由じゃないから。俺の神帝にいるポケモンは600を超える。その中でも大型の奴は現実世界で出すと大きすぎるから、反転世界で様子を見るんだよ。どうせなら見るか？結構レアだぞ？」

「じゃ、じゃあ……ちょっとだけ……」

「じゃ、行くか」

フォルムグラティナを右腕のみで部分展開し、次元の渦を作り、俺とシャルロットは反転世界に入る。

「ここでの注意点。重力がばらばらなのと、たまに漂う黒い雲は毒だから吸わないこと。それと、浮いてる泡には触れるなよ。脆くてすぐに割れて、現実世界に影響するから」

「わ、わかったよ」

「じゃ、我がIS神帝に眠りし神々よ、現れよ！」

神帝から眩い光が放たれる。そして、光が収まり、目の前にいるのは神と呼ばれしポケモンたち。

「じゃあ紹介するぞ。両肩に真珠みたいのを付けてるのが空間を司るパルキアで、胸にダイヤモンドなのをつけてるのが時間を司るディアルガ。金の装飾、黒の羽を持つのがこの反転世界の王のキラティナで、腰部分に金の装飾みたいなのがあるのがすべてを創造したと言われるアルセウス」

「へ、へえ……」

「まだいるんだけど、さすがに一度に紹介するのは無理があるから今日はこいつらだけで。俺はまだいるから、シャルロットは先に戻って着替えてくれ。10分くらいしたら戻るから」

「わかった」

キラティナに指示して次元の渦を作り出し、シャルロットを部屋へと戻す。

「久しぶりだな……竜牙……」

「ああ。アルセウス」

ポケモンの中にはしゃべることが出来る奴がいます。数は詳しくは知らんけど。

「我等の力を使わなくなったな……」

「悪いな。ここでお前たち神の力を使うと、日殺傷設定でも確実に大怪我するからな。特にアルセウスは最悪の状況になるまでは我慢してくれ」

「わかつている……。だが、我等の共通する意思はお前と共に戦い、共に生きるだ……。忘れるな、我等はいつでもお前と共にいることをな……」

「ありがとよ、アルセウス。そしてみんな……」

「我等は戻る……。他に顔を見せてやれ……」

「そうするよ」

アルセウスたちは戻り、新たにルギア、ホウオウ、サンダー、ファイヤー、フリーザーの5体を呼ぶ。

「久しぶりだな。みんな」

「久しいな竜牙」

「久しぶりだな竜牙」

「ルギアにホウオウ久しぶり。サンダーたちもな」

「『ギアアユウウ』」

この中でしゃべれるのはルギアとホウオウだ。海の神と呼ばれしルギアと虹の化身ホウオウ。

「我等を呼んだのはなぜだ？」

「久しぶりに顔を見たくくなってな。お前たちはみんなでかいから現実世界ではなかなか呼べないんだよな」

「そうか……。お前は人を待たせているのではないのか？」

「なんでわかるんだよ……。て言うか待たせてないし」

「お前はそうはいつでも相手がそうとは限らない。だから我等からは一言のみだ」

ルギアとハウオウが声をそろえて言う。

「我等は常にお前と共にいる」

「さつきも似たようなことを言われたよ……」

「では我等は戻る」

「ああ」

反転世界にいるのは俺のみとなった。

「……戻るか」

フォルムギラティナを部分展開し次元の渦から戻る。

「おかえり、お兄ちゃん」

「ただいま。シャルロット。じゃあ俺は着替えるよ」

「うん」

ぱつと着替える。 シャルロットの視線があつたのは気にしないで  
おしじ。

S i d e へ 竜 牙 へ o u t

第20話 怪我人とタッグ？（後書き）

次回はトーナメントです。

第21話 学年別トーナメントへ関

Side 竜牙

「竜牙竜牙竜牙竜牙竜牙!」

「ん?」

セシリアたちが怪我をして一週間、学年別トーナメントまで一週間。6月の三週目の土曜日の夜、俺の部屋にてシャルロットが慌てた様子で入ってくる。

「どどどど、どうしよう! 一夏にバレちゃったよ!」

「一夏にシャルロットが女ということがバレたようだ。」

「あーやっぱバレたか。で、一夏はどこにいるんだ?」

「たぶん部屋にいると思うけど……」

「一夏の部屋に行くぞ。事情を話す。最悪あいつなら俺と千冬の脅迫が効くからな」

あいつは俺と千冬の脅迫は絶対に逆らえない。俺のは逆らえたとしても、千冬の場合は確実に黙る。

「う、うん。わかった」



「とうわけだ。だからバラしたら容赦はしない」

「お、おう。絶対に言わねえ」

一夏にシャルロットのことを教えて、口止めもしておいた。ちなみに、シャルロットが妹になることはまだ話していない。

「それにしてもなんだ。シャルルの父親って最低だな」

「それは俺も同感だ。だから俺はデュノア社を潰してやろうかと

初めは考えたんだけどな」

「初めは？　じゃあ今は？」

「今はデュノアからシャルルを解放する」

「応本名は隠しておく。」

「やっぱりすげえよ。　兄貴は」

「そうだね。　竜牙はすごい。　強くて、優しくて、温かい」

「そうか？　強くはないと思うが……」

「強いよ。　僕の知る誰よりもね」

「……そういうことにしとくか。　じゃ、俺らは用が済んだんで戻るわ」

「おっ」

「あ、シャルルのこと、任せたぞ」

「ああ」

俺とシャルロットは部屋を出た。

6月も最終週に入り、IS学園は月曜から学年別トーナメント一色にと変わる。

「しかし、すごいなこりゃ……」

更衣室のモニターから観客席の様子を見ると、そこには各国政府関係者、研究書院、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チケットが入ると思うよ」

「まあ、俺は確実にチェックが入ってるだろうな……」

俺のISの世代はバレてはいないはずだが、確実にフォームチェンジできることはバレているはずだからな。

「ご苦労なことだ」

一夏を殴りたくなった。

「一夏はボーデヴィツヒさんとの対決だけが気になるみたいだね」

「まあ、な」

「あの女か。正直俺はどうでもいいんだけど、借りは返す主義な  
んでな。もしあいつとあたるなら軽く捻ってやるとしよう」

「「ほどほどにな（ね）……」」

どいつを使おうか……。

「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

突然のペア対戦への変更がされてから従来まで使っていたシステム  
が正しく機能しなかったらしい。

本来なら前日にはできるはずの対戦表も、今朝から生徒たちが手作  
りの抽選くじで作っていた。

「一年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運がいいよな」

「え？ どうして？」

「待ち時間にいろいろ考えなくても済むだろ。 こういうのは勢いが肝心だ。 出たとこ勝負、思い切りのよさで行きたいだろ」

「ふふっ、そうかもね。 僕だったら一番最初に手の内を晒すことになるから、ちょっと考えがマイナスに入ってたかも」

「俺はどうやって遊ぶかな」

なにか言いたそうな目で俺を見るが無視。

「あ、対戦相手が決まったみたい」

モニターがトーナメント表へと切り替わった。

「」  
「え？」

出てきた文字に一夏とシャルルはポカンとした声をあげた。

一夏たちの試合は俺の試合の後で、相手はラウラと篝のペアだった。ちなみに俺の相手は一般生徒だった。

俺はジュカインフォームで神帝を展開している。相手は打鉄とラファール・リヴァイブを纏った一般生徒だ。

「悪いが、すぐに終わらせる」

「え？ ウソツ！？」

「な、なに？ キャツ！？」

試合開始と同時に高速移動と瞬時加速の同時使用の軌道変化可能の超速移動『変則加速<sup>ドライブ・ブースト</sup>』を使い、リーフブレードで二人を連続して斬る。

気づいたときには時既に遅し。相手は反応もできずに終わった。

『勝者 八神竜牙』

状況が理解できていないのかアリーナは異様な静けさだった。

まあ、それもそうか。なぜなら、試合開始してから10秒ほどで終わったのだから。

Side〜竜牙〜out

第21話 学年別トーナメントへ関 (後書き)

竜牙無双です。

変則加速でいいのだろうか……。 もっとマシな名前があったはず

……。

感想などお願いしますm ( ( ( m



第22話 学年別トーナメントへ異

Side 竜牙

「手応えねえな。 つまらん」

俺が試合の感想をぼやいている。

「兄貴凄かったぜ！」

「お疲れ、竜牙」

「次はお前らだ。 まあ頑張れ」

「うん。 頑張るよ」

「兄貴に鍛えてもらってるんだ。 簡単には負けねえ！」

「負けたら罰ゲームな」

「マジで？」

「マジだけど。 それとシャルル、お前もだからな」

「ふえ！？ ぼ、僕も！？」

「当たり前。 お前も俺の特訓受けてるんだからな。 まあ、負けなければいいんだよ」

「よし！ 頑張るぜ（よ）！！」「

そういつて二人はピットへと走っていった。

「……負けたらなにさせよう……」

Side～竜牙～out

Side～一夏～

「こつも早く当たるとはな。 待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃあなによりだ。 こつちも同じ気持ちだぜ」

試合開始まであと五秒。 四・三・二・一、 開始。

「叩きのめす」

開始直後にラウラに向かって直進する。

「はあああつ！」

「ふん……」

ラウラが右手を突き出す。 A I Cが来る。

対策を考えた結果、A I Cを破る手段は思いつかなかった。 それなら手段は一つ、意外性で攻める。

「くっ……!!」

しかしその戦略は読まれていたのだろう、俺はAICに捕らえられる。

「開幕直後の先制攻撃か。　わかりやすいな」

「……そりゃどうも。　以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろう」

わかりたくはないが、想像はつく。

『敵ISの大型レール砲の安全装置解除を確認、初弾装填　警告！　ロックオンを確認　警告！』　警

「させないよ」

シャルルが俺の頭の上を飛び越えて現れる。　同時に六一口径アサルトカノン《ガルム》による爆破弾の射撃が浴びせられた。

「ちっ……!!」

俺へ向けられた砲撃は、シャルルの射撃によりカノンがずらされたため空を切る。

『シャルル、俺がラウラを引き付ける。　その間に籌を』

『うん、わかった。　絶対に捕まっちゃ駄目だからね』

『了解。伊達に兄貴の生地獄を見せ続けられていたことを見せてやるぜ』

自分で言っていて悲しくなったが、今は戦闘中。これでプライベ  
ート・チャンネルを切り上げた。

「一騎打ちと行こうじゃねえか」

「ふん。死に底ないが！」

ラウラは両手のプラズマ手刀とワイヤーブレードの波状攻撃。俺はそれを避け、捌く。ラウラの攻撃速度はモウカザルのパンチよりも遅い。捌けるようになってきた俺にとっては雑作もないことだった。

「ちょこまかと……！」

だんだんラウラの攻撃が雑になってきたように見えた。

「そんな攻撃は当たらないぜ！」

雑になった攻撃はモウカザルのインファイトを見切れるようになった俺の前ではすべて無意味だ。

しかし、調子に乗っていた俺はついにAICに捕まってしまった。

「ちょこまかとしていたが、これで終わりだ。消えろ」

ラウラの肩にある大型のレール砲が向けられる。

「お待たせ！」

シャルルが大型レール砲に弾丸が降り注ぎ、轟音と共に爆散した。  
同時にA I Cの拘束が解けた。

「シャルル、助かったぜ。　ありがとうよ」

「どういたしまして」

「箒は？」

「お休み中」

「なら、俺たちの力を見せてやろっぜ」

「うん！」

「一夏もなかなかやるようになったな」

一夏の動きは前よりも遙かによくなっている。　一夏の成長スピードはやはり速い。

「モウカザルと互角以上に闘えるようになってきたからな。　そろそろ相手を変えなきゃか……」

相変わらず一夏はモウカザル、箒はジュプトル、セシリアはアメモース、鈴はヌマクロウ、シャルロットはロトム。　既に全員が互角には闘える様になっている。

「お、『グレー・スケール灰色の鱗殻』だ。終わるか」

「この距離なら、外さない」

シャルルの盾の装甲がはじけ飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が露出する。六九口径パイルバンカー《グレー・スケール灰色の鱗殻》。通称

「『シールド・ピアース盾殺し』……!!」

シャルルはラウラの腹部にパイルバンカーを叩き込んだ。

ズガンッ!!!

「ぐっぐっ……!!」

ISのエネルギーシールドが集中して絶対防御を発動して防ぐものの、そのエネルギー残量をごっそり奪う。しかも相殺しきれなかった衝撃が深く体を貫いたのだらう、ラウラの表情に苦悶に歪んだ。

しかし、これで終わりではない。《灰色の鱗殻》はリボルバー構造のおかげで連射ができる。

ズガンッ!　ズガンッ!　ズガンッ!

連続で3発撃ち込まれ、ラウラの体が大きく傾く。機体にも紫電が走り、ISの強制解除の兆候を見せ始める。

だが次の瞬間、異変が起こった。

Side〜一夏〜out

Side〜ラウラ〜

(こんな……こんなところで負けるのか、私は……！)

確かに相手の力量を見誤った。それは認める。

(私は負けれない！ 負けるわけにはいかない……！)

鉄の子宮から私は生まれた。

私はただ戦いのためだけに作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。

私は優秀であった。だがそれは、世界最強の兵器　ISが現れたことで世界は一変した。

ISの適正向上のために行われた『ヴォーダン・オージエ』の移植により、『越界の瞳』<sup>ヴォーダン・オージエ</sup>の不適合により、私は『出来損ない』の烙印をつけられた。

そんなときに初めて目にした光、織斑千冬との出会いだった。

私はあの人に憧れた。その強さに。その凛々しさに。その堂々とした様に。自らを信じる姿に、焦がれた。ああ、こ  
うなりたい。この人のようになりたい。

そう思ってから、私は時間を見つけては話にいった。いや、ただ側にいるだけで、その姿を見つめるだけでよかった。そして、私

はある日訊いてみた。

「どうしてそこまで強いのですか？　どうすれば強くなれますか？」

その時、あの人が、鬼のような厳しさを持つ教官が、優しい笑みを浮かべた。

「私には弟とがいる」

「弟と……ですか」

「あいつを見ていると、わかる時がある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかをな」

「……よくわかりません」

「今はそれでいいさ。そうだな。いつか日本に来る事があるなら会ってみるといい。……ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつに」

優しい笑み、どこか気恥ずかしそうな表情。

（それは違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに）

だから許せない。教官にそんな表情をさせる存在が。

（だから、敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で、完膚なきまでに叩き伏せると！）



あの男は、まだ私の目の前で動いてるのだ。動かなくなるまで、徹底的に壊さなくてはならない。そのために

(力が、欲しい)

ドクン……

『 願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……？ より強い力を欲するか……？ 』

言うまでもない。力があるなら、それを得られるのなら、私など空っぽの私など、何から何までくれてやる！

(だから、力を……比類なき最強を、唯一無二の絶対を 私に よこせ！)

Damage Level……D .

Mind Condition……Uplift .

Centifification……Clear .

《Valkyrie Trace System》……boot .

Side～ラウラ～out

第22話 学年別トーナメントへ異 (後書き)

ラウラの過去にどうやって竜牙を入れようか悩みましたが、竜牙は後々というところで。

第23話

学年別トーナメントへ終（前書き）

少し変更。

## 第23話 学年別トーナメントへ終

Side 竜牙

「あああああっ！……！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発する。と同時にシュヴァルツエア・レーゲンから激しい雷撃が放たれ、シャルルの体が吹き飛ばされた。

「一体何が……！」

モニターから見える光景は、ラウラの纏っていたISががどろどろに溶け、ラウラの全身を覆った。

そして、シュヴァルツエア・レーゲンだったものは黒い全身装甲のISに似た『何か』だった。そして、その黒が手にしていた武器は《雪片》。嘗て千冬が振るっていた武器だ。

「VTシステムか……！」

俺はレポートでアリーナに飛ぶ。そして、俺の視線の先には白式を纏った一夏が黒に突撃していった。そこに俺が入り込む。

「サーナイト、ムウマーシ、ランクルス、サイコキネシス！」

「!?!」

三体のサイコキネシスで一夏と黒の動きを止める。

「兄貴！ 離してくれ！！ あいつ、ふざけやがって！ ぶっ飛ばしてやる！」

「一夏……キレてんのはお前だけじゃねえんだよ……」

「り、竜牙……？」

「竜牙さん？ 一夏も一体どうしたと言うのだ！」

俺は今キレている。俺の彼女のデータを組み込んだドイツ軍と、その偽りの力を頼ったラウラに対して怒りがある。

「あれは……あれは千冬姉のデータだ。千冬姉だけのものなんだよ！ それを……アイツが！」

「シャルル、一夏にエネルギーを渡せるか？」

「やってみないとわからないけど、多分できると思う」

「なら一夏に残りを渡せ。俺があいつの動きを止めている今のうちに蹴りをつける」

「じゃあ、はじめよ。リヴァイブのコア・バイパスを開放。エネルギーの流出を許可」

どうやらできたようだ。

「完了。リヴァイブのエネルギーは全部渡したよ」

「一夏、零落白夜で決めろ」

「ああ。じゃあ、行くぜ偽者野郎」

一夏は《雪平式型》を握り締めた。

「零落白夜 発動」

エネルギー無効化攻撃の刃が現れた。そして変化した。本来の実体刃は、日本刀の形をした零落白夜のエネルギー刃になった。

ギンツッ！

「ただの真似事だ」

腰から抜き放たれた横一閃、すぐに頭上に構え、縦に真っ直ぐに相手を切り裂く。

「ぎ、ぎ……ガ……」

真っ二つに割れたISからラウラが現れた。

「……まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

一夏は崩れかかるラウラを抱きかかえて、呟いた。

「感動のシーンの途中ですが、まだ終わらすわけにはいきませんわ」

突然の声。

「「「「!?」「」」」」

出てきたのは茶髪に眼鏡の女と茶髪で短髪たぶんの女。

「……誰だ」

「特別に自己紹介致しましょう。私の名はクアットロ。まあ、私たちはナンバーズとでも名乗りましょう」

オープン・チャンネルではない。プライーベート・チャンネルでもない。普通に会話するかのように語る。

「僕はオットー。ナンバー8だよ」

ナンバー8?

「つまり、他にも似たのがいるということか」

「ご名答。私たちナンバーズは計12人いますの。今回の目的はあなたのIS、世界で唯一の第七世代型のISをいただきにきました」

「神帝をだど? 笑わせるな。貴様如きが俺から奪おうなど、100年早い」

「いいえ、あなたから奪うのは私たちではありません。ドイツの鉄屑ですわ」

そういつてクアットロと名乗った女はラウラが乗っていたISに近づき、何かをした。

「……!?」「……」

そして、再び変化を始めた。

「まさか、独立稼動だと!?」

「ええ。あなたの相手は初代ブリュンヒルデ、織斑千冬のデータを組み込まれたVTシステムが乗ったISにDr. が作ったデータを組み込んで、より凶悪にしたものですの」

変化が終わった。見た目はさっきの全身装甲で黒いことは変わっていない。だが、持っていた武器《雪片》が両方の手に握られていた。

「さて、あなたの相手をしている間、もう一人の男のほうは、かわいい妹のオットーが致しますの」

「早く始めよう。姉様がそう望んでいる」

「一夏、シャルルたちを連れて逃げる!」

「兄貴は!?!」

「俺が殺る! 早くしろ! お前がいると邪魔なんだよ!」

「ちっ……! 兄貴、無事に戻ってこいよ!」

「わかってる!」



「夏はこの場からの脱出を始めた。」

「わざわざ待つてくれるなんてな。 どうした？」

「いえいえ。 ただ、あまりにも間抜けな光景だったので、つい」

「そうですか。 じゃあ、始めよう。 フォルムチェンジ。 ミュウツーフォルム！ 来い、エルレイド、バシャーモ、ジュカイン！」

「オットー、おやりなさい」

「わかりました。 姉様」

「エルレイドとバシャーモは短髪の方をやれ。 ジュカインはあの眼鏡の女をやれ」

「レイッ！」

「バシャーッ！」

「ジュカツ！」

「三体は各々動き出した。」

「さて、ラウラ・ボーデヴィツヒ。 今すぐ助けてやる」

サイコカッターを放つが、二本の偽雪片に防がれる。

「……容赦はしない。 フォルムチェンジ……パルキアフォルム……」

空間を司る神、パルキアフォームになった。

「耐えるよ………亜空切断！」

両肩の真珠が少し膨張し、右腕から斬撃を飛ばす。

黒は両手の偽雪片で防ぐが、それを切裂いた。そして完全に起動を停止した。

「まだやるか？」

クアットロ、オットーはエルレイドたちに防戦一方だった。

「今回は引きますわ」

「だが、俺が逃がすと思うか？」

「いいえ。逃げれますので安心してください」

すると地面から人間が出てきた。水色の髪の少女だった。

「クア姉、助けに来たよ」

「セインちゃん、早く行くわよ」

「了解」

そのままクアットロとオットーを連れて地面へと消えていった。

「逃がしたか」

『竜牙、無事か!?!』

「姉貴か。俺は無事だ。だが、問題はボーデヴィツヒのISだ。無理やりの独立稼働と全力ではないにしろ、亜空切断を受けたんだ。ダメージレベルはCには達していないだろうが、ちゃんと整備させておいてくれ」

『わかった。竜牙は戻ってき』

「了解」

S i d e 〉 竜牙 〉 o u t

S i d e 〉 ラウラ 〉

「一つ忠告しておくぞ。あいつに会うことがあれば、心は強く持て。あれは未熟者のくせにどうしてか、妙に女を刺激するのだ。油断していると惚れてしまうぞ?」

そんな風に言う教官はひどく嬉しそうで、それでいてどこか照れくさそうで、なんだか見ているこっちがモヤモヤした。

だから、あれはやきもちだったのだ。それでつい、あんなことを訊いてしまった。

「教官も惚れているのですか?」

「姉が弟に惚れるものか、馬鹿め。……まあ、惚れている人ならいるかな」

そして、少し顔を赤らめて言った。私は余計に落ち着けなくなった。教官にこんな顔をさせる男が羨ましい。

「それは、どんな人のですか？」

「気になるのか。まあいい。あの人はお前と同じ年でも強かった。武術を習っていたわけではなかったが、私よりも強かった」

「教官よりも、ですか？」

「ああ。あの人はたった一人で生き続けたんだ。家族が突然いなくなつてから、たった一人で、強い意志を持つて」

「そう、なのですか」

教官が言った惚れた男『八神竜牙』。彼は強いと教官は言った。

私は織斑一夏と戦つて、理解した。

強さとは　　なんなのか。

その答えは無数にあるのだろう。けれど、その答えの一つに、強烈に出会ってしまった。

『強さつっつーのは心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常に思うことじゃないかと、俺は思う』

……そう、なのか？

『そりゃそうだろ。自分がどうしたいかもわからねーやつは、強

い弱い以前に歩き方を知らないもんだろ』

……歩き、方……。

『どこへ向かうか。 どうして向かうか、さ』

……どうして向かうか……。

『つまり、やりたいことはやったもん勝ち。 つまんねー遠慮とか我慢とか、損するぞ?』

そして、そいつは その男は ニヤリとして言った。

『やりたいようにやらなきゃ、人生じゃねえよ』

では、お前は……? お前はなぜ強くあるつもり? どうして強い?

『強くねえよ。 俺は、まったく、強くない。 本当に強いやつってのは兄貴みたいな人だ。 俺はそう思う』

断言。 その言葉に私はぽかんとしてしまつ。

あれほどまでの力を持ってなお、強くないと言つ。 それが理解できない。

『けれど、もし俺が強いつていうのならそれは』

それは……?

『強くなりたいから、強いしさ』

。

『それに、強くなったら、やってみたいことがあるんだよ』

やってみたいこと……？

『誰かを守ってみたい。自分のすべてを使って、ただ誰かのために戦ってみたい』

それは、まるで……あの人のようだ。

『そうだな。だから、お前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィツヒ』

言われて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

『守ってやるよ』

そう言われて、私は ああ、そうか。これが……そうなのか。

ときめいて、しまったのだ。

そして、早鐘を打つ心臓が言っている。こいつの前では、私はただの15歳なのだと、ただの『女』なのだと。

織斑、一夏。

ああ、これは、確かに。

惚れてしまいそうだ。

「う、あ……………」

「気がついたか」

その声に聞き覚えがあった。聞き覚えがあるどころではない。どこで聞こうと一瞬で判断できる、自らが敬愛してやまない教官、織斑千冬だ。

「私……………は……………？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくは動けないだろう。無理はするな」

「何が……………起きたのですか……………？」

無理をして体を起こす。全身に痛みが走る。

「教えてやりやあいいじゃねえか」

「!?!?」

突然の声。しかもこの声はもう一人の男のものだった。

「こいつは当事者で被害者だぜ？　しかもお前の教え子だろ？　千冬」

「ここでは織斑先生と呼べと言った筈だ」

「別にいいじゃねえか。　ここにいるのは俺とお前、あとはこいつだけだ」

教官に対して軽口を叩く八神だが、教官はどことなく嬉しそうだっ  
た。

「……仕方ありませんね。　一応は重要案件である上に機密事項  
なのですが」

教官の言葉を聞いて八神の顔が僅かにだが笑ったように見えた。

「VTシステムは知っているな？」

「はい……。　正式名称はヴァルキリー・トレース・システム……。  
過去のモンド・グロツソノ部門受賞者の動きをトレースするシス  
テムで、確かあれは……」

「そう、IS条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開  
発・使用すべてが禁止されている。　それがお前のISに積み  
まれていた」

「……………」

「巧妙に隠されていたがな。

操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメ



ージ、そして何より操縦者の意思……いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

私はぎゅっつとシートを握りしめた。

「私が……望んだからですね」

あなたに、なることを。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はいっ！」

いきなり名前を呼ばれ、驚きも合わせて顔を上げる。

「お前は誰だ？」

「わ、私は……。私……は、……」

言葉の続きが出てこなかった。

「誰でもないのなら、ちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒになるがいい。何、時間は山のようにあるぞ。何せ三年間はこの学園に在籍しなければならないからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。 たっぷり悩めよ、小娘」

「あ……………」

意外だった。まさか、自分を励ましてくれるとは思ってもいなか

った。

「千冬、上出来だ。では、俺からお前に言っておくことがあったな」

これもまた意外だった。今まで私はこいつを、八神竜牙を敵視していたのに、優しい表情で告げてきた。

「お前は千冬にはなれない。千冬になれるのは千冬だけだ。そして、お前になれるのもお前だけだ」

.....。

「自分を見つけるよ、ラウラ・ボーデヴィツヒ。それと、お前が俺を認めないのなら俺はいつでも相手になってやる。まあ、用がないときだけだな」

やつは自虐する様に笑った。

「最後に、精精頑張りな。ライバルは多いぞ」

初めはやつが言っていることの意味がわからなかった。

「あいつは唐変朴だからな」

そのセリフで理解した。こいつには、私の気持ちがばれている事に。

「じゃあな。ラウラ・ボーデヴィツヒ」

そうして八神竜牙と織斑千冬は部屋を去った。

S i d e ~ ~ ~ o u t

第23話 学年別トーナメントへ終 (後書き)

ナンバーズ登場！ だけどナンバーズの口調がわからない！  
あっているのか間違っているのか指摘してくだされば助かります。  
そしてラウラの回想が無理やりな気がします。

第24話 デュノアと一夏ハーレム(前書き)

オープン・チャンネルではない。 プライベート・チャンネルでもない。 普通に会話するかのように語る。 これを前回の話に追加しました。

## 第24話 デュノアと一夏ハーレム

Side 〱 竜牙

ラウラと話した後、部屋の外。

「千冬、今からデュノアに行くからさ、明日遅れるから」

「急ですね」

「ああ。元々学年別トーナメントが終わってから行くつもりだったんだが、今日のおれのせいで中止だろ？ だから早めに行つてこうと思つてな。あーそれと一応結果は連絡するから、シャルロットに伝えておいてくれ」

「わかりました」

「じゃ、行つてくる」

俺はフリーデインを呼び出して連続でテレポートを使った。

「フーディンお疲れ。 ゆっくり休んでくれ」

連続テレポート使用回数17回。 おかげでフーディンは疲労困憊だ。

「さて、デユノアの社長に話をつけないとな……」

Side 〽 竜牙 〽 out

Side 〽 一夏 〽

『トーナメントは事故により中止となりました。 ただし、今後の個人データ指標と関係するため、すべての一回戦は行います。 場所と日時の変更は各人端末で確認の上  
』

俺は海鮮塩ラーメンを食べながら聞いていた。

「ふむ。シャルルの予想通りになったな」

「そうだねえ。あ、一夏、七味とって」

「はいよ」

「ありがとう」

当事者はのんびりと食事をしている。兄貴はなぜかいないけど。

「ふー、ごちそうさま。学食といい寮食堂といい、この学園は本当に料理が上手くて幸せだ。……ん？」

女子がなぜかすごく落胆している。

「……優勝……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うわあああんっ！」

女子たちが泣きながら走り去っていった。

「どうしたんだろうね？」

「やあ……？」

俺とシャルルにはちんぷんかんぷんだ。



「……………」

女子が立ち去った後に、一人呆然と箒が立ちつくしていた。  
ひとまず俺は箒のそばへと移動する。

「そついえば箒。先月の約束だが」

「びくっ」

ちょっと反応した。

「付き合ってもいいぞ」

「。、なに?」

「だから、付き合ってもいいって……おわっ!?!」

突然、バネじかけのように大きく動いた箒は、身長差を俺をお構いなしに締め上げる。

「ほ、ほ、本当、か? 本当に、本当に、本当なのだな!?!」

何回本当を繰り返すんだ、コイツは。

「お、おう」

「な、なぜだ? リ、理由を聞こうではないか……」

俺を離し、腕組みをする。

「そりゃ幼馴染の頼みだからな。付き合っせ」

「そ、そうか！」

「買い物くらい」

「……………」

びきいっ！ と篝の表情が強張る。

「……………だろっつと……………」

「お、おう？」

かなり怖い顔の篝さんには刺激を与えないのが一番だ。

「そんなことだろっつと思っただわ！」

どげしっ！…！

「ぐはあっ！…！」

腰のひねりを加えた正拳。

「ふん！」

どじょっ！…！ とつめく俺の鳩尾につま先が刺さる。

「ぐぐぐぐぐ……………」

俺はその場に崩れ落ちる。

「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思うときがあるよね」

「な、なに？　どういう意味だ、それは」

「さあね」

それから俺が回復したのは十五分後だった。

「そついえばちょっと聞きたいんだが」

「うん、なに？　何でも聞いて」

「ISで会話って出来るのか？　えーと、プライベート・チャンネルとは違う、なんか二人だけの空間、みたいなところでの会話なんだが」

「うん？　うーん……何か聞いたことがある気がする。　IS同士の情報交換ネットワークの影響だって言われてるんだけど、操縦者同士の波長が合うと特殊な相互意識干渉クロッシング・アクセスが起こるっていう、あれかな」

「おお、多分それだ。　しかし、波長……波長ねえ。　なんかよく分からんって感じだな」

「ISにはよく分からない現象や機能がかなりの数あるよ。　作った篠ノ乃博士は全機能を公開してない上に現在も失踪中だし、前に何かのインタビューで自己進化するように設定した部分もあるから、

本人も全部を把握するのは無理だって言ってた気がする」

「うわ、東さんらしいな、それ」

あの人は基本的に自分が興味がないことはどうでもいいからなあ…  
…。きつと調べればわかるはずなのに。

「……一夏、二人だけの空間で会話って、もしかしてボーデヴィッヒさんと？」

「あ、ああ、そうだが……」

「ふーん。そう」

急に不機嫌になったシャルル。なぜだろう……。

「あ、織斑君にデュノア君。ここにいましたか。さっきはお疲れ様でした。八神君は一緒ではないんですね」

「あ、はい。一体どこに行ったのやら……」

「それよりも、朗報です！」

グツと山田先生が両こぶしを握り締めてのガッツポーズ。胸の膨らみが揺れる。眼福なんだが目の毒だ。

「なんとですね！ ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「おお！ そうなんですか！？ てっきりもう来月からになるもの

とばかり」

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があったので、元々生徒たちが使えない日なんです。でも点検はもう終わったので、それなら男子の三人に使ってもらおうって計らいなんですよー」

なんとということだ！ 素晴らしい！

「ありがとうございます、山田先生！」

俺は山田先生の手を握り締めている。

「……一夏、前にも似たようなことなかった？」

感激のあまり先生の手を握ったままだった。

「と、ともかくですね。二人は早速お風呂にどうぞ。今日の疲れも形まで浸かって百数えたら疲労もスッキリ！ですよ」

「はい！ じゃあ早速、お風呂に あ」

あることに気づいた。二人。兄貴はなぜかいない。つまりシヤルルと二人つきり。まずい。非常にまずい。

「え、えーと……」

「どうしたんですか？ ほらほら、ふたりともはやく着替えを取りに行ってください。鍵は私が持っていますから、脱衣場の前で待っていますね。じゃあ」

どっしたらいいものか……。

S i d e ～ 一夏 ～ o u t

S i d e ～ 竜牙 ～

一夏とシャルロットと一緒に風呂に入っているころ（竜牙は知りません）、俺はデュノア社長と会っていた。

「技術提供をしてくれるといったのは貴方ですね？」

「ええ。条件さえ呑んでくれれば、私は貴方……デュノアに技術提供をいたします」

今の格好は普通なんだが、ゾロアークの力により、デュノアには俺のことは『八神竜牙』とは見えていない。口調も変えているのはなんとなく。

「その条件とは？」

「簡単ですよ。貴方の愛人との間に生まれた娘、IS学園に男装させて『シャルル・デュノア』として過ごさせている『シャルロット・デュノア』と縁を切ってくださいればいいんですよ」

「!?!? 一体どこでそれを……?」

「そんなことは本人から聞いたままでですよ」

「あいつから……?」

その返しに俺はイラついた。

「ええ。私はシャルロット・デュノアさん本人から聞きました。貴方がシャルロットさんにさせたこともね」

「あいつと縁を切れれば技術提供してくださるのですか?」

「はい」

「その程度のこと、別に構いません」

その言葉に俺は切れた。

「やっぱりテメエは最低だな。親としても、人間としても!」

「!?!? 急にどうしたのですか?」

「急にどうしたじゃねえ! テメエがシャルロットにやってきたことは、いくら愛人の子だからといってもやっていいことじゃねえんだよ! 俺はテメエのことを一生認めねえ!」

俺の不安は現実のものとなった。……怒りで感情が止めれなくなる状況に。

「アンタは一生シャルロットに関わるな。もしも、シャルロットたちに関わるようなことになれば、今度はデュノア社を潰してやる」

俺は部屋から出ようと歩く。そして、扉の前で一度立ち止まる。

「ちゃんと第三世代型ISの足がかりとなる情報は提供してやる。それと、シャルロットの専用機も返してやるよ。これ以上、俺をがっかりさせないでくれよ」

俺は部屋を出た。そして、そのままテレポートする。今回はデユノア社から出るためだけにケーシィだ。ちなみに、ゾロアークは既に戻っている。

「これが最後だといいな。デユノア」

もし、次に何かをしたのなら、確実に潰してやる……。

「フーデインは休ませるから、どいつに使わせよう……。フーデインレベルじゃないと連続100回くらいはテレポートする羽目になるからな……。今までほとんど使ったことがなかったけど、サーナイトに疲れられるよりマシか……」

そういつてネンドールを呼び出す。

「ネンドール、無理するが頑張ってくれ」

テレポートで移動を始めた。

S i d e 〱 竜牙 〱 o u t

S i d e 〱 一夏 〱



翌朝のHR、教室にはシャルロットと兄貴、ラウラの姿が無かった。

「み、みなさん、おはようございます……」

ふらふらの山田先生。 どうしたのだろうか。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。 転校生と  
いいですか、すでに紹介は済んでいるといいますが、ええと……」  
また転校生が来るの？

「じゃあ、入ってきてください」

「失礼します」

あれ？ この声って

「八神シャルロットです。 皆さん、改めてよろしく申し上げます」  
スカート姿のシャルロットが礼をする。

「ええと、デュノア君はデュノアさん……ではなく八神さんでした。  
ということですよ。 はああ……また寮の部屋割りを組み直す作業  
が始まります……」

山田先生がふらふらだったのはそれが理由か。

「え？ デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！ 美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、八神君、同室だから知らないってことは」

「って、八神ってどういうこと!?!」

「あれ? 八神君はどこ!?!」

「ちょっと待って! 昨日って確か男子が大浴場使ったわよね!?!」

教室が一斉に喧噪に包まれる。

バシーン!

教室のドアがすごい勢いで開く。

「一夏あつ!?!?!」

甲龍を纏った鈴が登場した。

「死ね!?!?!」

両肩の衝撃砲がフルパワーで開放される。

俺、死ぬんじゃない?

ズドドドドオンツ!

「ふーっ、ふーっ、ふーっ!」

鈴は怒りのあまりでか肩で息をしていた。

生きてる……?!

あれ? 俺……



再び衝撃砲が開く。

「待て！ 俺は悪くない！ どちらかというと被害者サイドだ！」

「アンタが悪いに決まってるでしょうが！ 全部！ 絶対！ アンタが悪い！！！」

どっという理屈だそれは！

脱出しようと教室の後ろ側出口に向かうが

ビシュンッ

鼻先をレーザーがかすめる。

「ああら、一夏さん？ どこかにおでかけですか？ わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがあります。 ええ、突然ですが急を要しますの。 おほほほ……」

廊下への脱出を諦め、窓へと向かう。

ダンッ！

「……一夏、貴様どういふつもりか説明してもらおうか」

「待て待て待て！ 説明を求めたいのは俺の方で おわあっ！  
？」

簞の鋭い斬撃が襲い掛かってくる。

俺は宛先のない逃亡を始める。

ぼすっ。

「ほへ？」

シャルロットとぶつかった。

「にっっ」

「に、にっっ」

「一夏って他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりしたな」

「あのー……シャルロットさん？俺はされたんであって、したわけではないし、そしてなぜISを起動させているのか」

「なんでだろうね」

『ラビット・スイッチ  
高速切替』は必要ではないらしい。

パンツ！と軽く炸薬の弾ける音が響いて左腕の盾がパージされる。そこにある武器は六九口径パイルバンカー《グレー・スケール灰色の鱗殻》。通称『シールド・ヒアース盾殺し』。

「は、はは、ははは……」

人は極限を超えると笑うしかなくなるらしい。

ドカアアアアンツ！！！！

朝のホームルームは轟音と爆音、衝撃でクラスが揺れた。

「おっすす」

どこからともなく兄貴が登場したのはそんなときだった。

S i d e ー 夏 ー o u t

第24話 デュノアと一夏ハーレム（後書き）

一夏がシャルにいつの間にフラグを立てたのかは、バレてからの一週間でです。

## 第25話 試練

Side 〱 竜牙

「八神君！ どういうこと!？」

「遅れてきたけどどこに行ってたの？」

授業終わり、俺の周りに女子が集まってきた。

「シャルロットのことは俺が……正確には姉貴が養子として引き取った」

「でもなんでデュノアさんを？」

「シャルロットはもう“デュノア”ではない。“八神”の人間だ」

「じ、じゃあ、遅れてきたのは何で？」

「野暮用」

デュノア社に行ってきたのは伏せておく。バレたら騒がしくなるのは確実だからだ。

「これ以上の質問は受け付けない。それに 時間、大丈夫か？」

女子たちの後ろに千冬が立っているのに気づいた俺は女子たちに忠告する。だが、もう遅い。



「席に着け。 馬鹿者共」

バシンバシンバシンバシンバシン……………。

連続で千冬の出席簿が女子たちの頭上に落ちた。

S i d e 〱 竜牙 〱 o u t

S i d e 〱 一夏 〱

「池に来てって言われたけど、兄貴いないな」

「そうだね。 だけど、何のようだろう?」

俺たちは兄貴に放課後、池に来いと言われて来たのだが、呼んだ当人がいない。

俺たちは兄貴が来るのを待っていたが、池の水面に不自然に波紋ができたように見えた。

「? なあシャルル」

「シャルロット! そう呼んでっていったでしょ!」

「悪い悪い。 なあシャルロット」

「何?」

「今さ、水面に不自然に波紋が広がらなかったか？」

「やっぱり？ 見間違えじゃなかったんだ」

そして再び水面に波紋が走る。そして、水面から何か渦のようなものが俺たちに向かって飛んできた。

「！？ シャルロット！ 逃げるぞ！」

「あ、うん！」

突然の出来事に俺たちは逃げようとする。

「うわああああっ！？」

俺たちはその渦に飲み込まれた。

「ここは……」

俺は見たこともないところにいた。そして体が軽い。

「ここって……」

「シャルロットは知っているのか？」

「あ、うん。前にお兄ちゃんに連れてきてもらった反転世界って言う現実世界の裏側にくつついた掟破りの世界だって」

「なんで俺たちはここに呼び込まれたんだ？」

「反転世界に入れるのは基本的にお兄ちゃんだけだから、お兄ちゃんが呼び出したんだと思うけど……」

その兄貴がない。

『お前は真実と理想、どちらを求める？』

「「え？」」

突然、声が聞こえた。

『お前が求めるのは真実か？』

『お前が求めるのは理想か？』

俺たちの目の前に現れた謎の浮遊物体。 黒の丸い石と白の丸い石？だ。

「俺は……」

「僕は……」

『お前の求めるものは何だ？』

突然の問い掛け。 真実と理想。 俺が求めるものは……

「俺は理想を求める」

「僕は真実を求めるよ」

俺たちの答えに、黒い石は俺の前に、白い石はシャルロットの前に動き、目の前で浮遊する。

『お前の理想は何だ？』

「俺はみんなを守れるほど強くない。 だから、みんなを守れるほどに強くなること。 それが俺の理想だ」

俺の理想。 今は守ってもらってばかりの俺。 だけど、仲間は俺が守る。 守りたい。 だから、その理想を求める。

『お前の真実は何だ？』

「僕は今の僕であり続けること。偽りのない姿でい続けること、かな」

シャルロットも自分の真実を述べたようだ。

「レシラム、ゼクロム、どうだった？」

「「!？」」

当然、兄貴の声が響いた。

そして、黒と白の石が変化を始めた。

「「!？」」

そして、変化が終わったとき、そこにいたのは純白の龍と漆黒の龍だった。

『織斑一夏……こいつは合格だ』

『八神シャルロット……この娘も合格だ』

漆黒の龍と純白の龍は兄貴に何かを言った。

「へえ……一夏！シャルロット！」

「は、はい！」

「な、なにかな？」

急に呼ばれてつい大きく反応してしまう。

「お前たちは、今言った求める真実と理想に嘘偽りはないな？ 貫き通す覚悟はあるな？」

「当たり前だ！」

「嘘じゃないし、貫き通す覚悟もあるよ」

俺たちの声を聞いて、兄貴が笑った。

「お前らは合格だ」

「「こ、合格……？」「」

「ああ、合格だ。今の問い掛けはお前たち二人に対しての試験だ。真実を求めるのがレシラム。理想を求めるのがゼクロム。――夏はゼクロムに、シャルロットはレシラムに認められたわけだ」

「認められた？ 俺たちが？」

「この二体のドラゴンは真実と理想を求める者に力を貸す。まあ、善意を持たない者と強い理想と真実を求めない者には容赦なく牙を向けるがな」

今さらつとんでもないこと言わなかったか？

「シャルロットに渡したIS『ラウエリテ・ラフアール真実の疾風』には元々対応させてある。そのため、すぐにでもレシラムの力を扱える。だが、一夏の白式にはまだその機能がない。もしあったとしても、俺は使わ

せなかつたけどな」

「なんでだ？」

シャルロットは使えても俺は使わせないってどういうことなのだろうか。

「レシラム、ゼクロムの力は強大だ。簡単に殺してしまうほどのな。そのため、俺の持つISには非殺傷設定がある。これはどのような攻撃であろうとも殺すことができなくなる機能だ。まあ、異常すぎるほどまでの攻撃……俺のISにはあるんだが、その場合は非殺傷設定であっても死ぬかもしれない。言わばこれはリミッターなんだよ。強大すぎる力でも全力で扱えるようするためなのな」

俺は納得した。

「シャルロットのISには元々非殺傷設定は備え付けてあるし、レシラムの力を使うための機能もつけてある。今すぐにも使うことは可能だ。だが、シャルロットはまだラファールを使ったことがない。調整とかあるからすぐには使わせないがな」

「僕の新しい力……」

シャルロットはデザインの変わった十字のネックレスを見て呟いた。

「……ってあれ？ シャルロットのISってリヴァイブだったよな？」

「ん？ あれか？ あれはデュノアに返した」

「はあ!?!」

「だから変わりにラヴェリテ・ラファールを渡したんじゃないか」

「な、納得……しねえ!　なんでISを渡してんだよ!」

「俺が作ったんだから誰にあげようが俺の自由だろ?」

「兄貴ってIS作れんの!?!」

「そう言ってるじゃん」

兄貴なら本当に作れそうだ……。　なんかコアまで作れそうだな……。

「コアも作れるぞ」

「マジかよ!?!　ってか今俺口に出してなかったぞ!?!」

「お前の心を詠んだだけだ」

「詠むな!」

「まあ、一夏、お前の白式をしばらくよこせ。　そうすりゃ改造してやるから」

「勝手に改造していいのか?」

「大丈夫だ」



自信たっぷりな様子で言う兄貴。

「兄貴が言うのなら……」

俺は白式を渡した。

「じゃ、用件は以上。 ということで、お前らを現実世界に帰す」

兄貴はISを右腕に部分展開をし、何も無い所へ右手を突き出す。  
そして、渦が作られた。

「行く、一夏」

「お、おう」

「じゃあな。 白式の改造は長くても三日だから」

最後に聞こえた兄貴の声。

「お、戻れた」

俺たちは池の畔にいた。

S i d e 一 夏 一 o u t



第25話 試練（後書き）

イツシユのドラゴンを一夏とシャルに使わせました。  
一夏の理想とシャルの真実は作者の勝手解釈です。

## 第26話 誘い

Side 竜牙

「白式の調整終了です」

ここ最近俺は徹夜ばかりしている。なぜかという、俺に関わるISにやるが増えているからだ。

一つは姉貴の砲撃のブレ調整諸々をさせるための術の作成。千冬のIS作成。一夏、シャルのISの調整など……。

千冬のISは直に完成する。問題は一夏の白式だ。ゼクロムの力を完璧に使いこなせていない一夏はゼクロムの力を使用するたびにどこかに異状ができる。すぐに使いこなせるものではないと思っていたが、さすがに掛かりすぎだ。シャルは元々の才能もあるから一日で使いこなせるようになったが、一夏は五日も経つが完璧には使いこなせていない。まあ、最初は最悪だったけど、今はまだマシになった。

ちなみにシャルは別の部屋に変わった。

「あー睡眠時間が三時間しかねえ……」

考えるのも止めて寝た。

「あ、少し寝すぎた」

時刻は本鈴の20分前。いつもなら本鈴の1時間前には起きているところだ。

俺は急いで着替えてレポート。

「食堂到着」

「あれ？ 珍しいな。兄貴がこの時間に来るなんて」

「誰の所為だと思ってるんだよ、誰の」

「すみません……」

「わかればいい」

一夏と話しつつもいつもよりも少な目の朝食を手にした。

「とつとと食わないとな」

そこに

「わああっ！ ち、遅刻っ……遅刻するっ……！」

珍しいことにシャルも遅かった。

「どうしたんだ？　いつも時間にしっかりしているシャルロットがこんなに遅いなんて、寝坊でもしたか？」

「う、うん、ちょっと……その、寝坊……」

「へえ、シャルロットでも寝坊なんてするんだな」

「う、うん、まあ、ね……。その……二度寝しちゃったから」

これまた珍しい。シャルが二度寝とは。

「い、一夏？　ずっと僕のほつを見てるけど、どうかした？　ね、寝癖でもついている？」

「いや、ないぞ。ただほら、先月はずっと男子の服装だったから、改めて女子の格好をしているシャルロットは新鮮だなあ、と」

「い、新鮮？」

「おう。可愛いと思うぞ」

相変わらずのフラグメーカー！

「……と、とかいって、夢じゃ男子の服着せたくせに……」

なんつう夢を見てんだよ……。

「ん？　夢？」

「な、なんでもないっ。なんでもないよっ!?!」

あからさまに動揺するシャル。

「いてえっ!」

一夏の悲鳴が聞こえた気がするが気にしないでおっつ。

キンコンカンコンコン。

あ、予鈴だ。

「うわあっ! い、今の予鈴だぞ、急げ!」

俺はテレポートの準備をする。

「お、置いてくな! 今日は確か千冬姉  
のSHRだぞ!」

じゃない、織斑先生

「私はまだ死にたくない」

「右に同じく」

「ごめんね、一夏」

「みんな間に合うといいな。頑張っつて」

「「「「あ!」」」」

俺はテレポートで教室に移動した。

そして俺は見た。すでに千冬がいるのを。

「あー……これりゃ……アウトだろうな……」

そして俺の勘は当たった。

「本学園はISの操縦者育成のために設立された教育機関だ。そのためどこの国にも属さず、故にあらゆる外的権力の影響を受けない。がしかし」

すばぁんっ！

誰かが叩かれた。よく見るとシャルだった。

「敷地内でも許可されていないISの展開は禁止されている。意味はわかるな？」

「は、はい……。すみません……」

篝とラウラは怒られている後ろをすり抜けて席に座っていた。

「八神と織斑は反省文の提出と放課後教室を掃除しておけ。二回目は特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな」

「はい……」

ご愁傷様。

キーンコーカーンコーン。



チャイムが鳴ってSHRが始まる。

「今日は通常授業の日だったな。IS学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってきてくれるなよ」

余裕だな。それにたとえ勉強する必要があつたとしてもそんな時間はないだろうしな。

「それと、来週からはじまる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。3日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように」

そつえば水着無かつたな。プールとか海とか行く余裕なんて一切無かつたからな。

「ではSHRを終わる。各人、今日もしっかり勉学に励めよ」

「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか？」

誰かが言った。

「山田先生は校外実習の現地視察に行っているので今日は不在だ。なので山田先生の仕事は私が今日一日代わりに担当する」

「ええっ、山ちゃん一足先に海に行ってるんですか!? いいな〜」

「ずるい! 私にも一声かけてくれればいいのに!」

「あー、泳いでるのかなー。泳いでるんだらうなー」

ということとは千冬が授業をすべて受け持つのか……あ、姉貴もいた。

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しい。山田先生は仕事で行って  
いるんだ。遊びではない」

女子たちが揃って返事をした。

放課後、今頃一夏とシャルは教室で掃除中だろう。ちなみに現在は部屋だ。

「水着どうしようかな」

多分シャルは水着を持ってないだろうが、一夏とでも行くだろう。

もし一夏と行くならついていくわけにも行かないしな。

「一人で行くか……」

買い物に行くのはいいが一人ってなんか悲しくなるよな。

くくく

「電話？ 誰だ？」

この着メロでなのは、フェイト、シグナム、千冬の四人と決まってるのだが……。

お、フェイトだ。 フェイトから電話なんて珍しいな。 いつもはメールなのに。

「もしもし、フェイト、どうした？」

『竜牙、週末の日曜日って時間ある？』

「俺はその日に用があって買い物に行く予定がある」

『そうなんだ。 ねえ、付いて行ってもいいかな？』

「別にいいけどよ、ただの買い物だけど」

『私も買い物に誘おうとしたんだよ』

「じゃ、それでいいか」

『うん。 じゃあ、日曜日にね』

「了解」

予想外の人物からのお誘いでした。



第27話 買い物デート(前書き)

部活引退……。 あっさりと終わった部活でした……。

## 第27話 買い物デート

Side 竜牙

週末の日曜日。 天気は快晴。 フェイトと買い物という名のデートの日だ。

「早く来すぎたか？」

予定の時刻よりも30分は早いので来ていないのは当たり前といえは当たり前なのだが。

「待つか……」

「竜牙っ！」

後ろから声をかけられ、背中に勢いよく重みを感じた。 俺は倒れることなく衝撃を堪えた。

「おっと……フェイトか」

重みの正体はフェイトで、どうやら飛びついたようだ。

「おはよう、竜牙」

「おはよう。 それと急に飛びつくな。 転んだらどうするんだよ」

「ごめんね。 でも、竜牙なら耐えたでしょ？」

「あれくらい勢いならな。もしも俺が耐えれなかったらフェイトが汚れちまうだろ?」

「心配してくれるの?」

「当たり前。大切な彼女だからな。綺麗な容姿が台無しになっちまうよ」

「ありがとう。あ、竜牙」

「ん? どうした?」

「その服、似合ってるよ」

俺の現在の格好は黒のズボンに青と緑の中間の色のTシャツの上に黒の上着（未来偏のメローネ基地突入時のやつです）+他アクセだ。

「そりゃどうも。フェイトも似合ってるぞ。綺麗な」

フェイトの服装は黒を基調にしたワンピース。綺麗な金髪と合っている。

「き、綺麗? 嘘じゃないよね?」

「嘘言うだけ無駄だろ。事実だ事実」

俺がそう言うとフェイトは顔を赤くした。

「あ、ありがとう／＼／」

「じゃ、行くか」

「あ、うん」

俺たちは動き出す。が、

「何で腕を組むんだ？ 別にいいけど」

フェイトは俺の左腕に自身の右腕を絡ませていた。

俺たちは動き始めたが、周りの視線、特に男の俺への嫉妬の視線があつたが気にしない。

「ねえ、竜牙」

「なんだ？」

「買い物って何を買うつもりなの？」

「水着」

「水着？ どうして？」

「臨海学校があつてな。 初日が完全フリーなんで、そのための水着を買おうってわけだ」

「へえ……」

何かを考えるかのように感じた。

「……なあ、フェイト」



「何？」

「今行こうとか考えなかったか？」

「そ、そんなこと、ないよ!？」

「考えてたんだな。来るなよ、絶対に。面倒なことになるから来るな」

「うん……」

あーなんか来そうな気がする。場所は知らないはずだから無理だ  
と思うから、来ないって事にしておこう。

「先に買いに行くけどいいか？」

「いいよ」

俺とフェイトはそのまま水着売り場に向かった。

俺とフェイトが男の水着売り場に入ると、周りの男の視線が俺に刺さった。嫉妬の視線が俺に、厭らしい視線がフェイトに刺さる。移動しているとき以上に刺さる。

「竜牙、早くここから出たい」

「俺も同感。すぐに決めるからちよつと我慢してくれ」

「うん」

急ぎめで水着を選んでいても、どこにもいる馬鹿なやつに絡まれた。

「ねえねえ、そんなやつよりも俺と遊ぼうよ!」

「人の彼女を誘惑しないでくれ」

「テメエには聞いてねえよ。　こんなやつよりも絶対に楽しいからさ、一緒に遊ぼうよ!」

俺はイラっときていた。

「あなたよりも竜牙のほうが数百倍も魅力あるからどこか行って」

「こんな軟弱な男よりも絶対にいいって!」

プチッ

「……………俺が大人しくしてやってたのをいいことに……………糞がつてんじゃねえよ」

「はあ?　テメエみたいなガキが何ほ?　　グバツ!?!」

「もう一度はつきりと言ってくれるかな?　言えたら、だけどな」

俺は男の鳩尾に一撃入れる。　それだけで男は蹲り、しゃべることすら俣ならなくなった。

「フェイト、行くぞ。　水着は決めたから」

「あ、うん」

フェイトは一度蹲る男に視線を向けたが、すぐにその視線をはずした。

ちなみに俺の選んだ水着は、黒に赤い龍が描かれた水着だ。

「竜牙、私も水着、買ってもいいかな？」

「別にいいけど。俺の用は水着を買うことだけだし」

元々の目的にこれが含まれているのならいいが、臨海学校の話聞いてから決めたのなら少し問題だ。まあ、今は気にしないでおう。

「選んでもらってもいいかな？」

「別にいいけど、あまりわかんねえけどそれでもいいの？」

「いいよ。私は竜牙に選んでほしいんだ」

「それなら行くか」

「うん！」

相変わらずの嫉妬の視線を受けながらも、俺たちは女性用水着売り場に踏み入れた。

「ちょっと見てくるから、少し待ってて」

「一緒に見たほうが早いと思うけど」

「いくつか選んでから竜牙に選んでもらった方が選択肢が少なく早く決まると思うから」

どっちでも変わらん気がするけどな。

「わかった。じゃあ俺はこのあたりにいるから、見てきてくれるだけ早めにな」

「わかったよ。行ってくるね」

そういつてフェイトは水着売り場を散策し始めた。

俺はしばらくこのあたりで待つか。さっきから周りの女の視線が刺さるし。

「そのあなた」

「あ？」

不意に声をかけられた。

「その水着、片付けておいて」

名前も顔も知らない相手からいきなり言われた。ISが普及して女尊男卑の風潮になった所為で、男は街を歩いているだけで見ず知らずの相手から命令されるようになった。

「なんで俺がテメエみたいな奴の命令に従わなければならねえんだよ。自分でやれ」

友好関係を持たない奴からの命令は大嫌いだ。拒否する。

「ふうん、そういうこと言うの。自分の立場がわかっていないみたいね」

その女は警備員を呼ぼうとする。

「止めておいたほうがいいぞ」

「何？ 今更言い訳？」

「いいや、ただの忠告だ。アンタに対してのな」

「はあ？ 何言ってるのよ」

そういつて警備員を呼んだ。 あーあ、忠告してやったのに。

「君かい？ 暴力を振るつたというのは」

「そんなことしてませんよ」

「一応話を聞くために事務室にまで来てくれないかい？」

「なんでもなくてもこのためにわざわざ連れを待たせてまで行くか」

「本当に暴力は振るってないんだね？」

「してません」

「彼の言っている事は事実ですか？」

「嘘よ！ デタラメよ！ 私は本当に暴力を振るわれたんです！」

「監視カメラの映像でも見てください。事実がわかりますから」

女の顔が少しずつ暗くなっていく。

「わかりました。監視カメラの確認は今しているので、お二人の身分を教えてください」

「いいですよ。身分を証明できるものが生徒手帳しかないんですが、それでもいいですか？」

「構いません」

「これが俺の身分です」

生徒手帳を見せる。もちろん、IS学園の。

「こ、これは……」

「俺は世界でISを動かせる男。天才篠ノ之束が紹介した八神竜牙だ」

女の顔が絶望に染まっていく。

「だから言ったはずだ。止めておいたほうがいいと。それにア  
ンタ、篠ノ之束が声明の時に言ったことを覚えているか？」

女の顔色がさらに青くなっていく。

「覚えてないのなら教えてやる。『もしも彼になにかあったら、そいつは覚悟しておいた方がいいよ。彼に恋する人間がいるからね。彼女たちを敵に回したら、世界が壊されるかもね。』だ」

女の顔は既に真っ青。病気と思えるほどに真っ青だ。

「今、映像の確認が取れました。彼の言っていたことが事実と判断されましたので、あなたは私に付いてきてください。事情を聞きたいので」

「竜牙、何どうしたの？」

「いやなに、女に絡まれてな。そいつが無いことを言っつて俺を陥れようとした奴だ。今無実が証明されたんで、連行されようとしているわけだ」

俺がそういうと、フェイトから異様な殺気が感じられた。

「警備員さん、少しその女性を貸していただけませんか？　すぐに終わりますので」

「彼女からは事情を聞かなければならないので……」

「5分ほどで終わります。私は彼女から直接話しを聞きたいので。お願いします」

「……わかりました。ここで待ちますので、必ず連れてきてください」

「ありがとうございます。 行こうか。 O・H A・N A・S H I、しよっ？」

「あー……フェイト？ ほどほどにな？」

「わかったよ。 あ、これ持ってて」

フェイトは俺に持っていた水着を渡し、そのまま女を連れ去って行った。

「……ご愁傷様」

俺を陥れようとした女に、哀れみの言葉が普通に出てきたのだった。

「きゃあああ!？」

山田先生の声？ どうしたのだろうか。 俺は声のした方へと歩み始めた。

「「す、すみません……」」

そこにいたのは正座して謝っている一夏とシャル、説教している千冬と姉貴と山田先生がいた。

「えーっと……なにしてんの？」

「あ、竜牙。 どうしてここにおるん？ それとその複数の水着は？」



「これか？　これは連れが見てほしいってことで持ってきた水着だ」

「その連れとやらは？」

「あー……今はとある女とO・H A・N A・S H Iしてるぞ」

それを言ったら、O・H A・N A・S H Iを知っている千冬、姉貴、シャルは顔を引き攣らせていた。

「で、これはどういう状況？」

「一夏くとシャルロットちゃんが試着室から出てきたんよ」

……一夏、なにしてんだよ。

「そ、そろそろ出てきた方がいいんじゃないか？」

一夏が言つと、ギクツと言つ音と共に柱の陰に隠れていた鈴とセシリアが出てきた。

「そ、そろそろ出てこようかと思ってたのよ」

「え、ええ。　タイミングを計っていたのですわ」

「なにをこそこそしているのかと思って、ずっと気になっていたんだがな」

「女子には男子に知られたくない買い物があんのー！」

「そ、そうですね！　まったく、一夏さんのデリカシーのなさには

いつもながら呆れてしまいますわね」

一夏に対しての罵詈雑言。

「さつさと買い物を買わせて退散するでしょう」

千冬が手にしているのは水着だ。

「あ、あー。私ちよつと買い忘れがあったので行ってきます。

えーと、場所がわからないので鳳さんとオルコットさん、八神先生と八神さんもついてきてください」

そういつて山田先生は姉貴たちを連れてどこかに行った。

この場に残ったのは俺に千冬に一夏だ。俺を抜けば姉弟水入らずということだ。

「……まったく、山田先生は余計な気を遣う」

「だな」

「え？」

「ふう……。言っても仕方がない、か。一夏、竜牙さん」

「なんだ？ 千冬」

「な、なんですか？ 織斑先生」

「今は就業中ではないからな、名前がいい。私たちはこの場ではただの姉弟だろう」

俺の場合は恋人だけだな。

「わ、わかった」

「で、どっちの水着がいいと思う?」

千冬が見せたのは黒の水着と白の水着。      どちらもビキニだ。

「黒」

「白の方」

「黒の方だな」

「いや、白の」

「お前が千冬に隠し事なんてできるかよ。      それにお前が最初に注視していたのは黒だったぞ」

「まったく、弟が余計な心配をするな。      大体、私とその辺にいる程度の男になびくような女に見えるか?」

「いや、見えないけど……。      でも千冬姉、彼氏とか作らないのか?      そういう話、一回も聞いたことないしさ」

君の目の前にいます。      千冬の彼氏。

「手のかかる弟が自立したら考える      と言いたところだがな、  
すでにいる」

あ、バラすんだ。

「えー!? マジで!?!」

「私のことはいい。お前の方はどうなんだ?」

「え、俺?」

「お前は彼女は作らないのか? 幸い学園内には腐るほど女がいるぞ」

俺と一夏を除いたらほとんど男なんていねえじゃん。

「そうだな……。ラウラなんてどうだ? 色々と問題はあるだろうが、あれは一途なやつだぞ。容姿だって悪くはあるまい」

「シャルもいいだろ。しっかりしてるし、容姿も悪くない。それに一夏とシャルには対になるドラゴンの力を貸し与えているしな」

「いや、それは……」

「それに、キスした仲だろう?」

「それに、一緒に風呂に入った仲だろ?」

一夏はものすごく狼狽している。

「まんざらでもないか?」

「いや、そついうのはなんつつか、まだよくわかんねーって……」

「そつか。では容姿は好きなほうか？ 嫌いなほうか？」

「それも……うーん。まあ、その、二人とも可愛くはあると思うけどさ」

「ほう」

「へえ」

「ラウラとシャルは可愛いよ　って、何を言わせてんだよ！」

「勝手に言ったのはお前だろう」「」

誘導尋問だな。

「あ、いたいた！ 竜牙！」

「フェイトか。あの女は？」

「ちゃんと渡したよ」

「そつか。じゃ、俺は連れが来たんで行くわ。じゃあな、千冬、

一夏

「はい。また学園で。それとフェイトもな」

「千冬さんも」

「あ、一夏。 フェイトのことを言ったら承知しねえからな」

「お、おう。 絶対いわねえ」

俺とフェイトはその場から少し離れ、水着を選んで買った。 その後、昼食を取ってからフェイトの買い物に付き合った。

Side↳竜牙↳out

第28話 臨海学校1（前書き）

サブタイが思いつかない……。

第28話 臨海学校1

Side) 竜牙)

「海っ！見えたあっ！」

クラスの子が声を上げた。  
臨海学校初日、転校は快晴。

「テンション高いな……」

俺のテンションは大絶賛下降中。睡眠の邪魔されてテンション上  
がねえよ。それに少し嫌な予感がする。

「……寝よう」

俺は再び意識を手放した。

「竜……さん……きて……い」



誰かに呼ばれている気がした。

「竜牙さん！ 着きましたよ！ 起きてくださいー！」

「…………ん？ あー…………着いたのか…………」

俺を起こしていたのは千冬。 バスの中には俺と千冬しかいなかった。

「悪い悪い。 今降りるから」

俺は荷物を持ってバスから降りた。 すると、俺に視線が向けられ、千冬にも視線が向けられていた。

「凄い…………織斑先生、あの八神君を起こしちゃったよ…………」

「さすがは千冬様ね…………」

「竜牙さんが反撃しないで起こされたの始めてみた…………」

などという俺を起こすことに対しての驚嘆の声が聞こえた。

「ンッ！ ンッ！ それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。 全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「…………よろしくおねがいしまーす…………」

千冬の言葉の後に全員で挨拶をする。

「はい、こちらこそ。 今年の一年生も元気があってよろしいです

ね

しっかりとした雰囲気の女将さんだ。

「あら、こちらが噂の……？」

一夏と目があった女将さんが千冬に尋ねていた。

「ええ、まあ。今年は男が二人いるせいで浴場分けが難しくなつて申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。しっかりとそうな感じを受けますよ」

「あいつはともかく、こいつは感じがするだけです。挨拶をしる、馬鹿者」

一夏は頭を抑えられた。

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

近づいて俺も挨拶をする。

「八神竜牙です。よろしくお願いします」

「うふふ、ご丁寧にも。清洲景子です」

女将さんは丁寧なお辞儀をしてくれた。

「不出来の弟でご迷惑をおかけます」

「あらあら。　織斑先生つたら、弟さんには随分厳しいんですね」

「あいつと比べ、手を焼かされますので」

一夏は否定し切れていないんだろうなあ。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。　海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。　場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

女子達は返事をする、すぐに旅館の中に入っていった。

「ね、ね、ねー。　おりむ、やっくん」

のほほんさんこと、布仏本音だ。　てかやっくんって俺か？　俺か。

「おりむ、達って部屋どこ？　一覽に書いてなかったー。　遊びに行くから教えて」

「いや、俺も知らない。　廊下にも寝るんじゃないの？」

「普通に考えてそれはないだろ」

「それもそうか」

俺と一夏はおそらく一室を借りるのだろう。

「織斑、八神、お前達の部屋はこっちだ。　ついてこい」

「夏は「またあとで」と告げて分かれた。

「えーっと、織斑先生。俺達の部屋ってどこになるんでしょうか？」

「黙ってついてこい」

「夏は言葉を封じられた。

「ここだ」

「え？ ここって……」

教員室と書かれている部屋が二部屋並んでいる。あーもしかして……いや、もしかしなくてもそういうことが。

「最初は個室という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということになってだな」

「つまり、先生と同室、ということだな」

わざわざ千冬の部屋に来るほどの勇者はいないだろう。

「そういうことだ。織斑は私と、八神ははやとだ。姉弟が同じ部屋の方がまだいいだろう」

「一応言っておくが、あくまで私は教員だと言つことを忘れるな」

「はい、織斑先生」

「それでいい」

思い出したように、

「それと、大浴場は使えるが、時間交代だ。深夜、早朝に入りたければ部屋の方を使え」

「わかりました」

「了解」

俺が部屋に入るとすでに姉貴がいた。

「おー竜牙ー。一緒の部屋やでー」

「さっき聞いた。あ、それと明日ついでに実験するから」

「実験？ 何の？」

「リインフォースの俗に言うパッケージみたいな奴だ」

「りょうかい。竜牙は海に行ってきたもええで」

「じゃ、行ってくるわ」

俺は荷物を置いて、必要なものを持って部屋を出た。

「……………」

俺は見た。道端にウサ耳が生えているのを。しかも『引っ張ってください』と書いた張り紙まである。

「……………よし、無視だ」

俺が見なかったことにして立ち去ることにした。

「あ、竜牙さん。そんなところで何を？」

筈に出会った。

「なんでもない。気にしたら負けだ」

俺はそのまま立ち去った。こんなところであいつに会いたくない。絶対に疲れるからだ。

Side↳竜牙↳out

Side↳一夏↳

「何してんだ？」

俺は立ち尽くしている筈を見つけた。ふとウサ耳を見た。

「なあ、これって」

「知らん。私に訊くな。関係ない」

筈は即否定をした。

「えーと……抜くぞ？」

「好きにしる。私には関係ない」

筈はすたすたと去ってしまふ。

残された俺はウサ耳を思いつきり引っ張った。

すぽっ。

「のわっ!？」

ウサ耳はあっさりと抜け、力余った俺は盛大にすっころんだ。

「いてて……」

「何をしていますの？」

「お、セシリアか。いや、今このウサ耳を引っこ抜いてだな……」

「はい？」

素っ頓狂な声で聞き返すセシリア。それは当然だろう。

「いや、東さんが」

キイイイン……。

何かが飛んでくるような音。

ドカ　　ン！

「に、にんじん……？」

謎の飛行物体の形はにんじんだった。

「あっはっは！　引っかかったね、いつくん！」

割れたにんじんから現れたのは天才・篠ノ之束だった。

「お、お久しぶりです、東さん」

「うんうん。　おひさだね。　本当に久しいねー。　ところでいつくん。　篝ちゃんとりゅーくんはどこかな？　さっきまで一緒だったよね？　トイレ？」

「兄貴はいませんでしたよ？」

「まあいいや。　篝ちゃんはこの私が開発した篝ちゃん探知機ですぐに見つかるよ。　じゃあねいつくん。　また後でね！」



束さんはすったったーと走り去る。

「い、一夏さん？ 今の方は一体……」

「束さん。 篝の姉さんだ」

「え……？ ええええっ！？ い、今の方が、あの篠ノ之博士ですか！？ 現在、行方不明で各国が探し続けている、あの！？」

「そう、その篠ノ之束さんだ」

Side ～ 夏 ～ out

第29話 臨海学校2 自由時間

Side 竜牙

「暑い……」

海にまでは来た。だが暑い。正直、暑すぎるのは嫌いだ。適温が一番いい。

「あ、八神君だ！」

「う、うそっ！ わ、私の水着変じゃないよね！？ 大丈夫だよね！？」

「わ、わ。体かっこい。鍛えてるよね」

「八神くん、後でビーチバレーしようよ」

「気が向いたらな」

俺を見つけた女子に声をかけられ、適当に答えておく。

にしても、本当に久しぶりの海だな。プールとかも一切行かなかったから、泳ぐのは3年ぶりくらいだ。

「お、兄貴」

「一夏か」

一夏が来ていた。

「東、見ただろ？」

「あ、ああ、見たよ。東さん。箒を探しにどこかに行ったけどな」

「あいつは何してんだよ……」

ふざけた調子の束を思い出し溜息が出た。

「い、ち、か~~~~~っ！」

鈴が一夏に飛びついて肩車の状態になった。あの動きは猫だ。

「おー高い高い。遠くまでよく見えていいわ。ちょっとした監視塔になれるわね、一夏」

監視塔になる一夏の身になってみるよ。なんか可哀そうだろ。

「あっ、あっ、ああっ！？な、何をしていますの！？」

セシリアが登場。

「何って、肩車。あるいは移動監視塔」

「じっここかよ」

「そりゃそうでしょ。あたし、ライフセーバーの資格とか持ってないし」

「期待はしんが、まあ、精々頑張れ」

「鈴さんはそこから降りてください!」

「やだ」

「な、何を子供みたいなことを言っ……!」

セシリアがパラソルを砂浜に刺す。このことがあるから怒りが籠  
っている。

「一夏さん、約束、忘れていませんわよね?」

「お、おう」

「ではさっそくサンオイルを塗ってください!」

「「「え!?!」」」

「私サンオイル取ってくる!」

「私はシートを!」

「私はパラソルを!」

「じゃあ私はサンオイル落としてくる!」

わざわざ塗ったなら落とす意味無いじゃん。そんなに一夏に塗っ  
てもらいたいのか?

「……俺、行くから」

「兄貴、俺を見捨てないで！」

「自分の言葉に責任持てよ」

俺は一夏を見捨ててこの場を後にした。

「にしても、みんな元気だな」

「竜牙ー！」

「……は？」

俺がどこか年寄りくさいことを口走っていると、今、ここで聞こえるはずの無い声が聞こえた。

「なんでお前がここにいるんだよ！」

少し前にデートをした俺の彼女の一人のフェイトがいた。

「俺言っただよな？ 絶対来るなって言っただよな！？」

「言っただけど、竜牙といたかったから……」

「ってか臨海学校があるのは言っただけど、場所はどっやって調べた  
！」

「竜牙のISの反応を調べてケーシィのテレポートでここまで来た  
んだ」

……ISをステルスモードにしておけばよかった……。それと、前に渡したケーシィにも制限をかけておけばよかった……。

「帰る気は？」

「ないよ」

「はあああ……」

「一応訊いてみたけど、やっぱり帰る気は無いようだ。あー面倒くさいことに……。あ、千冬にも伝えておかなければ……。」

「……バルディッシュは？」

「あるよ」

《……すまない、龍》

バルディッシュの開口一番は謝罪だった。

「お前が謝るな。薄々感じてたことだからな……」

「あれ？ 八神君？ その人誰？」

今更見つかったようだ。海にいたのに今さっきまで声をかけられなかったのが謎だ。

「誰！？ 八神君とすっごい親しそう！」

「どこどこ!?! うわっ! すっごい美人だ!」

その一人に見つかってから続々と見つかっていった。俺の周りは一気に騒がしくなった。

「あーあ、やっぱりこうなつたよ……」

予想通りの光景にまた溜息が出た。

「コイツの話はまた今度な」

「『えええええー!!』」

俺がそういうとブーイングが巻き起こつた。

「遊ぶ時間が無くなる。だから話は後。以上」

俺はそう告げてからフェイトを連れて動き出した。

「あの人誰?」

「八神君と一緒にいる人……すごい美人……」

「あれ? その人って……」

「あ、お兄ちゃん。それにお久しぶりです。フェイトさん」

「あ、シャルロット。久しぶり」

「あれ? シャル知ってんの?」

「あ、うん。前に会ってね」

「へええ。兄貴、その人って結局なんなんだ？」

「ここでの追求をしなければ教えてやる。もし破ったら、海に思いつきり投げ飛ばす。ラグラージが」

俺は神帝からラグラージを呼び出す。

「で、訊くか？」

「「是非！」「」

集まっていた女子が聞いてくる。

「俺の彼女」

僅かな沈黙。

「「ええええええ！？」」「」

女子の絶叫。

「神は死んだ！今死んだ！」

「私の恋が！」

「この世界は腐っている！」



女子の嘆きが響く。

「……放っておいて行こう。時間の無駄だから」

「あ、う、うん」

「じゃあな、一夏、シャル」

「お、おう」

「またね」

俺とフェイトはそのまま海で遊んだ。

フローゼルを水上バイクにして海を失踪したり、ラプラスに乗ってゆっくりしたりした。

「ビーチバレーにでも雑<sup>ざ</sup>ぜてもらおうか？」

俺がそう提案したのは海に着いて誘われたのもあるが、一夏たちがやっていたのを見たからだ。

「そうだね」

俺とフェイトは海から出て、一夏たちのもとに行った。

「一夏、シャル、楽しんでるか？」

「お、兄貴。当たり前だぜ。兄貴もやるか？」

「いいのか？」

俺は他の女子に尋ねる。

「い、いいよ」

反応が少し変だったが、フェイトがいるからだろう。

「じゃ、やるか」

「うん」

俺とフェイトのペアと一夏とシャルのペアのゲームだ。

「サーブは一夏からでいいか」

「わかった。手加減しねえからな」

「かかって来い」

一夏のサーブ。それを俺がレシーブし、フェイトがトス。そして俺のスパイク。

「任せて！」

シャルは俺のスパイクを綺麗に上げた。そしてそのまま一夏のスパイク。

「フェイト！」

「大丈夫！」

フェイトがレシーブ。俺はそれをトスし、フェイトがスパイク。  
そのスパイクは決まった。  
見かけによらずいいスパイクだった。

「ナイス、フェイト」

「ありがとう」

「じゃ、一夏。そろそろ俺も全力で行くからな」

「臨むところだ！」

俺のサーブ。容赦なしのジャンプサーブ。我ながらいいサーブだ。

「おわっ!?!」

一夏がレシーブをしたが、弾いてしまった。弾かれたボールを追うシャル。ボールはシャルに拾われ、打てないようで普通に返された。

「フェイト、上げる！」

「わかった！」

俺が拾い、フェイトのトス。そして俺のスパイク。ボールは二人の間をぶち抜いた。

「ナイストス」

「ナイススパイク」

俺とフェイトはハイタッチする。

「やっぱり強いな」

「だけど、簡単には負けられないよ!」

「上等!」

「私たちも負ける気は無いよ」

結果は10対4で俺たちの勝ちだ。

「やっぱり強いな。兄貴って本当に何でもできるよな」

「初めからなんでもできたわけじゃねえよ。まあそこまでやらなくてもできたけどな」

「その才能が羨ましい……」

「ま、頑張れ」

俺は皮肉を言っておいた。

「そういえば、一夏たちって結局どこの部屋だったの?」

「あー、それ私も聞きたい!」

「私も私も！」

「わたしも〜。冷たい床情報は共有しよ〜」

のほんさんこと布仏本音。冷たい床情報って何？

「えーと、俺は織斑先生の部屋だぞ」

「俺はその隣の姉貴の部屋だ」

女子はぴしっと凍り付いた。

「だからまあ、遊びに来るのは危険だな」

「そ、そうね……。でも織斑君とは食事時間に会えるしね！」

「だね！ わざわざ鬼の寝床に入らなくても」

「誰が鬼だ、誰が」

千冬登場。女子がさらに固まったぞ。

「お、織斑先生……」

「おっ」

前に選んだ水着を着ている。凄く似合っている。

「で、なんでお前がいるんだ？」

「竜牙といたかったから、かな？」

「なぜ疑問形なんだ……」

「千冬姉」

「ごすつ。千冬のチョップ。」

「織斑先生だ」

「お、織斑先生、知っているんですか？」

「まあな」

「弟には厳しいですね、千冬さん」

「黙れフェイト。余計なことは言つなよ」

「わかっています」

これ以上面倒なことは御免だ。もし言ったらO・H・A・N・A・S  
HIだ。

「お前たちは食堂に行って昼食でもとってこい」

「先生は？」

「私はわずかばかりの自由時間を満喫させてもらつてじつじつ」

「俺たちは昼食に行つてきます」

「集合時間には遅れるなよ」

「はい」

一夏たちは別館へと向かっていった。

「八神、お前も行け。 フェイトもだ」

「いいよ俺は。 それに、あいつらがいるとなかなか一緒にいれないしな」

俺は付き合っなら平等にがモットーだ。

「学園じゃあ恋人らしくいらねえだろ。 今くらいべつにいいだろ、千冬」

「……わかりました。 生徒がいないときだけです、今はそうしましよ」

いつも千冬は固い。 特に教師としているときは特に。 だから今だけ、僅かな時間でも一緒に遊ぼうと考えたわけだ。

「ところで竜牙さんは昼食はどうするのですか？ 私といて昼食を取らないのは私の気が済まないのですが……」

「大丈夫だ。 ラッキーと八ピナスがいるからな」

ラッキーと八ピナスは卵を産む。 その卵の味は別品だ。

「それならいいのですが……」

「さて、時間は長くないから遊ぼうぜ」

「はい」

俺と千冬は他の生徒が戻ってくるまでの間、二人で遊んでいた。フェイトはその光景を邪魔しまいと見ているだけだった。

Side 〱 竜牙 〱 out



第30話 臨海学校3 夜の部屋にて1（前書き）

長くなりそうだったので二つに割りました。

第30話 臨海学校3 夜の部屋にて1

Side 竜牙

時間はあっという間に過ぎ、現在は七時半。大宴会場で夕食を取っていた。

「うん、うまい！ 昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だよなあ」

「そうだね。ほんと、IS学園って羽振りがいいよ」

シャルの左に座る一夏。俺はシャルの右側に座り、俺の右側にフェイトがいる。

「よく千冬もお前のことを許したよな」

「そうだね。ま、私としては助かるんだけどね」

あまりに普通にいるため、フェイトに視線が行っている女子ばかりだ。

「お前、この状況を狙っていたわけじゃねえよな？」

「そんな訳ないよ。だって竜牙がこういう状況になることを嫌っていたからね」

「それが真実だといいいけどな」

俺が膳に手を出しながらフェイトと話していて、ふとシャルの箸に

わさびの山が乗っているように見えた。それは見間違いではなく、シャルはそのまま口に運んだ。

「シャル、お茶だ」

鼻を押さえて涙目になっているシャルにお茶を渡す。

「あ、ありはとう……」

「だ、大丈夫か？」

「ら、らいひょうぶ……」

鼻声で返事をする。

「ふ、風味があつて、いいね……。お、おいしいよ……？」

どこまで優等生でいるんだ。

「あ、そういえばフェイトって明日もいる気なんだよな？」

「そのつもりだよ？ それがどうかしたの？」

「いや、持ってきて正解だったと思ったただけだ。まあ、調整がまだなんだけどな」

「調整？ 何か作ったの？」

「まあな。ま、それは明日のお楽しみだ」

「じゃあ楽しみにしておこうかな」

俺はその後やや急ぎ気味で食事を終えた。会場からでて部屋に向かっていたら会場がやたらうるさくなっていたが、何があったのだろうか。

S i d e 〱 竜牙 〱 o u t

S i d e 〱 一夏 〱

「ふう、さっぱりした」

食後に温泉とはなんとという贅沢だろうか。部屋に戻ると誰もいなかった。

(千冬姉も温泉かな?)

あ、ちょうど帰ってきた。

「ん？ 一人か？ 女の一人も連れ込まんとは詰まらん奴だ」

「だから……はあ、もういいよ。それは」

大体ここは『織斑先生』の部屋だ。如何わしいことを目的にそんなことをしたら後が恐ろしい。

「なあ、千冬姉」

「ごすつ。 鋭いチョップが飛んできた。」

「織斑先生と呼べ」

「まあ、それはいいじゃん。二人きりだし、風呂上りだし、久しぶりに」

Side～一夏～out

Side～セシリア～

「……………」

「……………」

わたくしは一夏さんに誘われたので準備をして一夏さんの部屋に来たのですが、部屋の入り口のドアに張り付いている女子がいました。

「鈴さん？ それに篝さんまで。一体そこで何を」

「シッ！！」

鈴さんに口を塞がれました。一体に何が……………。

『千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる？』

『そんな訳あるか、馬鹿者。』

んっ！ 少しは加減をしろ……

……』

『はいはい。 んじゃあ、こっちは……と』

『くあつ！ そ、そこは……やめっ、つうっ！！』

『すぐに良くなるって。 大分溜まってたみたいだし、ね』

『にしても、千冬も可愛らしい声だすよな』

『そ、そんなことは……あああつ！』

一夏さんと竜牙さん、織斑先生が聞こえてきました。

「こ、こ、これは、一体、何ですの……？」

引き變った笑みを浮かべているのは自分でもわかります。

「……………」

「……………」

お二人も沈んだ表情をしています。 わたくしだってきつとそう  
ですから。

『じゃあ次は』

『一夏、少し待て』

『あ、俺がやるから続けてくれ』

『竜牙さんは作業をしてください』

『はいはい』

あれ？ 声が途切れました。 わたくしたちはドアにぴったりと耳を寄せましたら

バンツ！！

「「「へぶつ！」「」」

ドアに殴られました。

「何をしているか、馬鹿者どもが」

「は、はは……」

「こ、こんばんわ、織斑先生……」

「さ……さようなら、織斑先生っ！！」

逃走を試みました。 しかし、鈴さんと篝さんは首根っこを取られ、わたくしは浴衣の裾を踏まれて身動きが取れなくなりました。

「盗み聞きとは感心しないが、ちょうどいい。入っていけ」

「「「えっ？」「」」

予想外のお言葉ですの。

「ああ、そつだ。他の二人　ボーデヴィツヒと八神妹も呼んで来い」

「は、はいっ！」

Side～セシリア～out

Side～竜牙～

俺が千冬の部屋にいるのは、反転世界から戻つたために次元の渦を作つたが、その座標を少し間違えたからだ。

「おお、セシリア。遅かつたじゃないか。じゃあはじめようぜ」  
「夏はいつの間にかセシリアを誘っていたようだ。」

「え、あの、織斑先生と竜牙さんがいらっしやいますし、その……」  
「？ 別にいいじゃないか。俺も体が温まってるし、早くはじめよう」

「い、いえ、でも、こういうのは、その、雰囲気……」  
「……？」

ちよつとおちよくるか。俺は千冬にアイコンタクトで俺がやることを教えた。そして千冬が微かに笑つたのが見えた。



「千冬、一夏がセシリアとやってる間は俺がやるよ」

「え？」

「し、しかし……」

「俺は一夏ほど上手いわけじゃないけど、気持ちよくできると思っけどな」

セシリアは赤くなっていたが、意を決したようにベッドに横たわっていた。

「セシリアもやる気みたいだし、俺たちもやるうぜ」

「そうですね。では、お願いします」

千冬もベッドに寝た。

「「じゃあ、始めようか」「」

俺と一夏の声が揃う。

俺は千冬の手、一夏は腰の指圧をしていたようだ。

「!? いたたっ、いたたっ! い、い、いっ、一夏さん!? な、なにをして あううっ!」

「なにして指圧」

「し……あつ……?」

「そう、腰の」

「腰の……」

セシリアはきよとんとしている。俺はマッサージを続けながらも笑いを堪えていた。

「え、ええと、一夏さん。部屋に誘ったのは、もしかしてこの……」

「おう。マッサージをサービスしようと思ってな。セシリアって班部屋だろ？ それじゃ落ち着かないだろうから、この部屋に呼んだんだ」

「……………」

「まさかセシリアって如何わしいことを考えていたんじゃないの？ コイツに対して？」

俺が嫌味ったらしく言う。

「ぶ、無様です……わたくし……」

セシリアは落ち込んでいた。

「さて、続きしようか」

「はい。お願いします」

脚のマッサージ。やっぱり鍛えられてるな。

「んっ……！ はあん！」

「千冬、大丈夫か？」

「え、ええ。 し、しかし、もう少し力を……ん……抑えてください」

「了解。 こんくらいでどうだ？」

「き、気持ちいです」

「それは結構」

隣ではセシリアが寝かかっていた。

「そろそろ……ですね……」

「ん？ なにかするのかわか？」

「はい。 ちょっと……」

俺はマッサージを止めてベッドから少し離れる。そして、千冬がセシリアの尻を鷲掴んだ。

「おー、マセガキめ」

今さっきまでの顔とは違う、イタズラが成功したこのような顔だ。まるで豹の如くの笑み。 ていうか、さっきと変わりすぎだろ。

「しかし、歳不相応の下着だな。 そのうえ黒か」

「え……きゃあああつ!?!」

千冬がセシリアの浴衣をすくい上げる様につかんだせいで、まくれ上がった浴衣から、下着が丸見えである。

「……………」

一夏は顔を赤くして視線を逸らしている。俺は何もなかったことにして中断していた作業に戻る。

「せ、せつ、先生!離してください!」

「やれやれ。教師の前で淫行を期待するなよ、十五歳」

「い、い、いつ、インコっ……………!?!」

「冗談だ。おい、聞き耳を立てている四人……いや、五人か。そろそろ入ってこい」

ドアに視線を向けた。

S i d e へ 竜 牙 へ o u t

第31話 臨海学校4 夜の部屋にて2 (前書き)

俺の中のキャラが崩れていく……。

第31話 臨海学校4 夜の部屋にて2

Side(竜牙)

ぎくっぎくっぎくっぎくっ。

「「「「.....」」」」

沈黙が数秒あり、それからゆっくりとドアが開いた。

いたのはさつき開放され、シャルとラウラを呼びに行った筈と鈴、呼ばれてきたシャルとラウラ。そしてなぜかフェイトまでいる。全員浴衣だ。

「さすがは千冬さん。私も気づかれるとは思わなかったな」

「よく言うな。ばれることを前提で聞いていただろ」

「やっぱりわかった？」

「気配が完全に消えてなかったからな。お前が本気で気配を消したら千冬でも気づくかわからんレベルだろうが」

あいつらもただけぞ。

「全員好きなところに座れ」

すでに入っていたフェイトは俺の隣に座り、他四人は入室、後に座った。

「ふー。さすがに二人連続ですると汗かくな」

「手を抜かないからだ。少しは要領よくやればいい」

「いや、そりやせつかく時間を割いてくれる相手に失礼だって」

「愚直だな」

「千冬姉、たまには褒めてくれても罰は当たらないって」

「どうだかな」

フェイトは気づいていたようだが、ここで全員状況を飲み込んだようだ。

「は、はは……はあ」

「ま、まあ、あたしはわかってたけどね」

「」「」

シャルとラウラは真っ赤になっていた。

「本当にしてたら面白いことになってたかもね」

フェイトが俺に向けて言う。

「……お前……やっぱりなんか企んでるだろ……」

「そんなことないよ？」

「なんで疑問形なんだよ……」

すでに呆れている。

一夏、篝、鈴、セシリア、ラウラは俺とフェイトに視線が向けられていた。おそらくフェイトの発言の所為だろう。

「まあ、お前はもう一度風呂にでも行ってこい。部屋を汗臭くさ  
れては困る」

「ん。そうする」

一夏はタオルと着替えを持って出て行った。

「……………」

どうしていいのかわからない女子は黙り込んでいる。

「おいおい、葬式か通夜か？　いつものバカ騒ぎはどうした」

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、はじめてですし……」

「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう。何  
がいい？」

旅館の備え付けの冷蔵庫から飲料水を取り出した。



「ほれ、ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、紅茶だ。それぞれ他のがいい奴は各人で交換しろ」

俺はすでにコーラを持っている。

「……………い、いただきます……………」

全員が飲んだのを確認してから、千冬は笑った。

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……………」

「な、何か入っていましたの!？」

「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちょっとした口封じだ」

千冬が新たに取り出したのはビールだった。

「ふむ。本当なら一夏に一品作らせているところなんだが……………それは我慢するか」

「なんなら俺が作るうか？」

「いいんですか？」

「いいからそう言うてんだろ」

「ではお願いします」

俺はテレポートで移動した。

S i d e 〱 竜牙 〱 o u t

S i d e 〱 フェイト 〱

竜牙が去った後、女の子たちはぼかんとしている。シャルロットは少し複雑な表情をしている。千冬さんのイメージがあってないのと、竜牙とのやり取りの所為かな？

「おかしな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

「い、いえ、そういうわけでは……」

「ないですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……?」

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ」

そういつてニヤリと笑う千冬さん。そして女の子たちは自分の手元を見て、「あっ」と声を漏らした。

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」

二本目のビールを飲みながら話を続ける。

「お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

私以外だね。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

それ、明らかに嘘だね。

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

「」「言わなくていいです！」「」

一斉に詰め寄る三人。

「僕　あの、私は……やさしいところ、です……」

「ほう、しかしなあ、あいつは誰にでもやさしいぞ」

「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなあ」

照れ笑いをするシャルロット。素直だね。

「で、お前は？」

次はラウラ。

「つ、強いところが、でしょうか……」

「いや弱いだろ」

「つ、強いです。少なくとも、私よりも」

「まあ、強いかは別にしてだ。あいつは役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサージもうまい。付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

「くくく、くれるんですか？」「」「」

「やるかバカ。決めるのはあいつだ」

それもそうだよね。

「女なら、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

「ただいま」と

竜牙が戻ってきた。手には料理がある。そして視線をビールの空き缶に向けた。

「……千冬……飲み過ぎは駄目だぞ」

「わ、わかっています」

「……あの……織斑先生」

「ん？ なんだ？」

「えーと……竜牙さんとはどういう関係なんですか？」

「敬語を使っていますし……」

「竜牙にはすでに彼女がいるはずですし……」

眼帯をした女の子が私のほうを見ながら言う。

「俺は風呂行くわ。こいつらなら別に話してもいいと思うけど、まあそれはお前らに任せるわ」

そう言っただけでまた竜牙は消えた。逃げたよね？

「任せるって言われてもね……どうします？ 千冬さん」

「そつだな……お前ら、聞きたいか？」

「「「「は、はい」「」「」」

シャルロット以外の女の子が答える。シャルロットは知ってるしね。

「というわけだ。 シャルロット、教えておいてやれ」

「ふえ！？ ぼ、僕が教えるんですか！？」

「別にいいだろう。 お前は直接見ていたのだからな」

「そ、そうですけど……」

「千冬さん、私から教えますよ。 それに、シャルロットで遊ぶのは可哀想ですよ」

「それもそうだな」

竜牙の義妹でも千冬さんについて言うのは気が重いと思うからね。

「まず始めに、竜牙にはね、彼女が四人いるんだよ」

「」「」「え？」「」「」

意味がわからないって言うところかな。

「そ、それはどういいうことなのですか？」

「そのままの意味だけど？」

「つ、つまり、あいつにはあなたとは別に三人の彼女がいると？」

「そうだよ」

「そ、そういうことってありですか？」

「ありなんじゃないかな？ 竜牙だからって理由だけど」

「……話の流れからすると、教官も竜牙の彼女、ということですか？」

「そういうこと」

数秒の沈黙。

「……ええええええええっ！？」

驚愕の叫び。

「あ、ちなみに、竜牙からの告白は一度も無いよ」

「四人とも竜牙に惚れて告白をしたと」

「そうだよ。君たちが惚れている一夏とは違って、気づいていたけど、竜牙からは告白はしなかったんだ」

「そ、それはなぜですか？」

「竜牙が旅をしていた三年の間に私たち……あ、千冬さんは除いた三人ね。私たちは竜牙さんと一緒にいたことが何度もあったんだ。そのときから私たちは竜牙に好意を持っていた。それに竜牙は気づいていたのに、告白したのに答えは出さなかったんだ」

「それは三人のうち誰が好きかわからなかったからですか？」

「それもあると思うんだけど、きっと竜牙は答えを出したくなかったんだよ」

「どづいつことだ？」

「竜牙は優しいからね。私たちの悲しむ姿が見たくなかったんだと思う」

「」「」「あ！」「」「」

理解できたみたいだね。

「竜牙は誰かを選んで誰かを悲しませることはしたくなかったんだと思う。だから答えを出さなかった」

「で、では、どうやって竜牙さんを恋人にしたのですか？」

「それが今の状況につながるんだけど、三人で寝込みを襲っちゃったんだ。そしたら全員と付き合うことになってね」

「」「」「え！？」「」「」「」

「そ、それって……」

「も、もしかして……」

「もしかしなくても……」

「そ、そういうことなんですか？」



顔を赤くしながら訊いてくる。あれ？ シャルロットまで訊いてくる。知らなかったのかな？

「そついうことだよ」

顔をさらに赤くした五人。

千冬さんは溜息までついてるし。呆れないでください。

「竜牙は付き合うなら平等に愛してくれるからね。私はそついうところが好きなんだよ」

「……フェイト、お前の惚気話になってるぞ」

「あ、ごめんね。そついうつもりはなかったんだけど。あ、一応言っておくね。もしもこれをばらしたら竜牙が黙ってないと思うから」

「だろうな。竜牙さんは面倒なことを嫌っているからね。それなのに、ばれるようなことがあれば情報元を潰そつとする。面倒ごとを嫌っているのに、面倒でも仕返しは必ずするのが竜牙さんだからな」

「だから、ばらさないほうが身のためだよ」

「一応忠告しておく。大丈夫だと思うんだけどね。」

「わかった？」

「「「「「はい！」「」「」「」」

「龍牙」

Side 龍牙 out

第31話 臨海学校4 夜の部屋にて2 (後書き)

俺の中のキャラが崩れていく……特に千冬さんが……。  
えー、感想などあればお願いしますm(´|´)m

第32話 臨海学校5 試される機体(前書き)

これは原作と違い、東メインではなく、竜牙メインの話です。

第32話 臨海学校5 試される機体

Side(竜牙)

臨海学校二日目。

「ようやく全員集まったか。                   おい、遅刻者」

「は、はいっ」

珍しくラウラが寝坊をしたようだ。

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみる」

「は、はい。ISのコアはそれぞれ相互位置情報交換のため

」

俺の隣……腕にはフェイトがくっついて離れない。おかげで作業がやりにくい。   チェックをしているだけなんだが、正直やりづらい。   周りの視線もあるからだ。

「                   現在も進化の途中であり、全容は掴めていないとのことです」

「さすがに優秀だな。                   遅刻の件はこれで許してやるっ」

胸をなでおろすラウラ。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行う

ように。 専用機持ちは専用パーツのテストだ。 全員、迅速に行え」

俺は姉貴のラインフェース、フェイトのバルディッシュに試すものがあるためそれをやるつもりだ。

「ああ、篠ノ之。 お前はちょっとこっちに来て」

「はい」

「お前には今日から専用」

「ちーちゃ~~~~~ん!!!!」

この声は！

ずどどどど……！ と砂煙を上げながら走ってくる。

「……束」

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめ ぶへっ」

飛び掛った束を片手で掴む千冬。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

よくもまあ簡単に抜け出せるものだな。

「とっつー!」

俺のほうに飛んでくる。

「りゅーくん! 私と愛を育もう!」

「黙れ束。そして失せろ」

俺は飛んできた束を作業を終わらせて空いた右手で掴み、そのまま投げる。飛ばした方向には崖がある。

「ったく……。本当にぶん殴ってやろうかな……」

俺は本気で考える。

で、崖に激突しなかった(激突すればよかったのに)束は次に箒に近づいた。

「やあ!」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。

おっきくなつたね、箒ちゃん。特におっぱいが」

がんっ!

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ……。しかも日本刀の鞘で叩いた!

ひどい！ 篝ちゃんひどい！」

なんで刀を持っているんだよ……。

「え、えつと、この合宿では関係者以外」

「んん？ 珍妙奇天烈なことを言うね。 ISの関係者と言つなら、一番はこの私をおいて他にいないよ」

「えつ、あつ、はいつ。 そ、そうですね……」

山田先生瞬殺。 束に何か言うだけ無駄だ。

「おい束。 自己紹介くらいしろ。 うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなあ。 私が天才でりゅーくんお嫁さんの束さんだよ、はろー。 終わり」

ブチッ！

「……束え」

「なにかなりゅーくん？」

「ホント黙れ！！ カメックス！ ハイドロカノン……！！」

俺はカメックスを呼び出しハイドロカノンをぶちかまして海に消えた。 コイツに対しては躊躇いはない。

「」「」



他の奴らは全員唾然としている。

「……そら一年、手が止まっているぞ。 今のは見なかったことにしてテストを続ける」

「それはひどいなあ……」

「」「復活早っ！」「」

ハイドロカノンを受けて海に沈んだはずだぞ？ コイツはやはり化け物だ。

「ひどいなあ、りゅうくん。 私と愛をはぐ」もう一発逝くか？

今度は全力で「ごめんなさい。 そして字が違っよ？」

「間違ってない。 本当に逝けばいいのに……」

「ちーちゃん、リユークンが虐める」

「それがお前の運命だ。 諦めて受け入れろ」

俺と千冬の攻めで束は跪く。

「二人がひどいよお……」

「それで、頼んでおいたものは……？」

筈が尋ねると束は復活した。 にしても無駄に復活早いな。

「うつつふつぶ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

ズドーンッ！

空から金属の塊が降ってきた。

「じゃじゃーん！ これぞ篝ちゃん専用機こと『紅椿』！ 私が作った現行ISの全スペックを上回る束さんお手製ISだよ！」

俺が作ったISを含めれた全ISの順位をつけると第八位か？

「さあ！ 篝ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！ 私が補佐するからすぐ終わるよん」

無駄話をしながらも手は動き続き、数秒単位で切り替わる画面にも全部目を通していた。

「さて、姉貴、フェイト、束は無視してこっちはこっちでやるぞ」

「了解」

「あ、うん」

「じゃ、リインフォースとバルディッシュを起動して」

姉貴とフェイトは正常に起動した。

「じゃ、始めるか」

「で、何をやるん？」

「姉貴はこれ、フェイトはこれを持って」

俺が渡したのはI.S.のコアだ。

「それを自分の武器で衝撃を与えて」

「「え？」」

「だから早い話、それをシュベルトクロイツとバルディッシュで叩いて」

姉貴とフェイトは渡したコアを手に持つ武器で思いっきり叩いた。

そして、眩い光が迸った。

「はい完成つと」

俺の目の前にはシルエットは同じだが、色の变化した姉貴とフェイトがいる。

姉貴はあまり変化が無く、茶髪が薄くなり、クリーム色の髪になり、目の色も通常時よりも色が薄くなっている。

フェイトの変化は大きかった。髪の毛は金髪から姉貴と同じくクリーム色になり、目の色が赤から金色へと変わった。そして、黒を基調にした装甲は青を基調にした装甲に変化していた。

「え？ 今の光は何？」

「あれ？ 髪の色が変わったよね？」

「俺たちに注目しないでテストを再開すること」

さっきの光で注目を集めたようだ。俺は適当に注意しておく。

「竜牙、これはなんや？」

「それは専用のパッケージ『オートクチュール』みたいな奴だ」

「これの効果は？」

「性能の上昇、制御の補佐などのサポート機能がある。精密射撃の精度が上がったりする」

「へえ」

「今からちゃんと起動してるか確認するからしばらく待っていてくれ」

「了解」

俺はリインフォースとバルディッシュを同時にチェックする。その速度は束以上だ。

で、箒たちはと言うと、『紅椿』の試運転をしていた。箒はミサイル16発をすべて撃ち落したりしていた。さすがは束が作った機体だな。

俺は試運転の様子を見ながらもペースを落とすことなく作業を続ける。

「一応は大丈夫だ。正常に機能している。後は実際に動かしてデータを取る」

「わかった」

「あ、今のところは解除していいから」

姉貴とフェイトはISを解除する。すると、姉貴とフェイトの近くに浮遊する小さな人影があった。

「……竜牙、これは？」

「それね。それは「たつ、た、大変です！ お、おお、織斑先生  
っ！」……？」

いつも以上に慌てた様子の山田先生。

「どうした？」

「こ、こっ、これをつ！」

渡された小型端末の、その画面を見て千冬表情が曇った。

「解く命令レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていた」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは？」

「ひ、一人欠席していますが、それ以外は」

人の目を気にしてか手話でやり取りを始めた。

「そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」

「了解した。 全員、注目！」

山田先生が走り去ったあとに、千冬が声を上げた。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。 今日のス  
ト稼動は中止。 各班、ISを片付けて旅館に戻れ。 連絡がある  
まで各自室内待機すること。 以上だ」

「え………？」

「ちゅ、中止？ なんで？ 特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

一気に騒がしくなる女子たち。

「とつとと戻れ！ 以後、許可なく室外に出たものは我々で身柄を  
拘束する！ いいな！！」

「……はっ、はい！！」

「専用機持ちは全員集合しろ！ 織斑、オルコット、ボーデヴィッ  
ヒ、凰、八神兄妹！ それと、篠ノ之、フェイトも来い」

「はい！」

やけに気合の入った声で返事したのは筈だった。

(何も起こらなければいいのだが……)

S i d e へ 竜 牙 へ o u t

第32話 臨海学校5 試される機体（後書き）

ユニゾンデバイスをIS化しました。

フェイトのユニゾンモードはこれでいいのだろうか。

思いつきで書いたのでそれで似合っているかどうか不明です。

なのは、千冬さんにもユニゾンさせる予定なので、意見があれば是非お願いします。



第33話 臨海学校6 作戦会議(前書き)

ついに一夏たちにはねます。

### 第33話 臨海学校6 作戦会議

Side(竜牙)

「では、現状を説明する」

専用機持ちと教師人が集められていた。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『シルハリオ・ユスベル銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた」

一夏以外は真剣な眼差しになっている。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかつた。時間にして50分後、学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなつた」

なんか厄介な流れになつたな。

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よつて、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらつ」

千冬は俺の予想を裏切らなかつた

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

データが表示される。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だね。しかも、スベック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴアイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速2450キロを越えるとある。アプローチは一回が限度だろう」

実際は無理ではない。テレポートがあるしね。

「一回きりのチャンス……ということやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に、全員が一夏に向く。

「え……？」

「一夏、あなたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんね。ただ、問題は」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！ お、俺が行くのか!？」

「「「当然「「「」」」」

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟ないなら、無理強いはしない」

「やります。俺が、やってみせます」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

俺のテレポルト、及びデオキシススピードフォームが最速なんだけどな。

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「20時間です」

「ふむ……。それならば適任」

「待った待った。その作戦はちょっと待ったなんだよ！」

出てきたのは束。天井から首が逆さに生えていた。

「……山田先生、室外の強制退去を」

「えっ！？ は、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」

「とっつ」

空中で一回転して着地。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「……出て行け」

「聞いて聞いて！ ここは断・然！ 紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

「紅椿のスペックデータを見てみて！ パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！」

織斑先生を囲むようにディスプレイが現れる。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいと。ホラ！ これですピードはばっちり！」

展開装甲ねえ。俺が作ったISに似たようなのが積ませた機体がある。

「説明しましよ〜そうしましよ〜。展開装甲というのはだね、この天才束さんが作った第四世代型ISの装備なんだよー」

ソウデスネー。

「はい、ここで心優しい束さんの解説開始〜。いっくんのためにね。へへん、嬉しいかい？ まず、第一世代。これは『ISの完成』を目標とした機体だね。次が、『後付け武装による装備の多様化』。これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』空間圧作用兵器にBT兵器、あとはAICとか色々だね。……で、第四世代というのが『パッケージ換装を必要としない万能機』という、現在絶賛机上の空論中のもの。はい、いっくん理解できました？ 先生は優秀な子が大好きです」

「は、はあ……。え、いや、えーと……？」

「ちつちつちつ。 東さんはそんじょそこらの天才じゃないんだよ。これくらいは三時のおやつ前なのさ！」

なんか中途半端だな。

「具体的には白式の《雪平式型》に使用されてます。 試しに私が突っ込んだ〜」

「「「え!?!」」」

「それで、うまくいったのでなんとなんと紅椿は全身アーマーを展開装甲にしてあります。 システム最大稼動時にはスペックデータはさらに倍プッシュだ」

「ちよつ、ちよつと、ちよつと待ってください。 え? 全身? 全身が、雪平式型と同じ? それって……」

「うん、無茶苦茶強いね。 一言で言うと最強だね」

俺が最強だね。

「さらに紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。 リアルタイム・マルチロール・アクトレス これぞ第四世代型の目標である即時万能対応機つてやつだね。 にはは、私が早くも作っちゃったよ。 ぶいぶい」

「た、東さん」

「ん? なんだい? いっくん」

「兄貴のIS『エンペラー神帝』が第七世代型ISって本当なんですか？」

「……………えっ！？」「……………」

あの時間こえていたのか……。

「一夏、それは本当だ」

「竜牙……言つてよかつたの？」

「仕方がない。あの時に聞こえてたんだろ？」

「あ、ああ」

「俺のISは第七世代だ。ちなみに、姉貴、千冬、フェイト、シヤルが持つISは俺お手製の第五世代だ」

「……………えっ！？」「……………」

「で、気になってた奴もいたんじゃないかねえのか？　そこに浮いてるちつこい人間が何なのか」

姉貴とフェイトの隣に小さい人が浮いている。

「この際教えてやるよ。これはユニゾン型ISだ」

「ユニゾン型IS………？」

「これはIS同士をユニゾンさせて、射撃精度、スペック上昇などを促す。この二体は姉貴の『リインフォース』、フェイトの『バ



ルディツシユ』の専用にしてある。　いわばオートクチュールみたいな奴だ。　質問は？」

「兄貴はISを作れるのか？」

「ああ。　ゼロから作れる」

「つまり、コアも作れると？」

「それはイエスだな。　正確には少しだけ違いがあるけどな。　まあ、この違いについては秘密だ。　他には？」

「では、神帝はいつから持っていたのですか？」

「コアから言うくと七年前からだ。　八歳のときから作り始めていたな」

「八歳!？」

「まさかアンタ、学校に通いながら作ってたって言うの!？」

「そうだ。　俺は八歳から作り始め、完成したのが去年だ」

「その間に第五世代型のIS……私の持つてるバルディツシユもそうだけど、それを三機作り上げていたよ」

「つまり、ここに入学する前からISを四機も完成させていたのですか？」

「そういうことだ。　今現在俺がコアから作った第五世代は五機。

形になっていたISを第五世代に改造したのが一機。データを基に作られた機体が一機の計七機、俺は作った」

「ちなみに、その七機のうちの五機がここにあるよ」

俺たちの発言に、一夏、篤、セシリア、鈴、ラウラ、それに加えて山田先生までもが啞然としていた。

「あっさりと言ったけど、公にはしたくないんでな。黙っておけよ。最悪屍を作ることになるから」

「簡単に言うとりゅうくんは私以上の天才だよ。『神の子』の名は伊達じゃないってこと」

まあ、俺の父さんと母さんも天才だったんだよな。七年前から神帝の初期設定を考えていたんだから。

「それにしてもアレだね。海で暴走っていうと、十年前の白騎士事件を思い出すねー」

無理やり話を逸らした気がする。

「しかし、それにしてもウフフフ。白騎士って誰だったんだろうねー？ ね？ ね、ちーちゃん？」

「知るか」

「うむん。私の予想ではバスター」

「すっ。

情報端末アタック。

「ひ、ひどい、ちーちゃん。 東さんの脳は左右に割れたよ!？」

「そうか、よかったなあ。 これからは左右で交代に考えことができるぞ」

「おお! そつかあ! ちーちゃん、頭いい!」

その前に普通は死ぬよな?  
つてか普通に考えて白騎士つて千冬だよな。

「話を戻すぞ。 …… 東、紅椿の調整にはどれくらい時間がかかる?」

「お、織斑先生!？」

声を上げたのはセシリアだ。 唯一高機動パッケージを持っていることから、作戦に参加できるものだと思っていたらしい。

「わ、わたくしとブルー・ティアーズならば必ず成功して見せますわ!」

「そのパッケージは量子変換してあるのか？」

「そ、それは……まだですが……」

「ちなみに紅椿の調整時間は7分あれば余裕だね」

「よし。 では本作戦では織斑・篠ノ之・八神竜牙の三名による目

標の追撃及び撃墜を目的とする。 作戦開始は30分後。 各員、  
ただちに準備にかかれ」

やっぱり俺も作戦に参加しますよね」。

「お、織斑先生、た、大変です!!」

「どうした？」

「このシステムが何者かによって乗っ取られました!」

「何!?!」

…… 一体誰が？

S i d e 〱 竜 牙 〱 o u t

第33話 臨海学校6 作戦会議（後書き）

感想などがあればお願いしますm（）（）m

第34話 臨海学校7 殲滅作戦

Side 竜牙

「このシステムが何者かによって乗っ取られました！」

「何!?!」

『初めまして、IS学園の諸君。そして八神はやて、久しぶりだね』

モニターに現れたのは紫の髪の男。容姿はいい方だ。

「スカリエッティ、何の用や!?!」

姉貴が少し怒っている。

「スカリエッティ……あの円筒形の機械に書いてあった名前と同じだな」

千冬は円筒形の機械……クラス対抗戦で姉貴が落としたあれのことか？

「姉貴、こいつを知っているのか？」

『私はジェイル・スカリエッティ。ナンバーズとガジェットの開発者だ』

「ナンバーズの開発者だと? あいつらは人だろ?」

「ナンバースは人間に機械を組み込んだサイボーグ。私は『戦闘  
機人』と呼んでいる」

「……外道だな」

「外道で結構。私は目的のためには手段は選ばないからね」

コイツは何が目的だ？ 神帝を奪うためだけにわざわざシステムを  
クラックしてくるなんて考えられな。他に別の目的があるはずだ。

「最後に私の目的は八神竜牙。君だ。君の両親の残したISも  
そうだが、君自身も狙っていると言っただけ言っておこう。私を愉しま  
せてくれよ」

そういつてモニターは元に戻った。

「織斑先生！ 四方から大量の機械反応！ すべてこちらへと向か  
つています！ 10分ほどでここまで辿り着く速度です！」

相当距離が離れている。

「何？」

「距離は離れていますが数はさらに上昇しています！」

「千冬さん、私が処理します」

「はやて、やれるのか？」

「はい。リインフォースは長距離砲撃ができますし、殲滅・制圧は得意分野です」

「姉貴、ツヴァイを使うのか？」

「そのつもりや。竜牙が作ったものやしな」

「織斑先生。俺は姉貴に付く。ツヴァイに何か問題がある可能性があるからだ。福音は一夏と箒に任せる。一夏にはゼクロムの力を貸している。大丈夫だろう」

「兄貴、まだ……」

「信じる」

「へ……？」

「自分と白式、ゼクロムを信じる。俺はお前ならできると信じている」

「……わかった。やってやる！」

「福音の撃墜は織斑・篠ノ之の両名に変更。作戦開始は20分後に変更。ここに接近する物体の殲滅を八神はやて及び補佐に八神竜牙の両名に任せる。八神竜牙は殲滅終了後、福音撃墜に向かつてもらう。各員、迅速に準備を行え」

忙しいな。

「一夏、白式を貸せ。チェックをする。お前はセシリアとかか



ら高速戦闘について教えてもらってこい」

「わかった」

白式の調整・確認を始める。

「……システムに異常なし。 神帝との接続リンクも正常」

白式がゼクロムフォルムなれるのは白式と神帝に特殊なりんくシステムを積ませたおかげである。

一夏はゼクロムフォルムで無茶をするたびにシステムを損傷させたから困る。

それから数分確認しておいた。

「ゼクロム、一夏と筈を頼むぞ」

『ああ。 任せろ』

「サーナイト、一夏にこれを渡してきてくれ」

サーナイトは肯いて白式を受け取り、レポートをした。

俺は部屋を出て外に出る。 姉貴は既に砲撃を放っている。 姉貴

は俺に気づいたようだ。

「竜牙、行くで」

「ああ」

姉貴は砲撃を中断した。

「行くで、リイン！」

「はいですー！」

「「ユニゾン・イン！！」」

ユニゾンした姉貴は俺の指示を待つ。

「正常に起動している。 姉貴、続けてくれ！」

「了解や！」

姉貴は特殊武装『夜天の書』を展開し、再び詠唱を始める。

「来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ。」

「フリースヴェルグ！！！」

魔方阵から発射される砲撃。

俺はリーダーを最大まで広げて確認する。

途轍もない数の反応がある。 その一部が消滅した。

「どうだ？ 姉貴。 ユニゾンの力は」

「凄いとしか言いようが無いわ……。 自動で狙ってくれるし、それなのに砲撃のブレがほとんど無い。 砲撃の出力も上がってる」

「そりゃどうも。 数はまだまだいる。 気を抜かないように」

「おう！」

次々に放たれる砲撃。 消える反応。 増える反応。

「……………これって底なし？」

「……………さあ」

既に十分は撃っている。 それでもまだ反応が増えている。 予想以上の数に俺と姉貴は驚いている。そして、そろそろ一夏たちの福音撃墜作戦が開始する。俺は間に合いそうに無い。

「……………使いたくなかったんだよなあ……………衛星で監視されてるから、絶対に面倒くさいことになるよなあ……………」

さすがにこれ以上姉貴一人に任せるのはキツイだろう。 エネルギー切れがそろそろ起こるはずだ。

十分以上撃ち続けているため、シールドエネルギーからも砲撃用エネルギーとして使われるようになる。

ターゲットまで距離がありすぎるから、直接潰しにかかれない。

テレポートを使えばいいが、神帝のエネルギーを消費し過ぎてしまう。それが理由で俺がISに乗って殲滅にはかかれない。

そうになると手は一つしかない。 エネルギーのかからないポケモンに殲滅に行かせることだ。 だが、それだと衛星の監視にかかる（IS学園ではポケモンに対してジャミングをかけているため問題ない）。 ジャミングは神帝から放っているので、距離がありすぎると効果が無くなる。 そしてターゲットはジャミングの効果範囲外。 その所の為で余計に国際IS委員会からの声が五月蠅くなる

だろう。

「腹括るか……」

最悪の最終手段として世界の上役たちを脅迫すればいい。

「姉貴、俺もやる」

「助かるわ」

俺は一度目を閉じ、深呼吸をする。そして目を開ける。

「サンダー・ファイヤー・フリーザー！ 出番だ！」

三鳥を呼び出す。指示を出し終わると同時に飛んで行った。

「……やってやるよ。終わらせてやる……」

Side～竜牙～out

第34話 臨海学校7 殲滅作戦（後書き）

スカリエツティ登場です。

戦闘機人ってサイボーグって感じでいいのかな？

意見などお願いしますm（| |）m

第35話 臨海学校8 落ちし白・黒

S i d e 一夏

時刻は十一時半。

砂浜では俺と箒が並んで立っている。頭上からはさつきから止むことなく砲撃が続けられている。少し前に名前の知らないポケモンが飛んでいった。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

全身がISアーマーが構成され、同時にPICによる浮遊感、パワーアシストによる力の充実感とで全身の感覚が変化した。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

（本当に大丈夫なのか……？）

箒はさつきから浮かれている気がして仕方がない。

『織斑、篠ノ之、聞こえるか？』

ISのオープン・チャンネルから千冬姉の声が聞こえる。

『今回の作戦の要は一撃必殺だ。』コンアフローチ・コンダウン 短時間での決着を心がける』

「了解」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

『そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めてからの実戦経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が出るとも限らない』

「わかりました。できる範囲で支援をします」

やはり筭の口調はどこか喜色に弾んでいる。

『織斑』

「は、はい」

今度はプライベート・チャンネルで千冬姉の声が届く。

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態では何かをし損じるやもしれん。八神が援護にいけるかも危うい。いざというときはお前がサポートしてやれ』

「わかりました。ちゃんと意識しておきます」

『頼むぞ』

オープン・チャンネルに替わり、号令をかけた。

「では、はじめ！」

作戦、開始。

篤は俺を乗せたまま、一気に上空300メートルまで飛翔した。もの凄いスピードで、俺という荷物を載せた状態で、ものの数秒で目標高度500メートルに達した。

「暫時衛星リンク確立……情報照合完了。 目標の現在位置を確認。

一夏、一気に行くぞ！」

「お、おう！」

篤はさらに加速させる。 脚部及び背部装甲が開き、そこからエネルギーを噴出させる。

（これが《雪片式型》と同じ展開装甲 その完成型か）

束さん曰く、紅椿の展開装甲は攻撃・防御・機動のすべてに即時対応ができるらしい。 しかも、ISアーマーのほぼ全てがこの展開装甲タイプらしい。

（それだけのエネルギーを一体どこから ）

「見えたぞ、一夏！」

「……！」



『銀の福音』はその名にふさわしく全身が銀色だ。何よりも異質なのが、頭部から生えた一对の翼だ。本体同様銀色に輝くそれは、資料によると大型スラスタと広域射撃武器を融合させた新型システムだそうだ。

「加速するぞ！ 目標に接触するのは十秒後だ。一夏、集中しろ！」

「ああ！」

福音との距離はぐんぐんと縮まる。

五、六、七、八、九……十！

「うおおおっ！」

零落白夜と瞬時加速の同時使用。一気に間合いを詰める。

(行ける ……！！)

光の刃が福音に触れる。その瞬間。

「なっ!?!」

福音は、なんと最高速度のままこちらに反転、後退の姿となって身構えた。

(一度体勢を立て直し いや、このまま押し切る！)

どちらにしるこの間合いだ。引くには遅すぎる。それなら相手

の反撃が来る前にケリをつけたほうがいい。

しかし

「敵機確認。

迎撃モードへ移行。

《シルバー・ベル銀の鐘》、稼動開始」

「!?!」

オープン・チャンネルから聞こえたのは機械音声だった。

嫌な予感がする。

ぐりん、と福音がいきなり体を一回転させ、零落白夜の刃を僅か数ミリの精度で避ける。

「くっ……!! あの翼が急加速をしているのか!?!」

『一夏、俺の力を使え!』

「ああ! 箒、援護を頼む!」

「任せろ!」

俺は箒に背中を預け、福音から離れる。

「行くぞ、ゼクロム!」

『おう!』

白式の白いボディが漆黒のボディになる。

ゼクロムフォーム

又の名を『黒式』<sup>こくしき</sup>。兄貴から授けられた力。理想を求める力だ。俺は再び福音に接近し斬りかかる。

「くっ！ このっ……っ！」

しかし、ひらりと紙一重で回避されてしまう。だが、ゼクロムの方で《雪片式型》に纏わる雷までは回避できてはならず、福音に僅かだがダメージを与える。だが、このままではジリ貧だ。零落白夜の残り時間もあることから、大振りになってしまう。そして、その隙を見逃す福音ではなかった。

「……！」

銀色の翼。スラスターでもあるそのの、装甲の一部がまるで翼を広げるかのように開く。

（しまった！ こいつは 砲口だ）

一斉に開いた砲口を俺に向かわせるため、翼を前に迫り出す福音。次の瞬間、幾重もの光の弾丸が撃ち出された。

「ヤバイッ!？」

その弾丸は、高密度に圧縮されたエネルギーで、羽のような形をしている。それがISAアーマーに突き刺さった瞬間に爆ぜた。そして問題は

（なんて連射速度だよ……っ！）

狙いの精度はそれほど高いわけではないが、あの爆発弾の所為で僅かに触れるだけでも危険だ。

弾丸を避けきれず、被弾数が増えつつあるが、突如俺の周りに光でできた壁ができた。それは俺を守るかの如く、俺を包み込み、爆発弾のダメージがかなり抑えられていた。

「助かった、ゼクロム！」

『思う存分にやれ。 竜牙の命とお前の求める理想のため、全力でサポートする』

「助かる！」

本当に心強い味方だ！

「箒、左右から同時に攻めるぞ。 左は頼んだ！」

「了解した！」

連射の手を休めない福音へと、二面攻撃を仕掛ける。

けれど、俺の攻撃はなかなか当たらない。ゼクロムの雷で僅かだが与えてはいるが、本命の攻撃はことごとく回避されている。

「一夏！ 私が動きを止める！！」

「わかった！」

箒は二刀流で突撃と斬撃を交互に繰り返す。腕部展開装甲が開き、そこから発生したエネルギー刃が攻撃に合わせて自動で射出、福音を狙う。

(こっちの機体も化け物だな……！)

さらに筈は紅椿の機動力と展開装甲による自在の方向転換、急加速を使って福音との間合いを詰めていく。

「はあああっ！！」

いける！

そう思つて刀を握り締める俺だったが、そこに福音の前面反撃が待っていた。

「La………」

甲高いマシンボイス。ウイングスラスタはその砲門すべてを開いた。その数、三六。しかも全方位に向けての一斉射撃。

「やるなっ……！　だが、押し切る！！」

筈が光弾の雨を紙一重でかわし、迫撃する。　　隙が、できた。

「！！」

だが俺は福音とは真逆の、直下海面へと全速力で向かった。

「一夏！？」

「うおおおっ！！！！」

瞬時加速と零落白夜を最大出力で行い、一発の光弾に追いついた俺はそれをかき消す。

「何をしている！？　せつかくのチャンスに　」

「船がいるんだ！　海上は先生たちが封鎖したはずなのに　ああくそつ、密漁船か！」

だからといって見殺しにはできない。

キユウウウン……。

《雪片式型》の光の刃が消え、展開装甲が閉じる。エネルギー切れだ。最大にして唯一のチャンスを失い、作戦の要もたつた今なくした。せめてもの希望はゼクロムの力のみ。召還はできないから、俺の技量が完全にものを言う状況となった。

「馬鹿者！　犯罪者などがばって……。　そんな奴らは　！」

「箒……！」

「ッ　！？　」

「箒、そんな　そんな寂しいことは言うな。　言うなよ。　力を手にしたら、弱いやつのが見えなくなるなんて……。　どうしたんだよ、箒。　らしくない。　全然らしくないぜ」

「わ、私、は……」

明らかな動揺をその顔に浮かべ、それを隠すかのように手で覆う。

その時に落した刀が空中で光の粒子へと消えたのを見て、俺はぎくりとした。

(今のは、具現維持限界だ……！　まずい　……！)

具現維持限界　　つまりエネルギー切れということだ。そして今は実戦だ。

「箒いいっ！！」

俺は一直線に箒へと向かう。最後のエネルギーを使っただけの瞬時加速。

(頼む！　間に合ってくれ！！)

視線の先では福音が再び一斉射撃モードへと入っていた。しかも今度は箒に標準が絞られている。

(頼む！　頼む、黒式！　頼むっ！！)

スローモーションの世界で俺は、光弾が放たれるのを確認し、福音と箒の間に割って入った。

「ゼクロム、“まもる”だ！！」

箒をかばい爆発光弾が一斉に降り注ぐ。ゼクロムの力を借りて“まもる”で光弾を防ぐが、既にエネルギーは尽きかけている。さすがのゼクロムでも力の媒介が少なすぎた。“まもる”の障壁にはひびが入っている。が、何とか耐え切った。

(助かった。 ありがとうゼクロム、白式)

『いや、まだまだ!!!』

次の瞬間、どこかから飛んできた砲撃が、ひびの入っていた障壁を破って俺に直撃した。

「ぐあああつ!!!」

突然の衝撃でみしみしと骨があげる軋みが聞こえる。 同様に悲鳴をあげる筋肉、アーマーが破壊され、熱波で肌が焼けていく。

「一夏っ、一夏っ、一夏あつ!!!」

「一夏!!!」

「う……あ………」

海へと真っ逆さまに落ちる。 ちょうど兄貴が来たが、俺は何が起こったか理解できずに気を失った。

(ゴメン……兄貴……)

Side〜一夏〜out





第36話 臨海学校9 再戦前の休息（前書き）

スランプ気味です。

いつも以上に文がかけない……。

第36話 臨海学校9 再戦前の休息

S i d e 〱 竜牙

一夏が落とされた。俺はガジェット殲滅後、全速力で飛んできたが、間に合わなかった。

俺は一夏を回収して辺りを見渡す。

「テメエはクアットロ!」

「あらあら、遅れて登場ですか? ヒーロー気取りですね」

「黙れ! あれを撃つたのは誰だ!? 貴様ではないことぐらいわかってる!」

「さすが、というところですね。ダイエチちゃん、もう一発お願いね」

今の俺は落とされた一夏とISを解除された筈を抱え、ろくに反撃もできない状況だ。正直、これでは戦えない。

高熱源確認。 危険!

ISのセンサーから発せられるアラーム。俺は回避する。あの砲撃を見るだけでわかる。姉貴のリインフォース程ではないが、かなりの高威力砲撃だ。

「へえ……やるじゃねえか」

砲撃が飛んできた方向に意識を向けると、ぽつんとある岩場に茶髪のロングヘアの少女が大砲を担いでいた。

「あいつが一夏をやったのは……」

俺はナンバーズと思しき少女の顔をしっかりと記憶した。

「クアットロ、悪いが今は引かせてもらっせ」

「行かせるとお思いですか？ 福音！」

クアットロの後ろで待機していた福音が俺に向かって飛んでくる。

「じゃあな。次は落とす」

俺はテレポートで戻った。

「一夏が落とされた。急いで治療を」

「は、はい！」

俺は一夏を渡し、箒をその場に置く。

「一度休憩してからもう一度出る」

「わかった。だが、福音の位置は？」

「そのあたりのことは大丈夫だ」

クラッキングを仕掛けるからな。

「わかった。では、休憩後、再び福音に接触してもらう。準備  
をしておけ」

「了解」

許可も出たところで、俺は気になっていたことがある。

「姉貴」

「竜牙か。どうしたん？」

「姉貴は、あいつ……ジエイル・スカリエッティを知っているんだ  
よな？」

「……ええ」

「あいつと姉貴に何があった？ あのときの姉貴、怒ってた」

「……いつか言わんとあかんと思ってたけど、ここで言うことにな  
るとはね」

姉貴の雰囲気がいっつもと違い真剣なものとなる。

……何があった？ 姉貴は何を知っている？

「あいつは……スカリエッティは……三年前、私たちを襲った奴や」

「襲った!？」

「ああ」

あいつが父さんたちを襲ったって言うのか？

「あいつは三年前、父さんたちと一緒に過ごしてた時に突然ガジェットの大群を引き連れて襲撃してきたんや」

ガジェットってあの水色の円筒形の機械のことか。

「その時、私は父さんたちに助けられた。この『リインフォース』を私に渡して、自らを囮にして、私を助けてくれたんや……」

「……父さんと母さんは？」

「わからん……。私はリインフォースを受け取ってすぐに逃げ出したんや。ゴメンな……」

「なんで姉貴が謝るんだよ……」

あいつが父さんたちの鍵を握っている。あいつから訊き出せばいいだけだ。

「父さんたちはあいつが知っている。なら、あいつから訊き出せばいい」

「竜……牙？」

「姉貴はここを守ってくれ。ナンバーズとかが攻めてくるかもしれないから」

俺はそのまま立ち去る。姉貴が何か言いたそうだったけど、無視

して立ち去る。

覚悟しろよ……スカリエツティ……！

S i d e 〱 竜牙 〱 o u t

S i d e 〱 はやて 〱

竜牙は行ってしまった。

「竜牙……」

このままだと竜牙も自分から離れていってしまうのではないかと感じた。 けど何も言えなかった。 私は自分が不甲斐なくて仕様がなかった。

「あれ？ はやて、どうしたの？」

「あ、フェイトちゃん……」

「元気ないね。 何かあった？ 私でよかったら話くらいなら聞こうか？」

「ありがとうフェイトちゃん。 でもこれは、私の問題だから」

「……はやて、もしかして竜牙のこと？」

「！？」

私の心が読めるんか!?

「やっぱり。ただ、これだけは言わせて」

「？」

「一体フェイトちゃんは何を言いつつもりなん？」

「竜牙は、大切な人のためになら、自らを犠牲にしようとする」

「……………」

「けど、その人が悲しむようなことは絶対にしない」

「！　ありがとうフェイトちゃん。　おかげでスッキリしたわ」

「そう？　それならよかった」

「さすがは竜牙の彼女やね。　姉よりも竜牙のことわかってる」

七年も離別していたんだから当たり前かな。

「はやくて、七年も離れてたから当たり前とか考えなかった？」

「な、なんでわかったんや!？」

「はやくては七年も離れていたことを負い目と感じてるからね。　そう思ったただだよ」

「なんか見透かされてるなあ」



「はやてはわかりやすいんだよ」

「なんか悔しいなあ……………」

「えーっと、なんかゴメンね」

「うー。 フェイトちゃんが大人になってるう……………」

「あはは……………」

七年でこんなにも変わるなんて……………。  
昔はおろおろしてばっかだったのに。 懐かしいな。

「うじうじなんかしてられないな。 私も私で頑張らなきゃね」

Side～はやて～out

第36話 臨海学校9 再戦前の休息（後書き）

終わりが無理やりな気がします……。

第37話 臨海学校10 再出撃(前書き)

臨海学校の話だけで10話を超えましたね(笑)。

……笑い事じゃないですかね？

第37話 臨海学校10 再出撃

S i d e 〱 竜牙

今の時刻は3時。

休憩という名のメンテナンスを終えて、俺は出撃の準備を終えていた。

「さて、行くか」

今俺は砂浜にいる。

『今回は単独での作戦だ。しかし、本当に一人でいいのか？』

「一人でいい。いや、一人がいいんだ」

『……わかった。ナンバーズもいたのだろう。敵戦力は未知数だ。決して無理はするな』

「了解。あ、フェイトが出ようと思うから、フェイトを監視しておいてくれ。あー後、箒たちもだ」

『わかった。いい結果を待っている』

「言われずともそのつもりだ」

『では、始め！』

千冬の号令と共に一気に飛翔する。

今のフォルムは全ポケモンの中で最速を誇るデオキシス・スピードフォルムだ。

今の速度が全力でないにしろ、紅椿の最高速度の数倍だ。

ちなみに、レポートで移動しないのは、敵とすれ違わないためだ。俺は点から点の移動に対して、相手は線の移動だ。点と点の間に相手がいたら無駄な時間を取ってしまう。

時間を無駄にするのは別に構わないが、相手の数がわからないため、エネルギーを消費は望ましくない。

相手はゼクロムの力がある程度扱えるような一夏と第四世代型ISの『紅椿』を纏った筈を相手に圧勝した『銀の福音』に加えて、スカリエツテイ率いるナンバーズだ。ナンバーズの総数は12人。

さらにガジェットだ。ガジェットは大した戦力は無いだろうが、数に物を言わせればキツイ。エネルギーは大いに越したことは無い。

(見つけた)

俺の視線の先。そこにいたのは胎児のように蹲り、ナンバーズの一人、クアットロがいた。

(あの砲撃を撃った奴はどこだ?)

俺は近くの岩場を探すが見当たらない。

(戻った? いや、どこかに隠れているのか……それとも、もっと離れたところにもいるのか?)

「思ったよりもお早いこと。もっと遅くなるかと思いましたわ」

「そうかよ」

「それにしてもお一人ですか？」

「俺一人だ。お前らは俺が片付ける」

「私たちを相手にたった一人。おふざけも大概にして欲しいもの  
ですわね！」

「!？」

突如俺の周りに浮遊するガジェットの大群。

「……どういうことだ？ さっきまでは視覚にもセンサーにも反応  
しなかったのに。まさか、お前らもテレポートでも使えるのか？」

「ふふふっ　これが私のIS『シルバーカーテン幻惑の銀幕』の力ですの。あ、  
お一つ教えてあげますわ。私が言うISはあなたたちの言うIS  
とは似て非なる物ですのであしからず」

「俺たちの言うIS……『インフィニット・ストラトス』とは違う  
ということか」

「せいかりい！　詳しいことは教えませんがね」  
「うげえなコイツ。」

「そうか。なら力づくで訊くまでだ」

「簡単にことが進むとお思い？」

「なっ!?!」

さらにガジェットが増えた。

(シルバーカーテンと言ったか。 どういう能力だ? 名前に関係するのなら“隠す”ことになるだろう。 物体を隠す能力と見て間違いは無いだろう)

「まあいい。 用は全部片付ければいいだけだ」

「そう簡単にいくといいんですけど」

一々鼻に付く野郎だな。

(おそらくクアットロは戦闘に向いていない。 奴を潰すのは後でいいだろう。 問題は今は大人しいが、福音だな。 ガジェットは数が多いが大した戦闘力は無い)

そうなれば辿り着く結論は一つだ。

(福音を優先して潰す!)

福音は《銀の鐘》が厄介だ。 それを防ぐよりも回避したほうが得策だ。

アタックフォームで攻撃にも力を入れたいところだが、それだともしもの時、攻撃を受けたらやばい。 防御が紙なアタックフォームだと一気に削られる。

他のポケモンのフォームになると隙が大きくなるから、仕方ない。

このままで行くか。

「福音ちゃん　この子をやっちゃって」

『《銀の鐘》最大稼働　開始』

機械音声を発すると同時に翼から大量の光弾が発射された。

「容赦無しってか。　スピードスター」

俺は星形の光を無数に発射し、福音の放つ光弾にぶつけて相殺し、福音の放った光弾以上の数で福音に攻撃する。

「あれを避けるか。　大した機動力だなぁ……と。　こっちも容赦無いのね」

俺の周りに浮遊する大量のガジェットは俺に向けてレーザーを発射する。　数が数だけに避けるのも一苦労。　ただ、救いがあるとすれば、牽制攻撃が無く俺だけを狙ってくれるので、割と簡単に避ける。

「結構面倒だな……」

この数はさすがに面倒だ。　攻撃すべてが直線的だとはいえ、100を超える数の一斉射撃があれば一つのものに集中しきれない。

（ガジェット優先にしよう）

数を減らさなければ福音とまともに殺り合えない。　先にガジェットを潰すことにした。

スピードスターでガジェットを潰していくが、避けられたり、レーザーに相殺されたりして、なかなか数が減らない。



「多いな……」

さつきから潰しているが、数が減らない。既に軽く30は破壊しているが、数に変化が見られない。

(いや、これは……あの時と同じだ。底なしに増えているんだ)

「まさか……！」

「ようやくお気づきになったようですわね。私のシルバーカーテンは『幻影を操り、対象の知覚を騙す』こと。騙す対象は人だけでなく、レーダーなどの電子機器にも及びますのよ」

なんてふざけた能力だ。俺が見ているガジェットは本物かもしれないし偽者かもしれない。レーダーも騙されては打つ手が無い。対抗手段が無いのだ。このまま続ければジリ貧だ。

「どうです？ ドクターが作った私たち『戦闘機人』の力は」

「随分と厄介なものを作ってくれたよな。お前らの生みの親は」

大した戦力が無くてもこうした幻覚を操られたら手の出しようが

(幻影を操るのならこっちもいるじゃねえか。幻影の覇者が)

神帝起動中にポケモンを出すと神帝そのものに負担がかかるが、二体ほどなら問題は無い。

「ウォーグル、ゾロアーク！」

巨大な鷲と黒い狐。ゾロアークはウォーグルに乗り、ウォーグルは空を舞う。

「そんなの二体を出して何になることやら」

「侮るなよ。幻影の覇者の名は伊達じゃない！」

ゾロアークの目が一瞬だけ光り、その直後、ガジェットは紫の氷に包まれ、そのまま海に落ちた。

「なっ!?!」

「形勢逆転だな。お前がどんな幻影を出そうとゾロアークの幻影の前では無力だ」

「仕方がないようね。奥の手ですわ」

「奥の手……?」

突然、ISの動きが鈍くなった。

Side 〱 竜牙 〱 out

第37話 臨海学校10 再出撃(後書き)

感想などがあればお願いしますm( )m

第38話 臨海学校11 援軍の兆し

それは一夏がまだ小学校二年だったころのことだ。

放課後の教室、一夏以外のクラスメイトは掃除をサボっている。

「おーい、男女」。今日は木刀持ってないのかよ」

「……竹刀だ」

「へっへ、お前みたいな男女には武器がお似合いだよな」

「……」

「喋り方も変だもんな」

女子は答えない。

「やーいやーい、男女」

「……うっせーなあ。てめーら暇なら帰れよ。それが手伝えよ。

ああ？」

無意味な攻撃に苛立ちを覚えていた一夏は、クラスの男子に言い放つ。

「なんだよ織斑、お前コイツの味方がよ」

「へっへっ、この男女が好きなのか？」

「邪魔なんだよ、掃除の邪魔。どっか行けよ。うぜえ」

「へっ。まじめに掃除なんかしてよー、バツカじゃねーのおわっ!？」

いきなり、女子 箒は男子の胸ぐらを掴んだ。 さっきまで何を言われても手を出さなかった箒が、その言葉だけには反応した。

「まじめにすることの何がバカだ？ お前らのような輩よりははるかにマシだ」

「な、なんだよ……何ムキになってんだよ。 離せっ、離せよっ」

残りの二人はまだニヤニヤとしていた。

「あー、やっぱりそうなんだぜー。 こいつら、夫婦なんだよ。

知ってるんだぜ、俺。 お前ら朝からイチャイチャしているんだろ」

一夏が箒の道場に通うようになってから、そういわれたのは一度や二度だけではない。

「だよなー。 この間なんか、こいつリボンしてたもんな！ 男女のくせによー。 笑っちま ぶっごっ!？」

一夏が男子の一人の顔面に拳を叩き込んだ。

「笑っ? 何が面白かったって? あいつがリボンしてたらおかしいかよ。 すごい似合っただろうが。 ああ? なんとか言えよボ

ケナス」

「お、お前っ　　！！　先生に言うからな！」

「勝手に言えよクソ野郎。　その前にお前らは全員ぶん殴る」

「　お前ら、何してんだ？」

突如教室に響く男子の声。　この場にいる誰の声でもない。　声のした方へと顔を向けると教室の出入り口に佇んでいる一人の男子がいた。

「りゅ、竜牙さん！　こいつがいきなり殴ってきたんです！」

その男子　　竜牙はそう言った男子に目を向けて何かを考え始めた。

「……………てかお前、誰だ？」

竜牙はこの頃には学校で名前を知らない者はいないと言われていた。　竜牙が知らなくても相手が知っているため、このセリフはよく言っていたのだった。

「まあいいや。　で、お前は何で殴ったんだ？」

「こいつらが掃除の邪魔だったんだよ」

竜牙は一夏に近づく。　そして

「ぶいっ！？」

「……え!?」「」

一夏が殴った男子を蹴り上げた。

竜牙のこの行動に、一夏、箒、残り二人の男子は驚愕した。

「りゅ、竜牙さん……これは……一体?」

「こいつが殴った元々の原因はお前らじゃねえか。まあ、こいつは真実は言っただけだったけどな」

「それに」と言っただけでさらに続ける。

「お前らの様子見てたし」

「……な!?」「」

また驚く四人。一人は未だに悶えていた。

「だからさ、俺はこいつの味方をするぜ」

その後、あつという間に残った二人を片付けたが、騒ぎを聞きつけた先生がその場を沈めた。

馬鹿な子供の親は馬鹿と言うのは昔からの定説らしく、やれ警察だのやれ裁判だのと騒ぎ立てる馬鹿な生き物が三匹いた。

一夏と竜牙はそれを気にしなかったが、その所為で無意味に親が、姉が謝るのが許せなかった。

しかし、その馬鹿な三匹の親子はしばらく体調を崩すという摩訶不思議で奇妙なことが起こったりもした。

「……お前らは馬鹿だな」

「あん？ 何がだよ。 馬鹿じゃねえよ馬鹿」

「馬鹿はねえだろ。 馬鹿は」

「あんなことをすれば、後で面倒になると考えないのか」

あれから数日後、珍しく篤が話しかけてきた。 あのこと以来、竜牙と一夏、篤とはちよつとあつたが仲良くなった。

「ん？ ああ、あのことか。 そうだな、考えねーな。 許せねえ奴はぶん殴る」

「俺はやりたいうようにやったただけだ」

それで一度、一夏は千冬にひどくお叱りを受けたが、これは幼い頃から唯一の曲げられないことだった。

竜牙は父親には「やるならバレないようにね」と、母親からは「やるなら記憶が飛ばせるようになってからだ。 それと一撃必殺の精神で手早くやれ」と親有るまじきことを言い聞かせていた。

「大体、複数でつて言うのが気にいらねえ。 群れて困んで陰険なんざ、男のクズだ」

「塵は塵らしく地に落ちてればいいんだよ。 まあ、巧くやれなかつたけどな」

「……………」



「だから、お前も気にすんなよ。前にしてたりボン、似合ってたぞ。またしろよ」

「ふ、ふん。私は誰の指図も受けない」

「じゃあ、帰るわ。またな篠ノ之」

「んじゃ、俺も」

「だ」

「うん？」

「私の名前は箒だ。箒と呼べ」

「わかった。俺は割と、身近なやつ指図は受ける。じ

ゃあ、一夏な」

「お前らがそうするなら俺は竜牙だ。まあ、好きに呼んでくれて結構だ。よろしくな」

「こちらこそよろしくな、兄貴！」

「よろしくお願いします。竜牙さん」

「何で一夏は兄貴で箒はそんなに硬いんだ？ ま、いつか。あ、そつだ。俺は俺の味方をしてくれる奴の味方だから。それだけは言っとくよ」

季節は六月。 夏はもうそこまで来ていた。

S i d e 〱 〱

「……………」

旅館の一室。 壁の時計は四時前を指している。  
ベッドに横たわる一夏の傍らに控えている箒はうながれていた。

(私の所為だ……)

不意に思い出した思い出の中でも一夏は笑っていた。  
けれど、その笑顔は今はない。 ただ力なく横たわっているだけだ。

(私が、すっかりしないから、一夏がこんな目に ……!!)

ぎゅつとスカートを握り締める。

『作戦は継続して八神が単独で行う。 以降、状況に変化があれば  
召集する。 それまで各自現状待機しろ』

竜牙さんに助けられ、旅館に戻った私に告げられたのはその言葉だ  
った。

私は、責められないことがまた一層辛かった。

(私は……どうして、いつも……)

いつも力を手に入れるとそれに流されてしまう。  
修行をしたのも、リミッターのためだった。

(私はもう……ISには……)

バンッ！

ドアが乱暴に開く。

「あー、あー、わかりやすいわねえ」

遠慮無く入ってくる鈴。

「……………」

「あのさあ」

鈴は話しかけてくる。 私は答えない。 答えられない。

「一夏がこうなったのって、あんたのせいなんですよ？」

ISの操縦者絶対防御、その致命領域対応によって一夏は昏睡状態  
になっている。

すべてのエネルギーを防御に回すことで操縦者の命を守るこの状態  
は、同時にISの補助を深く受けた状態になる。 それゆえに、I  
Sのエネルギーが回復するまで、操縦者は目を覚ませなくなっ  
てしまっただった。

「……………」

「で、落ち込んでますってポーズ？ つぎけんじやないわよ！」

烈火のごとく怒り出す鈴は私の胸ぐらを掴んで無理やり立たせた。

「やるべきことがあるでしょうが！ 今！ 戦わなくて、どうすんのよー！」

「わ、私……は、もうISは……使わない……」

「ッ ……！」

バシンッ！

頬を打たれ、支えを失い倒れた。

「甘ったれてんじゃないわよ……。専用機持ちっつーのはね、そんな我が俣が許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは ……」

鈴は信じられないことを口にする。

「変わりに福音と戦いに行った竜牙が落とされたのに、黙ってられるって言うの？」

「！？」

竜牙さんが落とされた？ あの竜牙さんが？

それを聞いてやっと気づいた。部屋の外が騒がしくなっていることに。

「あたしも信じられないけどね、それは事実なのよ。アンタはそれでも戦えない臆病者なの？」

「どつしろと言っただ！ 敵の居場所がわからないのに！ 戦えるなら、私だって戦う！」

敵の居場所は竜牙さんと織斑先生たちしか知らない。先生がわざわざ私たちに教えることは無い。

私がそう言つと鈴はため息をついた。

「やっとやる気になったわね。……あーあ、めんどくさかった」

「な、なに？」

「場所ならわかるわ。今ラウラが」

言葉の途中でドアが開く。そこに立っていたのは、真っ黒の軍服に身を包んだラウラだった。

「出たぞ。ここから40キロ離れた沖合い上空に目標を確認した。福音とナンバーズと思しき影が衛星による目視で確認した」

「さすがドイツ特殊部隊。やるわね」

「ふん……。お前のほうはどうなんだ。準備はできているのか」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シヤルロットとセシリアの方こそどうなのよ」

「ああ、それなら」

ラウラがドアのほうへと視線をやる。

「たった今完了しましたわ」

「元から準備オツケーだよ。いつでもいける」

みんなが私のほうへと視線を向ける。

「で、あんたはどつするの?」

「私……私は……戦う……戦って、勝つ！ 今度こそ、負けはしない！」

「決まりね」

鈴は不敵に笑う。

「じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実に墜とすわ」

「ああ！」

「それは許可できん」

「「「「「!?!?」」」」」

突然の声。 声の主は織斑先生だった。

「これは私だけの意志ではない。八神の意志でもある。いくら

どこにも所属していないフェイトでも認めることはできん」

ふと見ると、複雑な表情をしたはやてさんとフェイトさんがいた。

「なら、竜牙さんは、竜牙さんはどうするんですか！」

「いくら竜牙の意志でもあなたは先生でしょ！」

「それに、竜牙さんの彼女なのですから！」

「そこまでして、教官は竜牙の意志を貫き通すのですか！」

「お兄ちゃんは一人で戦っていたのに！ 助けないなんておかしいです！」

私たち専用機持ちの言葉。

「八神の反応はロストした。だが、私は八神がまだ戦っているはずだ。そうだろう？ フェイト」

「竜牙はまだ戦っている。バルディッシュがそう言ってるからバルディッシュが言ってる？」

「八神はまだ戦っている。しかし、このままだと確実に落されてしまう」

「それならなぜ！」

「お前らが、第三世代如きが、八神の操る第七世代を苦戦させる相





「仲間であるわたくしたちがそれを救えないのはあんまりですわ！」

「はあああ……。まったく……。これでは八神に合わせる顔がないな」

「それでは……。！」

「仕方がない。お前らも付いて来い。ただし、私たちがお前らを守る保証は無い。自らのみは自分で守ることが前提だ。来るなら覚悟を決めろ」

「「「「はい！」「」「」」

今度こそ！ 今度こそ福音を墜とす！

Side ㄱ out

第38話 臨海学校11 援軍の兆し（後書き）

いろいろと無理があると思いますが、次回はリベンジの話です。  
指摘、感想などがあればお願いしますm( )m

第39話 臨海学校12 辿り着いた援軍（前書き）

あれ？ リベンジバトルに入らなかった。

第39話 臨海学校12 辿り着いた援軍

S i d e ー 夏

ざあ……。ざああん……。

(ここは……?)

俺がいるのは砂浜。だが、ここがどこで、今がいつなのかわからない。

足を進めるたびに、さく、さく、と足元の白砂が澄んだ音を立てる。俺はなぜか制服で、ズボンの裾を折り返した状態で素足のまま砂浜を歩いていた。手には、いつ脱いだのか靴がある。

「 。 」

歌声が聞こえた。

とても綺麗で、とても元気な、その歌声。その歌声が無性に気になり、歌声が聞こえる方へと足を進める。

「ラ、ラ」 ラララ 「

少女、はそこにいた。

波打ち際、僅かにつま先を濡らしながら、その子は踊るように歌い、謡うように踊る。

白い髪が輝き、揺れる。

俺は声をかけようとは思わず、近くにあった流木へと腰を下ろした。

俺はただただぼんやりと目の前の光景を眺めた。

Side〜一夏〜out

Side〜千冬〜

「見えたぞ」

視線の先には人型のポケモンと福音、ナンバーズにガジェットが見えた。竜牙さんは見当たらない。

私が纏っているISの名は『白桜』<sup>ウキハク</sup>。武器は《雪片零型》。現役時代に使っていた《雪片》の発展型《雪片式型》をさらに発展させたものだ。

かなりの速度を出せるため、第三世代組みを背負っている。私はオルコット。シャルロットは鈴。フェイトは一番重いラウラを背負っている。ちなみに、はやては後方からの砲撃で援護するため、すでに止まっている。

高熱源接近。 危険！

白桜のセンサーからの警告が発せられる。そして下方から砲撃が飛んできた。

私たちはそれを避け、砲撃の飛んできた方へ意識を向ける。

そこにいたのは茶髪の女。 大砲を担いでいる。

「クアットロたちの邪魔はさせない」

「お前一人でか？」

「デイエチ一人じゃない」

「私たち、ナンバーズだ」

見る限りの人数は五人。

「こいつらは私たちが引き受ける。 お前ら第三・四世代組は福音  
へ向かえ」

「『了解！』」

はやてが砲撃で道を開け、篠ノ之、凰、オルコット、ボーデヴィッ  
ヒは飛んでいく。

『シャルロット、ある程度潰せたらお前も援護に向かえ』

『わかりました』

プライベート・チャンネルで伝えておく。

「一応自己紹介でもしておくか。 ナンバーズ3、トーレだ」

トーレと名乗ったのは、紫の髪の女だ。

「トーレが名乗るなら私も。 ナンバーズ7、セツテです」

ピンクの髪の女。ヘッドギアをしている。

「知ってるかもしれないけど僕はナンバーズ8、オットー」

V-Tシステムのときに襲撃してきた奴らの一人だった。

「あたしはナンバーズ10のディエチ」

砲撃を撃ってきた女だ。

「私はディード。ナンバーズ12です」

カチューシャをつけた茶髪の女。

「既に四人逃がしましたが、あなたたちは逃がしません」

「貴様らはここで墮とす！」

「そう簡単にいくと思つなよ」

「邪魔をするなら容赦はしないよ」

「竜牙の仇は討たせてもらつて」

竜牙さんは死んでないがな。

「早く始めよう。こっちは急いでいるんでな」

「上等！」





今、俺はISを纏っていない。

『仕方ない、か……。なんか格好悪いな……』

『今は格好を気にしている場合ではないぞ』

『わかってるよ。デオキシス』

『それならいい』

「あらあら、お仲間の登場ですか？」

「みたいだな」

俺がデオキシスと意識の中で会話していると筈たちが到着した。

「お前ら！ 何で来た！」

「え！？ 竜牙！？」

「嘘！？ 墜とされたんじゃないの！？」

「その姿は一体！？」

「どういうことだ！？」

「話は後だ！ 来たもんは仕方がねえ！ お前らは福音を落せ！」

「「「わ、わかった！」「」」

厄介なガジェットは既に落したからな。  
ガジェットの大群とクアットロだけだ。

後は実物か幻かわからん

「本当にしぶといですわね……」

「福音は気にしなくていい分、楽になる。クアットロ」

「くっ……」

福音が箒たちに引き付けられたのでクアットロを守るのはガジェットののみ。本物はかなり潰されたのか、クアットロは苦虫を噛み潰したような顔になった。

「もう、終わらせようぜ」

S i d e へ 竜 牙 へ o u t

第40話 臨海学校13 反撃（前書き）

すみません！ 更新が遅れました！

定期的にやっつてなかったのが悪いのですが、夏休みの課題に少し追  
われていましたm( )m

第40話 臨海学校13 反撃

S i d e 〱 竜牙

「くっ……」

クアットロは徐々に追い詰められ、疲労困憊であった。

「やっぱりお前は戦闘に向いていなかったな。お前のシルバーカーテンは騙すだけで実質的なダメージは与えない。しかも、本物のガジェットの数も減ってきているだろう。あの厄介なデカブツは既に破壊した。諦めて投降しろ」

「だ、誰が投降なんてことをしますか！　そ、それに、まだ隠れているガジェットが、いるかも知れませんか？」

「本物が見えないのは本当に厄介だな」

目でもセンサーでも捉えられないとか厄介以外の何にでもない。

「あいつらに任せきりにはできんのでな、終わらせる！」

今はスピードフォルム。で自慢のスピードで一気にクアットロに接近し、“馬鹿力”で海に向かってぶん殴る。

水柱が上がり、クアットロは海に叩きつけられ、意識を失った。絶対防御は発動しているようで、海に叩きつけられてもそこまで大きなダメージは負っていないようだった。

俺は気絶しているクアットロを海から拾って、この戦闘空域内の海一帯に巨大で強大な結界を張った。

この結界を張ったのは、クアット口の逃走を防ぐためと、結界外からの侵入を防ぐためだ。  
千冬たちは結界内に入っている。

「ん？ あれは……シャルか」

俺の視界に映る純白の装甲を纏ったシャル。レシラムフォームだ。シャルも一夏に影響されてか『ラウエリテ・フレイム真実の炎熱』とか名付けていた記憶がある。

「あ、俺も福音戦に参加しなければ」

シャルの登場で動き出すことを忘れていた俺は箒たちを圧倒している福音の元へ飛ぶ。

状況は悪く、箒たちはダメージを負っていた。だが、福音のダメージは大きいようで、片翼を失っていた。福音相手によく四人でここまでダメージを与えたものだ。

「ゴメンね！ 遅くなったよ！」

「シャルロット！」

「悪い遅くなった」

「竜牙さん！」

「え？ お兄ちゃん！？」

当然の如く驚くシャル。

箒たちが俺の周りに集まり、俺は“まもる”をする。これで多少

話しても大丈夫だ。

「話は終わってからだ。お前ら、まだやれるか？」

「……当然！」「……」

「なら、お前ら五人で攻めろ。俺は後方にて援護する」

「竜牙は援護なの？ アンタが攻めれば一番手っ取り早いと思うんだけど」

「俺はこの姿だし、何よりお前らは経験積んどいた方がいいだろ。実践は貴重だからな」

こういうのは量も大切だが、質がよければもつといい。

「あー最後に一つだけ。絶対に死ぬな。わかったな」

「……はい！」「……」

「さて、もうすぐ俺の“まもる”の限界になる。思いつきり、思う存分にやれ」

同時に“まもる”の障壁が福音の攻撃により破壊された。

「行け！」

五人はそれぞれ移動し始める。箒と鈴は早速福音に飛び掛り、セシリアは後方からレーザーで射撃をしている。ラウラは砲撃をしている。シャルは呼び出したアサルトライフルで炎を纏ったレーザー

ーを撃っている。

「さて、俺もやるか」

今の状態じゃあまともに動けない。この状態は体力を使いすぎるため、デオキシスの姿でいるが、本来のデオキシスの力を十全に使えない。今の疲労状態から推測すると6割出せればいい方だ。

「“スピードスター”じゃあいつらを巻き込むか……なら、“シャドーボール”！」

俺は黒い塊を作り出して福音へと投げつける。ちなみに今はノーマルフォームだ。

“シャドーボール”を連続で投げ続ける。時々箒と鈴に当たりそうになるが、絶対に当たらない。“シャドーボール”を飛ばす位置を調節しているからだ。……あーでも、後で絶対に文句を言われそうだな……。

にしても、福音は片翼なのに異常なまでの動きしてるよな。

「箒、俺がどれだけ止めれるかわからんが、福音の動きを止める。その間に墜とせ」

「わかりました！」

「他の奴は俺が奴を止めている間、俺は無防備になる。少しだけ援護を頼む」

「……了解！」「」「」

俺はアタックフォームになり、福音のみに集中する。

「サイコキネシス」

福音が“サイコキネシス”に捕まる前に放たれた《銀の鐘》はシャルたちによって防がれた。

「行け！ 箒！」

箒が福音に両手の刀で斬りかかる。これで終わる。

「うっ！？」

突如襲ってきた疲労感。その所為で福音への集中が乱れ、一瞬弱まった“サイコキネシス”の拘束を解いた。避けられる！

「はあああああ！！！」

動き出した福音は箒の斬撃を避けようとするが、箒の方が速かった。箒の刀は福音の残った翼を奪った。そして、両翼を失った福音は重力に引かれて海へと墜ちていった。

「……悪い箒……助かった……」

疲労感が俺を襲う。だが、これで終わった。

「……………！？」

突如海面が強烈な光の珠によって吹き飛ばされた。

球状に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているかのよう  
にへこんだままで、その中心にいる福音は、青い雷を纏って自らを



抱くかのように蹲っていた。

「『セカンド・シフト第二形態移行』……！」

ISは操縦者に警鐘を鳴らす。

『キアアアアアア……！！』

獣の咆哮のような声を発し、銀の福音はラウラへと飛びかかる。

「なにっ!?!」

あまりにも速い動きに反応できず、ラウラは足を掴まれる。

そして、福音は切断された翼のあった頭部からエネルギーの翼が生えた。

「ラウラを離せえっ!」

シャルは武装を近接ブレード（ビームサーベルみたいな感じですが）に切り替えて突撃を行う。

福音は刀身から放出されるエネルギーに装甲を焼いたが、その刃は空いた方の手で受け止められて止まった。

「よせ！ 逃げろ！ こいつは」

その言葉は最後まで続かず、ラウラは眩いほどの輝きと美しさを併せ持ったエネルギーの翼に抱かれる。

「……やらせるかあ!」

俺はスピードフォームになり、“神速”で福音に急接近し、福音を殴りつける。

俺の攻撃は僅かに遅く、ラウラに多少のダメージを負わせてしまった。

「竜牙、助かったぞ」

「悪い。俺がもう少し速ければお前がダメージを負うこともなかったのに」

ドンッ！！

突然福音の胸部から、腹部から、背部から、装甲がまるで卵の殻のようにひび割れ、小型のエネルギー翼が生えてくる。それからエネルギー弾が放たれる。

「な、何ですの！？ この性能……軍用とはいえ、あまりに異常な

」

「セシリア！」

高機動による射撃を行おうとしていたセシリアに福音が迫る。瞬時加速　それも、両手両足の計四ヶ所同時着火による爆発的な加速だった。

「くっ！？」

長大な銃は接近されると弱い。距離を開けようとするセシリアだが、その砲身を真横に蹴られてしまう。

そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。

俺はテレポートでセシリアと福音の間に割って入り、俺がほとんどを受ける。

「くっ……！ 竜牙さん!？」

俺を越した砲撃がセシリアに当たる。

「よくも竜牙さんをつ！」

俺は喰らったけどまだ墜ちてないんだけどなーと思いつつ、状況解説。

俺が砲撃を喰らった直後に、箒が急加速によって接近し、続けざまに斬撃を放ち続ける。

展開装甲を局所的に用いたアクロバットで福音の攻撃を回避、それと同時に不安定な格好からの斬撃をブーストによって加速させる。

「うおおおおっ!!！」

互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘技。 徐々に出力を上げていく紅椿に、僅かに福音が押されはじめる。

(ここで世代差が出てきたか。 これなら行けるんじゃないか?)

俺は箒の怒涛の攻撃に俺は油断していた。 完全に見落としていた。

キュウウン……。

未完成の第四世代はエネルギーの燃費が激しすぎることを。

(俺としたことが……くそっ!)

「なっ！ また、エネルギー切れたと！？                   ぐあっ！」

その隙を見逃さず、福音の右腕が箒の首を捕まえる。

そして、ゆっくりとその翼が箒を包み込んでいった。

助けに行こうとする俺の体に、再び、体の硬直が襲った。

S i d e へ 竜 牙 へ o u t

第41話 臨海学校14 覚醒(前書き)

今日、ポケモン映画の『ビクティニと白き英雄 レシラム』を友達と見に行きました！

レシラムとゼクロムの戦いに鳥肌が立ちました！

夏休みの終わりごろに、『ビクティニと黒き英雄 ゼクロム』も見に行きます！

第41話 臨海学校14 覚醒

Side 一夏

ざあ、ざあん……。

さざ波の音を聞きながら、俺は飽きもせず女の子を眺めていた。その歌は、その踊りは、なぜか俺を懐かしい気持ちにさせた。

(……あれ?)

ふと気づくと少女の歌は終わっていた。

踊りもやめて、少女はじつと空を見つめている。

俺は不思議に思い、座っていた気から離れて少女の隣へと向かう。

「どうかしたのか?」

声をかけるが、少女はまだ空を見つめたまま動かない。

俺もなんとなく空を眺めると、ふと少女の声が耳に届いた。

「呼んでる……行かなきゃ」

「え?」

隣に視線を戻すと、そこに少女の姿は無かった。

(あれ?)

もう人影は見当たらない。聞こえるのは波音だけ。

「うーん……」

俺は仕方なく木のソファァーに戻ろうと体を反転する。  
しかしそこに広がっていたのは木のソファァーはなく、砂浜でもなく、  
洞窟のような暗い空間だった。  
後ろを振り向いても洞窟。 出口も無い。 さっきの砂浜が嘘のよ  
うであった。

「ここは……」

俺は辺りを見渡すが、暗く、広い空間が続いているだけ。

『お前の理想はその程度か』

「え？」

この声は……ゼクロム？

『その程度の理想なら捨ててしまえ』

どこからとも無く聞こえる声。

「ふざけるな！ 捨てれるわけが無いだろうが！」

『ならば魅せてみる。 お前の理想を！』

目の前の空間に突如広がった道。

「いいぜ！ やってやる！」

俺はその道に入った。

「ここはなんなんだ？」

道はいくつにも分かれ、あまり変化が無いように見える。

「にしても、何でゼクロムはあんなことを言ったんだ？ 力は前から貸してくれていたのに……」

そこまで呟いて、前に兄貴に言われたことを思い出した。

『この二体のドラゴンは真実と理想を求める者に力を貸す。まあ、善意を持たない者と強い理想と真実を求めない者には容赦なく牙を向けるがな』

「……俺は理想は強く求めているのか？」

だんだん弱気になってくる。そこに、再び兄貴に言われたことを思い出した。 数時間前に言われたことを。

『自分と白式、ゼクロムを信じる。俺はお前ならできると信じている』

「兄貴は俺を、白式を、ゼクロムを信じろって言ったんだ。 兄貴が俺を信じてくれたんだ！ だから！ 諦めて堪るか！」

俺は、みんなを！ 仲間を！ 守るって決めたんだ！

『それでこそ我と竜牙の認めた男だ』



「え？ ゼクロム？」

突然現れたゼクロム。

『お前に我の真の力を貸そう』

「真の……力……？」

『お前に貸していた力は援護や防御のものばかりだった。 我の使う攻撃の技は始めの一度しか貸し与えていなかった』

「言われてみれば……」

今までゼクロムフォームになったときは、初めて使った日以来は、雪片式型に雷を纏っただけで、ゼクロム自身の技を使うことはなかった。

『それは竜牙の意志であつた』

「兄貴の？」

『竜牙はお前が我の技を使ったとき、使いこなせていなかったのに気づいた。 それは我も、お前も気づいていたことだ。 あのときから竜牙は我にリミッターを付けた』

「リミッター……」

『竜牙はいずれお前が我の力で身を滅ぼしことを危惧し、我にリミッターをかけた。 リミッターは我の攻撃技を抑えるものだった。』

そのため、攻撃面でのサポートは刀に雷を纏わせることしかでき

なかった。そして、そのリミッターを外す条件がお前だ』

「お、俺!?!」

『竜牙は「一夏がより強く理想を求め、ゼクロムの力を使いこなせるようになったときにリミッターが外れる仕組みにした」と言っていた。お前が願いが我に届いた』

「っ、つまり……」

『そうだ。我のリミッターは外れた。同時に、お前が我の力を使いこなせるようになった証!』

キイイイン……。

ゼクロムの尻尾が青く光り始めた。

『我はお前の覚醒の時を待つ!』

ゼクロムはそう言い、さらに尻尾の輝きは増した。

キユイイイイン!!

「うっ!?!」

眩い光は俺の視界を白く塞いだ。

そして、視界が戻るとまた、砂浜にいた。

目の前には流木がある。

さっきと同じ光景だった。

「あ……あれ?」

ゼクロムの姿は無い。 さっきまでのことが嘘のようだ。

「夢……じゃないよな？ ……なんだっただ？」

さっきまでの光景が嘘でないことを願いながらも、流木へと足を向ける。そこに、背中から声をかけられた。

「力を欲しますか……？」

「え……」

振り向くと、波の中 膝下までを海に沈めた女性が立っていた。

その姿は、白く輝く甲冑を纏った騎士さながらの格好だった。

大きな剣を自らの前に立て、その上に両手を預けている。

その顔は目を覆うガードに隠されて、下半分しか見えない。

「力を欲しますか……？ 何のために……」

「ん？ そんなこと決まってる」

「ざあ、ざあん、と。」

波だけが俺と女性の間にある。

「友達を 仲間を守るためだ」

「仲間を……」

「不条理な……道理の無い暴力から、できるだけ仲間を助けたい。

この世界で一緒に戦う 仲間を」

「そう……」

女性は、静かに答えて肯いた。

「だったら、行かなきゃね」

「えっ？」

また後ろから声をかけられる。

振り向くと、白いワンピースの女の子が立っていた。

人懐っこい笑み。 無邪気そうな顔で、じいっと俺を見つめている。

「ほら、ね？」

手を取られて、にこりと微笑みかけられる。

俺はひどく照れくさい気持ちになりながら、

「ああ」

と肯いた。

すると、いきなり変化が訪れた。

「な、なんだ？」

空が、世界が、眩いほどに輝きを放ち始める。

その真っ白な光に抱かれて、目の前の光景が徐々に遠くぼやけていく。

夢の終わり、なんて言葉がふいに思い浮かんだ。

(ああ、そういえば……)

あの女性は誰かに似ていた。

白い 騎士の女性。

S i d e 一夏 out

S i d e 一夏 一夏

「ぐっ、ぐっ……！」

ぎりぎり締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる。福音の手は硬く私の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へと進化した『銀の福音』が紅椿の全身を包んでいた。

(ここまでか……。情けない……)

ぼつと光の翼が輝きを増していく。一斉射撃への上読みが始まる中、私の頭にはただ一つのことだけが浮かんでいた。

会いたい。

一夏に、会いたい。

すぐに会いたい。今会いたい。

ああ、ああ、会いたい。

「いち、か……」

知らず知らず、気づいたら私は一夏の名前を呼んでいた。

「一夏……」

さらに輝きを増す翼に、私は覚悟を決めてまぶたを閉じる。

イイイインツ……！

『!?!?』

突然、福音は私を掴んでいた手を離れた。

いきなりのもので混乱している私が、瞳を開けた時に見たのは強力な荷電粒子砲による狙撃を受けて吹き飛ぶ福音の姿だった。

(な、何が起きて )

竜牙さんが助けてくれたのだろうかと思いはじめたところに聞こえたのは、さつきからずっと願い止まない声だった。

「俺の仲間、誰一人としてやらせねえ！」

視線の先には、黒く、輝きを放つ機体がある。

「あ……あ、あ……」

じわりと目尻に涙が浮かぶ。

僅かに潤んだ視界に見えるのは、白式第二形態・雪羅を纏ったゼク  
ロムの力を使いこなせるようになった一夏だった。

S i d e 〽 〽 o u t

第41話 臨海学校14 覚醒（後書き）

映画を見て、曖昧だった一夏の夢？が形になりました。  
これは盗作になるのでしょうか？ 途轍もなく不安です……。



第42話 臨海学校15 決着（前書き）

暴走事件終了です。

第42話 臨海学校15 決着

Side(竜牙)

「一夏っ、一夏なのだな!? 体は、傷はっ……………!」

声を詰まらせた筈の元へ一夏は飛んだ。

「おう。 待たせたな」

「よかつ……………よかつた……………本当に……………」

「なんだよ、泣いてるのか?」

「な、泣いてなどいないっ!」

……………。

「心配かけたな。 もう大丈夫だ」

「し、心配してなごっ……………」

……………。

「ちょうどよかつたかもな。 これ、やるよ」

「え……………?」

一夏は持っていたものを筈に渡した。

てか……。

「り、リボン……?」

「誕生日、おめでとくな」

「あっ……」

今日は七月七日で筈の誕生日だ。それはいいとして……。

「それ、せつかくだし使えよ」

「あ、ああ……」

……もう我慢できん。

「いい加減この場でそんな空気出すな!」

「あ、兄貴!? なんだよその格好は!?!」

「話は後! 今は福音だ! お前のその姿を見ればゼクロムの枷を外せたのはわかる! 今からはお前とシャルを中心に福音を落とす!」

「兄貴は!?!」

「俺は事情により援護のみだ。お前はここまで来る間に零落白夜を使ったはずだ。エネルギー消費がある今、速攻でケリを付ける」

一夏がここにいるのなら、俺の張った結界を破ってきたことになる。

一夏がそれができるのは零落白夜かゼクロムの技だけだ。少なからずエネルギーの消費が見れる。

「セシリア、鈴、ラウラは筭の護衛だ！ 戦いを終わらせる！」

「……………了解！」「……………」

『ゼクロム、レシラム、一夏とシャルに“デュアルクロス”について教えてくれ』

『『わかった』』

神帝と白式、ラファールはリンクしている（正確には白式のゼクロムとラファールのレシラムとだが）。

そのため、ゼクロム、レシラムが神帝内にいなくても会話ができる。まあ、ポケモンは常に神帝とリンクしているから、やろうと思えばどこにいようが会話ができるのだが。

「さて、再戦だ！」

一夏が声を上げる。

第二形態となった白式には、左腕に新たな装備ができています。そのためか、右手で《雪片式型》を持っている。さつき福音を吹き飛ばした荷電粒子砲は左腕の装備から放たれたものだろう。

てか、もう“デュアルクロス”の説明終わったのか？ ……さすがにまだか。一夏とシャルの動きが気持ち遅くなっているように見えるから。

「シャドーボール」

俺は“シャドーボール”を連続で投げつける。説明が終わるまでの時間稼ぎだ。

福音はひたすらに避ける。福音が進もうとする位置に“シャドーボール”を投げ込み、進行を邪魔する。おかげで福音のいる位置はあまり変わっていない。

(まだか？ くそっ……意識が……)

この状態でいる時間が長い所為か、意識が飛びそうになる。それでも、“シャドーボール”は投げ続けている。そして“シャドーボール”を投げ始めてから3分。俺の体感時間は10分ほどで、ようやく一夏とシャルが動き出した。

「行くぞ、シャル！」

「うん！」「一夏！」「え？」

「「「箒！？」」」

飛んできたのは箒。

「お前、ダメージは」

「大丈夫だ！ それよりも、これを受け取れ！」

箒の手が白式へと触れる。

「な、何だ……？ エネルギーが 回復！？ 箒、これは

「

「今は考えるな！ 行くぞ、一夏！」

「箒は下がれ」

「なぜだ！ 『けんらんぶどう絢爛舞踏』のおかげでエネルギーは回復した！ 私  
も戦う！」

「違う。お前がいると、レシラムとゼクロムの全力が使えないんだ。巻き込まれたらタダじゃすまんぞ。一夏とシャルを信じろ」

「……わかった。一夏、任せたぞ！」

「おう！ シャル！」

「オーケー！ “クロスフレイム”！」

シャルの纏う純白の装甲、その尻尾のターボが赤く染まり、広げた両腕の前に炎の球体が現れ、福音へと飛ばす。

ズドオオオン！

“クロスフレイム”が巨大に膨張する。そして

「行くぜ、ゼクロム！ “クロスサンダー”！！」

尻尾のタービンが回り、電気を生成、そして、青き稲妻を全身に纏い、一夏を中心に巨大な球体となる。

「一夏！ この戦いを終わらせる！」

「当たり前だ！」

さらにタービンが回り、一夏が爆発的な加速をする。

強化された大型四機のウイングスラストターが備わった白式・雪羅は、ダブル・イクニッション二段階瞬時加速を可能にした。ゼクロムの力による推進力＋二段階瞬時加速による加速。

俺の“シャドーボール”で足止めされていた福音は、一夏を確認し、翼からの一斉射撃を行った。

だが、その射撃は“クロスフレーム”の後に行い、強化された“クロスサンダー”で消された。

「おおおおおっ！！！」

“クロスサンダー”を纏った一夏は、零落白夜の刃を福音の胴体に突き立てた。

一夏の勢いに押されながらも、一夏の首へと手を伸ばす福音。

（“クロスサンダー”も喰らってんのによく動けるな）

俺は福音に感心していた。

その福音は、その指先が一夏の喉笛に食い込んだところで、銀色のISは動きを停止した。

「はあっ、はあっ、はあっ……！！！」

アーマーを失い、スーツだけになった操縦者が海へと墜ちていく。

「しまっ

！？」

「油断しすぎだ」

俺が動いて操縦者をキャッチする。

「なんだ、お前らで片付けたのか」

「千冬、フェイト、姉貴、お前らも終わったのか……」

「うん。 というよりもその姿は？」

「……今度話す。 フェイト、その姿……ライオットを使ったのか……？」

「うん……。 トーレって娘が強くてね……」

「そうか……。 悪いが……後……まか……せ……た……」

俺は気を失い、ポケモンとの同化が解けて、そのまま、海に向かって、福音の操縦者と共に墜ちていった。

Side～竜牙～out

Side～千冬～

「そうか……。 悪いが……後……まか……せ……た……」

「え、竜牙？ 竜牙!？」



ポケモンと思しき格好をしていた竜牙さんは福音の操縦者『ナターシャ・ファイルス』と共に墜ちていった。私とフェイトは急いで墜ちていった竜牙さんとファイルスを救助した。

「竜牙！？ 大丈夫！？」

『気絶しているだけだ』

「バルディツシュ！？ 何か知ってるの！？」

『さっきまでの龍は神帝唯一エンペラーの禁じ手を使っていたのだ』

「禁じ手？」

『そうだ。詳しいことは知らないが、そのデメリットなら教えられている』

「デメリットだと？」

『あの状態は自らの体力を使いすぎる。そして、肉体に大きな負担がかかる。龍はあの姿の状態で長くいすぎたため、限界を迎えて気絶したのだから』

「そうだったんだ……」

「理由はわかった。早く戻って検査をしなければならんな」

それにしても、なぜ竜牙さんは私たちにそのことを教えてくれなかったんだろうか……。

私たちは竜牙さんとファイルスを抱えて旅館へと戻った。

倒したナンバーズだが、私たちが戻ったところには既にいなかった。

逃げられてしまったようだ。

竜牙さんとはやてには悔しい結果になってしまったが、怪我人はい  
るが、皆無事で終わった。

S i d e 〱 千 冬 〱 o u t

第43話 臨海学校16 臨海学校の終わり(前書き)

臨海学校終了です。

第43話 臨海学校16 臨海学校の終わり

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めても42%かあ。ま、こんなところかな？」

空中投影ディスプレイに浮かび上がったパラメーターを眺めながら、その女性 篠ノ之束は無邪気に微笑む。

「は。それにしても白式には驚くなあ。まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで」

「まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー〇〇一にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

森から音もなく千冬が姿を現す。

「やあ、ちーちゃん」

「おっ」

互いに背中を向けたまま、束はさっきまでと同じようにぶらぶらと足を揺らし、千冬はその身を木に預ける。

「りゅーくんは大丈夫なの？」

「体には異常は無かった。今は過労で寝ている」

「そうなんだ。……ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行っただんでしょうか？」

「……白式を『しろしき』と呼ばば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぽーん。さすがはちーちゃん。白騎士を乗りこなしただけのことはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体は、今では『白式』と呼ばれる機体に組み込まれている。

「それで、うふふ。たとえばの話、コア・ネットワークで情報をやり取りしていたとするよね。ちーちゃんの一番目の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』が。そうしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティを開発したとしても、不思議じゃないよねえ」

「……………」

千冬は答えない。

「それにしても、不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、なんでなんだらうねー。私からしたら、確実にあのコアは初期化されたはずなんだけどね」

「不思議なこともあるものだな」

確かにそれについては、わからないというのが本当のところである。しかし、東は別にわからなくても問題はない。

「……そうだな。私も一つたとえ話をしてやるっ」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねえ」

「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせることができるとする。そこで使われるISを、その時だけ動けるようにする。そうすると、本来男が使えないはずのISが使える、ということになるな」

「ん〜？ でも、それだと継続的に動かないよねえ」

「そうだな。お前は、そこまで長い間同じものに手を加えることはしないからな」

「えへへ。飽きるからね」

「……で、どうなんだ？ とある天才」

「どうなんだろっねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私のもわからないんだよねえ。いっくんはIS開発に関わってないはずなのにね」

「……少し……いいか？」

「「！？」」

二人の話に割って入ったのは、過労で寝ているはずの竜牙だった。まだふらふらなのでフェイトに支えられている。

「りゅーくん！？ 寝てたんじゃないの!?!？」

「竜牙さん！ まだ寝ていてください！」

「悪いな。 だが、束に聞きたいことがあってな」

「何かな？ りゅうくん」

「今回の福音の暴走を起こしたのはお前じゃないのか？ 束」

「「！？」」

竜牙の発言に驚く千冬とフエイト。

「……さすがりゅうくんだね。 そうだよ、私が福音を暴走させたんだ。 だけど、途中であのスカリエッティって奴に乗っ取られちゃったんだけどね」

「……そうか……俺が聞きたかったのはそれだけだ。 行こう、フエイト」

「わかった」

二人は、ゆっくりと戻っていった。

そして、千冬と束はそれを、姿が見えなくなるまで眺めていた。

「ねえ、ちーちゃん。 今の世界は楽しい？」

「それなりにな」

「そうなんだ」

そして、束は消えた。  
忽然と。突然と……。

S i d e ー 夏

翌朝。朝食を終え、ISおよび専用装備の撤収作業に当たった。  
10時を過ぎたところで作業は終了。全員がクラススのバスに乗り込む。  
昼食は帰り道のサービスエリアで取るらしい。

「あ………」

座席にかけた今の俺の状況は、一言で言うとボロボロだ。  
昨日、セシリア、鈴、シャル、ラウラに一時間近く追い掛け回された拳句、旅館を抜けたのがばれて千冬姉に大目玉。実睡眠時間は三時間強。それでいて、あの重労働なのだから、もう死にそうだ。兄貴は自分の座席で寝ている。昨日のダメージが抜けていないのだろう。ちなみに、兄貴の彼女さんは既に帰ったらしい。

「すまん……誰か、飲み物持ってないか……？」

あまりにしんどくてそう声をかけてみたが、

「……つばでも飲んでいろ」

とラウラ。



「知りませんわ」

とセシリア。

「あるけどあげない」

とシャル。

鈴は二組なのでいない。

俺は最後の望みを託して算を見る。

「なっ……何をみているか！」

赤くなったと思ったら、いきなりチョップを喰らわせる筈。  
に痛い。

地味

「ふ、ふん……！」

どうやら、誰もくれないらしい。

「うー……しんど……」

「「「「い、一夏っ」「」「」

「はい？」

四人の声が重なって聞こえ、それと同時に見知らぬ女性が入ってきた。

「ねえ、織斑一夏君と八神竜牙君っているかしら？」

「あ、はい。俺と後ろの席で寝ているのがそうですけど」

20歳くらいで金髪のカジュアルスーツを着た女性だった。

「君たちがそうなんだ。へえ」

俺と寝ている兄貴を興味深そうに眺める女性。

「あ、あの、あなたは……？」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

「え」

ナターシャ・ファイルスは、一夏の頬に唇が触れた。

「ちゅっ……。これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」

「え、あ、う……？」

困惑する俺を置いて、ナターシャさんは兄貴に近づく。

「……近くで見るとなかなか格好いいわね……」

ナターシャさんが言ったことは聞こえなかったが、嫌な予感がした。

そして、だんだんナターシャさんは兄貴の顔に近づけていった。

「……え？ あ、ちよっと！」

俺が止めるのが遅かった。いつもよりもキレもスピードも無いが、兄貴の拳がナターシャさんの腹部に吸い込まれていった。

パシッ！

だがそれは、ナターシャさんの手に掴まれ、防がれていた。

「あ、あのー八神君、寝ているときは近づかない方がいいですよ」

「そうみたいね。残念だけど……。じゃあ、またね。バイ」

「は、はあ……」

ひらひらと手を振ってバスから降りるナターシャさんを、俺は未だにボーっとしたまま手を振り返して見送る。

「……………」

なんとなく、なんとなく、嫌な予感がして、俺は振り向いた。

「浮気者め」

「一夏ってモテるねえ」

「本当に、行く先々で幸せいっぱいなのでしょうね」

「はっはっはっ」

すたすたと歩いてくる4人。

ああ……軍靴の音が聞こえる気分だ。

「「「はい、どござー」「」」

投げつけられる500mlのペットボトル×4。正直死ぬる。

「……うん……何？ この状況……」

いつものように起きた兄貴。兄貴はなぜか、睡眠中にカウンターやら反撃をしてちよっとすれば起きてしまうのだ。これはどういうことなのだろうか……？

S i d e ー 一 夏 ー o u t

S i d e ー 竜 牙 ー

まだ体が重い。 やっぱり使いすぎたか……。

「……で、この状況は何？」

一夏の座席の周りに立つ筈、セシリア、シャル、ラウラ。なぜか怒っている。

「……さっき例の操縦者が来てな、一夏と竜牙に用があったらしい。お前は例の如く反撃していたがな」

答えたのはラウラだった。にしても、やっぱり怒っている。

「悪いことしたな……」

俺は席を立ち、ふらふらしながらもバスを降りようとする。

「お、お兄ちゃん!? そんなにふらふらしてるんだから、まだ寝てなきゃ駄目だよ!」

「その人の顔も見てみたいし、謝んなきゃなんねえからな」

俺はそう言っつてバスを降りた。

「ええ、それは問題なく。 私は、あの子に守られていましたから」

バスを降りて最初に聞いたのはそれだった。  
俺は、思わず歩みを止めた。

「やはり、そうなのか？」

「ええ。 あの子は私を守るために、望まぬ戦いへと身を投じた。  
強引なセカンド・シフト、それにコア・ネットワークの切断……  
あの子は私のために、自分の世界を捨てた」

『あの子』はどうやら福音のようだ。

「だから、私は許さない。 あの子の判断能力を奪い、全てのISの敵に見せかけた元凶を 必ず追って、報いを受けさせる」

元凶は束なんだよな……。

「……なによりも飛ぶことが好きだったあの子が、翼を奪われた。  
相手が何であろうと、私は許しはしない」

「無茶はしない方がいいですよ」

「「!?!」」

つい声をかけていた。

「八神、お前はまだ寝ていた方が……」

「大丈夫だ千冬。歩くくらいならできるから」

歩けるけど滅茶苦茶ダルい。

「あなたが福音の操縦者ですか。さっきはすみませんね。寝ているときは勝手に体が動いてしまっんです」

「いいえ、大丈夫よ。防げたから」

「そうですね。それと、あなたはしばらくは大人しくしておいた方がいいですよ」

「それは何故かしら?」

「ただの勘ですよ。根拠なんかありません。俺よりも千冬の方が思い至ることがあるんじゃないですかね」

「どつだろつな」

イタズラっぽく笑みを浮かべる千冬。

「そうですか。それでは、大人しくしてましよう。……しばらくは、ね。それと、八神竜牙君」

「なんでしょうか？」

俺に近づいてくる。あ、そういえば名前聞いてない。

「……見れば見るほどいい男ね。これはお礼よ」

「はい？ んっ!？」

「!？」

俺の唇に、女性の唇が触れる。

千冬は驚いている。俺の方が驚いている。

「私はナターシャ・ファイルスよ。また会いましょうね」

顔を赤くしたファイルスさんはそう言って去っていった。しばらく呆然としていた俺は、ふとつぶやいた。

「……またかよ……」

いろいろとありすぎた臨海学校だった。

Side 〱 竜牙 〱 out





第43話 臨海学校16 臨海学校の終わり(後書き)

ナターシャさんフラグです。

長かった臨海学校も終了しました。

次回からは夏休みです。

第44話 臨海学校終了後の面倒事（前書き）

前次回から夏休みと宣言したのに、違う結果になってしまいましたね。

すみませんm（|）（|）m

## 第44話 臨海学校終了後の面倒事

Side ㄱ 竜牙

臨海学校が終わって、IS学園に戻ってきた翌日。  
俺は追われている。

「いた！」

「者共出会え出会えい！」

デジャブ？ 前にもこんなことあったよな。

俺はダメージが抜け切ってないが、ある程度動けるようになった。  
女子の多さに追い詰められることもしばしば。そんなときは便利な  
テレポートで逃走する。

「しつこいな……」

いくら逃げても俺とフェイトのことを訊こつと追いかけてくる。  
やっぱり面倒なことになった。

「八神君！ あの美人さんについて教えて！」

「二人の出会いはい！？」

「どこまで進んだの！？」

俺を追いながら問いかけてくる女子共。俺の気のせいじゃなかったら、この学園のほとんどが追いかけてくる。……教師もいない

か？

「いい加減諦めやがれ！」

俺は叫ぶ。そして、テレポートをする。

テレポートした先は屋上。時間まで時間を潰す。

「ホント諦めてくれねえかな……」

そういうお年頃だからコイバナとかに五月蠅いのはわからんではないが、しつこすぎる。

その執念とかを勉強とかの別のことに向けてくれればいいのに。

「きつと無駄だよな……」

女子よりも先に自分が折れそうだ……。

キーンコーンカーンコーン。

「お、予鈴だ。もう少ししたら戻るか」

俺が教室に戻ると女子の視線、獲物を狙うハンターのような視線が

俺を射抜く。

「いい加減諦めろ！」

「」「絶対に諦めない！！」「」

クラス全員（一夏、箒、セシリア、シャル、ラウラは呆れている）の拒否の叫び。

「五月蠅い黙れ」

千冬の登場。 クラスが一気に静かになる。

「放課後まで八神のことについて問い詰めることは禁止だ」

ナイスだ千冬！ 放課後までだけど俺は安全だ！ 視線は変わらんとするけど！

「もしも破ったらグラウンド二十週だ」

これで破る奴は消えた！ よし。逃げる準備は一応しておこう。

「（千冬助かった！）」

「（予想できていたので。 放課後までですが）」

「（それで十分だ。 準備ができていれば一瞬でテレポートできるからな）」

「（そうですか。 それでも気をつけてください）」

「(ああ)」

アイコンタクトの会話終了。  
よし。寝よう。

昼は普通に過ごせた。 …… まあ、狙われるような視線はあったけど……。  
そして昼からもぐっすり寝た。

「……………ら…いつ……………わよ」

……何か聞こえる。

「包……して……しょう」

……危険な感じがするのは気のせいだろうか。

「どうせなら縛っちゃいませうか」

完全に危険だな。

「まったく……なんだよ……」

目が覚めると、目の前には女子の大群がいた。

「あー……」

これはちょっとやばい？

「教えてもらおうよ!」

「臨海学校の時にいたあの美人さんについて!」

「八神君の彼女って本当!？」

「一体どこまで進んだの!？」

四方八方からの質問の嵐。

逃げてやるうか。いや、ここで逃げたら訊くまで追ってくるか。

「しょうがない、か。いいだろう。制限付きでなら答えてやる」

「なら！ あの人が彼女って本当！？」

「前にも言ったように本当だ」

「じゃあ！ どこで出会ったの！？」

「元々は姉貴の親友で、姉貴の伝で出会った」

「どっちゃってそついう関係になったの？」

「いろいろあってな」

「いろいろって？」

「いろいろはいろいろだ。詳しいことは駄目だ」

「そこをなんとか！」

「駄目なものは駄目だ」

世界を飛び回っていたときのことだしな。どっちゃってなんて言うのはアウトだ。

「えー。じゃあ、どこまでいってるの？」

「それこそアウトだろ。完全なプライベートだ」

「むー。じゃあじゃあ！ なんて呼び合ってるの？」



「互いに呼び捨てだけど。　　っつかまだ？」

「う、うん。　　も、もういいです！」

何動揺してんだ？

「じゃ、戻る。　　これ以上の詮索は許さんからな」

そう言って戻った。

それから、追いかけることも質問されることは無かった。

Side 〱 竜牙 〱 out

第44話 臨海学校終了後の面倒事（後書き）

次こそは夏休みです。

## 第45話 ウォーターワールド

Side ㄱ 竜牙

八月。 IS学園は遅めの夏休みだ。 半分近い生徒が帰省している。

俺の実家無人。 最近行ってないから、掃除にでもしに行くことにしよう。

ㄱㄱㄱ

電話だ。

『もしもし竜牙君！ プール行こ！』

「開口一番に単刀直入だな、なのは」

電話の相手はなのはだった。

『はやてちゃんに聞いたよ。 フェイトちゃんが臨海学校に行ったことー』

「姉貴……」

なに行ってんだよ……。

「あれはフェイトが勝手に来ただけだぞ。 日付も場所も教えてないのに」

『そんなことはいいの！ 私が言いたいのは、フェイトちゃんだけ  
ずるいつてことなの！』

「あ、そういうこと。じゃあ、いつ行くんだ？ 予定を確認しん  
といかんからな」

『次の土曜日！』

「土曜？ あー大丈夫だ。で、場所は？」

『ウォーターワールドってところなの』

「そこって今月で来たばつかのとこだよな？ よくもまあそのチ  
ケット持ってたな」

『竜牙君と行くこうと思って頑張ったの！』

「へえ〜。あ、そういうえば時間は？」

『10時ごろでいいんじゃないかな？』

「了解。んじゃ、土曜の10時にウォーターワールドのゲート前  
に集合な」

『わかったの！ 楽しみにしてるからね！』

「俺もだ」(ピッ)

千冬とシグナムとも出かけないとな。

そして土曜日。 現在時刻九時半。

「やっぱり早いよな」

予定の時刻よりも三十分早くウォーターワールドのゲートに着いた。

「待たせるよりかマシか」

「あ、竜牙君！」

「パパア！」

「つてもう来たのか。まだ三十分前なのに。」

「早かったな」

「早く会いたかったから」

「そうか。予定よりも早いけど、入ろうか」

「「うん！」」

「あ、ヴィヴィオ」

「なあに？ パパ」

「今日はパパって呼ぶの止めてくれないか？」

「なんで？」

「俺の歳でパパって言われるのは恥ずかしいんだ。俺やママたち以外の人がいる場所では前みたいにお兄ちゃんって呼んでくれないかな？」

周りに視線が痛すぎる。 ヴィヴィオのパパ発言に既に俺たちに視線が刺さってるからな。

「なのはママからもお願いヴィヴィオ」

「わかったよお」

「ありがとうヴィヴィオ。 じゃあ行こうね」

「うん！」

着替えてプールまで来た。

「人多いなあ」

俺の水着は前の臨海学校と同じで、黒に赤い龍が描かれている水着だ。 待機状態の神帝を首にかけている。

「なのはとヴィヴィオはどんな水着を着てくるんだろうか……」

なのはとヴィヴィオ待ちながら呟く。

「あの二人、姉妹!？」

「すっげえ美人だな!」

「両方可愛い!」

「羨ましい!」

辺りが騒がしくなった。

「お待たせ!」

「いや、そんなに待っては……」

「? どうしたの? 竜牙君」

「どうしたのお? お兄ちゃん」

「あ、いや、なんでもない」

なのはの水着姿に見とれていたなんて恥ずかしくて言えない。

「どうかな? この水着」

「似合ってるう?」



なのは薄いピンクのビキニ。首にはレイジングハートがかかっている。ヴィヴィオは薄い緑のワンピース。

「ああ。二人とも似合ってるよ」

見とれてたとは言えんが、似合ってるなら言える。

にしても、周りの視線が痛い。特に男たちの嫉妬の視線が。

「竜牙君、見られてるね」

「俺よりもなのはだろ。男共の視線は確実になのはに刺さってるぞ。俺には嫉妬の視線だろ」

「竜牙君格好いいもん。女性の視線を集めてるんだよ」

実際、周りの視線は男女問わず俺たちに刺さっている。同姓は嫉妬、異性は羨望の視線が。

「これだけ視線があると遊びにくいな。仕方がない」

「なにするの？」

「威圧」

邪魔したら殺す的な感じの雰囲気だしとけばいいだろう。邪魔してきたら睨めばいいだろう。一般人だし。

「じゃあ、遊ぶか」

「うんー！」

ヴィヴィオは早く遊びたくてうずうずしていたようだ。俺となのはを引っ張ってプールに向かった。

「ヴィヴィオ、楽しいか？」

「うん！ すっごく楽しい！」

「そうか。よかったな」

プールで遊んでいると、放送が入った。

『本日のメインイベント！ 水上ペアタッグ障害物レースは午後一時より開始いたします！ 参加希望の方は十二時までにフロントへとお届けください！』

なんか面白そうだな。

『優勝商品はなんと沖縄五泊六日の旅をペアでご招待！』

これになのが反応した。

「竜牙君！　これに出よ！」

「却下」

「何で?!」

「正直これは面白そうだと思うよ」

「じゃあ何で？」

「ヴィヴィオはどうすんだよ。俺とお前が組んだらその間ヴィヴィオは一人。たとえ俺かなのはとヴィヴィオが組めば勝機はゼロだ」

「……諦めるね」

「悪いな。旅行くらいなら俺が金出すから今回は諦めてくれ」

そう言ってから気づいたことが一つ。

「もしなのはと旅行行ったら今度はフェイトやシグナム、千冬が可哀想だな」

「じゃあ今度みんなで行こ！　ね？」

「そうだな。夏休み中にみんなで行くか」

場所とかを後で考えよう。

「お兄ちゃん！　しゃべってないで遊ぼうよお！」

ふてくされたヴィヴィオが言葉を発した。

「悪い悪い。　そうだヴィヴィオ。　泳ぎの練習でもするか？」

浮き輪で浮いているヴィヴィオに提案する。

「今日はいいよお」

逃げたな。

「じゃあ泳ぎの練習は今度にして、遊ぶか」

「うん！」

S i d e 〱 竜 牙 〱 o u t

第46話 水上レース(前書き)

すみません！ 遅れました！

## 第46話 水上レース

Side 竜牙

午後一時。

『さあ！ 第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！』

司会のお姉さんがそう叫ぶと同時に大きくジャンプをした。その動きで大胆なビキニから豊満な胸が思わずこぼれそうになる。その所為なのか、主に男からの歓声と拍手が上がる。

『さあ、皆さん！ 参加者の女性陣に今一度大きな拍手を！』

再びの歓声に参加者は手を振ったりお辞儀をしたりとそれぞれ応える。

『さあ、皆さん！ 参加者の女性陣に今一度大きな拍手を！』

再びの歓声に参加者は手を振ったりお辞儀をしたりとそれぞれ応える。

その中に異様な威圧感を放つのが二人……

「おいおい鈴とセシリアじゃねえか。まさかいるとはな」

「あの二人って竜牙君の友達？」

「ああ……。イギリスと中国の代表候補生だ」

『優勝商品は南国の楽園・沖縄の旅！ みなさん、頑張ってくださいー！』

目的はこれだな。

鈍感一夏を誘おうって魂胆だろうな。

「……この試合、二人の勝ちだね」

「だろうな」

俺となのははこのレースの勝者を予測・確信した。

『では！ 再度ルールの説明です！ この五〇×五〇メートルの巨大プール！ その中央の島へと渡りフラッグを取ったペアが優勝です！ なお、コースはご覧の通り円を描くようにして中央の島へと続いています。その途中に設置された障害は、基本的にペアでなければ抜けられないようになっていきます！ ペアの協力が必須な以上、二人の相性と友情が試されるということですね！』

コースはよくできていて、コースをワイヤーで宙吊りにされて、シヨートカットができないようになってる。しかも、このレースは『妨害OK』なのだ。代表候補生である二人にとっては有利になるだけだ。

『さあ！ いよいよレース開始です！ 位置について、よーい……』

パンツ！ と乾いた競技用の音が響き、24名12組の参加者が一斉に駆け出す。

足払いを仕掛けてきた横のペアをジャンプでかわし、一番目の島に着地する。次に向かってきたペアを軽くかわし、ついでに足を引っ掛けて水面へと落とす。レースは先行逃げ切りの真面目組と、妨害上等の過激組に分かれていた。しかし、セシリアと鈴のいきなりの立ち回りで注目を集め、妨害が集中した。

「見誤ったなあ……」

「そうだね……」

さつきから何度落とされても即復活し、妨害をするペアがいる。真面目組のグルがいるようだ。

「「うりゃあああっ！」「」

組み合った腕でリアットを仕掛けてくる妨害ペア。そして落とされる。だが今回は、妨害ペアの水着の上を奪い反対側の客席へ投げた。これにより、会場の男性人が沸いた。

「竜牙君？」

「見ていない。俺は何も見っていない」

なのはがすつごくいい笑顔で問いかけてくるが、俺は何も見っていない。なのはの笑顔も、セシリアたちの行動も見えない。



女性一人分しか支えられないはずの小島を二人は大道芸の如き動きで渡っていく。

さっきのアクシデントに沸いていた会場は、二人の活躍に沸いていた。

『こ、これはすごい！ ふたりは高校生ということですが、何か特別な練習でもしているのでしょうか！？』

一般人がしないようなことをしています。

続く第二の島も、障害が意味を成さなく突き進む。

そんなこんなで続く第三の島、第四の島も難なくクリアー。

そして、第五の島でトップのペアが反転し、鈴とセシリアに向かった。

『おおっと、トップの木崎・岸本ペア！ ここで得意の格闘戦に持ち込むようです！』

一般人が代表候補生に勝てる訳がない……

『ご存じ二人は先のオリンピックでレスリング金メダル、柔道銀メダルの武闘派ペアです！ 仲がよいというのは聞いていましたが、競技が違えど息はぴったりですね！』

と思っただが、勝てるかもしれない。

というより、

「「なんでメダリストがこんなところにいるんだ（の）？」」

俺となのはの声が重なった。  
ヴィヴィオはなんのことかわからないようだ。

セシリアが一人でメダリスト・ペアに立ち向かい、振り返った。  
そして、鈴に踏まれた。

セシリアを踏み台にした鈴はフラッグを取った。

「勝ったあ！」

鈴の雄叫び。

セシリアはメダリスト・ペアのタックルを受け、水面に落ちた。

「……なのは、バインドの準備をしてくれ。俺は」

セシリアが落ちたときの倍ほどの高さの水柱が立つ。

「バカ共を沈めてくる」

なのははレイジングハートを起動し、バインドの準備を始めた。

「今日という今日は許しませんわ！ わ、わたくしの顔を！ 足で  
！ 鈴さん！」

ブルー・ティアーズを展開したセシリアが、憤怒の表情で鈴へと向かう。

「はっ、やるうっての？」

甲龍シエンロン！

「な、なっなあっ！？」 ふ、二人はまさか IS学園の生徒な

のでしょうか！ この大会でまさか二機のISを見られると思いませんでした！ え、でも、あれ？ ルー的にどうなんでしょう…  
…？』

司会は興奮と困惑が混じっている。

「行くぞ神帝。<sup>エンペラー</sup> フォルムダークライ！ なのは、やれ！」

「了解！ “レストリクトロック”！」

《Restrict Lock》

鈴とセシリアの手足にリングがつき、二人を拘束する。

「な、なんですか?! これは!?!」

「動けない!?!」

「お前ら、ここがどこで、自分の立場をわかってるんだろうな?」

「り、竜牙<sup>きん</sup>!?!」

「お前らは寝てる。“ダークホール”！」

俺は手から黒い球体を生み出し、鈴とセシリアにそれぞれぶつけ、二人を眠らせた。

「まったく、じつじつのは学園でやれっつっの」

「とにかく！ こういったことは！ 金輪際！ しなくてください  
ね！」

「はい……」

「ダークライの特性“ナイトメア”により、悪夢を見て、二人揃って  
うなされて起きて着替えてから、さっきの司会の人のお説教を受け  
ていた。」

「お前ら、それでも代表候補生か？　時と場所を考えるよな」

ちなみに、なのはは外でヴィヴィオと待っている。

「あ、あのう……」

「何か!？」

「い、いえ、あの、優勝はどうなったのかと思ひまして……」

「……景品、もらえらと思ってるの?？」

一般人にしては迫力あるな。

「す、すみません……何でもありません……」

「あー俺、連れ待たせてるから帰っていいですか?？」

「あ、はい。　帰ってくれて結構です。　本当にありがとうございます」

ました」

「気にしないでください。　俺たちはどっかの馬鹿二人を止めただけですから。　では、俺は帰りますね。　失礼しました」

俺は微笑みながら答えたら、

「い、いえ／＼／」

顔を赤くしてしまった。

(またかよ……)

そう思いながら事務室を出た。

「ごめんなのは、ヴィヴィオ。 待たせちまったな」

「気にしないでいいよ」

「ヴィヴィオも気にしな—い！」

「偉いぞ、ヴィヴィオ」

俺はヴィヴィオの頭を撫でながら言う。

「えへへ〜」

「ビビるっ〜」

「うーん……時間もなくなってきたしね。 今日はお終いだじゅっ  
か」

「それでいいのか？」

「うん……。レースの所為で最後まで楽しめなかったけどね」

「……そうか。なのは、ちょっとこっち来て」

「？ どうしたの？」

「いやなに、ただのお詫びだ」

「!？」

「これ以上は無理だからな？」

「う、うん／＼／」

なにしたかだつて？ 皆さんの想像通りキスだが？ って誰に言つてんだ？

あ、勿論ヴィヴィオの視界は隠して見えないようにしたし、周りの視線が少ない一瞬の隙にやったよ？

「なのはママどうしたの？ お顔真っ赤つかだよ？」

「だ、大丈夫だよ、ヴィヴィオ。なんでもないよ」

「ヴィヴィオ、今日はさよならだ。元気にしてるよ？」

「うん!」

ヴィヴィオが純粹でよかった……。

「じゃあな。またな」

未だに顔を赤くしたなのはと、元気に手を振るヴィヴィオと別れ、俺は学園へと戻った。

S i d e } 竜牙 } o u t



第46話 水上レース（後書き）

こっぴつ感じで大丈夫でしょうか？

第47話 巻き込まれた？（前書き）

シグナムとデートです。

第47話 巻き込まれた？

Side 竜牙

「君、可愛いね！」

「俺たちと遊びに行かない？」

「約束がある。 他を当たれ」

男5人に囲まれナンパ（もはや恒例となってきた）にあっているシグナムを見つけた。

「待ってるんでしょ？ そんな奴なんて放っておいてさ、俺たちと遊ぼうよ！」

「楽しくするからさ！」

なんか既視感。<sup>デジャブ</sup>

つてか、毎回毎回似たような口説き文句だよな？

「つて呆れてる場合じゃねえや」

馬鹿を蹴散らさなければ。

「ね！ 行こうよ！ お金とかは全部こっちが出すから  
グへ  
ッ!？」

シグナムをちょうど口説いていた男を蹴り飛ばす。

「「「「や、ヤスオ!?」「」」」」

あ、凄いモブキャラ臭のする名前だな。

「彼女は俺の連れだ。モブキャラは引っ込んでろ」

「モブキャラだと!? ふざけやがって!」

「よ、よくもヤスオをやってくれたな!」

「奴は一人だ! 困ってやっちまうぞ!」

「そういうのはあんたらみたいな奴が言うただの死亡フラグだからな?」

「や、やっちまえ!」

「「「おっ!」「」」」

「はぁ……なんで毎回こうなんだよ……ったく……」

呆れてくる。

近づいてくるモブ4人。相変わらず一人は伸びている。

「とつとと消えうせろ!」

バキッ! ドカッ! ドサッ!

「きょ、今日はこれくらいにしてやる」

「次は無いと思えよ！」

「「「「お、覚えてるよ〜！」「」「」

これも既視感。

てか古くないか？

「悪い遅れた。 あいつらに何かされてないか？ されてたらこの世から抹殺してやるんだが」

「大丈夫だ。 される前に助けてもらったからな。 それと、あの程度の男なんぞの所為でお前の手を汚すな」

「わかった。 だけど、俺の気が済まなかったら殺る」

「まったくお前らしいな。 それがお前のいいところでも悪いところでもあるんだがな」

「そうか？」

「そうだ。 自らを犠牲にして自分の大切なものを守ろうとする。 前から何度も言っているが、無茶だけはしないでくれよ」

「わかってる。 皆が悲しむ顔は見たくないしな」

「釘を刺したところで、行くか」

「そつだな」

今回はシグナムとデートです。

「そついえば竜牙」

「ん？ なんだ？」

「なぜ私を誘ったのだ？」

「あ、そのこと？ シグナムも姉貴から聞いたんじゃないの？」

「……テストロッサのことですか」

「そうそう。いくらフェイトが勝手に来たとはいえ、海で遊んだのは事実だからな。その穴埋めかな。なのはがその件でさつそく出かけたしな。なのは曰くフェイトだけずるいだそうだ」

「そういうことか。高町は私たち四人の中で特に竜牙にべつたりだからな」

「そうか？ なのはとフェイトは積極的なだけだろ」

そう考えると千冬とシグナムはあまり積極的ではない。

千冬の場合は学園のこともあるからわかるけど、シグナムは遠慮がちだと思う。

「シグナムってさ、なのはたちと比べると遠慮がちだよな。なん  
でだ？」

「そんなつもりはないのだがな」

「じゃあさ、今日はシグナムの好きにしていよ。ただし、限度はありけどね」

「ならば、そうさせてもらうか」

そう言ってシグナムは俺の左腕に自分の右腕を絡めてきた。

「……女性って腕組したいのか？」

「好きな相手とはしたいだろう」

「そういうものか？」

「そういうものだ」

「へえ」

「では行こう」

「了解しました。お姫様」

ノリで言ってみた。

「へ、変なことを言うな！」

顔を赤くして反論するシグナム。ちよつとからかってみよう。

「ん？ でも満更でもないって顔してるよ？」

「~~~~~!?!?」

ここまで反応するとは……。

「言葉になってないよ。冗談だから落ち着いて」

「じよ、冗談か。冗談でも変なことを言うな。するならするで人のいないところでしてくれ。私の身が持たん」

「わかった」

人がいなければやってもいいんだ……。

「で、では、気を取り直して行くとするか」

「そつだな」



シグナムに連れられて来ましたデパートに。

「騒がしいな」

「何かあったのか？」

ただ今駅前のデパートの七階にいるのだが、騒がしい。

「あの店みたいだな」

「『サード・サーフェイス』か。なんの騒ぎなんだ？」

気になったので騒ぎの中心になっていそうな店を探したらすぐに見つかった。

店の外にまで人だかりができていたからだ。

「む？ あれは竜牙の妹ではないか？」

「え？ ……あ、本当だ。よく見つけたな」

どうやら、人だかりの正体はシャルとラウラのようだった。写真を撮られたり、握手を求められたりと大人気の様子だ。

「どうするんだ？」

「どうするって言われてもな……あ、見つかった」

俺がシャルたちの光景を眺めているとラウラと目が合った。

ラウラが教えたのかシャルも俺たちに気づいたようだ。

「見つかったのなら助けるのか？」

「いや、無理だろ。 有名人にあったファンみたいな感じになってるんだから助けるなんてことはできんだろ。 最悪巻き込まれるぞ」

「いや、巻き込まれる。 そして逃げられないだろう」

「奇遇だな。 俺もそう思っていたところだ」

「「竜牙（お兄ちゃん）助けて！」」

ほらね？ 二人の声にあわせて俺の方に他の客の視線が俺に刺さるんだって。

二人に見つかった時点で巻き込まれることが決まってしまったんだよ。

「「「シルバー銀髪ピンクに桃髪……」」」

「「「美青年と美女……」」」

「「「カップル……」」」

何かに魅了されたようにそこにいた客（店員も）たちがつぶやく。そして……。

「二人ともクール系！」

「写真撮ってもいいですか?!」

「握手してください！」

なぜか騒ぎが大きくなりました。

「……やっぱり巻き込まれたな」

「私なんぞ撮っても無意味だろうに……」

「それを言うなら俺もだ。俺なんか撮っても無意味だろ」

俺たちは喧騒になぜか巻き込まれた。

Side ㄟ 竜牙 ㄟ out

## 第48話 @クルーズ

Side↳竜牙

「ふう、疲れたな」

「まさか最初のお店であんなに時間を使うとは思わなかったね」

「まさか巻き込まれるとは思ひもしなかったな」

「まったくだ」

「……………」

俺とシグナムの一言でシャルとラウラが目を逸らす。

時間が十二時を過ぎたところで、俺たちはオープンテラスのカフェで一緒にランチをとっている。

どうせなのでもう少し責めてみることにした。

「騒ぎが気になって近づいてみれば見知った顔が中心人物で」

「見つかったがために巻き込まれ」

「折角のデートなのに時間を無駄にってしまった」

シグナムも乗ってくれた。

「え、えっと……………」

「そ、その……」

視線を泳がし、おろおろする二人。

「すみませんでした……」

「ま、過ぎたことだから仕方がないけどな」

「それにしても、あの騒ぎはどういう経緯だ？」

「……正直僕たちもよくわかってないんですよ」

「わかってなかったのか……」

ビックリだ。

「……竜牙よ、その女性は彼女なのか？」

「そうだけど？ 前にフェイトと千冬から聞かなかったか？」

「いや、聞いたが人数だけだ」

「そっか。 誰にも言っていないよな？ 言ったら締め上げるんだけど……」

「だ、誰にも言っていないぞ！」

「それならいい」

ラウラは口が堅いしな。

言うことは無いだろう。

「お兄ちゃんとシグナムさんはお昼からはどうするんですか？」

「デートの続きだな」

「そうだな」

「お前らは？」

「生活雑貨を見て回るつもり。僕は腕時計見に行きたいかなあ。  
日本製の時計って、ちょっと憧れだったから」

「腕時計？ そんなものが欲しいのか？」

「せっかくだからね。それとラウラ、そんなものは無いと思うよ」

俺もそう思った。

「ラウラは日本製の欲しいものってないの？」

ラウラは少し考えてからきっぱりと言った。

「日本刀だな」

言葉を失った。

「……女の子的なものは？」

「ないな」

即答かよ。

シャルが何かに気づいた。

「どうした？」

「あ、あの人……」

そこにいたのは隣のテーブルの女性客。

「……どうすればいいのよ、まったく……」

歳は二十代後半と思われる女性の声が聞こえ、悩みがあるのか料理は冷め切ってしまったている。

「はあ……」

深淵の色が見えるため息。

「ねえ、ラウラ」

「お節介はほどほどにな」

「俺たちに被害がなければよし」

巻き込まれるのは御免だ。

「で、どうするつもりだ？」

「うーん、とりあえず話だけでも聞いてみようかな」

そう言ってシャルは席を立つなり女性に声をかけた。

「あの、どうかされましたか？」

「え？　　！？」

俺たちを見るなり、ガタンッ！　とイスを倒す勢いで女性が立ち上がる。そしてそのまま、シャルの手を握った。

「あ、あなたたち！」

「は、はい？」

「バイトしない！？」

「」「」「え？」「」「」

S i d e ～ 竜牙 ～ o u t

S i d e ～ シャル ～

「とうわけでね、いきなりふたり辞めちゃったのよ。辞めたっていうか、駆け落ちしたんだけどね。　　はは……」

「はあ」

「ふむ」



「でもね、今日は超重要な日なのよ！ 本社から視察の人間も来るし、だからお願い！ あなたたち二人に今日だけアルバイトして欲しいの！」

お兄ちゃんとシグナムさんはデートの続きをするからって手伝わないみたい。

巻き込まれるのは御免だって言ってたしね。

ちなにみこのお店はメイド& amp ;執事喫茶だった。

「それはいいんですが……」

着替え終わったのはいいんだけど……

「なぜ僕は執事の格好なんでしょうか……？」

「だって、ほら！ 似合うもの！ そこいらの男なんかより、ずっとキレイで格好いいもの！」

「そうですか……」

正直あまり嬉しくない。

(僕もメイド服が良かったなあ……。 そっちを着ているラウラ、すっごく可愛いし……)

僕は自分が着ている執事服を見下ろす。

(うー、僕ってやっぱりこういう方向性なのかなあ……)

そう思うと落ち込んでしまう。

「大丈夫、すごく似合ってるから!」

「そ、そうですか。 あはは……」

(それが問題ないんだけどなあ……)

「店長、早くお店手伝って」

フロアリーダーがヘルプを求めて声をかける。Vすぐに店長は最後の身だしなみをして、バックヤードの出入り口へと向かった。

「あ、あのっ、もう一つだけ」

「ん?」

「このお店、なんていう名前なんですか?」

そういえば聞いてなかった。

店長は大人びた容姿に似合わない可愛らしいお辞儀をした。

「お客様、@クルーズへようこそ」

Side~シャル~out

Side~竜牙~

「あー店の名前訊くの忘れてたな……」

ただ今デートの真っ最中。

勿論、シグナムと腕を組んでますよ。

「行くつもりだったのか？」

「ああ。面白そうだしな」

格好とか仕事する様子とか、反応とか面白そうだし。

「確かに面白いかもな」

お、賛同を得れた。

「だが、訊き忘れてしまったものは仕方がないだろ？」

「だよな……。少し残念だ」

ダメモトでどこか喫茶店でも行ってみようかな？

「考えても仕方があるまい。今はデートを楽しむぞ」

「そうだな。どこ行く？」

「映画とかか？」

「どんなもの見るんだ？」

「そうだな」

「

俺たちは甘い空間を作り出していた。

S i d e 〱 竜牙 〱 o u t

S i d e 〱 第三者 〱

「シャルル君、四番テーブルに紅茶とコーヒーお願い」

「わかりました」

カウンターから飲み物を受け取って、トレーに乗せた。

そんな単純な動作にさえシャルロットの気品がにじみ出て、臨時の同僚にあたるスタッフたちは、ほうつとため息を漏らした。

初めてのアルバイトだというのに、その立ち居振る舞いには物怖じした様子はなく堂々としていて、けれど嫌味ではない。

そんなシャルロットの姿に、女性客のほとんどが見入っていた。

「お待たせいたしました。紅茶のお客様は？」

「は、はい」

自身の方が年上であるにもかかわらず、女性は緊張した面持ちでシャルロットに答える。

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？ よろしければ、こちらで入れさせていただきます」

「お、お願いします。 え、ええと、砂糖とミルク、たっぷりで」  
「わ、私もそれでっ」

この二人は常日頃からノンシュガー・ノーミルクなのだが、今日に限ってはあえて目の前の美形執事に奉仕してもらいたい一心でわざとそう答えたのだった。

それを知ってか知らずか、シャルロットは柔らかな笑みの浮かべてうなづく。

「かしこまりました。 それでは、失礼いたします」

女性客は安全にシャルロットに見入っていた。

「どうぞ」

「あ、ありがとう……」

それぞれ、カップを受け取った女性客は、ぎくしゃくとした動きで一口飲んだ。

「それでは、また何かありましたら何なりとお呼び出してください。  
お嬢様」

綺麗なお辞儀をするシャルロットはまさしく「貴公子」だった。

一方のラウラは男性客三名のテーブルで注文を取っていた。

「ねえ、君可愛いね。 名前教えてよ」

「……………」

「あのさ、お店何時に終わるの？一緒に遊びに」

ダンツ！と、テーブルに垂直に叩きつけられたコップが大きな音と一緒に滴を散らかす。

面食らっている男性客に、ぞっとするほど冷たい声で告げた。

「水だ。飲め」

「こ、個性的だね。もっと君のことよく知りたくなっ」

台詞の途中で、オーダーを取ることなくテーブルを離れる。そしてカウンターに着くなり何かを告げ、少しして出されたドリンクを持って行った。

「飲め」

ソーサーが割れるのでさっきよりは多少やさしめにカップをテーブルに置く（じゃないとソーサーが割れる）。それでも弾んだカップからは中のコーヒーが遠慮なくこぼれた。

「え、えっと、コーヒー頼んだ覚えは……………」

「何だ。客でないのなら出て行け」

「そ、そうじゃなくて、他のメニューも見たいわけですか……………」

ラウラに好印象を持たれたのか、それとも、ラウラの態度に萎縮しているのか、男は言葉を探りながら会話を続ける。

実際、女性優遇社会でこんな風に初対面の女子に声をかけられるというのは、勇者か馬鹿のどちらかでない。そして、男たちは確実に後者だ。

「た、例えば、コーヒーにしてモカとかキリマンジャロとか」

言葉を遮るように、ラウラはまったく笑ってない目で、その顔に嘲笑を浮かべた。

「はっ。 貴様ら凡夫に違いがわかるとでも？」

「いや、その……すみません……」

結局、ラウラの絶対零度の視線と許しのない嘲笑に折れた。男たちは小さくなりながらコーヒーをすすった。

「コーヒーを飲んだら出て行け。 邪魔だ」

「はい……」

ドイツの冷氷と呼ばれたラウラの一面は今でも健在のようだ。しかし、その人を寄せ付けない態度ですら、美少女の外見を伴えば魅力となるらしい。

「あ、あの子、超いい……」

「罵られたいつ、見下ろされたいつ、差別されたいいつ！」

特別盛り上がっているテーブルは異様な興奮を見せていたが、他の客は勿論スタッフまでもが見てみぬふりでやり過ごしていた。

「あ、あのっ、追加の注文いいですか！？ できればさっきの金髪の執事さんで！」

「コーヒーください！ 銀髪のメイドさんで！」

「こっちにも美少年執事さんをつ！」

「美少女メイドさんをぜひ！」

そんな騒動は一気に店内に感染し、爆発的に喧噪を大きくしていく。

Side 〉 第三者 〉 out

Side 〉 竜牙 〉

「恋愛物の映画はよくわからんな」

「同感だ」

「じゃあ何で見た?!」

シグナムが見てみたいといった恋愛映画を見終え、俺のつぶやきの返りに俺は驚いた。

「見てみたかったから？」

なぜ疑問形なんだ？



「カップルだからか？」

「それもあるな」

「ま、よくわからなかったが、面白かったからいいか」

恋愛映画はよくわからんが、俺たちが見た映画は面白かった。

「だな」

「小腹が空いたからあそこに入ろうぜ」

「私もそう思っていたところだし、ちょうどいいか」

俺たちが入る店は@クルーズと言っらしい。

「@クルーズへようこそ。 二名様ですね。 こちらでございませす」

メイド姿のウエイトレス。

見た感じ、どうやらここはメイド& amp ;執事喫茶のようだ。

「ご注文がお決まりになりましたらお呼びください」

メイドはそう言って混雑した店内の仕事に戻った。

「賑やかな店だな」

「そうだな。 で、何にするんだ？」

「私はホットケーキにするか」

「んじゃ俺も。　コーヒーもだけど」

「私もコーヒーを付け足すか」

「んじゃ決まりだな。　すみませーん、ホットケーキとコーヒーを二つずつ」

「ホットケーキとコーヒーを二つずつですね。　かしこまりました。　少々お待ちください」

店内を改めて見渡す。　そしてふと気づく。

「あれ？　あの執事、シャルじゃねえか？」

忙しく動いているシャルらしき執事を見つけた。

どうやってシャルかどうか確かめるか考えていると、注文の品が来た。

「お待たせしました。　ホットケーキとコーヒーになります」

聞いたことがある声だな。

メイドに目を向ける。

「ラウラ？」

「ん？　なに！？　竜牙だと！？」

銀髪の眼帯美少女がそこにいた。

「バイトってここだったんだ。ラッキー」

「運がいいな」

シグナムもそう思うか。

「じゃああれはシャルだったか」

「しかしなぜ執事服だったんだ？」

「……さあ？」

とにかく食べよう。

そんなとき……。

「全員、動くんじゃねえ！」

雪崩れ込んできた三人の男が怒号を発し、銃声が響いた。

「きゃあああつ！？」

「騒ぐんじゃねえ！ 静かにしろ！」

男たちの格好は、ジャンパーにジーパン、顔には覆面、手には銃。背中のバックからは何枚かの紙幣が飛び出していた。

「あー、犯人一味に告ぐ。君たちはすでに包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返す」

「……なんか」

「……警察の対応も」

「……古……」

ズズズ……。

「ど、どうしましょう兄貴！ このままじゃ、俺たち全員」

「うるたえるんじゃないっ！ 焦ることはねえ。こっちは人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

「へ、へへ、そうですね。俺たちには高い金支払って手に入れたコイツがあるし」

威嚇射撃。

「きゃあああっ！！」

蛍光灯が破裂し、パニックになった女性客が耳をつんざくような悲鳴を上げた。

ハムハム……。

「おい、聞こえるか警官ども！ 人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！ もちろん、追跡車や発信機なんかつけるんじゃないぞ！」

俺とシグナムは、そんな騒ぎを気にせずにホットケーキを食べ、コ

ーヒーをすすっていた。

「おい！ そのカップル！ 動くなと言ったのが聞こえなかったのかー！」

「うるせえな……。 シグナム、レヴァンティンを貸してくれ」

「わかった」

シグナムは首にかけてあったレヴァンティンを俺に渡す。

「殺るぞ、レヴァンティン」

《了解した》

レヴァンティンはシュベルトフォルム（片刃の長剣の形）になる。

「「「な!?」「」」

俺はレヴァンティンを片手に肉迫する。

バキッ！ ザシュツ！ ドカッ！ ドサツ！

レヴァンティンの峰で男たちを気絶させた。

俺が動いて僅か10秒の出来事だった。

「ありがとう、シグナム」

俺はレヴァンティンを待機状態に戻してシグナムに渡す。

「お、終わった……？」

「助かったの、私達……」

「い、一体何が……」

しばらくの間静まり返っていた店内は、危機を脱したことはわかるものの、まだ状況を正しく把握できていない人々。何度もまばたきを繰り返し僕たちの姿を呆然と眺めていた。

「お、俺たち助かったんだ！」

「やった！ あ、ありがとう！ 青年、ありがとう！」

助かった実感がわいたのか、突然店内が騒がしくなる。その様子を見て、警官隊も詰めかけてくる。俺は青年ではない。

「シグナム、食べ終わった？」

「ああ」

「じゃ、行こ。面倒だから」

「わかった」

テーブルに代金を置いて、俺たちが立ち去ろうとしたとき、事態が変化した。

「捕まってムシヨ暮らしになるくらいなら、いっそ全部吹き飛ばし

「てやらあつ！」

軽く四十平方メートルは吹き飛ばせそうな、プラスチック爆弾が見えた。

起爆装置は勿論奴の手の中にある。

「甘かったか」

俺は自分が使っていたナイフを持つ。

「最後まで古い！」

俺は手に持ったナイフを投げる。

ナイフは男の手に刺さり、起爆装置を落とす。

「眠ってる」

俺は近づき、腹に蹴りを入れて意識を刈る。

「一応コイツは壊しておくか……」

俺は墜ちた起爆装置を拾い、誤爆させないように破壊する。

「シグナム、行くぞ」

「わかった」

俺たちは裏口から逃げた（ちゃんと代金は置いてあるから食い逃げじゃないよ）。

ところ変わって公園。  
俺とシグナムはベンチに座っている。

「なんか今日はいろいろと巻き込まれたな」

「そうだな。あの二人の喧騒に強盗……」

「強盗は俺一人で瞬殺したけど」



「あのときの竜牙、格好よかったぞ」

「そうか？　ありがとう」

俺はクレープ屋を見つけた。

「クレープ食べる？」

「食べる。　味はまかせる」

「わかった。　急いで買って帰るからちょっと待っていて」

「わかった」

俺はクレープ屋に向かって走る。

「すみませーん、イチゴとブルーベリーのクレープを一つずつください」

俺は料金を払い、できるのを待つ。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

できあがったクレープを貰い、急ぎ足で戻る。

「お待たせ。　イチゴとブルーベリー、どっちがいい？」

「先に選んでくれ。　私はどちらでもいい」

「そうか？　じゃあはい、イチゴだよ」

俺はブルーベリーを食べる。

「美味しいな」

「そうだな。　ブルーベリーも美味しいぞ。　食べるか？」

「頂く」

シグナムは俺の持つクレープをかじる。

「こっちも美味しいな。　イチゴも食べるか？」

「じゃあ貰うよ」

俺はイチゴを食べる。

「美味しいな。　……なあ、シグナム」

「なんだ？」

クレープを食べながら答える。

「今日、楽しかったか？」

「当たり前だ。　お前といてつまらないわけが無いだろう」

「そう。　それならよかった」

「なぜそんなことを訊いた？」

「今日はいろいろあったからな。その中でも楽しめたのか不安になっただけ」

「楽しめたさ。私はお前と一緒に入れればそれでいい」

嬉しいこと言ってくれよ。

「ありがとう」

「!？」

俺はシグナムにキスをする。  
軽く触れるくらいの、短いキスを。

「りゅ、竜牙? / / /」

頬を赤く染めたシグナム。

「嫌だったか？」

「い、嫌なわけがあるか! むしろ嬉しい / / /」

「それならよかった」

それから俺たちは甘い雰囲気をかもし出していたということ報告する。

S i d e ~ 竜牙 ~ o u t

第49話 バイクと千冬と祭り前（前書き）

タイトルに深い意味はありません。

## 第49話 バイクと千冬と祭り前

Side 竜牙

「なあ千冬」

『なんですか？ 竜牙さん。話なら直接会ってすればいいのにわざわざ電話など……』

千冬が言ったように、俺は千冬に電話している。理由は簡単だ。

「ここではマズい話だからだ。他にバレたら大変だぞ？」

『！ そういうことですか。わかりました。で、どのような話で？』

気づいたな。

学園には知っている人が少ない（というかほとんどいない）俺と千冬の関係が見つかる虞があるからだ。

「今日って篠ノ之神社の夏祭りだろ。だから行かないかって話だ」

篠ノ之神社は篝の実家だ。

『あそこのですか？ 篠ノ之がいますが……』

「篝は別にいいだろ。臨海学校で教えてあるんだし。まあ、知り合いに出会わないって言う確証はないけどな。この際バレるの

覚悟で行くか？」

『ふふっ、そうですね。　行きましょうか』

「あ、浴衣でも着るか？　着るなら買いに行くけど」

『竜牙さんは着るのですか？』

「俺か？　俺はどっちでもいいかな。　そもそも持ってないし」

浴衣なんてほとんど着ない代物だからな。

『もしも私が浴衣を買つとして、そのときに竜牙さんは買いますか？』

「俺としてはどっちでもいいんだけどな。　千冬に任せる」

『では買いに行きましょう。　浴衣で祭りを楽しみましょう』

浴衣一つで乗り気だな。

「わかった。　じゃあ、4時頃にケーシー使って俺の隠れ家に来てくれ」

『隠れ家……あ、前に顔合わせしたところですか』

「そこそこ。　そっちの方が都合がいい。　そうでもしないと女子共にバレちまうからな」

『わかりました。　では、4時に（ピッ！）』

約束はしたからな。

「さて、先に行ってあれを早く完成させないとな……」

俺は軽く準備をして、サーナイトによるテレポートで学園を離れた。



現時刻3時30分。

「そろそろ来るかな。　これもあと少しで完成だ。　……シャワーでも浴びとこ」

俺はあるものを創っている。  
それはユニゾン型ISであったり、千冬たちには一まったく意味を持たない物であったり……。

「とつとつシャワー浴びねえと千冬を待たせちまうな」

俺は軽く片づけをして、風呂場に入った。

「ふうー、さっぱりした」

「あ、竜牙さん」

俺がシャワーを浴びてリビングに行くと、既に千冬が来ていた。

「あーもう来てたんだ。待たせちまったな」

「ついさっき来たばかりです」

「そっか。なら浴衣、買い行くぞ。俺が後10分ほど言った時間になるしな」

「はい、わかりました。ですが、何で行くのですか？ テレポーターで飛びますか？」

「いいや、バイクだ」

「バイク！？ 竜牙さん、免許持てませんよね!？」

「いやさ、俺が世界転々としてるときの移動手段は基本テレポーターだけだよ、動くときはバイクが便利なんだよな」

「竜牙さんは何歳から無免許でバイクに乗っているんですか?!」

「確か14から乗ってるぞ」

「教師として、これは見逃すわけには……」

「んじゃ、今日は教師つつう仕事は忘れて、俺の彼女としていればいいじゃん」

「そういう問題ではありません！ そもそも無免許運転は駄目なん

ですよ？ わかってますか?!」

「世の中気にしたら負けなことが溢れてるんだぞ？ こんなことで目くじら立てるなって。 それと大丈夫だ。 絶対にバレないからバレなければ問題ない。」

「……もういいです……諦めました……」

「早く行くぞ。 デートの時間は長い方がいいだろ？」

「はぁ……」

溜息をつくな。

呆れたような目で俺を見るな。

「そういえば、俺がバイクに乗るようになったのはシグナムの後ろに乗るのがなんか嫌だったからなんだよな」

「奴もバイクに乗るんですか？」

「乗るよ。 最初の方はシグナムに乗せてもらって回ってたからな  
今思い出せば懐かしいな。」

「……そう言えば彼女たちと世界を回っていたんでしたね」

呆れてるな、完全に。

「さ、行くぞ。 このバイクは俺が改造したからな。 特殊だ」

「特殊？ 一体どのよう……」

「説明面倒だから直接乗って感じる」

「なぜか嫌な気しかりないのですが……」

「安心しろ。 千冬ならすぐに慣れるだろう」

「安心できないのですが……」

「大丈夫だって。 そこまで速度は出すつもり無いから」

「は、はあ……。 竜牙さんを信じてもいいんですよね？」

「大丈夫大丈夫。 安心ななって」

バイクの元まで着いた。

「大型バイクですか」

「そっちの方が格好いいからな。 はいヘルメット」

俺はヘルメットを渡して、バイクに跨り、エンジンを掛ける。

「コイツに乗るのも大体半年振りくらいか」

「大型なのに音がそこまで大きくないですね」

「そういう風に改造したからな。 というよりもこのバイクは俺が

束にしか造れん」

コイツにはISの技術を使っている。  
おかげで完璧なモンスターバイクだ。

コイツの全速力を完璧に操れるのは俺とシグナムだけだ。

「ちなみにISのコアは使っていないからISじゃないからな」

「何を言っているんですか？ このバイクはISに関係があるんですか？」

「気にすんな。 というよりも早く乗って。 時間なくなるよ」

「あ、はい。 お願いします」

千冬は俺の後ろに座り、千冬に後ろから抱きしめられる形になった。  
千冬の胸がっ！

よし、気にしないようにしよう。

「さ、しっかり？まってるよ」

少し取り乱したが、すぐに元に戻れるのが俺だ。  
今までのいろいろあったからもう慣れた。

「到着」

「早く入りましょう」

「了解」

俺たちは店内に入る。

「いらっしやいませ」

「彼女に似合う浴衣をお願いします」

「かしこまりました」

「男物ってどこですか？」

「あちらです。 あちらにいるスタッフに声をかけてくだされば選  
ぶお手伝いをしますので、よろしければ頼んでみたらどうでしょう  
か」

「ありがとうございます。 では、彼女の方はお任せします」

「かしこまりました」

千冬の方は任せるとして、俺もぱつと決めるか。

S i d e 〱 竜 牙 〱 o u t

第50話 夏祭り〈前編〉

Side 竜牙

「ど、どうですか……?」

千冬が浴衣を来ている。

「……………」

似合っている。綺麗だ。

黒に所々見える白い花びら模様がより千冬を綺麗に魅せる。  
視惚れていた。

「似合いませんでしたか……」

「あ、ごめん！ 似合ってる！ 凄く似合ってる!」

視惚れて答えを出すのを忘れていた。

「そ、そうですか？ では、これにします。ところで竜牙さん」

「な、何だ？」

やばい。

落ち着け落ち着け……。

よし！ 大丈夫だな、うん！



「で、何だ？ 千冬」

「竜牙さんは決めたんですか？ 私服のままですけど……」

「二つに絞ったときに呼ばれたからな。後は決めるだけだ」

俺は自分の浴衣を選んでいる途中に呼ばれたため、まだ決まってい  
ない。

だが、大体決まっている。

「その二つ、私に見せてくれませんか？」

「別にいいぞ。どっちも捨てがたいから少し迷っていたところだ  
からな、他の意見も聞いてみたいしな」

どうせだし、選んでもらおうかと思った俺だった。

「この二つだな」

一つは青のシンプルなデザインの物、もう一つは薄めの赤のシンプ  
ルなデザインの物の二つだ。

「私なら赤い方ですね」

「じゃあこっちにするか。すみません、彼女の着ている奴とこれ  
ください」

「そちらの二点ですね。着ていってもらっても構いませんが、ど  
うなさいますか？」

「あー着てきます。 ちょっと着てきますんで、千冬、これで支払  
つといて」

「あ、はい。 わかりました」

俺は千冬に財布を渡し、浴衣を持って試着室に入った。

「お待ちせ」

俺は浴衣に着替えて千冬たちの前が出る。

「似合っていますよ」

「ありがとう」

「あ、それと財布です。 財布に入っていた金額には突っ込みませ  
んよ」

「あー最近はそれなりに入れてあるからな。 別に普通に手に入れ

ているだけだから安心しろ」

最近は財布の中に常に50万近く入っている。  
これだけあれば不測の事態に対応できるからな。

「竜牙さんの普通は私たちにとっては普通ではないと思うのですが……」

「ま、そういうのは置いて、行くよ」

「はい」

「」「ありがとうございます。またのお越しをお待ちしております」「」

俺たちは店を出て、再びバイクでの移動になる。  
今は5時過ぎ。

ここに来るときのペースだと、6時には確実に着けるな。

「さて、行くか」

「はい。お願いします」

さっきと同様に俺の背中に抱きつくような形で乗る千冬。  
俺は俺で気にしなくなった。

「飛ばすぜえええ！……！」

「と、飛ばしすぎですうう！……！」

かなりの速度で急発進するバイク。  
驚いて反抗する千冬。

「冗談だ。　ペースはさっきと同じくらいだ」

スピードを落とし、一般的なバイクよりも少し速い程度の速度で走るバイク。

俺たちはカメラなどの機器には写らないようになっていて、記録に撮られると面倒だから、認識障害とかの装置はお手の物だったりする。

「到着だ」

時刻はもうしばらくすると6時になるころだ。少し寄り道したため、この時間帯になった。

「おうおう、賑わってるな」

「6時を過ぎればもっと増えると思いますよ」

俺たちが神社の鳥居の前に来ると、そこには見知った顔があった。

「一夏？」

「お、兄貴じゃん。それと……千冬姉？」

「ああ。お前は待ち合わせか？ 相手は誰だ？」

「箒だよ。なんか彼女を待つのも彼氏の役目だとか言われて待ってるんだけど全然来なくてな。というか彼氏ってどういうことだ？」

「お前と箒がそう思われたんだろ。まあ、待ってやれよ」

「おう。それとさ、さっきから気になってたんだけど、二人はど  
うしてここに？」

「一夏は俺と千冬たちの関係について知らないんだったよな。」

「ま、この際お前にも教えとくか。簡単に言うとデートだ」

「で、デート!? 兄貴、あの人はどうしたんだよ?!」

「フェイトのことか。フェイトも彼女だし、千冬もだぞ」

「……え? ええええええ!?! そ、それじゃあ、前に言ってた千冬姉の彼氏って兄貴だったの!?!」

「そうだ」

「ちなみに、一年の四組の専用機持ち以外の専用機持ち……まあ、いつものメンツは知ってるから。それと、もしも、他の女子に言ったら、ポケモンの大群にリンチされるから」

「もしも殺らせるなら、ガブリアスやフライゴン、ボーマンダなどのドラゴンタイプと、各御三家最終進化の群れで殺らせるかな。」

「わ、わかった。絶対に言わねえ」

「んじゃ、俺たちは行くから」

「またな、一夏」

「あ、待ってくれ」

「行こうとした俺たちは一夏に呼び止められた。」

「何だ？」

「あーえっと、千冬姉、おめでとう。 やつと結ばれたね」

「「!？」」

「……お前、気づいていたのか？」

「気づくも何も、千冬姉の兄貴に対する態度が違ったから。 違いに気づく人は少ないと思うけど、俺からしてみれば気づかない方がおかしいでしょ？」

「「……………」」

一夏の返答に俺と千冬は全く同じことを考えていた。

( ) ( ) それなのになぜお前は自分のことに気づかない!!! ( )

相変らずの唐変木っぷりに度肝を抜かれた。

「じゃ、じゃあ、俺たち行くぞ？」

「引き止めて悪かったな。 ゴメン」

「気にするな。 また会えたらな」

俺と千冬は一夏と別れて人ごみの中に紛れる。  
俺ははぐれないように千冬の手を掴む。

「りゅ、竜牙さん？ えっと……どうしたんですか？」

「嫌だったか？ そりゃ悪かった」「いえ、そういうことでは……」「た……どゆこと？」

「竜牙さんからそういうことされるとは思ってもみなかったことでしたので……」

「そういうことね。」「ごういごとで逸れないようにって思ってな」

それ以外にも理由があるけど。

「そういうことですか。納得です」

俺と千冬はそのまま手を繋ぐ。

勿論、恋人繋ぎで。

「俺は飲み物買っけど、千冬は何かいる？」

「私も飲み物を」

折角の祭りだから自販機ではなく、少し値が張るが屋台で売っている物買っ。

やっぱり祭りの飲み物はこれが王道だな。

「普通に作れるけど、こごういう場で飲むのもいいな」

「そうですね」

俺も千冬も飲みながら回る。



「金魚すくいで勝負してみるか？」

「金魚すくいですか。いいでしょう、受けていただきますよ」

俺と千冬の勝負が始まった。

Side 〳 竜牙 〳 out

第51話 夏祭り〈後編〉

Side 〽 竜牙

「なんであんなに掬えるんですか?!」

俺と千冬の金魚すくい勝負は、俺が圧倒的な差で勝った。

千冬が掬ったのが4匹だとして、俺は13匹。

一匹だけ貰って残りは全て返したよ。

合計17匹もいらんし。

「俺にもわからん。前にテレビとかで見た達人とかのやり方を試  
しただけなんだが……」

小学校のときになんかそんなのを見たことがある気がする。

「それでも普通はあんなに取れませんよ?!」

「……それが俺クオリティーってことで」

これで納得してくれればありがたい。

「……あなただから仕方がないんですけど、さすがにあそこまでの  
差があると凹みます……」

やっぱり納得しちゃうのか。

「にしても、本当に凄いですね。 竜牙さんがあまりにも掬うから  
人混みができてましたよ」

「……自分でもビックリしてるんだよ」

曖昧な記憶のコピーで13匹ってさすがにビックリだよ。

「さて、花火まで時間あるし、しばらくは飲み食いまたはゲームだな」

射的には絶対的な自信がある。

どれだけ一度で落せるかな楽しみだ。

それからしばらく屋台を回り、飲み食いしていると、射的屋にて盛り上がりがあった。

「何でしょうか？」

「さあな。ちょうどいいし、俺もやるか」

盛り上がっているところに、一夏と篤、見知らぬ女子がいた。

「一夏じゃん。もしかして、この盛り上がりはお前か？」

「あ、兄貴。俺じゃなくて蘭だよ。液晶テレビ当てたんだよ」

「すげえな。その蘭って子はその子が」

赤毛の中学生だな。

一夏、お前は年下まで落しているのか……。人のこと言えねえけど。

だが、俺はまだ気づくだけマシだと思う。

「はい。五反田蘭です」

「俺は八神竜牙。一夏の兄貴分って感じた」

「あ、あなたが一夏さんの話しによく出てくるなんでもできる凄人なんですね」

「一夏、俺のこと他になんて言ってた？」

「えーっと、なんでもできる化け物染みた人で、年上の女性に人気

「が高いと」

「よーし一夏。明日は俺に付き合ってもらおうぞ」

「ちよつ兄貴!? 兄貴がそんなに黒いと俺死ぬかもしれねえんだけど!？」

「大丈夫だ一夏。そういうこと言う奴に限って死なねえから。それと、死なない程度に地獄を魅せてやるから安心しろ」

「余計安心できねえぞ!？」

「一夏、諦める。竜牙さんがこうなったら止めれる奴はいないだろう」

「……出た。竜牙さんのブラックモード……」

今幕がなんか言った気がするが、気のせいだろう。

「一夏、お前に逃げ延びる可能性をやるう」

「……その可能性とやらは何でしょうか……?」

「射的でどれだけ多く取れるか」

「もしも俺に勝てば見逃すし、俺が勝っても、お前が打ち落とした数が俺の打ち落とした数の差が3つまでだったら見逃してやる」

「それって兄貴が不利なんじゃ?」

「そんなもん、自信があるからに決まってんじゃないか。で、やるの？ やらねえの？」

「いいぜ、やってやる」

……俺の勝ちだ。

「おっちゃん、二人分くれ」

「あいよ。あんた、相当自身あんのかい？」

俺たちの会話が聞こえてたか。

ま、この距離なら聞こえて当然か。

「ええありますよ。だから俺が不利な勝負にしたんですよ」

俺を普通の奴だと思うなよ？

「じゃ、一夏が先にやれよ。俺は後からやる」

「わかった。絶対に勝ってやる」

一夏の落した合計は2つ。

「一夏、俺の勝ちだ」

「兄貴、玉は五発だぜ？ 俺が落したのは2つ。 兄貴が全発落としても5つ。 差は3つ。 俺の勝ちだぜ」

「甘いな一夏。 俺が6つ以上獲ればいいだけの話だ」

「おいおい、あんたマジで言ってんのかい？ さすがに無理ってもんだぜ？」

「じゃ、魅せてやりますか」

俺は一発撃つ。

その弾丸はぬいぐるみの向きを少し変えただけだった。

「兄貴、やっぱり無理だつて」

「いいや、これで準備ができた」

「え？」

「さあ皆さんご覧あれ。 これから一発の弾丸で4つの物を倒して魅せましよう」

俺がわざとらしく言い放ち、場所を変える。

「そこから撃つのか？」

「弾道予測は完璧だ」

俺は鉄砲を構え、狙い撃つ。

ベシベシベシベシッ。

パタパタパタパタ。

「……え?」「」

俺が撃った弾丸は兆弾し、次々に落していく。  
そして、俺の宣言通り4つの景品を倒した。

「……な、なにいいいい!?!」「」

「マジかよ!?!」

「さすがだな……」

「あんなことできるんですか!?!」

「一夏、お前が竜牙さんに勝てるわけなかつた。ただでさえほとんど負ける勝負をしない竜牙さんにだ」

「さーて、ここから先は一方通行だ。本気を出させてもらつぜ」

俺は二発撃ち、それで弾道予測を行った。  
そして、

「これでフィニッシュだ」

その光景は圧巻としか言いようがなかった。

一発の弾丸が、計11もの景品を一度に倒したのだから。



「な、んだと……?」

「うーん、タイ記録か。最初から狙って置けば良かったな」

「赤字だ……」

射的屋のおっちゃんが絶望を感じている。

「おっちゃん、このぬいぐるみだけ貰っとくぞ。後は返す」

「……兄ちゃん、どういうつもりだ?」

「俺は単に記録を伸ばしただけだ。それに、そんなにあってもいらねえからな」

15個とかいらねえ。

俺は遊び感覚でやってるんだからな。

「さて一夏。明日が楽しみだな?」

「い、嫌だあああ!」

一夏の悲鳴が響き渡った。

「あー面白かった」

「さすがにあれはやりすぎでは？」

「いやーちよつとイラついたので完膚なきまでに叩きのめしたかっただけだ。 それにあれは遊びだしな。 あ、それとこれやる」

俺はさっきのぬいぐるみを渡す。

「ありがとうございます」

「そろそろ花火だけど、どこで見る？」

「あ、それなら私がいい場所を知ってます」

「そうか。 じゃあ案内頼む」

林に入り、林の中を進み、林を抜けると、天窓を開けたように開いている場所。

「ここは私と一夏、束と篝の四人しか知らない穴場です」

「じゃあここに一夏たちも来るよな。 だったら、もっと見晴らしのいい場所にするか」

「え？ どうするんですか？」

「俺のIS神帝のことを忘れたか？ 来い、サーナイト」

「なるほど、わかりました」

「そういうことだ。サーナイト、サイコネシスで俺と千冬を空中に。下からは見えないように空間操作もしてくれ。無理させるが、頼むぞ」

「サーニア」

俺と千冬、サーナイトは宙に浮かび上がる。  
周りの景色がよく見える。

「俺にはこういうことができるんだよ。そもそもポケモンはISの一部であっても、ISではないからな。文句を言われる筋合いはないぞ」

一応釘を刺しておく。

「竜牙さんに何を言っても駄目だとわかってますから……」

「そろそろ始まるかな……おっ、一夏たちが来たようだ」

「一人いませんね。何かあったのでしょうか？」

「そうじゃねえの？ ま、俺たちはゆっくりここで楽しもうぜ」

「そうですね。周りの目も気にしなくてもいいみたいですのね」

サーナイトは本当に役に立つ。

日常でも俺のために仕えてくれるからな。

『い、一夏……』

「ん？ 篤が告白でもするのか？」

『わ、私は、お前がつ、す』

ドーーーーーン！！

『おおっ？ はじまったな、花火！』

「残念だったな、篤……」

「……………ですね」

「綺麗だな」

「そうですね」

夜空を彩る様々な色の世界。  
轟音と共に、暗闇に色を付けていく。

「千冬」

「何でしょう……………！？」

俺は千冬にキスをする。

「竜牙さん！？」

「嫌だったか？」

「そんな訳ありません！　ただ、されるなんて思ってもみなかった  
ので……」

「思い返してみればさ、俺と千冬って付き合い始めてからキスすら  
してねえし、仕事の所為で一緒にい続けることができない。　だか  
らかな」

俺は、言っておきたかったことを言う。

「俺と二人っきりのときくらいはさ、仕事を忘れるよな」

「はい……！」

轟音と共に、俺たちを照らす鮮やかな色。

夜空に浮かぶ影は、華やかな色に彩られ、二人だけの時間を満喫し、  
過ぎていった……。

Side 〱 竜牙 〱 out

第51話 夏祭り〈後編〉（後書き）

どうでしたでしょうか？

自分ではいいのかわからなくなります……。。

## 第52話 一夏臨死体験

S i d e 竜牙

夏祭りの翌日、俺は昨日の宣言通り、一夏をボコすために第三アリアナに来ていた。

「さーて一夏、やるぞ」

「兄貴、どうしても止めないのか？」

「別に止めてもいいぞ？ その代わりに、これからの特訓の内容をお前だけ倍にするけど」

「止めなくていいです。これだけで勘弁してください」

「んじゃ、出て来い、カイリユー、フライゴン、ボーマンダ、ガブリアス、オノノクス、サザンドラ！」

出てきたのは6匹のドラゴンポケモン。  
全員上位クラスのポケモンたちだ。

「えーつと兄貴……？ 皆滅茶苦茶強そうなんですけど……」

「普通に強いぞ。お前なら一匹と互角の戦いができるんじゃないか？」

ドラゴンタイプはどれも強力な奴ばっかだからな。

「……俺、今日死ぬかもしれない……」

「安心しろ。　そういうセリフを言って死んだ奴はいないから」  
ほとんど死なないからな。  
殺すつもりなんてないし。

「じゃ、始めるから。　ちなみに、ゼクロムの力は使えんからな。  
30分逃げ続けるよ。　じゃ、開始」

「え？　ちよつ、まつ！」

『『『ギヤオオオオオ！』『』』』

開始早々一夏に襲い掛かる、“10万ボルト”、“火炎放射”、“龍の息吹”、“破壊光線”、“龍の波動”、“悪の波動”。  
いくら全員的能力を七割ほどに落しても、これだと相当やばいんじゃないか？  
やらせている俺が言うのもなんだが、これはエグい。

「マジでこれは死ねる！　ぎゃああああー！！」

次々と襲い掛かる攻撃の嵐。  
一夏はひたすら逃げている。

「五分経過。　後二十五分。　頑張れよ」

「まだ五分！？　ちよつとマジでヤバイー！！」

「全員能力を五割まで落してやるから。　ファイター」



「最後が棒読み!? 兄貴、俺を殺さないでくれー!!!」

「殺さないから大丈夫ー。 お前殺すと千冬が悲しむしー」

俺は神帝を操作し、リミッターを加える。

加えた瞬間は一瞬止まったが、すぐさま攻撃を再開した。

「頑張つてー。 逃げ切らないとこれからの特訓の内容を濃くするからー」

「何イイイ!? 絶対にやられてたまるかああああ!!!!」

逃げてばかりだった一夏は、攻撃もするようになった。

数を減らそうって魂胆か。

まあ、能力を五割に抑えた分、体力や防御も落ちてるから妥当か。

「十分経過。 残り二十分」

あれから一夏はなんとガブリアスを倒した。

“破壊光線”を撃つた後の僅かな隙を狙って倒したのだ。

あの狭い空間では六匹中で一番遅いカイリユーか、飛べないオノノクスが先に倒されると踏んでいたんだが、まさかガブリアスを倒すとはな。

素早く、一撃が重いガブリアスがやられるとは思っても見なかったな。

これも特訓の成果なのだろう。

「一夏に朗報だ。後二匹倒すことができれば、その時点で終了にする」

「ま、マジか。 やってやる……!!」

この十分でかなり体力を消耗したようだ。

まあ、次々と襲い掛かってくる複数の遠距離攻撃に加えて、オノノクスとガブリアスの重い近接攻撃。

様々な要素が加わり、疲労感が増幅されている。

一夏がどこまで持つかな。

『『『ギヤオオオオオ!!』』』

「こいつらは化け物か!?!」

どちらかと言うと化け物に部類されるだろう。

「つりゃああああ!!」

一夏、頑張るねえ。

一夏はあれから一匹も減らすことができずに倒された。

「一夏、生きてるか？」

「……………」

現在、一夏はうつ伏せで、地面に倒れている。

「返事がない。ただの屍のようだ」

全く反応をしない一夏。

「冗談は置いといて、お前、よくあそこまで耐えたな。結果的には駄目だったけど、お前の奮闘に免じてこれからもいつも通りの特訓だから。まあ、お前が成長するから内容も濃くなってくけどな」

一夏は頑張つて抗い続けたが、開始から十七分頃にボーマンダの“火炎放射”を受け、体勢を崩し、落下していたところに“龍の舞”で強化されたオノノクスの“ドラゴンクロー”が直撃し、一夏はそのまま意識を失い、それから数十分後に意識を取り戻して今に至る。

「（ピク）」

お、少しだけ反応した。

「お前があそこまでやれるとは思わなかった。今日はこれで終了だ。タブンネ、“癒しの波動”」

俺はタブンネを呼び出し、一夏を回復させる。

「うう……」

癒しの波動を掛け始めて約一分。

ようやく言葉を発せる用になるまで回復したようだ。

「もう少し大人しくしてろよ。動けるようになるまで回復させるから」

それから数分後、動けるようになった一夏は俺に文句を言ってきた。

「兄貴！ あれ、本当に死ぬかと思ったんだぞ！？」

「だから死なないようにリミッター掛けてたし、第一、非殺傷設定があるから余程のことがない限り死なないから。今生きれてるんだからいいだろ」

「よくねえよ！！」

「じゃあ次は非殺傷設定解除してリミッターなしでやる？」

「心の底から遠慮します」

「冗談だから土下座は止める。さっきも言ったけどお前が死んだら千冬が悲しむからそんなことはしない」

俺が冗談で言ったら一夏は即行で土下座をしてきた。  
俺は土下座をする速さに驚いた。

「にしても千冬姉が兄貴と付き合ってたなんてな。驚いたぜ」

「誰にも言うなよ。言ったら非殺傷設定は解除しないが、リミッターなしでマジでやらせるから」

「お、おう。何があっても言わねえ」

「ちなみに、俺の彼女はあの二人以外にも二人いるから」

「嘘お！？ マジか！？」

「おう。マジだ」

一夏は部屋に戻ってからはベッドに倒れこみ、そのまま眠りに着き、俺は神帝の調整をしてから、千冬と話をしたりしていた。

結果、その日は、一夏が初めて臨死体験をした、記念すべき(?)一日だった。

S i d e 〱 竜 牙 〱 o u t

第53話 実家に帰郷〈前編〉(前書き)

お掃除回ですね。

第53話 実家に帰郷へ前編

Side 竜牙

「ここに来るのも久しぶりだな……」

「そっやね……」

「ここがはやてちゃんのお家ですかあ」

俺と姉貴、ついでにツヴァイも今、昔住んでいた家の前に来ていた。俺は小学校を止めてから、姉貴は父さんと母さんと消えてから、この家には一度も来ていない。ツヴァイに至っては初めてだ。

俺と姉貴は懐かしの実家に思い耽っていた。俺たちがここに来た理由。

それは、子供のときに気づかなかった物があるか調べるため、それと、おそらく汚くなっているだろう家の中を掃除をするためだ。

「さて、入ろうか」

「ああ」

姉貴が鍵を開け、懐かしい家の中が見える。

今まで掃除をしていなかったため、くもの巣とかがあたりに見えた。

「これは随分と汚くなったもんやなあ……」

「ここまで汚くなっているとは、さすがに予想外だ……」



「二人で掃除するには少しキツイなあ……」

「ポケモンを出して手伝わせる。かなりの数を出せば一日で終わるだろ」

「……はやてちゃん？ 今リインを数えてませんでしたね？」

恒例のサーナイトや、ピカチュウなどの小型のポケモンたちを総動員で掃除をすれば一日で終わるだろう。

……ツヴァイの言ったことは気にしないでおう。

「さ、掃除を始めようぜ」

「せやな。じゃあ竜牙、任せたで」

「了解。出て来い」

神帝から放たれる光。

そして現れるおよそ20匹のポケモンたち。

「4匹の部隊を5つ作って、掃除の手伝いをしてくれ」

『『『シャアアア！』』』

俺がそう言うと、あっという間に部隊分ができた。

凄い団結力？ 統率力？ だ。

「ピカチュウ隊は二階の廊下の床拭きを、バリヤード隊は一回の床拭きを、チラチーノ隊は食器や小物、置物を拭いてくれ。ドレディア隊は一階の窓を拭いてくれ。サーナイト隊は俺と姉貴のサポ

トを頼む。 全員、早く綺麗にして終わるぞ！」

『『『シャアアア！』』』

俺が指示をすると、各々動き出した。

「……凄いな」

「……凄いですね」

「何が？」

「ポケモンたちの動きや。 皆竜牙の指示に従って動いておる。それだけ信頼されとるみたいやな」

「まあ、俺が産みの親だし、そういうもんじゃねえのか？ 俺たちも掃除するぞ」

「じゃあ、まずは私たちの部屋をやるか」

「わかった。 サーナイトとラルトスは姉貴の指示に従ってくれ。エルレイドとキルリアは俺を手伝ってくれ」

サーナイトたちは肯く。

ちなみに、サーナイト隊のメンバーはラルトス進化の面子だ。

「姉貴、あまり無理させるなよ」

「わかってるわ。 それにこっちはリインもおるしな」

「じゃ、さつさと片付けますか」

俺は二階にある自室へと入った。

埃やくもの巢などがあるが、それ以外は何も変わらない部屋だった。

「ま、当たり前か。よし、エルレイドは天上の方からくもの巢を取っていつてくれ。キルリアは窓を拭いてくれ」

俺は机や本棚にかぶった埃を落として行った。

「うわっ、汚ねっ」

……汚かった。

S i d e 〱 竜牙

S i d e 〱 姉貴

「うわ〜懐かしいなあ……」

私は自分の部屋でそう呟いた。

昔使っていた部屋。

埃などで見ていられないほど酷い汚れ様だけど、懐かしいものは懐かしい。

「ここが昔のはやてちゃんお部屋ですか。本ばかりですね」

「そないことはどうでもええやろ。ささ、掃除や掃除！ 午前中

には父さんと母さんの部屋も掃除するから急ぐで!」

「はいです!」

『はやく様、ご指示を』

「!?!」

「どうかしましたか? はやくちゃん」

「今頭の中に声が響いてきたんやけど……」

『それは私です。 サーナイトです』

「サーナイト!? どないなつとんのや!?!」

『テレパシーです。 私はあなたの脳に直接話しかけております。 マスターのご命令です。 はやく様、ご指示を』

「わかった。 サーナイトは窓と天上を、ラルトスは壁と床、お願いや」

『了解しました』

「リインは私を手伝ってや」

「はいです!」

まず私は机を拭き、本を叩いたり、引き出しの中を拭いたり、久しぶりの本格的な掃除をした。

S i d e は や て ー o u t

S i d e ー 竜 牙

「ふゝ、俺の部屋は綺麗になったな」

俺は額の汗を拭いながら言う。

「姉貴ゝ！俺の部屋は終わったぞ！」

「こつちもそろそろ終わりそうや！」

「じゃあ俺は一旦下の様子見てくる！」

「わかった！」

俺は下の階を見に行く。

二階の廊下はピカチュウ隊が綺麗に拭いたので、綺麗になっている。ここをやり終わったピカチュウ隊には別の仕事を任せた。

「おー、綺麗になって来てるな」

皆一生懸命にやってくれたのだろう。

入った頃の汚い家が、マシになっていた。

「これなら予想よりも速く終わるかもな」

そんな予感がした。

S i d e へ 竜 牙 へ o u t

第54話 実家に帰郷へ中編 (前書き)

終わらなかった……。

第54話 実家に帰郷へ中編

Side ㄱ 竜牙

「俺は父さんの部屋を掃除するから、姉貴は母さんの部屋頼むわ」

「任せとき。何か見つけたらすぐに教えてや」

「了解。姉貴もだぞ」

「わかつとる。ま、早く掃除終わらせよ」

「そうだな」

俺は父さんの部屋に入る。

「久しぶりに見るが、やっぱり本の山だな……」

俺の両親はほとんど知られてはいないが、凄い開発者だった。

特に父さんは第二世代が主流の時から既に第七世代の設計図を考案していた。

母さんも開発者で、ポケモンたちの考案者だ。

二人揃って途轍もなかった。

その所為か、家には様々の本がある。

特に父さんの部屋には、家にある本の半分以上がある。

「何かあるかもしれないし、しっかりやるか」

俺は掃除を始めた。



「竜牙、ちょっと来て〜」

俺たちが親の部屋を掃除をしていると、母さんの部屋から姉貴の聲が聞こえてきた。  
とりあえず母さんの部屋に行くと、

「何だ姉貴。何か見つけたのか？」

「見て見て竜牙！ アルバムやで！」

アルバムを見つけて俺に見せ付けてきた。

「掃除をしろ！ アルバムなんか後で見ればいいだろうが！」

アルバム見て眼輝かせているし。

「アルバムは後！ 今は掃除をしろ！」

俺は父さんの部屋に戻る。

「本の整理でもしよう……」

部屋の掃除は終わったので、今度は本の整理だ。それでまた部屋が汚くなるが、汚れきった部屋で数多の本を整理するのは無理だ。

「うげえ、すげえ埃だな……」

いくら見える埃を取っても、本を叩けば埃は出てくる。部屋よりも本の整理の方が時間が掛かりそうだ。

Side～竜牙～out

Side～はやて～

「あんな言わんでもええと思っんやけどなあ～」

アルバムを見つけて竜牙に教えたら怒鳴られてしもった。

「今はお掃除の途中なんですから、アルバムは後で見ればいいじゃないですか」

「むーリンまで言っん？」

「はやてちゃん、今はお掃除ですよ？ 何か見つけたらと言ってもっと重要なものこのことのはずですよ？」

「仕方ない。真面目にやるっ」と

「初めから真面目にやっってください!」

「サーナイター、本棚浮かせて」

「流さないでください!」

「ちょっとリイン、うるさいで」

「はやてちゃんの所為ですからね!」

いつの間にかツツコムようになったのう……。

「私は吏員の成長が嬉しい!」

「な、何言ってるんですか? はやてちゃん……」

「さ! 掃除掃除!」

「よくわかりませんが、真面目にやる気になったならそれでいいです……」

リインが何か言ってるけど、気にせんと」。

Side〜はやて〜out

Side〜竜牙〜

なにやら隣の部屋が騒わがしかったようだが、気にしないで置こう。

「ん？　なんだこれ」

本を整理していたら、本の中に挟まっていた紙を見つけた。

「……ユニゾン型のISの設計、できてたんだ」

俺が見つけたのはユニゾン型ISの設計図。

俺がユニゾン型について考えたのは二、三年前だったのに、父さんはそれよりも前に考え付いていた。

「やつばすげえな……」

父さんの発想力には感服する。

「まだあるかもしれないな。　探そう」

俺は本を探すペースをさらに上げる。

もしかしたら、まだ俺が考え付いていない技術があるかもしれないから。

「……これは第三世代のだな。　これもか……」

探してみれば結構あった。

と言っても、ほとんどが第三世代や第二世代のものであったが。

「父さんの頭はどうなってんだ？　世界が第二世代の開発してる時期だったはずなのに……」

しかもそのころにはコアまで作れていたし。  
あの人たちはやっぱり天才だ。  
父さんに至っては束を超えるほどの。

「……どこにいるんだ、父さんたちは……」

これほどの頭を持った二人が、あの馬鹿げた頭脳を持つスカリエツ  
ティに狙われている。

スカリエツティの目的と、なぜ俺を狙うのか、気になって仕方がな  
い。

「竜牙、いいもんあったぞ」

「！もしかしたら……」

俺は期待を胸に、母さんの部屋に入った。

「姉貴、いいもんって何だ？」

「これやこれ！ ISの武器の設計図や！」

「母さんの部屋にもあったのか。母さんは武器か……」

「母さんもってことは、父さんの部屋にもあったん？」

「ああ。父さんに至っては機体についてだった」

「へー。やっぱり凄いなあ、父さんと母さんは」

「同感だ。俺、続きしてくるから」

「了解。何かあったら教えるで」

「頼む」

俺は父さんの部屋に戻り、散策を開始した。

「これが最後だな」

山ほどある本の山を一冊一冊確認し、挟まっているものがないか探し、見つかった設計図の数は数十に達し、中には俺の役に立ちそうなものもあった。  
スカリエツティが使っていた技術についてもあった。

「無かったか。全部に挟まってるわけないし、当たり前か。姉貴はもう終わってるよな」

俺は姉貴がいる母さんの部屋に入った。

するとそこには、アルバムを熱心に見る姉貴とツヴァイの姿があった。

「姉貴、こっちは終わったんだが、何してんだ？」

「アルバム見てるんよ。昔の竜牙可愛かったな」

「母さんの部屋の掃除終わってたんだよな？」

「終わっとるよ。アルバムが気になって仕方なかったんよ」

「はあ……。もう昼過ぎだぞ。飯、どうすんだ？」

「んー、今から作るか」

食材は買ってきてあるから大丈夫だな。

「何作るんだ？」

「お姉ちゃんに任せなさい。竜牙は休んでてええで」

「んーじゃ、任せる。姉貴は料理美味しいな」

「竜牙ほどじゃないけどな」

「そうか？」

「そつや。女としては傷つくんやで」

「なんか知らんがごめん」

「ま、今から作るから休んでてや」

「了解」

結構楽しみだ。

姉貴は小さい頃から料理美味かったからな。

昔の俺はまったくしなかつたしな。



「おー綺麗になつとるもんやね」

下は下で綺麗になつてるようだ。  
これは予想以上に早く終わるな。

S i d e ㄱ 竜牙 ㄱ o u t

第54話 実家に帰郷へ中編 (後書き)

夏休みはまだ続きます。

あと数話は書きます。

## 第55話 実家に帰郷〈後編〉

Side 〱 竜牙

「あのガジェットに積んであったのはこれだったのか……」

福音の暴走のときにガジェットに積んであったもの、それがA E F。アンチエネルギーフィールド I Sのシールドエネルギーを拒絶するみたいだ。

で、これはそのI Sの世代に対して効果も変化するようだ。

俺のときは毒のようにじわじわとエネルギーが削られていった。おかげで、神帝の禁じ手を使う羽目になった。

「こいつの対策は必須だな……」

A E Fは、第三世代未満に至ってはI Sの起動を無効化するほどだ。小さいガジェットなら効果範囲が小さいため、強力な攻撃でなら破れるが、俺が戦った大型のガジェットの効果範囲は広く、あいつが相手ならセシリアたち第三世代型のメンバーは確実に死ぬ。

「あいつも、父さんも、厄介なものを考えてくれたな……」

そもそも、A E Fを考案したのが父さんだとして、それを使っているスカリエッティは、これを同じく考えてのか、もしくは、父さんから奪ったか。  
謎だ。

「竜牙」。 「ご飯できたで」

「わかった、今行く」

俺は思考を中断してリビングに向かった。  
姉貴が作ったご飯はオムライスにオニオンスープと、簡単なものだった。

「いただきます」

一般的なものだけど、味はいい。

「やっぱり美味しい」

「最近はあまり作らなくなったけど、今までやってきとったから。竜牙に比べれば見劣りするかも知れへんけどな」

「そんなことはない」

「そうですねよ、はやてちゃん！」

「そう言えば竜牙、なんでリインは食べれるん？ 不具合とか起きんの？」

「不具合は起きない。俺の造ったユニゾン型ISは、俺の神帝のポケモンたちを参考にしている部分があるから、そのためだと思う。現にポケモンたちは物を食べれるし。食べなくても大丈夫だけど」

「ふーん、ま、食べれるならええか。ちゃんと意識もあるし、仲間外れは可哀想やしな」

「そうですね！」

「ご飯食べたら、残りの掃除しようぜ」

「せやな。まだやってない部屋もあるしな」

「それにまだ探索し終えても無いしな」

「よし、お昼からも頑張ろー！」

「おー！です！」

「皆も頑張ってくれよ」

『『『シエアアアア！』』』

「ご馳走様でした」

「」馳走様です」

「お粗末さまでした」

俺は食器を持って立ち上がる。

「あ、それも私がやるからええのに」

「これくらいやれさせてくれ。俺の気が済まん」

「そう？　せやったらええけど」

「ツヴァイはそこに置いておけばいいぞ。無理しても持てんから」

「すみませんです……」

「気にせんでええで。　ラインはこんな小さいんやからな」

食器を洗い終え、今は少し休憩をし終えたところだ。

「んじゃ、客間とかの残りをやるか」

「そうやね。これからは定期的に掃除に来んな」

「ああ。またこんな大掃除はゴメンだしな」

毎回一日掛かる掃除なんてしたくない。

「よし、終わらせるか」

「せやな。場所割りはどうするん？」

「じゃあ……」

「ふー、終わったな……」

掃除の際、無駄に生命力のあるGが出て大変だったりもしたけど、四時ごろに掃除を終えた。  
なぜか父さんと俺の部屋にはいなかったのだけど、それが謎だ。

「姉貴ー、終わったかー？」



「あとちょっとやー」

「手伝い、いるかー？」

「大丈夫やー」

なら、片付けでもしとくか。

「エルレイド、キルリア、お疲れ。戻って休んでくれ」

エルレイドとキルリアが肯くと、神帝へと戻った。

俺は掃除を終えてゆっくりしている皆に声をかける。

「皆、今日はお疲れ様。助かった。戻ってゆっくりしてくれ」

各々の反応を示したポケモンたちは、神帝へと戻っていった。

本当に助かった。

「竜牙ー、終わったでー」

「そうか」

姉貴とツヴァイ、二人を手伝っていたサーナイトとラルトスが戻ってきた。

「サーナイト、ラルトス、お疲れ。ありがとう、助かった。戻ってゆっくりしてくれ」

「ほんまにありがとうな」

サーナイト、ラルトスも戻った。

「綺麗になったな」

「せやな。朝と比べると見違えるほどにな」

「来たばかりの時はゴミ屋敷と例えるのが妥当でしたしねー」

「姉貴、先にシャワー浴びてきなよ。俺は出てきたものの整理するから」

「そうか？ だったらお言葉に甘えさせてもらおうかな。リインも行くで」

「はいです」

姉貴とツヴァイはシャワーを浴びにいった。

「ふー、にしても、これだけあるとはな……」

父さんと母さんの部屋から出てきたもの、それ以外の場所に隠されていたものを合わせると、百を超えていた。

機体について、武装について、その他、それぞれの用途種別に分ける。

割合は機体：武装：その他＝5：4：1だ。

「まずは機体から見てくか……」

機体関係のものは総数の半分を占め、その半分以上が第三世代兵器だが、これは売れる。

第四世代以上のものもあるが、途中のものもある。

割合で言えば、第三世代：第四世代：第五世代以上 $\parallel$ 6：3：1だ。

「まったく、IS開発者の束が第四世代を考案したのがいつかは知らんが、父さんはとんでもない頭脳だな……」

応用できるものも見つけた。

これは便利だ。

「次は武装系だな。お、BT兵器も衝撃砲もあるじゃん。シャルの武装少ないし、増やすか」

母さんが考えたものには見慣れたものもあった。

シャルの特技である高速切替ラビット・スイッチを使うには、今のラファールの武装は少ないからな。

まだ拡張領域も開いてるし、少なくともあと5つは入れれるだろう。

「さて、残りは……」「竜牙ー、出たでー」……後にしよう」

俺は残りを見ようとしたが、姉貴が出たので中断し、着替えを持って風呂場に向かった。

「あーさっぱりした」

「そう言えば竜牙、今日はどうするん？」

「何が？」

「泊まってくのか、学園に戻るのかってこと」

「俺としてはどっちでもいいんだけど」

「じゃあ、久しぶりに一緒に寝よ？」

「それは拒否する」

「冗談や。そんなことしたら千冬さんやなのはちゃんたちに殺されちゃうからな」

なぜだろう、否定できない。

「で、どうするんだ？」

「久しぶりの実家やから泊まって行こうと思ってな」

「じゃあ泊まるか。一泊して学園に戻るとするか」

「じゃあ晩御飯の買い物行ってくるわ」

「一緒に行くか」

「せやな。リインは鞆の中に隠れててな」

「ユニゾン型のISは一般的には知られてないからな」

「わかったです」

それから俺らは一泊して、IS学園に戻った。

Side 〽 竜牙 〽 out

第55話 実家に帰郷〈後編〉(後書き)

夏休み偏はあと一、二話で終わらせる予定です。

## 第56話 修復プログラム

北アメリカ大陸北西部、第十六国防戦略拠点。通称『イレイ地図に無い  
基地』スト。

そこに一人の……否、一つの影が平然と進んでいた。

「な、なんなんだ！？ あの影は！？」

「こちらの銃撃が一切効かない！」

「応援はまだなのか！？」

その影たちに、軍人たちは翻弄され、大混乱になっていた。

『ナターシャ・ファイルスを出せ。 奴がここにいるのはわかっている』

影から放たれた声。

それは、『シルバリオ・ゴスヘル銀の福音』の操縦者であるナターシャ・ファイルスを要求してきた。

「どんな手を使っても奴を進ませるな！ 何があっても彼女の元に行かせてはならん！！」

その声で、さらに銃弾の量が多くなるが、影に当たる前に地面に落下する。

『もう一度言う。 ナターシャ・ファイルスを出せ』

今度は怯ませるために覇気を纏わせた声。  
それにより、戦意を失った軍人もいるようだったが、ほとんどが射撃を、砲撃を、爆撃を止めない。

『……仕方がない。強行手段を取らせてもらおう』

「「「な!?!?!」」」

すると、影を中心に結晶が広がり、軍人の腕を、足を、銃を固定していった。

「なんだこれは!?!」

「動ける者はいないのか!?!」

「応援はまだ来ないのか!?!」

その混乱の中、影以外に動く人影はなくなった。

『出て来いナターシャ・ファイルス。私は貴様と、銀の福音に要があるのだ』

そう告げる影。

しかし反応は無い。

『あまり破壊したくはないのだがな……』

影が少し大きくなり、影がうごめく。  
すると、影に光の矢が突き刺さり、爆発した。



『……出てきたようだな』

「あなたは私に要があるのでしょ？ 私はあなたに従うから、他の皆には手を出さないで」

『私は手を出すつもりなどないのだが』

実際、その影は相手を拘束しただけだった。軽く基地を破壊しようとはしたが。

『お前は私に従うのだな？ ならば私に近づけ』

「……わかったわ」

「駄目だ！ 私たちのことはいいからお前は逃げる！」

「お前ほどの人間を失うわけにはならない！」

『余程信頼されているようだな』

「そうみたいね。そう言えばあなた、あの子にも要があるみたいだけど、どうするつもりなの？」

『それはここで話せない』

影とナターシャが会話をしているうちに、ナターシャは影のすぐ側にまで近づいていた。

「それで、私はどうすればいいの？」

『どつもしなくていい』

影がそう告げると、影がナターシャを包み込み、その場から消えた。

消えた影は薄暗い空間にいた。

「あなた、何をしたの？」

『そんなに警戒しなくても大丈夫ですよ、ナターシャ・ファイルスさん』

影から抜け出されたナターシャは影を警戒する。  
だが、その影は先ほどまでの口調とは違っていた。

「お久しぶりです、ナターシャ・ファイルスさん」

「あなたは！」

影が消え、そこにいたのは銀髪の少年、八神竜牙であった。

「あの影とかはどうやっていたの？」

「あの影と結晶は俺のISだけの特徴を使ったもので、銃弾やら何やらが効かなかったのは、俺に当たらないようにさせていました。

詳しいことは話せませんね」

「それは、誰にも話せないからなのか、それとも、私がアメリカの軍人だからかしら？」

「両方です。俺のISはオーバーテクノロジーの塊ですからね。

あまり今でも五月蠅い国際IS委員会ですけど、これ以上五月蠅くなっても困るので。まあ、俺が心から信頼している人にはある程度教えてありますね」

「そう……。で、何の要かしら？　まさか愛の告白？」

「違いますよ。さっき言ったでしょ、あなたと福音に要があるって」

そう言って、竜牙は一つのUSBを取り出した。

「それは？」

「福音の修復プログラムです」

「あの子の？」

「ええ。俺はあなたには銀の福音が必要だと思ったので、勝手に作りました」

「……私のために、わざわざ作ったの？」

「はい。少ししか見てませんが、あなたは悪い人ではないと感じたのと、償いですかね」

「何の償いなの？ 心当たりは無いんだけど……むしろ私の方が思いつくんだけど……」

「あなたみたいいな美人さんが、俺なんかに好意を持ってくれることは嬉しいですけど、申し訳ないですよね」

「なんかなんて言っちゃ駄目よ。あなたはとても魅力的よ」

「ありがとうございます。でも俺、四股してるんですよ」

竜牙はなのは、フェイト、シグナム、千冬の四人と交際している。

「よ、四股！？ それってどういうことなの！？」

「どっつてそのままの意味なんですけど……。まあ、四人ともなぜか納得して付き合っているんですけど……」

「君が魅力的なのはわかるけど、納得して四股を公認する気持ちは流石にわからないわ……」

「それは俺も同感ですよ。まあ、彼女たちがそれでも俺を愛してくれるなら、俺はそれに応えるだけです。実際、俺は皆大好きですから」

「変わってるわね」

「誰が何と言おうとも、俺は俺の信じるものを貫くだけです。今はそんな話どうでもいいんで、この修復プログラム、受け取りますか？」

「これを使えばあの子はまた空を飛ぶことができるの……？」

「はい。出来は完璧のはずです。あ、一つ忠告が。それを解析しないでください」

「……した場合はどうなるのかしら？」

「まず、プログラムそのもののデータが消滅、その後、解析に使用しようとしたPCやらが破壊されるようになりました。解析さえしなければ危険はありませんよ」

「そう、わかったわ。ありがとう、これでまたあの子と飛べるわ」

「いえいえ。では俺はこれで帰ります」

「本当にありがとね」

「はい。あ、俺のことは他言無用でお願いしますね。色々と面倒なんでね」

「わかったわ」

「では、あなたをイレイズドに飛ばします。また会えるといいです  
ね」

「そうね」

そうしてナターシャは消えた。

「……さて、帰るか」

そして、竜牙も消えた。

第56話 修復プログラム(後書き)

これで夏休み編終了のつもりです。

## 第57話 新任教師

Side ㄱ 竜牙

「今日から新任の先生が三人も来ました」

始業式にて、司会の先生がそんなことを言った。すると、周囲がざわつき始めた。

まあ、新任の先生が三人も来るんだからざわつくわな。

「っ!?!」

ステージ上上がった三人の人影を見て、俺は度肝を抜かれた。なぜなら、その三人は俺の彼女たちだったからだ。

「高町なのはです。 皆さん、よろしくお願いします」

シンプルだな。

「フエイト・T・ハラオウンです。テスタロッサ 中には知っている子もいると思います。 よろしくお願いします」

臨海学校で色々あったからな。

「シグナムだ。 ISの対戦相手にならいつでもなるう。 これからよろしく頼むぞ」

戦鬪狂宣言?

ってそんなん思ってる場合じゃないぞ!?



俺知らんかったぞ！？

てか確実に面倒だぞ！？

逃げるか？

いや、無駄か……。

クソッ、逃げる術がみつからねえ……。

「こちらの三人の先生は皆、専用機持ちだそうです。シグナム先生が仰ったように、模擬戦を申し込んでみるのもいい経験になるでしょう」

腹を括るしかないか……。

集会が終わり、現在は教室。

「えらいことになったな、なあ、竜牙？」

「姉貴、わかってて言ってるだろ……」

全員一年の担当になった。

唯一の救いは、一組ではないことだ。

なのはは三組、フェイトは四組、シグナムは二組だ。

「はあ……」

別になのはたちが来るのはいいんだよ。

前のフェイトのことがあったから、それが嫌なんだよ……。

「悩んでても仕方ないで。腹括れや」

にやにやと笑みを浮かべながらそう告げる姉貴。

「面倒だ……」

俺はどんどんネガティブになっていった。

俺は机を枕に寝ようとしていた。

「八神竜牙君って今いるかな？」

「あれ？ 高町先生？ 八神君に御用ですか？」

あー来たよ……。

「うん、そうだよ」

「あれ？ なのは？」

「あ、フェイトちゃん」

「何だ、お前らも来ていたのか」

「シグナム」

なんか集合している気がする。

「竜牙いる？」

「先生方、皆八神君に？」

「うん（ああ）」

あー、確実に集合してるな……。  
確実に面倒ごとになるよな……。

「お兄ちゃん、なのはさんたちが来たよ」

「……わかつてる」

俺は立ち上がり、なのはたちのいる廊下へと向かった。

「「「竜牙（君）！」」」

三人は、俺を見た瞬間に飛びついてきた。  
避けるわけにもいかず、俺は脚を踏ん張る。

「くっ……」

三人の体重＋ の衝撃を何とか受けきった。

「だから何度も言っているだろう……飛びつくなんて……」

「久しぶり！ 竜牙君！」

「どっ？ 驚いた？」

「私たちとて、お前と一緒にいたいのだ」

「てか、俺知らなかったんだけど？」

「言っただけだからね」

「姉貴と千冬は絶対に知ってたよな……」

後で問い詰めよう……。

「俺たちもいるぜ、クリエイター」

「あたしもな」

「私もいますわ」

「ソニック、アギト、ラクスか」

なのはたちのユニゾン型ISの三体。

夏休みに渡した者たちだ。

もちろん、千冬にも渡してある。

「あ、あのー八神君？」

あー来たよ。

俺と付き合ってるフェイトを知ってるんだから、フェイト以外の女性に抱きつかれてほとんど動じていない俺に疑問に思ったのだろう。

「えっと……先生たちとはどういう関係なの？」

「どっつて言ってもな……」

一般的に四股なんて駄目だからな。  
言いづらんだよな……。

「皆竜牙の彼女だよ」

「そうだな。ここにはまだ一人いないが、竜牙ならば許される」  
それでいいのか!?

「そうだね。竜牙君なら何でもOKだよな」

「せやな。竜牙ならハーレム築いても文句は言えへんな」

「姉貴!? いつの間に?」

「いやー、なのはちゃんたちが竜牙に飛びつくもんやから、つい見入ってしまったわ」

「……つまりは最初から見てたんだな」

「せやけど?」

「姉貴、なのはたちも、後で話がある。で、あと少しで授業だからなのはたちは戻れ」

「はい」

「またね、竜牙」

「また来るぞ」

なのはたちは各々の教室に戻っていった。  
俺は自分の席に座り、女子に囲まれた。

「ねえねえ！ どういうことなの?!」

「テストロッサ先生と付き合ってるんじゃないの?!」

「高町先生やシグナム先生とはどういう関係なの?!」

俺は人影を見つけた。

「お前ら、ご愁傷様」

「お前ら、もう授業だ。席に着け」

スパンスパンスパン……

千冬の出席簿が火を噴いた。

俺は女子に囲まれたので、適当に話して、現在俺の部屋にはなのは、フェイト、シグナム、千冬、姉貴がいる。ユニゾン型のツヴァイヤソニックたちも集合している。

「まず、姉貴に千冬、このこと知ってただろ？」

「ええ、まあ……」

「知ったよ」

「俺に一言言っておいてもよかつたんじゃないのか？」

「それは私たちが口止めしておいたからなんだよね」

「サプライズだよ」

「……次になのは、ヴィヴィオはどうした？」

「今はシャマルさんに預けてあるよ」

「ここに来るってことは、ヴィヴィオをずっと預けっぱなしになるんだぞ？ 流石にシャマルさんに預けっぱなしってのも悪い。それに、まだ俺は上手くなつたシャマルさんの料理を食べていない。」



「それが一番の心配だ」

「シヤマルの料理は本当に上手くなったぞ。昔とは違い、ちゃんと食べれるようになった」

シグナムがそういうなら本当にそうなのだろう。

「そうか……。それならまだいいか」

シヤマルさんはどうやっていたのか、料理をすると劇物が生まれていた。

「ヴィヴィオは心配だが、まあこれならいいか……」

「あ、ヴィヴィオは今はシヤマルさんの家にいるけど、学園長に許可を貰えばここで面倒を見れるよ」

「なら、俺も掛け合ってみる。ヴィヴィオにはお前が必要だからな」

ヴィヴィオは捨て子のようで、ボロボロで一人のときになのはが拾ってきた。

それから、ヴィヴィオはなのはに懐き、俺にも懐いた。

だから、なのはがいないと駄目なのだ。

過保護だとか、甘いとか思われても仕方がないが、ヴィヴィオには幸せになってほしい。

「フェイト、アルフは？」

「シヤマルさんに預けてあるよ」

「シャマルさんに負担大きくないか？ ヴィータにザフィーラにアルフにヴィヴィオ。女手一つではきついだろ？」

「そこまで変わらないだろう。私はここに来たし、私がいた位置にヴィヴィオとアルフが入ったんだ」

「俺がいたいのはそういうことだけど、そうじゃない。一番手が掛かるのはおそらくヴィヴィオだ。ヴィヴィオが一度泣き出したらそう簡単には泣き止まんぞ？」

「確かにね、なのはでも泣き止ますのは大変だったしね」

「シャマルさんでは大変だろう」

「ヴィヴィオをここで面倒が見れたらそれがいいんだが、まだわからないしな」

「最悪、ポケモンを送るか」

サーナイトは送りたくないから、キルリアとかドレディアとかなら大丈夫だし。

「はあ……、やっぱり面倒なんだよな……」

「ごめんね、竜牙。連絡の一つでも入れておけばよかったかな…

…」

「謝らんでもいい。俺だってお前らと一緒に入れるのは嬉しいかな。ただ、問題はあの女子共だ。男に餓えてるのか知らんが、

しつこいぞ。　フェイトとの関係がばれたときがそうだった」

「あの時は潔く話してたな」

「見てたのかよ……。　まあいいや。　あいつらは話せば引くが、それでも視線がしばらく集中するんだよ」

あの時は話したらそれ以降はほとんど訊かれなくなったな。

「もしも訊かれたらできるだけ答えてくれ。　ただ、内容は考えてくれ。　それによりまた面倒ごとになるから」

「」「了解」「」

「で、千冬、お前は どうするんだ？　こいつらは話す気満々だけど」

「どうしましょうか……。　私はそういうのには無縁のイメージが定着していると思われんですよ」

「まあそうだな。　クールビューティーってイメージだもんな」

「ですので、あまりこのイメージを崩したくはないと言っか……」

「ま、千冬は隠しておいて、バレたらそれまでだ」

「そうですね」

「んじゃ、俺は学園長の所行ってくるから」

「あ、私も行くよ」

「わかった」

こうして俺たちは解散し、俺となのはは学園長に相談しに行ったのだ。

結果は許可はおりた。

だが、責任は取らないとのことだった。

S i d e 〱 竜牙 〱 o u t

## 第58話 最強の模擬戦

Side 竜牙

「危なかったな」

「結構ギリギリだったな」

「くう〜悔しい！」

二学期最初の実践訓練は、一組と二組の合同で行われ、一夏は何とか鈴に勝っていた。

「パワーアップしたのに何でギリギリの試合になんのかな〜」

「そりゃあ白式の燃費の悪さがさらに悪化したからだろ」

一夏の白式は第二形態移行して、雪羅に加えて、背部ウイングスラストの大型化により、エネルギーを大量に使用するようになった。瞬時加速のチャージ時間が約三分の一、最大速度が一、五倍になったが、その分エネルギー消費が激しくなったのだ。

「ま、まあ、アレだな！ そんな問題も私と組めば解決だな」

筈の紅椿の単一仕様能力の絢爛舞踏はエネルギー増大の効果を持つ。白式の燃費の悪さを改善するにはもってこいの相手なんだよな。

「何を難しそうな顔をしているか。お前は私の嫁だろう。故に私と組め」

関係ないが、なんでここまでアピールしてるのに一夏は気づかないんだ？

鈍感すぎるだろ。

「ざーんねん。一夏はあたしと組むの。幼馴染だし、甲龍は近接も中距離もこなすから、白式と相性がいいのよ」

「な、何を勝手な……！？ゴホン！それならこのわたくし、セシリア・オルコットも遠距離型として立候補しますわ。白式の苦手距離をカバーできますよ？」

「ええい、幼馴染というのなら私の方が先だ！それに、なんだ。

白式と紅椿は絵になるからな。……お、お似合いなのだ……」

黒式状態だったらシャルのラウエリテ・フレイム真実の炎熱だけどな。

「んー……。でもなあ、別に最近ペア参加のトーナメントとかないしなあ」

「いきなりあるかもしれないでしょうが」

「そのときは　　シャルと組むかな」

「へっ？　僕!？」

カルボナーラを食べていた手が止まる。

「え、えっと、ど、どうしてかな？」

「夏のことだから前に組んだからとかいいそうだな。

「前に組んから」

ブンゴ。

「あ、そう……………」

「それに、俺とシャルに貸してもらってるゼクロムとレシラムが対になってるからな。それと、シャルなら近、中、遠距離全てに対応できるしな」

確かにな。

シャルの特技である『高速切替』で武器の変更にはほとんど時間が掛からないし、レシラムとゼクロムの力は強力で、こいつらがタッグ組んだら止めれるのなんて第五世代以上しかないからな。

「へ、へえ……………」

少し嬉しそうなシャル。

ま、一夏にそういう評価されたら、他の奴よりも嬉しくなるわなあ。現に他の四人は不機嫌そうだし。

「シャルロットさんばかりずるいですわよー！」

「そうよ！ 何でシャルロットばかり特別扱いなのよー！」

……………なぜか文句を俺に言ってきた。

「何で俺に文句を言う。まあいいや。まず、シャルのISは俺

が作り、一夏の白式を作ったのは東。よって、この二つのISはどの国にも属していない。おかげで、俺は自由に改造できる。箒の紅椿も改造できるが、東を説得するのに滅茶苦茶疲れる。現に一夏の白式の改造について聞いたら色々条件を付けられた。だから、東に許可を取らないといけない紅椿の改造はなし。国に所属している鈴たちのISは改造することは出来ない。それにシャルは俺の義妹だ。以上」

これだけ言えば反論はできんだろう。  
見てみると、鈴たちは悔しそうにしている。

「ま、俺はアリーナに行くから」

そんなこんなで昼食が終わり、俺たちは午後の実習のために、アリーナへと向かった。



「やっぱり無駄に広いもんだ……」

俺と一夏専用となつているロッカールームは、二人しかいない所為か凄く静かだ。

だが、ここに俺と一夏以外の気配がする。

一夏が白式の調整をしていると、その気配は一夏の方へと動いていた。

「だーれだ？」

俺が見ている時点でその問いはあれなんだが。

それとコイツ、どこかで見ることがあるような……。

「はい、時間切れ」

「……誰？」

コイツは二年で、俺たちよりも一個上で、水色の髪の毛の女子。本当にどこかで見ることがある気がする。

少し前に、ここではないどこかで。

「八神竜牙君、覚えているかしら？」

「どこかで会ったような気がするんだけどな、色々ありすぎて覚えてないな」

「むう、君たち急がないと、織斑先生に怒られるよ」

膨れっ面になる女子は、そう言った。

「は(え)?」

壁の時計を見ると、すでに授業開始から三分が過ぎていた。

「だあああっ!?! や、やばい! まずい!」

「やっべ! シグナムもいるのに!」

俺はサーナイトを呼び出して、一夏と共にテレポートした。

「……遅刻の言い訳は以上か?」

「竜牙が遅刻やなんて珍しいもんやなあ」

一夏は千冬に言い訳をし、俺はあの女子がどこで出会ったのかを思い出していた。

シグナムは仁王立ちでいた。

「……水色……扇子……ミステリアス……」

あの女子の特徴をぶつぶつと呟く。  
すると、ピンッ！と閃いた。

「ああ！ あいつはロシアであった奴じゃん！」

俺が思い出してそう叫ぶと、シグナムが近づいてきた。

「ロシアで会った女子だな？」

「ああ。 名前までは思い出してはないけどな」

「水色の髪の毛だな？」

「そうぞ。 名前何だっけなあ……？」

「……アイツか」

「なんだシグナム、わかったのか？」

「ああ。 あいつしかいない」

心当たりがあるのかって！

なぜシグナムはそんなに殺気立っているんだ！？

「クフフフフ……覚えてるぞ……更識……！」

物凄く不気味な笑みを浮かべているシグナム。

あの女子に物凄い危機が迫っている気がする……！！

「……八神妹、ラピッド・スイッチの実演をしる。 的はその馬鹿で構わん」

千冬の言うその馬鹿は一夏のような。

「そして八神兄、貴様は私とシグナムと模擬戦をしてもらおう」

マジかよ！

絶対あいつ使うだろ！

ちよっとマジでやらんと殺られる！

「では織斑先生、まずは僕からやりますね」

一夏は半死だろう。

俺は半死どころじゃないと思うけど……。

シャルによる一夏を的にした実習は終わり、次は俺と、千冬、シグナムペアの模擬戦だ。

「行くぞ、竜牙」

「覚悟はいいだろうな？ 八神」

準備万端で、二人ともユニゾン状態だ。

千冬と白桜＋フリード、シグナムとレヴァンティン＋アギト。二人は本気だ。

「はあ……わあつたよ。 だつたら俺も

全力で行くぜ」

殺気を出し、二人を睨む。

その殺気の中てられた生徒たちは、冷や汗を出すもの、震える者など、様々だった。

「『エンペラー  
神帝』リミッター解除。」

『セカンドシフト  
第二形態移行』『アブソリュート  
絶対神』」

俺のISのフォルムチェンジは、元々のスペックに、ポケモンの力  
を上乗せするものだ。

セカンドシフトにより、元のスペックは飛躍的に上昇している。  
総合したスペックだと、元のスペックの二倍以上だ。

「ジユカインフォルム」

使うフォルムはジユカイン。

見た目に変化はないが、スペックは段違いだ。

「セカンドシフトか。わざわざリミッターを外すとはな」

「私は初めて見るな」

「お前ら二人を相手に手を抜けるか」

セカンドシフトしなくても勝てるが、ユニゾン状態だと勝率は七割  
ほどだ。

「さて、やるつか」

『模擬戦、開始!』

姉貴の声で合図され、模擬戦が始まった。

「行くぜ!」

ガキイイイ!

「くっ！ 想像以上の速さだな！」

「私もいることを忘れるなよ！」

「忘れた時点で俺の負けだっつうの！」

この二人を相手に、一瞬でも忘れたら負けは確実だ。

「紫電一閃！」

「零落白夜！」

「くっ！」

シグナムの一撃はまだいいが、千冬の零落白夜……フリードとユニゾンした状態だと、滅茶苦茶ヤバイ。

なぜなら、零落白夜の斬撃が飛んでくる。

飛ばす零落白夜と、普通の零落白夜の二種類がある。

確実に避けないと一気に削られる。

ドラッグ・オーバーブースト  
「変則超加速！！！！」

セカンドシフトして、さらに速くなった状態でのみ使える技で、ドラッグ・ブースト本は変則加速（21話登場）と同じだが、上昇速度が段違いだ。おかげで扱いが難しいけど。

ガギイイイン！ バシイイイン！

俺のリーフブレードと、千冬の雪片零型、シグナムのレヴァンティ

ンがぶつかり合う。

高速で動き、斬りあう俺たち。

見ている生徒は何が起こっているかわからないだろう。

「これで最後だ！ “ギガイんパクト”！！」

その馬鹿げた速度からの全力の体当たり“ギガイんパクト”。  
使用後の反動があるが、上手く決めれば一撃で終わる技だ。

「負けんぞ！ 火龍一閃！！」

「零落白夜！！」

「「「うおおおおお！！！！」」」



「……俺の勝ちだ」

「くっ、いいところまで行ったのだけどな……」

「楽しかったぞ、竜牙。またやろう」

「……き、機会があったらな」

結果は俺の勝ち。

やっぱりこの二人相手にジユカインじゃ少しきつかった。俺たちが地上に戻ると、他の生徒たちからの拍手。

「すげえよ兄貴！ あんま見えなかったけど！」

「流石は竜牙さんだな。 千冬さんをも倒してしまうとは。 見えないときがあつたが」

「先生二人を相手にして勝ってしまうなんて、驚きましたわ。 わたくしも見えないときもありましたが」

「やっぱり強いわね。 半分近く見えなかったけど」

「セカンドシフトできてたんだね。 僕、知らなかったよ。 あと、速すぎて見えなかったりもしたかな」

「いい試合だったぞ、竜牙。 左目でないと見えなかったぞ」

な、なぜ皆見えなかったことを言うんだ？

ま、まあ、流石にあの状態だとまだ少しきつかったけど。

酷いときはなのは、フェイト、シグナムの三人を相手に勝ったからな。

あのかきはセカンドシフトして、伝説級のフォルムでやったんだつたな。

滅茶苦茶疲れたけど。

その後、俺を除いたメンバーで模擬戦をしたりして、全勝したのがシャル、次がラウラ、一夏、鈴、箒、セシリアの順であった。

プライドの高いセシリアは相当シヨックだったんじゃないかな？

Side 〱 竜牙 〱 out



第59話

竜牙VS生徒会長(前書き)

グダグダです。

## 第59話 竜牙VS生徒会長

Side 竜牙

俺と千冬、シグナムの模擬戦があった次の日、SHRと一限目の半分を使つての全校集会が行われた。  
内容は今月中程にある学園祭についてのようだ。

(にしても……)

ここには全校生徒が集まっている。  
それはつまり、この空間にいるのはほとんどが女子。  
これだけの女子が集まると騒がしい。  
てかそれすら通り越して姦しい。

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

おそらく生徒会の役員であろう女子生徒がそう告げると、さっきまでのざわつきが消えていった。

「やあみんな。おはよう」

壇上で挨拶したのは、昨日ロッカールームに来て、シグナムが異様に反応していた二年生だった。

(アイツ、生徒会長だったんだ。あ、だから授業が始まってもあそこまで落ち着いていたのか)

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだ



して投票を行って、上位組は部費に特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれではつまらないと思い

俺の状態に気づいたのか、なのは、フェイト、シグナム、千冬は固まっていた。

特に、千冬以外の三人は青くなっていた。

まあ、そっだよな、だって今の俺、O・H A・N A・S H I するときの顔だろうからな。

「織斑一夏と八神竜牙を、一意の部活動に強制入部させましょう！」

「……ちよつと待とうか、会長さん？」

底冷えするような冷め切った声が騒がしい中でさえ、響く。

その声だけで気圧された生徒もいるらしく、小さな悲鳴が聞こえたりもした。

が、そんなことはどうでもいい。

ちよおおつと、この水色馬鹿にO・H A・N A・S H I しなきゃね……。

「……そのことは俺は了承していないはずだが？」

俺はゆっくりと、確実に更識に近づく。

それと同時に、神帝から光り輝き、エンテイ、ライコウ、スイクンの三匹が現れる。

『『『ガールルウウ……』『』』』

三匹の唸り声。

俺らから放たれる威圧感は、学生程度がそう簡単に耐えられるもので

はない。

気絶する者もいるし、かろうじて意識を保っているものでも顔を真っ青にして震えている。

「ひっ！　だ、だってあなたたちが部活動に入らないからこういうしたのよ！　君たちが部活に入らないから苦情が来てるんだもの！　仕方がないじゃない！」

秀囲気に吞まれた更識は、大量の冷や汗を掻きながら言ってくる。俺も全力でもないにしろ、この威圧感の中でその程度なのは驚きだな。

さすがは裏の人間だ。

「なら、そうならそれで、俺たちに話を通すのが道理ってもんだろうが。　なあ、会長さんよお……？」

エンテイたち三体は、更識を囲み、逃げることは不可能になっている。

俺はあと少しで更識の立つステージに辿り着こうとしていた。

「そこまだ、八神」

俺を止めたのは千冬だった。

千冬たちならこの場でも普通に動けるだろうな。

「流石にやりすぎやで」

「竜牙君、抑えて抑えて！」

「竜牙、気持ちわからなくはないけど、もっと抑えて。　皆が怖



「がつてるよ」

「奴が気に入らないのはわかった。だが、周りのことも考えてくれ」

「……悪い、頭に血が上ってた」

五人に止められ、俺は冷静さを取り戻した。にしても、取り乱すとは、俺もまだまだだな。

「……更識。俺は貴様に勝負を申し込む」

「しよ、勝負？」

「お前が俺に勝てばそれに乗ってやる。俺が勝てば部活に入らない」

「わ、わかったわ」

「千冬、今からアリーナを使ってやる。いいか？」

「……わかった。ただし、さっきので体調を崩した生徒をどうにかしてからにする」

「了解。チリーン、“癒しの鈴”」

心地よい鈴の音が鳴り響き、顔色の悪かった生徒たちは、顔色が少しずつよくなっていく。

しばらくしたら、気絶していた生徒も起きだした。

それからもうしばらく続けさせ、ほとんどの生徒が今まで通りに戻

った。

「これでどうだ？」

「いいだろう。これより、更識と八神の模擬戦を行う。アリーナに移動するものは来い。それ以外の者はここで中継する」

俺と更識、なのはにフェイトにシグナムに千冬に姉貴、一夏たち専用機持ちは移動するようだった。

「さて、更識。 殺ろうか」

今回はセカンドシフトはしない。  
セカンドシフトは第五世代が二人以上じゃないと相手にならないからな。

「ルギアフォーム」

だが、それでも容赦はしない。  
更識もISを起動する。

「『ミステリアス・レイディ』よ」

アーマーの面積が全体的に狭く、小さい。  
それをカバーするように透明の液状のヴェールが形成されている。

(あれは水だな……。 そう言えば、家にあつた設計図にも似たようなのがあつたな)

『試合を開始してください』

試合は始まった。

俺も更識も様子見と言つところか。

「……いい加減この様子見にも飽きたな。 終わらせるか……」

飽きたと言つても、まだ一分しか経っていないのだが、一気に終わらせることにした。

「“サイコキネシス”」

「え？ 動けない!？」

“サイコキネシス”で動きを封じ、そこからの大技でフィニッシュ。俺の良くやるパターンだ。

「お前はこれに耐えられるか？ “ハイドロポンプ”！」  
大量の水を更識にぶつける。

「……つつう、私が水を使えなければ今ので負けてたわね……」  
さっきの反動で“サイコキネシス”は解け、動き回られている。

「今の耐えたか。 流石と言っておくか。 だが、これで終わりだ」

使ったつもりはなかったが、さっきの一撃を耐えた更識と、そのISに敬意を賞し、使うことにした。

「アンタ、ほとんど何もしてないが、終わりだ。」

“エアロブラスト”」

空気の渦を発射して、更識を巻き込む。

海の神とも呼ばれるルギアの専用技であるこの技の威力は絶大だ。

『勝者、八神竜牙』

俺の圧勝だった。

S i d e へ 竜 牙 へ o u t

第59話 竜牙VS生徒会長（後書き）

戦闘描写はいつまで経っても駄文です。  
どろしよつもないほど駄文です。

第60話 生徒会長と出し物

Side 〽 竜牙

「お疲れ、竜牙」

「これで面倒事がなくなったな」

「そうでもないわよ？」

「は？ てかなんでお前がいるんだよ、更識」

模擬戦が終わり、ピットにいと、更識が来ていた。

「この生徒会長の条件って知ってる？」

「条件？ 知らん」

「生徒会長は全ての生徒の中で最強でなければならぬのよ」

「……おい！ それって！」

「そういうこと。 生徒会長である私に勝ったあなたが、次の生徒会長よ」

「マジ……かよ……」

俺はorzとなる。

「えっと……ドンマイ、竜牙」

「きつといいこともあるから」

「私たちもサポートするから気を落とすな」

「大変やなく竜牙も」

「全校生徒に見られている以上、こういうのもあれだが、お前が生徒会長になるのは決定事項だ」

上からフェイト、なのは、シグナム、姉貴、千冬の順だ。

「何でこうなるんだよ……。俺は単に景品にされるのが嫌だっただけなのに……」

どの道生徒会に入る羽目になったじゃねえかよ……。

「……なあ更識」

「何かしら？」

「仕事押し付けていい？」

生徒会長ともなると、色々と仕事が増える。

時間がなくなる。なのはたちと一緒に入れる時間が少なくなる。

「一応理由を聞いてもいいかしら？」

「正直言って面倒ってこともあるけど、近いうちに娘がここに呼ぶ」



「からさ、時間があつた方がいいんだよ」

「ヴィヴィオは近いうちにここに来ることになっている。学園長にお願いしたら許可してもらった。」

「娘ってあなたまだ15か16よね？ で、誰との子なの？」

「あー娘と言っても養子みたいなもんだ」

「その歳で養子っておかしくない？」

「それは聞くな。 まあ、それから妹みたいな感じだったんだが、どっかの誰かさんが勝手に俺を父親代わりにしやがった」

「俺そう言つと、なのはは目を逸らす。」

「まあ、諦めて俺の娘みたいになつてゐるんだよ」

「へえ〜色々あるのね〜」

「で、俺は仕事、大体押し付けるぞ。 それでも俺が生徒会長にならないといかんのか？」

「ヴィヴィオ、結構人見知りだから慣れるまでは時間掛かるし。」

「そういう理由があるみたいだけど、あなたの人気は相当なものよ。私よりも適任なのよね」

「はあ………わかった。 どうせこれは覆らないんだ。 やってやる」

「そう？　ありがとう」

「でもいいんか？」

「時間があるときは私たちがヴィヴィオを見るけど、竜牙君は大丈夫なの？」

「私たちのIS、特に竜牙の神帝はデリケートだからメンテナンスもあるし」

「なにより、竜牙も嫌う面倒事だぞ？」

「私たちのほうで掛け合えば覆らせることも可能だぞ？」

それぞれ行ってくれる。

「いいよ。もう諦めたし、上が納得できても生徒のほうで納得できないだろ。一年ならまだしも、生徒会長の証明するものを知っているであろう二、三年はキツイだろ」

更識の方が支持率高いだろうけどな。

「そうか。　まあ、頑張れ」

こうして俺は、生徒会長になった。

同日、教室にて放課後の特別HR。

なぜかあの後任命式をされて、正式に生徒会長になったのだが、対応早すぎじゃねえか？

まあ、そんなこんなで今はクラスごとの出し物を決めるため、わいわいと盛り上がっていた、が。

「えーと……」

「どうしようもないな……」

一夏はクラス代表として、俺は補佐として意見を纏めようとしているのだが

内容が『織斑一夏と八神竜牙のホストクラブ』『織斑一夏と八神竜牙とツイスター』『織斑一夏と八神竜牙とポッキー遊び』『織斑一夏と八神竜牙と王様ゲーム』……。

運がいいことに千冬がいないので大丈夫だが、もしもこの場になのは、フェイト、シグナム、千冬の誰かがいたら大変なことになってたんじゃないか？

まあ、そんなんだからこそ、

「「却下」」

「「「「「えええええー！！」「」「」「」」

女子の大ブーイング。

「あ、アホか！ 誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

「私は嬉しいわね。 断言する！」

「そつだそつだ！ 女子を喜ばせる義務を全うせよ」

「男子は共有財産である！」

「他のクラスから色々言われてるんだつてば。 うちの部の先輩もうるさいし」

「助けると思つて！」

「メシア気取りで！」

そんなことを言うが、

「こんなんやつたらなのはたちに殺されるわ！ 特にシグナムに！」

俺がそう言つと周りの空気が凍った。

「メイド喫茶はどうだ？」

凍りついた空気の中で、そう言ったのはラウラだった。

「客受けはいいだろう。 それに、飲食店は経費の回収が行える。

確か、招待券制で外部からも入れるのだろう？ それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

いつも通りの口調だが、何せ言ったのがラウラだったため、皆は理

解に時間が掛かっていた（さっきの思考も凍っていたこともあったが、ラウラの発言で徐々に戻っていった）。

「いいんじゃないかな？　一夏とお兄ちゃんには執事が厨房を担当してもらえばオーケーだよな」

「織斑君、執事！　いい！」

「それでそれで！」

「メイド服はどうするの！？　私、演劇部衣装係だから縫えるけど！」

一気に盛り上がっていく女子たち。

さっきの凍り付いていた空気が嘘のようだ。

「メイド服ならツテがある。執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

「またもやそう言ったのはラウラ。キャラにあわなすぎだ。」

「ごほん。シャルロットが、な」

いきなり振られたシャルロットは困った顔をしていた。

「え、えつと、ラウラ？　それって、先月の……？」

「むむ」

あー、@クルーズか。

「き、訊いてみるだけ訊いてみるけど、無理でも怒らないでね」

不安げに言うシャルに『怒りませんとも！』と断言する女子たち。

一組の出し物はメイド喫茶改め『ご奉仕喫茶』になった。

まあ、これなら大丈夫だと思うが、不安だな。

S i d e 〱 竜牙 〱 o u t

第61話 新生徒会長（前書き）

タイトルが似たり寄ったりですね……。

第61話 新生徒会長

Side 竜牙

「……というわけで、一組は喫茶店になりました」

現在は職員室。

俺と一夏は千冬の元で先ほどの報告をしていた。

「また無難なものを選んだな。」

といたいところだが、ど

うせ何か企んでるんだらう?」

「いや、その……コスプレ喫茶、見たいなものです。はい」

「立案は誰だ? 田島か、それともリアーデか? まあ、あの辺りの騒ぎたい連中だろう?」

にやにやとしている千冬。

「違いますよ。意外だと思えますけど、ラウラです」

きよとんとする千冬。

それから二度瞬きをして、千冬は盛大に吹きだした。

「ぶっ……ははは! ボーデヴィツヒか! それは意外だ。しかし……くっ、ははっ! あいつがコスプレ喫茶? よくもまあ、そこまで変わったものだ」

「何面白い話しとるん?」



「姉貴か。何、一組の出し物の提案者がラウラだってことを教えたらこのザマだよ」

「私はあいつの過去を知っている分、おかしくて仕方がないぞ。ふ、ふふっ、あいつがコスプレ喫茶……ははっ！」

それからひとしきり笑って、千冬は目尻の涙をぬぐう。  
まあ、あのラウラだからな……。

「ん、んんっ。 さて、報告は以上だな？」

「はい。 以上です」

「ではこの申請書に必要な機材と私用する食材などを書いておけ。  
一週間前には出すように。 いいな？」

「了解。 一夏には俺の方からやらせますので安心してください」  
どうせ一夏は面倒くさいとか思ってるだろうから、こうしておく。  
案の定一夏はげっと俺の方を向いていた。

「織斑に八神、学園祭には各国軍事関係者やIS関連企業など多く  
の人が来場する。 一般人の参加は基本的には不可だが、生徒一人  
につき一枚配られるチケットで来場できる。 渡す相手を考えてお  
けよ」

「はい」

報告が終わり、職員室を出る。

そこには……

「やあ」

前生徒会長の更識がいた。

「なんでお前がいるんだ？ 更識」

「何ででしょう？」

「今度は本気で殺るぞ？」

軽く殺気を出し、O・H・A・N・A・S・H・Iのときの笑顔をする。  
まあ、俗に言う脅しだ。

「全力でごめんなさい。 現生徒会長である君と、織斑一夏君を生徒会室に招待しようと思ったの」

「俺はともかく何で一夏も……」

俺はそこで言葉を失った。

なぜなら、凄い勢いの女子が、竹刀を持って襲い掛かってくるのを見たからだ。

しかもそのターゲットは確実に俺だ。

「覚悟おおおっ!!」

「何で俺なんだ!？」

俺はその竹刀を悉く避ける。

「どっいつことだ?! 更識!！」

俺は女子の襲撃を避けながら更識に問いかける。

「生徒の長たる生徒会長は最強であれ、がこの生徒会長の資格なだけで」

「んなもんは知ってるから訳を話せ!」

「最強である生徒会長はいつでも襲つていいのよ」

「マジかよ!」

そういうことなら反撃しよう。

それに、いい加減避けるのも面倒になってきたしな。

俺は竹刀を振り回す女子の首に手刀を入れて気絶させ、それと同時に窓ガラスが割れた。

次々に俺へと襲い掛かってくる矢。

俺は気絶させた女子が転がした竹刀を窓の外にいる袴姿の女子に投擲する。

その竹刀はその女子の眉間に直撃し、気絶したようだ。

「もらったああああ!」

廊下の掃除道具ロッカーの内側から三人目の女子が出てくる。

その両手にはボクシンググローブ。

軽やかなフットワークと共にパンチをしてくる。

「ああもう、面倒くせえ! ぶっ飛べ!」

俺はその女子にローリングソバットを入れる。  
その女子のわき腹に入り、そのまま女子は廊下の壁に激突し、その  
衝撃で力無く倒れた。

「ったく、面倒な……。俺は早くヴィヴィオを迎えに行きたいっ  
てのに……」

ぶつぶつと文句を垂れ流す。

「えーと竜牙君？ これはどういう状況なの？」

「あーなのはか。何か襲われたから返り討ちにした」

「え？ 襲われた？」

「ああ。どうやら、生徒会長はいつでも襲っていらしくてな。

更識曰く。だからその顔は止める」

なのはは次第に目にハイライトが消えていったが、俺がそれを止め  
る。

O・H A・N A・S H Iは駄目だ。

俺が言えることじゃないが。

「そ。で、生徒会長を倒した人が次の生徒会長になれるって話」

「面倒な話だな」

「私が就任して以来、襲撃はほとんど無かったんだけどなあ。ま  
あ、それは君たちのせいかな？」

「なんでだ(ですか)?」

「だってほら、私が今月の学園祭で君たちを景品にしたから、一位を取れなさそうな運動部とか格闘技系が実力行使に出たんでしょう。君を失脚させて景品キャンセル、ついでに君たちを手に入れる、とかね」

「実際のところお前が“勝手に”俺たちを景品にした所為じゃねえか」

こいつが俺たちを景品にしなかったらこういうことにはならなかった。

だから、この馬鹿の所為だ。

「んじゃ、俺はこいつにお呼ばれで生徒会室に行くから、なのは俺の部屋で待っていてくれ」

「わかったよ。あまり遅くならないでね」

「それはこの馬鹿次第だ」

「と言っことで一夏も行くぞ。道連れだ」

「え〜……まあわかった」

俺たちはなのはと別れて生徒会室へと向かった。

「ただいま」

更識が生徒会室に入る。

「ここが生徒会室か」

「おかえりなさい、お嬢様」

出迎えたのは三年の女子。

更識家に仕える家柄があったからそれだろう。

「お嬢様はやめてよ」

「失礼しました。つい癖で」

あー確か布仏家だったな。

「わー……。おりむーとやっくんだけ……。」

のほほんさんこと布仏本音がいた。

「まあ、そこにかきなさいな。お茶はすぐに出すわ」

「了解」

「は、はあ……。」

のほほんさんは俺と一夏を見て、三センチほど上げた顔をまたべち

やりとテーブルに戻した。

「お客様の前よ。しっかりしなさい」

「無理……。眠……。帰宅……。いい……。？」

「ダメよ」

三年女子の回答に崩れ落ちた。

「えーと、のほほんさん？ 眠いの？」

「うん……。深夜……。壁紙……。收拾……。連日……」

「う、うん？」

「あら、あだ名だなんて、仲いいのね」

「コイツの場合はそうではないだろ」

「うっ……。本名知らないし……」

「マジか。すごいな、お前」

「ええ〜!?!」

初めて聞く大声で起き上がる。  
あんな声出せたんだ。

「ひどい、ずっと私をあだ名で呼ぶからってつきり好きなんだと思っ

てた〜……」

「いや、その……『じめん』」

「本音、嘘をつくのはやめなさい」

「てひひ、バレた。わかったよー、お姉ちゃん〜」

「お姉ちゃん？」

「ええ。私は布<sup>ほ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>虚<sup>つこ</sup>。ほ 妹は本音」

「むかーしから、更識家のお手伝いさんなんだよー。 うちは、代々」

「えっ？ ていうか、姉妹で生徒会に？」

「そうよ。 生徒会長は最強でないといけないけど、他のメンバーは定員数になるまでは好きに入れていいの」

「俺は仕事を大体押し付けるつもりだから、メンバーは変わらんけどな」

ヴィヴィオ優先だ。

「で、なぜ俺たちを呼んだ？」

「新しい生徒会長になった竜牙君にはここに一度は来てもらいたかったのよね。 で、一夏君には投票決戦について説明しようと思っ  
てね」



「手短にな。俺は要があるんだから」

「じゃあまずは新生徒会長である、八神竜牙君に挨拶でもしてもらおうかしら」

「えー、まあ速めに終わらせるか……。本日生徒会長に任命されました八神竜牙です。諸事情により、仕事は任せっきりになると思いますが、これからよろしく願います」

諸事情はヴィヴィオのことだ。

「んー次に、投票についての説明ね。君たちが部活に入らないことで色々苦情が寄せられていてね。生徒会は君たちをどこかの部活に入部させないとまずいことになったの」

「それで学園祭の決選投票か。で、俺はなし崩し的に生徒会長になり、その投票の対象外になったが、まだ一夏はどこの部にも入っていない。だから、一夏に対しては変わらないってことか」

「そういうこと。ということ、私が鍛えてあげようか？」

「却下だ。一夏たちは俺の指導下にある。お前が出る幕ではない。それに、一夏の白式は異形だからな。お前がやるよりそういう風にした俺がやる。まあ、俺は見ているだけだが」

ポケモンとの一対一の戦い。

それが俺の特訓の基本だ。

それに加えて技術面の指導もしている。

マニュアル機体制御と、雪羅とゼクロムの遠距離攻撃のために、今

は射撃関連の練習中だ。

「見てるだけなら別にいいじゃない」

「んーじゃあ、お前が勝てたらお前も参加していいぞ」

「私負けたばかりよ？ しかも圧倒的に」

「大丈夫大丈夫、戦うのは俺じゃないから。じゃあ明日やるか」

「よくわからないけどわかったわ」

「用件は以上か？」

「ええそうよ」

「じゃ、明日の放課後第三アリーナでやるから来いよ。俺は帰るからな」

俺は生徒会室を後にした。

Side 〱 竜牙 〱 out

## 第62話 ヴィヴィオ来訪

Side↳竜牙

「ただいま」

「おかえり、竜牙君」

「なのはいたんだ」

「うん。今日の分の仕事は終わらせたからね。それに部屋で待っててって言われたからね。レポートして入っちゃった」

「別に構わないからな。なのはたちに隠すようなものなんてないしな」

「ホントかな？」

「んじゃ、調べるか？ 出てくるもんはIS関係のものが多いぞ」  
「実際、ここにあるのものはIS関係、暇つぶし用の本とか、そういうのしかない。」

「んー、ま、竜牙君なら別にいいけど」

「毎度そうなんだが、俺だからいいってなんなんだ？」

「いいんだからいいの」

だからなんなんだよ……。

「はあ、まあいいや。 んじゃ、行くか」

「そうだね」

「サーナイト、テレポートだ」

テレポートで移動する。

場所はシャマルさんの家の前。

ヴィヴィオを迎えに来たのだ。

インターホンを押し、待つ。

「は〜い。 あ、竜牙君になのはちゃんじゃない。 迎えに来たのね？」

「はい。 IS学園の方で許可を貰ったので、ヴィヴィオを迎えに来ました」

「ヴィヴィオは大丈夫でしたか？」

「大丈夫よ。 今はヴィータと遊んでるわ。 さ、入って」

「「お邪魔します」」

俺はシャマルさん宅に入る。

「あー！ パパとなのはママだ！」

ヴィヴィオが俺たちを見ると俺に抱きついてきた。

「久しぶり、ヴィヴィオ。 いい子にしてたか？」

「うん！ ヴィヴィオいい子にしてたよ！」

「偉いねーヴィヴィオ」

「えへへ」

なのはは俺に抱きつくヴィヴィオの頭を撫でる。  
頭を撫でられたヴィヴィオは元気に笑っている。

「今日から俺たちがいるところで暮らせるからな」

「本当？」

「ああ本当だとも」

「そこには私も竜牙君も、フェイトママもシグナムママも千冬ママ、  
シャルロットお姉ちゃんもハヤテお姉ちゃんもみんないるよ」

「みんなと一緒に暮らせるの？」

「ずっと一緒にはいれないけど、一緒に暮らせるぞ」

「ヴィヴィオにはその間寂しい思いさせちゃうけど、みんなと一緒に  
にいれるよ」

「やったあー！」

ヴィヴィオは本当に嬉しそうな表情をしている。

「今日からそこで暮らすから、シヤマルさんたちに挨拶して」

「うん！　ありがとうございます！」

「よく言えました。　じゃあ、行く？」

「うん！」

「サーナイト、レポートの準備しておいて。　シヤマルさん、数日ですが本当にありがとうございます。　ヴィータとザフィーラも、ヴィヴィオの相手をしてくれてありがとうございます」

「へ！　全然構わねえよ！」

「ありがとうございます、ヴィータ」

「ザフィーラもありがとうございます」

俺はザフィーラを撫でる。

「じゃあ、俺たちIS学園に戻りますね」

「わかったわ。　いつでも来ていいからね」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ行くっか」

「ああ。 ヴィヴィオ、もう一度挨拶しな」

「ありがとうございます!」

「本当にありがとうございます。 また来ます」

「また来ます。 サーナイト、レポートだ」

俺たちはレポートして、また俺の部屋に戻ってきた。

「ここにみんながいるの?」

「ああ。 ここは俺の部屋で、みんなは他のところにいるよ」

「早くみんなに会いたい!」

「会わしてやりたいけど、まずはヴィヴィオがここで暮らしてもい  
いように許してくれた人にお礼をしなきゃな」

「うーわかったあ……」

しょんぼりとするヴィヴィオ。

「挨拶が終わったらみんなに会いに行こうな」

「うん!」

「サーナイト、連続で悪いが、レポートだ」

扉の前に着く。

「失礼します」

「おお、これは八神君と高町さんではありませんか。　どうかいたしましたか？」

彼はここの良心とも呼ばれる轡木十蔵さん。  
ここの事実上の運営者だ。

「先日お話した、娘の件です」

「ああ、あれですか。　では、そちらのお子さんが？」

「はい。　名前はヴィヴィオと言います。　ヴィヴィオ、挨拶をしなさい」

「八神ヴィヴィオです。　よろしくお願いします」

ペこりと頭を下げるヴィヴィオ。

「これはご丁寧にも。　私は轡木十蔵といます。　こちらこそよろしく」

「このたびは本当にありがとうございます」

「いえいえ。　子供と一緒にいたいのが親の性ですからね。　構いませんよ」

「では、私たちはこれで。　ヴィヴィオが会いたがってる人たちがいるので」



「すみません、失礼しました」

「失礼しました」

俺たちは部屋から出る。

「じゃあ、みんなに会いに行くか」

「うん！」

ヴィヴィオは俺となのはの間に挟まれて手を握って歩き出す。  
見た目は仲のいい姉弟か、カップルには見える。

「あ、ヴィヴィオちゃん、久しぶり」

「シャルロットお姉ちゃんだ！」

「お兄ちゃん、どうしてヴィヴィオちゃんがここに？」

「今日からここで暮らすことになったんだ。なのはたちはみんな  
ここだし、シャルマルさん……ヴィヴィオをさっきまで預かってくれ  
ていた人に預けっぱなしもあれだし、ヴィヴィオにはずなのはたち  
が着いていてほしいからな」

「へえ」

「ヴィヴィオはフェイトたちに会いたがってるんだが、シャルも来るか？」

「一緒に一緒しようかな」

シャルも加わり、再び歩き出す。

他の生徒たちに見つかり、色々言っているが、俺たちに直接話しかけてくるものはいない。

正直ありがたい。

「おー竜牙になのはちゃんにシャルロットやんか。それにヴィヴィオもいるんじゃないか。もう来たんや」

「はやてお姉ちゃんだ」

「ああ。さつき連れてきた。今はヴィヴィオの顔なじみに会いに行っている途中だ」

「なるほどな、それでシャルロットまでおるわけやな」

「はい。お兄ちゃんたちについてきてるんです」

「じゃあ私も一緒に行くわ」

「じゃあ後はシグナムと千冬とフェイトか」

「千冬さんならさつきあつちで見たで」

「じゃあ千冬の方に行くか」

また一人増えて歩き出す。

しばらく歩いていると、見えるのは黒、金、ピンクの長髪の女性の後姿。

この学園でこの色の髪と一緒にいると言うことは、それはもうあの三人だ。

「おーい、フェイト、シグナム、千冬」

「八神、ここでは織斑先生と……なんだ、ヴィヴィオが来ていたのか」

「久しぶり、ヴィヴィオ」

「元気にしてたか？」

「やったあ！ みんなに会えたあ！」

「千冬たちは仕事か？」

「私たちは終わったところです」

「寮に戻ろうとしてたんだ」

「そうか。じゃ、みんなで飯にしようぜ。ヴィヴィオもいることだしな」

寮の食堂に俺たちが入ると、まあ目立つわけだ。

学園に二人しかいない男子の片割れに、専用機持ちに、美人揃いの教師五人に、ヴィヴィオ。

「えっと……八神君？ その子は……？」

気になって話しかけてきた女子。





## 第63話 更識楯無VSポケモン

Side ㄱ 竜牙

ヴィヴィオがIS学園に来た翌日、当然の如く女子からの質問が俺に集中砲火された。

誰との子供とか普通に考えてありえない質問も飛び出てきたが、なんとか処理し終えたのだ。

「疲れた……」

ヴィヴィオが一人のときはサーナイトを付かせておいてる。

なのはたち教師陣は、授業がないときはヴィヴィオというようだ。

俺は生徒会長権限を使えば授業をサボれるが、何度もサボるわけには行かないだろう。

授業には余裕で着いていけるのだが、これでも生徒会長だしな。

俺の中では、生徒会長＝生徒の模範的生徒、てな感じの公式が出ている。

前任の更識のように自由奔放でいい訳がないので、基本的にはサボるつもりはない。

「お疲れ、兄貴。にしても昨日の子、誰なんだ？」

「なんだ一夏。もしかしてロリコンに目覚めたか？」

「目覚めてねえよ！」

「冗談だ。俺が親代わりしている子だ。まあ、その辺りの事は

詮索するな」

捨て子だなんて言えないからな。

「わかった。にしても兄貴、あんな表情するんだな」

ヴィヴィオには甘いから、滅多に見せない顔でもしてたのだろう。

「一応父親だからな。娘には甘いもんだ」

「それにしても、千冬姉の反応は滅多に見れなかったな。『千冬ママ』って呼ばれて固まってたし」

昨日の食事途中にヴィヴィオが千冬ママと言って、食堂が凍りついたのだ。

そのとき一夏たちもいたようだ。

それよりも一夏に言っておく事が一つ。

「おい一夏」

「何だ？ 兄貴」

「後ろ」

「後ろ？」

「……面白い話してるな、なあ織斑？」

「ち、千冬姉……」

その千冬が一夏の背後にいたのだ。

バシーン！

千冬の伝家の宝刀、出席簿が火を吹き、一夏の脳天に直撃した。  
一夏はその痛みに床にのた打ち回っている。

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「は、はい……すみませんでした……」

床に転がりながら返事をした一夏。

「それと、ここでは織斑先生と呼べと何度言わせる気だ？ いい加減覚える」

「はい……織斑先生……」

それを訊くと、千冬は教壇に立ち、授業を始めた。



「待たせたな、更識」

「構わないわよ。その子連れてくるのは予想できてたから」

俺はヴィヴィオを連れて第三アリーナに来ていた。

昨日言ったように、更識と模擬戦をするためだ。  
俺が戦うわけではないが。

「お姉ちゃんだあれ？」

「更識楯無って言うの。好きに呼んでいいよ。よろしくね、ヴィヴィオちゃん」

「よろしく〜たあちゃん」

「じゃ、紹介も終わったところだし、やるか」

「ええ。で、相手は誰なの？ 相手があなたじゃないって言うだけだ」

「お前の相手はコイツだ。出て来い、テッカニン」

そこまで大きくないポケモンのテッカニン。  
素早さは全ポケモンの中でもトップクラスだ。  
テッカニンの素早さの上にはデオキシススピードフォルムしか存在  
しない。

「へえ……、これがポケモン……。で、相手ってこれ？ 嘗めて  
ない？」

ポケモンの事は知っているようだな。  
見た目が強そうに見えないため、油断しているな。

「嘗めてるのはお前だ。 コイツは最悪お前は一撃も与えれずに終  
わる可能性もあるからな」

「そ、そんなに強いのか？ これが？」

「強いぞ。 まあ、そいつに勝てば一夏の特訓に参加していいから  
な」

「まあわかったわ」

「んじゃ、俺の合図で始める。 テッカニンはそいつをやれ。 指  
示はしない」

俺はヴィヴィオを連れて離れる。

『では、始め！』

テッカニンは開始早々に“剣の舞”をした。

攻撃力上昇させて持ち前のスピードでやるさか。

「はあああ！」

更識はテツカニンの動きを警戒していたようだが、水を纏ったラン  
ス、蒼流旋を構え、突っ込んできた。

“剣の舞”をやり始めた時点でもう遅いんだよな。

「嘘！？ 避けられた！？」

“剣の舞”を終えて、更識の攻撃を回避したテツカニン。  
特性の“加速”の効果が出てきてるな。

「これならどう！」

蒼流旋に装備されている四門のガトリングガンからの掃射。  
テツカニンはそれをかわそうとはせずに“まもる”で防いだ。

「な、なんなの、これ……」

模擬戦を始めて10分、更識はテッカニンに悉く攻撃を避けられ、防がれ、自信を失ってきているようだった。

ポケモンは学園に知られてはいるが、テッカニンはここでは今日初めて出したから、情報が一切ないのだ。

それに、ポケモンは元々存在しない存在だ。常識が通用しないのは当たり前でもある。

「……速すぎる……動きが……見えない……」

テッカニンの特性である“加速”は、時間と共に自身の速度を上げる。

今のテッカニンは最高速度……俺ですら認識するのが難しいほどに速い。

異常すぎる俺ですら認識しづらいこれを、更識が捕らえきれるかと

いえば、ほぼ不可能だ。

「……終わったな」

俺は、テツカニンが“シザークロス”をしようとしていたのを見たのだ。

今のテツカニンは“剣の舞”を最大までやり、圧倒的な素早さと攻撃力を持つ化物状態だ。

そんなテツカニンが、戦意を失いつつある更識に、最大威力の“シザークロス”をやるうとしている。

更識の敗北は決定した。

俺はヴィヴィオを連れて更識の元へ向かう。

ズバーン！！

更識に“シザークロス”が直撃し、一気にシールドエネルギーを0になり、ISが解除されて墜落している。

「サーナイト、“サイコキネシス”で更識を降ろせ」

墜落している更識の周りに光を包み、地面に優しく降ろされる。どうやら気絶しているようだ。

「テツカニン、お疲れ。戻ってくれ」

テツカニンは神帝に戻った。

「少しやりすぎたか？ ……サーナイト、保健室までテレポートだ」

ヴィヴィオを左腕で抱きかかえ、更識を右肩に担ぎ、テレポートす

る。

俺は更識をベッドに寝かす。

「ねえパパ」

「何だ？ ヴィヴィオ」

「たあちゃん大丈夫？」

「大丈夫だ。 ちょっとやりすぎて気絶しちゃったけど、もう少しすれば起きるよ」

更識の容態を確認したので、数分すれば起きるはずだ。

「保健室で声がすると思えば、八神だったか」

「千冬か」

「あ、千冬ママだ！」

「織斑先生だ、と言いたいが、これはどういう状況ですか？」

プライベートモードになる千冬。

「いや、少しやりすぎちゃってな、更識が気絶したから運んだんだ」

「どづいつ経緯で？」

「一夏を鍛えるって話をこいつがしてな、俺の指導下だから拒否したんだ。 で、譲歩として、俺……ポケモンに勝てたらいいって話

をしてな。それでやったら、思いのほかやりすぎたようだな」

「なるほど。で、誰を使ったのですか？」

「千冬は知らん奴だ。テッカニンって言って、素早さは全ポケモンナンバー2だ」

「どのくらいの速さですか？」

「テッカニンの最高速度は俺が生身でぎりぎり認識できるくらいだ」

「恐ろしいほどに速いですね」

「それに、攻撃力強化をしての、最高威力での一撃で気絶ですね。  
一応最高速度と最大威力にリミッターを掛けておいたけど、思いのほか強くてな」

「それでこの様ですか」

非殺傷設定で、ISを破壊しすぎないように攻撃力にリミッターを掛け、時間と共に上昇する速度の限界値を多少抑えたのだが、もっと抑えても良かったと、今になって思う。

「ん……」

「更識、気づいたか」

「……「JJ」は？」

「保健室だ。テッカニンの一撃で気絶したんだ」

「そっか……負けちゃったんだ……」

「お前さえ良ければだが、参加するか？」

「え？」

「さっきの模擬戦は流石にやりすぎたし、俺は一人増えようが気にしないし」

「いいの？」

「構わん。俺のISについて詮索しなければだがな」

詮索したところで無駄なんだが、警戒するに越した事はない。

「じ、じゃあお願いしようかしら」

「了解。で、お前はどっする？ 怪我はないとはいえ、気絶したんだからな」

「一応もうしばらく休んでおくか？」

「お、織斑先生……いたんですか」

「いては悪いか？」

「滅相も御座いません！」

「で、どうするんだ？」



「もう大丈夫だから戻るわ」

「そうか。じゃ、俺は行くわ。 ヴィヴィオが退屈そうだしな」

空気を読んでか、会話に入ってこなかったヴィヴィオは不貞腐れていた。

俺は立ち上がり、ヴィヴィオを抱えて保健室を去ろうとする。

「待って！」

更識に呼び止められた。

「なんだ？」

「ありがとう」

笑顔を浮かべて礼を言う更識。

「何で礼なんか言うんだ。俺は礼を言われる事はしてないぞ」

「パパア、つまんない」

いい加減痺れを切らしたヴィヴィオが文句を言ってきた。  
ま、何もやる事もなければそうなるか。

「ゴメンゴメン。じゃあな、更識」

俺はヴィヴィオを抱えて、千冬と共に保健室を後にした。

「……ますます惚れちゃうじゃない」

更識が何かを言っているような気がしたが、俺は聞こえなかった。

Side 〱 竜牙 〱 out

第63話 更識楯無VSポケモン(後書き)

前に出たように、(竜牙はうる覚えですが)竜牙と楯無は以前に会ったことがあります。

そのとき一緒にいたのがシグナムです。

## 第64話 ヴィヴィオの嫌いなもの

Side ㄱ 竜牙

一夏たちのいつもの特訓に更識も加わった。

「ま、まずは一夏たちの様子を見てな。見てからの方が多少はやりやすいから」

「わかったわ」

「よし、じゃあ出て来い！」

一夏はゴウカザル、箒はジュカイン、セシリアはパルシェン、鈴はラグラージ、シャルはロトム（フォルムチェンジあり）、ラウラはボスゴドラだ。

全員に能力制限を掛けてはあるが、それでも一夏たちよりも強い。

「じゃあ始め！」

各々相対した相手との戦闘が始まった。

「……これがポケモン」

「そう、これがポケモンの力だ。能力制限にポケモンたちには全力は出さないように言っている」

「これでも本気じゃないなんて……」

一夏たちの相手が強くなったが、それ以来一夏たちは圧倒されている。

一夏たちも十分強くなっているが、ポケモンはそれ以上の力を持っている。

「基礎はもう出来ている。それでも奴らが弱いのは、実戦経験の無さだ。同じ人間同士の模擬戦よりも、こっちの方がいいんだ」

ポケモンに人間の常識は当てはまらない。

予想を覆す動きもする。

だからこそ、不測の事態になっても大丈夫なように、人間対ポケモンの構図になっているのだ。

「お前もやるか？」

「ええ、やるわ」

「そうか。なら、お前の相手はコイツだ。出て来い、エンペルト」

「ペンギン？」

「まあそうだが、油断すると負けるぞ。前のテツカニンみたいにな」

「わかってるわよ。じゃあ始めてちょうだい」

「了解。んじゃ、始め！」

「そこまでだ！」

更識もやり始めておよそ三十分。  
全員 of 戦闘を終わらせた。

「夏は時々見切りが甘い。それでは簡単にやられるぞ。」

箒は性能に甘えすぎ。 刀の打ち合いではいつも圧されているぞ。セシリアはビットを使っているときに動けるようになったのはいいが、まだ甘い。 射撃が単調だ。 鈴は攻めがまだ甘い。 接近したときに返り討ちにされているようにあまだだ。

シャルはフォルムチェンジしても、落ち着けて判断できるようになったのはいい。 だが、まだ技の対処が出来ていない。 ラウラはボスゴドラの防御が打ち崩せていない。 あの防御は簡単には崩せないが、体勢くらいは崩せるようになれ。 あれではカウンターされて終わる。

更識は流石と言うところだが、ポケモンの動きについて来れていない。 ポケモンと戦うときは人間と同じように戦うな。 人間とは違う。 常に相手の動きに注意しろ」

全部を見て、思った事を言う。 全員分見るのにはもうなれたし、一人増えたところで大して変わらないので、いつも通りにやる。

更識は実力はあるが、ポケモンの動きになれてないので、攻守共に甘かった。

人間と言う枠組みだけに囚われすぎだな。

これでは、もしもの相手には対処できても、反応が遅れる。

「いつもこんなやってるの？」

「そうだ。 更識、お前は実力はあるんだから、人間の常識に囚われるな。 もしも、人外的な動きをされたら対処ができなくなるぞ。 必ずしも常識的な動きをすることを思うな」

「わかったわ」

理解が早くて助かる。

一夏は言葉よりも実践した方が覚えるから、こっちの方が断然楽だ。

「んじゃ、今日はこれで終了だ」

俺の感想も言い終わったし、これで終わらせる。

「いつもよりも終わるのが早いな」

「そうですね。いつもならもう三十分ほど長いですね」

「ヴィヴィオちゃんがいるからだと思うよ」

「そういうことだ。時間が短くなるのは悪いと思うが、ヴィヴィオが気になるんでな。今はサーナイトがいるからいいが、アイツは元々人見知りでな、知らない人に怯えるんだよ」

だから、俺たちがいるときに、知らない人に話しかけられると、俺たちの後ろに隠れるのだ。

「竜牙さんも大変ですね」

「一応これでも父親なんでな、娘には甘いんだよ。じゃあ俺行くから」

俺はアリーナを出て、走る。

俺は自分でも自覚しているが、本当にヴィヴィオに甘い。もう親バカだな、うん。

そうこうしているうちに、サーナイトと一緒にいるヴィヴィオを見つけた。



ヴィヴィオはサーナイトの後ろで隠れている。  
どうやら、女子たちの好奇の視線が怖いのだろう。  
キョロキョロして、助けになるものがないか探しているようだ。

「あ！ パパ！」

見つけた。

「ただいま、ヴィヴィオ。 いい子にしてたか？」

「うん！」

俺はヴィヴィオを抱き上げる。

「お疲れ、サーナイト。 戻ってくれ」

いつも俺に仕えてくれるサーナイトを神帝に戻す。  
いつでも呼び出せるから便利だな。

「ご飯まで俺の部屋で遊ぶか？」

「うん！」

元気でよろしいこと。

俺はヴィヴィオを抱えたまま、寮内を歩く。  
視線が滅茶苦茶刺さるが、この際気にしないことにした。  
自分の部屋の前についたはいいが、誰かの気配を感じる。  
この気配は……更識か。

「どうしたの？ パパ」

「いや、なんでもない」

気にしても仕方がないので、扉を開ける。

ガチャ。

「お帰り」

ボタン。

すぐに扉を閉めた。

「……疲れてるみたいだな」

「たあちゃん？」

ヴィヴィオは僅かに見えたようだった。

確かに更識だ。

更識なんだが……

ガチャ。

「お帰りなさい。 ご飯にします？ お風呂にします？ それとも  
わ「アウトオ！」……最後まで言わせてよ」

「お前はなに人の部屋でそんな格好してるんだ！？ ヴィヴィオの  
目の毒だ！」

更識の格好は裸エプロンだった。

下に水着を着ているのはわかるが、ヴィヴィオの教育によくない。ヴィヴィオには手で目を隠している。こんなもん見せれるか！

「出て行け。　　と言うか送ってやる。　　高度4000メートルに」

ちなみに、器用に耳栓も付けた。

「死んじゃう！　　死んじゃうから！」

「じゃあなのはたちに明け渡す。　　訳を話せば一時間は軽くO・H A・N A・S H Iしてくれるから」

そうしたら、更識に次の日はないかもしれない。

「私に明日はないの!?!」

「さあ?」

「この歳でまだ死にたくないわよ!?!」

「じゃあ来世ではもっとマシな性格になるんだな」

「現世を全否定!?!　　そこまで言う!?!」

「娘に悪影響を及ぼす存在をただで済ますと思うなよ?　　悪は滅さなければ」

将来こんな人間になってほしくないからな。

「わ、わかったから！ わかったから見逃して！」

「しょうがない。じゃああなたの部屋まで飛ばしてやる」

ケーシーを呼び出し、更識をテレポートさせる。

更識は間違えがなければ部屋に戻っているだろう。

「パパ〜まだ〜？」

「ごめんごめん、もういいよ」

俺はヴィヴィオに付けていた耳栓を外してそう言う。

「あれ？ たあちゃんは？」

「もう帰ったよ」

「そうなの？ ざあんねん」

「ん？ これは俺の荷物じゃないな……更識のか……」

ダンボールとかではなく、既に荷解きを終えてある。

俺はため息をつき、ケーシーにテレポートさせる。

「これでよし」

「？」

何をしたかわからないヴィヴィオは首を傾げていた。

「さ、遊ぼっか」

「うん！」

それから俺たちは、ゲームをやって時間を潰していた。

「パパア、お腹空いたあ」

ゲームをやっていたら、ヴィヴィオがそう言った。  
時計を見ると、もう六時を過ぎていた。

「じゃあご飯食べに行こうな」

いつもの如く、ヴィヴィオを抱えて部屋を出る。

「よ、一夏。お前も飯か？」

食堂まで歩を進めていると、一夏に出会った。

「お、兄貴。それにヴィヴィオだっけか？　そういつ兄貴たちもか」

「ああ。にしてもお前は今日は一人なんだな」

「珍しくな。けどどうせ食堂で誰かに出会っただろ」

「それもそうだな」

食堂に着いた。

俺はヴィヴィオの分も含めて食券を買い、料理が出てくるのを待つ。

「お、シャルとラウラか」

「あ、一夏にお兄ちゃんにヴィヴィオちゃん」

「竜牙と嫁か。その子はヴィヴィオだったか」

やっぱり来たよ。

「シャルロットお姉ちゃんにラウちゃんだ」

「一緒にいい？」

「俺は構わん」

「俺もいいぜ」

「私も」

「じゃあ一緒にしようかな」

出来た料理を受け取り、テーブルを囲う。

「ピーマン嫌いい!」

「だーめた。好き嫌いしないで食べなさい」

食堂に俺とヴィヴィオの声が響く。

「嫌あ!」

「しっかり食べないと大きくなれないよ?」

「そうだけ。それに身体にもよくないぞ」

ヴィヴィオにピーマンを食べさせるために、一夏とシャルも協力してくれている。

「たった一口だから、少し頑張ってみろ」

「やなのおー！」

それでも拒否するヴィヴィオ。

「……ママたちみたいに綺麗になれないぞ？」

「う」

大体こういうとヴィヴィオは言うことをなぜかよく聞く。なのは、フェイト、シグナム、千冬、彼女らは皆美人だ。女の子だからか、将来は美人になりたいのだろうか。

「少し頑張ってみよ、ね？」

シャルが微笑みながら言う。

「……う、うん」

「そこなくっちゃな。はい、あーん」

俺はピーマンを挟んだ箸をヴィヴィオに向ける。

「あ、あーん」

パクッ。

ヴィヴィオが箸を口に含み、その箸を放さない。

ゴクン。



箸が開放された。

「た、食べたよ」

口を開けて、中が残ってない事を見せるヴィヴィオ。

「偉いぞ、よく頑張ったな」

俺はヴィヴィオの頭を撫でる。

「少しずつ好き嫌い無くそうな」

「僕たちも協力するから、一緒に頑張ろう?」

一夏とシャルがヴィヴィオに言う。

すると、さっきまで見ていたラウラが、

「竜牙、お前の料理で克服させればいいのではないか?」

と、言った。

「私はお前の料理を食べた事はないが、腕は確かなものだと聞いている」

「確かに。 兄貴が料理を振舞えばいいじゃん。 上手いんだし」

「あー、まあ、そうだな」

ピーマン使った料理、レパートリーあったっけ?

「ま、時間があつたら作るか。 どうせだ、お前らも食つか?」

「いいのか?!」

「ああ。 ヴィヴィオだけに作るのもなんか作り応えないし、なのはたちにも作るつもりだしな。 たまにはお前らに作るのも悪くないしな。 まあ、時間とかがあればだけど」

「それでいい! 久しぶりに兄貴の料理が食べたい!」

「僕も食べたいかな」

「私もいいのか?」

「いいぞ。 あー箒たちもどうせだから食わすか。 色々と五月蠅くなるだろうし」

あいつらが一夏たちだけに食べさせたら、俺に絶対文句言ってくるだろうからな。

特に箒と鈴、俺の料理を食べた事がある奴だな。

「ま、近いうち作るさ。 ヴィヴィオ、頑張ろうな」

「うん!」

S i d e 〱 竜牙 〱 o u t



## 第65話 苦手克服への第一歩？

Side 竜牙

早朝、俺の部屋。

ヴィヴィオはなのはとフェイトの部屋で寝ているため、俺は一人だ。ちなみに、シグナムは姉貴と同室、千冬は山田先生と同室だ。

「ふあああ……、よく寝たんだが……体が重い……？」

重さを感じたので、隣を見ると、なぜかシグナムがいた。……寝顔が可愛いな、和む。

「……って、なんでいるんだ？俺、ちゃんと鍵閉めたよな？」

「むう……起きたのか、竜牙」

「ああ。で、何でシグナムがいるんだ？いつの間に入った？」

「昨日お前が寝静まったであろう頃に、ケーシィのテレポートで入った」

「不法侵入だぞ？お前なら別にいいんだけど」

「ならば構わんだろう」

「で、何で入ってきたんだ？」

「お前と可能な限りは一緒にいたいからだ」

なんとも一途なことだ。

「ちなみに、ヴィヴィオがいないのをわかっての行動だ」

「だと思ったよ。　なのはたちは知らないだろ？」

「知ってるぞ？」

「マジかよ」

「マジだ。　近いうちになのはたちも来るだろう」

「マジかよ……」

俺の知らぬ間にそんな話がされていたのか……。

「私は行くとしよう。　ではな。　チュッ」

シグナムは俺にキスをして部屋を出て行った。

「……これからこれが続くのか？」

これは少しずつだが、確実に俺の理性を削っていくぞ？  
毎日続いたら、流石に理性が保てんかもしれんぞ？

「なんか大変なことになりそうだな……」

俺はそんなことを思っていた。

「姉貴、醤油とって」

「あいよ」

授業も終わり、一夏たちの特訓も終わったので、俺と姉貴は料理をしていた。

そう、ヴィヴィオのピーマン嫌いを克服させるために、ピーマン料

理を作っているのだ。

一夏たちにも食べさせる事になっているので、量もいるのから、姉貴にも手伝ってもらっている。

「竜牙、塩とって」

「はいよ。それ終わったらこれ摩り下ろしておいて。今日放せないから」

「了解や」

「完成だ」

「久しぶりに作り応えのあつた料理やつたな」

「量もあるしな」

「ほな、ヴィヴィオちゃんたち呼ぶか」

「だな」

俺は携帯を取り出して、なのはに連絡を入れておいた。  
もうすぐ来るだろう。

「竜牙君、来たよ」

「楽しみだっただよー!」

「久しぶりに竜牙さんの料理が食べれるとはな」

「たとえショックを受けても食べたいものがそこにある!」

鈴、お前は何言ってるんだ?

「ヴィヴィオ、俺が作った料理だ。ピーマンあるけど、少し我慢  
してみような?」

「うん」

「よし、じゃ、皆席について。早く食べよう」

「だな」

皆が席に着いた。

「いただきます」

『『『いただきます!』』』

一夏たち専用機持ちたち、俺の彼女たち、姉貴、ヴィヴィオが声を  
合わせて言う。



「まずはヴィヴィオからだ」

俺はヴィヴィオの分を皿に盛り、ヴィヴィオに渡す。

「い、いただきます」

パクツと一口。

「どうだ？ 大丈夫か？」

ヴィヴィオの感想を待つ。

ピーマン料理なんて滅多に作らないし、レパートリーも多くないから、心配なのだ。

「……おいしい」

「！ そつか、よかった……」

「ヴィヴィオちゃんがピーマン克服の第一歩を踏み出したところで、皆で食べちゃおう！」

姉貴がそう言うと、皆一斉に皿に手を伸ばした。

一番早かったのは一夏。

一夏お前、どんだけ食べたかったんだよ……。

「賑やかだな」

「せやな。こんな人数に料理を振舞うなんて、いつிரాయిやるうか……」

「さあな。俺はここまでの人数は初めてだ。多くて4、5人だ」

基本なのはたちか、一夏たちだったからな。

「さて、俺たちも食わないと無くなる！」

一夏たちが異様なペースで食べている。  
だから俺も食べる事にした。

『『『ご馳走様でした』』』

「「お粗末さまでした」」

かなりあつた量の料理を、二十分ほどで胃袋の中に入れ込んだ一夏

たち。

「さて、片付けるか」

俺は皿を持って移動する。

カチャカチャと音を立てながら、皿の山を洗っていく

「やっぱり兄貴の料理美味しいな」

「ああ。女のプライドがズタズタにされても食べたいものだ」

「にしても、何であんなに美味しく作れんのよ。一夏以上の主夫じゃない」

「そうですね……。是非ともご教授して頂きたいものですわ」

「確かに、料理が出来て悪くは無いからね」

「料理が美味くなれば嫁も……」

一夏たち専用機持ちたちがそう言っている。

「竜牙の料理大絶賛やな」

「姉貴も作ったじゃねえか」

「私は手伝ったやけやし、ほとんど竜牙が作ったもんやんか」

「そりゃそうだけどな」

「ヴィヴィオちゃんにも好評やったしね」

「今回の目的はそれだからな。まあ、ヴィヴィオが食べれたならそれでいいさ」

「せやな〜」

今の俺たちには、平和な時間が進んでいた。

Side〜竜牙〜out

## 第66話 学園祭開幕

Side(竜牙)

とうとうやってきた学園祭当日。

一般公開はしてないので花火などは上がらないが、生徒たちの盛り上がりは異常だった。

「うそ!? 一組である織斑君と八神君の接客が受けれるの!?!」

「しかも執事の燕尾服!」

「それだけじゃなくてゲームもあるらしいわよ?」

「しかも勝ったら写真を撮ってくれるんだって! ツーショットよ、ツーショット! これは行かない手は無いわね!」

一年一組の『ご奉仕喫茶』は大盛況で、朝から大忙しだった。

まあ俺は基本厨房で、ちよいちよいホールでも動いていた。

女子達は俺をずっとホールにしたかったようだが、……まあ、なんというか、なのはたちがね、怖かったんだよ。

で、怯えながらも何とか交渉した結果、俺はちよいちよいホールに出る羽目になったわけだ。

『執事にご褒美セット』がひとつですね。 それでは、少々お待ちください!』

つと、注文が来たな。

あの声は一夏か。

俺は手早く注文をセットする。

「『執事にご褒美セット』できたぞ」

「ありがとう」

俺はそれを渡し、マイクの音声に集中する。

『オムライスがお一つですね。少々お待ちください』

この声はシャルか。

俺はささっとオムライスを作る。

女子曰く、ここの評判に、俺の料理が入っているらしい。

「オムライス完成だ。持ってけ」

「美味しそう……」

俺がこういう料理を渡すと毎回こんな反応するんだよね。  
ん？

更識が来たようだな。

しかも一夏の写真を撮って、一夏は一時休憩に入っていた。

「八神君、指名入ったよ」

「誰だ？」

「高町先生」

「了解」

俺を指名しても、基本厨房にいるときはスルーするが、相手がなのはたちとなれば話が別だ。

「お待たせしました、后様、お姫様」

相手がなのはたちなら、お嬢様ではなく妃様だろう。

「き、きさきっ」

案の定取り乱した。

「どうかいたしましたか？」

「う、ううん！ なんでもないよ！」

「パパア、どうしたのお？」

いつもと違う口調を疑問に思ったのだろう。

「仕事でございます、お姫様」

そう答えるしかないのです、こう答える。

「ご注文は何になさいますか？」

「『執事にご褒美セット』に別料金込みで」

裏設定を使っ たな。

「オレンジジュース！」

「『執事にご褒美セット』に別料金込みでのサービスがお一つ、オレンジジュースがお一つですね。少々お待ちください」

俺はキッチンテーブルで品を受け取る。

「お待たせしました、后様、お嬢様。では、失礼します」

なのはの正面に座る。

「セット内容をご存知ですか？」

「うん、知ってるよ」

「では、説明は省かせていただきます」

「じゃあ、はい、あーん」

なのはは笑顔で俺にポッキーの先端を向ける。

「あーん」

俺はそれに何の抵抗を覚えずに口に含み、ポキッ、と小さな音を響かせて折る。

残ったそれを、なのはは自らの口に含み、飲み込んだ。

「では、別料金込みのサービスをさせていただきます」

俺もポッキーを取り、なのはへと向ける。



で、空気になつてゐるヴィヴィオはそれを眺めながらオレンジジュースを飲んでゐた。

「それでは、あーん」

「あーん」

なのは俺と同様に半分ほどで折り、残つたそれは俺が食べた。そして、それらが食べ終えると、最後に写真を撮つた。

俺となのはの間にヴィヴィオが入り、家族のような写真を。ちよいちよい更識が視線を向けていたような気がしたが、気にしなくてもいいだろう。

で、なのはたちは戻つていった。

「八神君、織斑君が戻つてきたら休憩してきていいよ。料理ばかり作つてくれてたし、少しくらいなら大丈夫だよ」

「そうか？ だったらそうさせてもらおう」

どうせ出てきたんだ。

それまではここで仕事するか。

それから数十分、更識の相手を適当にしたり、女子生徒の相手をしたり、途中寒気がしたりと、いろいろあつたが、一夏が戻つてきた。

「じゃあ俺休憩はいるから」

「あ、はい。じゅっくり」

俺は教室を出ると、まあ長い長蛇の列だ。

「あ！ 八神君だ！」

「え！？ どどこどこ！？」

「休憩？」

「まあな」

適当に流しながら、俺は一組から離れて行く。

「あ、竜牙、休憩？」

フェイトとあった。

「ああ。 しばらくは休憩だ」

「じゃあ一緒に回ってもいいかな？」

「いいぞ」

「やった」

嬉しそうに笑うフェイト。  
うん、可愛い。

「んじゃ、行くこうか」

「うん」

俺の左腕に抱きつくフェイト。  
いつものことなので気にしない。  
俺たちを目の当たりにした女子達はキャーキャー言ってたが、それも気にしない。

「どこに行く？」

「何か景品でも出る場所にするか」

「んー確か弓道部で何か景品があったよ」

「じゃあそこ行くか」

俺たちは弓道部へと足を向けた。

「お！ 八神君にテストロッサ先生じゃないっすか！ デートっすか？」

なんだ、このノリは？

「解釈は任せる。で、ここは何をするんだ？」

「ここはシンプルに弓道体験っすね。 的に当てれば景品ゲットっす」

「どっぴいつのかな？」

「これっす」

箱に入れられたアクセサリ。ストラップなど、種類も様々だ。見た目から、手作りのものと、市販のものもある。

「んじゃ、やってみるか」

「はい、弓と矢っす。あ、後で写真とつてもいいっすか？」

「それくらいなら別にいい」

「ありがとうっす」

でまあ、的の前に立ち、弓を構える。

「頑張つて、竜牙っ」

フェイトの応援もあることだし、確実にど真ん中を射抜くか。俺はさらに集中し、的に狙いを定める。

そして、トンツ、と音を立てて、見事に的のど真ん中を射抜いた。

「お！ ど真ん中！ やるっすねえ、流石生徒会長っすね」

「そりゃどつも」

「かつこよかったよ、竜牙」

「そうか。で、景品を選びたいんだが？」

「ど真ん中を射抜いたんで、二つ持って行ってくださいっす」

「いいのか？ だったら、これとこれだな」

俺が選んだのは同じ形をしたストラップを選んだ。

「はい、フェイト」

「ありがとう、竜牙。 お揃いだね」

「そうしたんだよ」

「二つ選べるならお揃いにするでしょ、普通。」

「っと、写真だったな」

俺は忘れかけていたことを思い出した。

「そうっす。 じゃあ、撮るっすよ」

シャツターが切られ、すぐに現像された。  
飾るのだろうか。

「もう行っていいか？」

「大丈夫っす」

俺とフェイトは弓道部を後にした。

Side 〱 竜牙 〱 out



第66話 学園祭開幕（後書き）

フェイトと学園祭デートでした。

第67話 学園祭デートその2？

Side↳竜牙

俺がフェイトと共に教室に戻ると、教室の一角に人ばかりが出来ていた。

「なんだ一体？」

「戻ったか」

「ラウラ、どうなってんだ？」

「狼だ」

「はい？」

「狼と小さい犬を連れてきた人がいてな、それに集まっているのだ」

「狼と小さい犬？ もしかして……」

俺とフェイトははその人だけに入り込む。

「やっぱり、シャルルさんたちでしたか」

「あら、竜牙君、フェイトちゃん。来たわよ」

「おっす竜牙！ フェイト！」



いたのはシャマルさんにヴィータ、狼のザフィーラに、犬のアルフだ。

「アルフ！」

アルフを見たフェイトがアルフを抱きかかえた。

「アルフも連れてきたんですか」

「ええ。フェイトちゃんのペットだしね。ご主人様に会いたいだろうと思ってね」

「あ、シグナムに会いましたか？」

「ええ。ちゃんとやってるようでよかったわ」

「え、えーっとお兄ちゃん？ その人誰？」

「シャルか。そう言えば知らなかったな。この人はシグナムのお母さんだ」

『『『え！？ 若っ！』』』

どうみてもシャマルさんは二十代にしか見えないからな。とても直成人になる子供を生んだようには見えない。

「ところで竜牙君、仕事に戻らなくてもいいのかしら？」

「あ、そうでした。失礼します」

俺は厨房に戻った。  
それから三十分ほど料理を作り、一回店の体勢を整えるためにまた休憩となった。

「八神、休憩か？」

「千冬か」

「織斑先生だ」

「折角の学園祭なんだから吹っ切れようぜ。まあばれても仕方がないと言うことで」

俺と千冬の間を知っている人も、ヴィヴィオの『千冬ママ』発言で驚いていたが、知らない人はもっと驚いていた。  
あときは適当に誤魔化したけど、折角の学園祭だし、もうこの際はれでもいいや。

「……いいんですか？」

「俺はもうこの際気にしないことにしたさ。まあ、千冬次第だ」

千冬は鬼教官として知られているし、イメージもある。  
俺たちの関係が知られれば、そのイメージが崩れ去るし、後々どうなるかわからない。

「……もう隠すのも面倒になってきましたし、ちょうどいいですね  
隠すのをやめたか。」

まあ、鋭い奴なら俺と千冬の関係に気づいているかもな。

でもまあ、ここはなぜかアホばっかだからばれてないかもな。

「じゃ、行くか」

「そうですね」

吹っ切れた俺と千冬は、いつもの如く腕を組みながら学園祭を満喫する事にした。

それを見て騒ぐ女子たち。

まあ当たり前か。

「嘘！？ 織斑先生も！？」

「美人揃い！？」

「あ！ だから『ママ』なのか！」

「私の千冬様がああー！！」

……何を言ってるんだ、この馬鹿は？

千冬は俺のだ！」

「りゅ、竜牙さん！？ 何を言ってるんですか！？」

顔を赤くして驚く千冬。

「あ、つい思っている事が口に」

後半から……と言うか、恥ずかしい部分を口に出したようだった。

「悪い悪い。 つい馬鹿な奴の発言に反応してしまった」

まったく、変な思考の馬鹿な女っているもんだな。  
千冬がそっちの気を持つてるわけないのにな。  
てか誰が渡すか。

「まあ馬鹿は放っておこうぜ」

「そ、そうですね」

うん、赤くなってる千冬も可愛いな。  
これがギャップ萌えてやつか。

「お、クレープだ。 腹の足しに他にも食つかないかな」

「竜牙さんは人気ですからね」

なんかとげがあるな。

女子たちに接客するのが気に入らないのだろう。

「俺はお前たち以外、眼中に無いさ」

耳元で囁く。

「なっ／＼／！？」

案の定真っ赤になる千冬。  
さっきから赤くなってるばかりだな。  
俺がそうさせてるんだけど。

「あ、竜牙に千冬さん、いらっしやい」

四組はクレープを販売しており、四組の副担任のフェイトがちょうど手伝っていたようだ。

「その様子だと、二人とももう隠す気はないみたいだね」

「ああ。千冬は何にするんだ？」

「私はストロベリーで」

「んじゃ、俺はチョコで」

「ストロベリーとチョコが一つずつだね。ちょっと待ってて」

どれほどの味が、見物だな。

「はい、ストロベリーとチョコが一つずつ。二つで五百円だよ」

「どうも」

俺はフェイトに五百円を渡し、クレープを受け取る。

俺は受け取ったクレープを口に含む。

「……結構美味しいな」

予想以上に美味かった。

「そうですね。学園祭のものにしては美味しいですね」

千冬も賛同してくれた。

「じゃ、またな、フェイト」

フェイトのいる四組を離れて、他にも少し食べ、人気の少ないベンチへと来た。

「人いないところが落ち着くー」

「一気にだらけましたね」

「好きな人がいるのに、周りに視線ばっかあったら落ち着けないじゃん」

「………そうですね」

千冬も結構くつろいでるよな。

少し無理をしているのだろうか、少しうとうととしている。

俺は千冬の肩を抱き、自分に寄せる。

「竜牙さん!?!」

「少し休め。お前だって疲れてるだろう? だから休め」

「しかし竜牙さんも」

「俺は気にしなくていい。俺はお前に倒れてほしくない」

俺は千冬たちに無理はしてほしくないからな。

「……では、お言葉に甘えて、少し肩を貸してください」  
千冬は完全に俺に身体を預け、すぐにスヤスヤと眠った。  
相当疲れてたのだろうか。

「……少しの間、ゆっくりと休んでくれ、千冬」

Side 〽 竜牙 〽 out

第67話 学園祭デートその2? (後書き)

どうだったでしょうか？

自分ではgood goodな気がします。



第68話 シンデレラ

Side 竜牙

「千冬、もう時間だから起きろ」

千冬が眠って三十分ほどしてから、休憩終了の時間が近づいてきたので千冬を起こす。

「ふみゆ……時間……ですか……?」

やべえ、寝起きで目を擦ってる千冬、滅茶苦茶可愛いんだけど。

「あ、ああ、もう時間だ」

「そう、ですか……」

「寝起きだが、大丈夫か?」

「はい……大丈夫です……」

「顔洗ってこれば? 目覚めるから」

「そうですね……行ってきます。竜牙さんは教室に戻っててください」

「わかった。またな」

「はい」

ベンチから立ちあがり、千冬は去っていった。

俺はそれを見届けると、俺もベンチから立ちあがり、教室へと歩みを進めた。

俺は教室に戻ると厨房に入り、次々と入る注文を片っ端から作って

時間が過ぎていくたびにオムライスとかチャーハンの注文が増えていくのはなぜだろうか。

(竜牙の料理が評判になり、どんどん集まってきたのだ)

「ん？　一夏が騒がしいな」

ピンマイクから聞こえる叫び声。

女子の声が聞こえるが、周囲のざわめきもあるため、それが誰のものなのかはわからない。

「もしかして……!!」

そろそろ時間でもあるし、あいつの気がする。

「ここに更識が来てないか？」

「あ、うん、来てるよ」

「やっぱりな。悪いが、生徒会の企画があるんでまた抜けるぞ」

「あ、うん、わかった」

俺は厨房を後にし、ホールへと出る。

「一夏、強制連行だ」

「何故に!?!」

「ここであらしたら面白くないだろう」

「あのー、お兄ちゃん? 一夏連れてかれると困るんだけど……」

「シャル、お前も来い」

「ふえ!?!」

「ドレス着れるぞ」

ここでジョーカーを切る。

今回の生徒会企画の醍醐味で、一番シャルが可能性のあるものだ。

「上手くいけば一夏とまた同室になれるぞ?」(ボソッ)

「ほ、本当!?!」

小声で驚く。

「ああ。生徒会権限でそうさせる」(ボソボソ)

「じゃ、じゃあ、少しだけ……」

落ちた。

「んじゃ、行くぞ。で、聞き耳立ててる輩たちはどうするんだ?

来るの？ 来ないの？ とつとと決める」

一応声をかけておく。

どうせ後で五月蠅いだろうからな。

「早くしないと放っておくぞ。俺はお前らが出よつが出まいがどうでもいいんだから」

「し、仕方がない」

「つ、付き合っただけあげましよう」

「こ、今回だけな」

俺がシャルだけ誘ったのに何かを感じたのか？

「んじゃ、行くぞ」

「あ、そう言えば、演目って何なんだ？」

「「シンデレラだ」よ」「」

俺と更識の声が重なった。

「結構似合ってるじゃねえか」

「何で俺だけなんだよ……」

「だって俺と更識で決めた事だぜ？俺がやるわけないじゃん。それに生徒会長だし」

「最後のは関係がない気が……」

「気にするな」

生徒会長権限で力ずくでもやらないようにできるんだよ。

「一夏、王冠だ。それはこの劇で重要だからな。何かあっても耐えろよ」

「何があるんだよ！？滅茶苦茶怖いじゃねえか！」

「大丈夫、死なないから」

「マジで何があるんだよ！？」

「そろそろ始まるぞ」

「マジで怖いんだけど！？それと台本とか見てないんだけど！？」

「安心しろ、基本アドリブで十分だから。流れに沿ってけばわかる」

「物凄く心配になってきた……」

そんな事は言いつつも舞台袖に移動する一夏。

「んじゃ、幕開けだ」

ブザーが鳴り響き、照明が落ちた。

『むかしむかしあるところに、シンデレラという少女が居ました』

更識のアナウンスが流れる。

一夏はセツトの舞踏会エリアへ向かっていった。

『否、それはもはや名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことさえいとわぬ地上最強の兵士たち。彼女達を呼ぶにふさわしい称号……それが【灰被り姫】<sup>シンデレラ</sup>！』

もはや一般的なシンデレラとはかけ離れてしまった。

内容は更識に任せだが（確認はした）、あいつ天才だけどやっぱり馬鹿だろ（笑）。

『今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜が始まる。王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女達が舞い踊る！』

「は、はあっ!?!」

一夏の驚愕の声。

まあ、当たり前か。

「もらったあああ！」

最初に飛び出したのは鈴、中国の手裏剣、飛刀を投げる。

「し、死んだらどうするんだよ!？」

「死なない程度に殺すわよ！」

「意味がわからん！」

やっぱり鈴は理不尽の塊だな。

「だりゃあ!！」

鈴がかかと落としをかます。

……強化ガラスの靴を履いて……。

「アホか！ あぶねえ!!！」

殺人癖があるのか？

「のわあっ!？」

一夏の隣に何かが通過する。

それはスナイパーライフルで、そんなものを使うのはセシリアしかない。

……こいつら、本当に一夏を殺す気か？

「し、し、死ぬ！ 死んでしまっ!！」

一夏の嘆きが聞こえてくる。  
俺も原因の一人だけど、同情するもん。

「一夏、伏せて！」

狙撃から逃げていた一夏は無駄に広いステージを移動し、セシリアの罠にかかった。

そんな一夏の前に現れたのは、対弾シールドを装備したシャルだった。

一夏を守るうとするのはシャルだけってどうなのさ。

逃げるように指示するシャルだったが、控えめに王冠を置いてくようにも言った。

そして、王冠に手をかけた一夏にアナウンスが遮った。

『王子様にとって国とは全て。その重要機密が隠された王冠を失うと、自責の念によって電流が流れます』

それに間に合わず、そのまま王冠を取った一夏。

「ぎゃあああああっ!?!」

バリバリバリ!

「な、なんじゃこりゃあ!?!」

服の所々が焼き切れて煙を上げていた。  
更識の奴、やりすぎだろうが!

『ああ! なんとということでしょう。王子様の国を思う心はそうまでも重いのか。しかし、私達には見守るしかできません。な



んといじつとでしよっ」

「二回言わなくていいですよー！」

叫ぶ一夏。

お前の無念は後で俺が代わりに晴らしてやるからな。

「す、すまん、シャル。　そういうことだから」

「ええっ！？　そんな、困るよー！」

「そう言われても……スマン！」

「あっ！　い、一夏ってばあ！」

脱兎の如く逃げ出した一夏。

一夏、俺の助言を無視したな？

まあ俺もあそこまで強い電流が流れるとは思わなかったから仕方がないが。

「一夏、そこに直れ！」

「王冠は私がいただく」

箒は日本刀、ラウラは二刀流のタクティカル・ナイフ。

「あ、あ、あぶねえ！ー！」

間一髪避けた一夏。

……本当にシャル以外は一夏を殺す気なのか？

「邪魔をするな、ラウラ！」

「こちらの台詞だ。まずはお前から排除してやるわ」

「面白い……来い！」

なぜか二人は勝手にバトルを始めた。

……馬鹿だろ。

『さあ！ ただいまからフリーエントリー組の参加です！ みなさん、王子様の王冠目指してがんばってください！』

大量のシンデレラが舞台に解き放たれた。

「織斑君、おとなしくしなさい！」

「私と幸せになりましょう、王子様！」

「そいつを……よこせえええ！」

セットの上を走り回る一夏。

「見つけたぞ、一夏！」

あ、幕に見つかった。

「その王冠をよこせ！ そつすれば……そつすれば……」

「な、なんだよ？」

「ええい！ とにかくよこせ！ 断れば斬る！」

本当に殺人事件が起こりそうだ。

あ、一夏が舞台上から消えた。

……動き出したか。

俺は一夏がいるであろう場所へと向かった。

S i d e へ 竜 牙 へ o u t

第69話 一夏と亡国機業（前書き）

タイトルが変！

それと一夏のキャラが崩壊した気が……。

第69話 一夏と亡国機業

S i d e 一夏

セットから俺を連れ出したのは、IS装備開発企業の巻紙礼子さんだった。

「どうして巻紙さんが……」

「はい。この機会に白式をいただくと思ってまして」

「……は？」

ニコニコとした笑顔は崩さない。

「いいからとつとよこしやがれよ、ガキ」

「えつと……あの、冗談ですか？」

「冗談でてめえみたいなガキと話すかよ、マジでムカツクぜ」

口調は全然違うのに、表情は変わらない。

その温度差についていけずにいると、思い切り腹をけられた。

「あーあ、クソツたれが。顔が戻らないじゃねーかよ。この私の顔がよ」

「ゲホッ、ゲホッ！ あ、あなた一体……」

「ああ？ 私か？ 企業の人間に成りすました謎の美女だよ。おら、嬉しいか」

ここに来てようやく相手が敵だと訴えてきた。なんて平和ボケしてるんだよ、俺は。これじゃあ兄貴に顔向けできねえな。

「行くぞゼクロム！ 『黒式』だ！」

『ああ、行くぞ、一夏！』

漆黒の装甲の『白式』、『黒式』を纏った。

緊急展開によって、ISスーツごと呼び出した。

だが、それを行った所為でシールドエネルギーを使用してしまった。

「！ 待ってたぜ、ISを使うのをよお」

ようやく笑みを崩した巻紙さん（仮）。

「ようやくこいつの出番だからさあ！」

「！」

スーツを引き裂いて、女の背後から鋭利な『爪』が飛び出す。それも、クモの足によく似ていて、黄色と黒の配色で、刃物のような先端を持っていた。

「くらえ！」

八つの装甲脚の先端が割れるように開いて、銃口を見せる。

「まもる」

弾丸は簡単に防ぎ、その間に“雪片式型”を展開した。

「何なんだよ、あんたは?!」

雷の纏った雪片の突きを放つが、避けられる。

「ああん? 知らねーのかよ、悪の組織の一人だつーの!」

「ふざけて」

「ふざけてねえつつの! ガキが! 秘密結社『亡国機業』が一人、オータム様って言えばわかるかあ?!」

「知るかあ!」

自称オータムは完全なIS展開状態になると、脚の銃口から実弾射撃を行ってくる。

「くらえ!」

八問の集中砲火。

左右から迫ってくるそれを“まもる”で防ぎ、瞬時加速で懐に入り込み、零落白夜で切り裂く。

「ぐっ! こんのガキい……」

竜牙様様だな。

かなり余裕を持って戦える。

「お前を拘束させてもらおう」

「やれるもんならやってみやがれ！」

俺のほうが優位なのに、あいつはなぜか得意げだ。

……もしかしてこいつ、馬鹿のなか？

「ついでに教えてやんよ。 第二回モンド・グロツソでお前を拉致したのうちの組織だ！ 感動のご対面だなあ、ハハハハ！」

「……！」

その言葉に俺の沸点が超えた。

そうか、そうかよ。

だったら……

「だったら、手加減しなくてもいいよなあ！ ついでにあのときの借りも返してやらあ……！」

俺は雪片を握り締める。

ゼクロム、“クロスサンダー”だ。

《ここは狭い。 この部屋を破壊するかも知れんぞ？》

いいからやってくれ。 俺は、こいつらを許すことはできねえ。



《……わかった》

キュイイイン！

尻尾のタービンが回り、球形の雷に包み込まれる。

「これで終わらせる！ “クロスサンダー” アアアア！！！」

瞬時加速と零落白夜も使用し、威力抜群の一撃と化した一撃必殺の突きを放った。

ズガアアアアン！！

更衣室の壁を破壊し、オータムが吹き飛ばされて外に出た。

相手の装甲は最初の見る影もなくボロボロで、修復するのも大変な状態になっていた。

「俺、必要なかったみたいだな」

「兄貴、それに楯無さんも」

更衣室に入ってきたのは兄貴と楯無さん。

このタイミングを狙ってたのか？

「さて、この間にオータムを捕獲するぞ」

「ええ。　ここまでやって逃げられるのは嫌だしね」

兄貴と楯無さんがオータムに近づくが、それを遮るように長身の女性が立ちふさがった。

「ナンバーズ！」

「生憎、こいつを捕らえられるのは困る。今回は引かせてもらおうぞ」

「誰が逃がすか！」

兄貴はISを纏った。  
だが、

「まったねー！」

地面から人が飛び出し、その二人を抱えて地面に消えた。

「くそっ！ また逃がしたか！」

本当に悔しそうな兄貴。

追い詰めたのに逃げられたのだから仕方がないのか。

「ふう……一夏、後で白式を貸せ。やることがある」

「？ わかった」

「取り逃がしたことだし、戻るぞ」

俺たちは戻ったのだった。

Side 一夏 out

S i d e 〱 竜牙

食堂にて。

「なのはのところにもナンバーズが来たのか？」

「うん。 ヴィヴィオがいたけど、フェイトちゃんが来てくれたおかげで大丈夫だったよ」

「シグナムや千冬のところには行ったのか？」

「いや、私のほうには来なかった」

「私のところにもだ」

「なのはが狙いだっただのか？ もしくは……」

ヴィヴィオかもしれない。

「これで『亡国機業』とスカリエッティがグルなのはわかった。十分収穫だ」

「そうだな」

スカリエッティの足取りが一切掴めないの、こついった情報でもあったほうがいい。

「っと忘れていたが、シャルにプレゼントだ」

「プレゼント？ 僕に？」

「ほらよ」

俺はシャルにその物を渡す。

「これって…！」

「そう、一夏の王冠だ」

更衣室に行く際に見つけた。

「なあ兄貴、その王冠って何なんだ？」

「その王冠を手にした者は、一夏と同質になれる権利が与えられるんだ」

「へーそうなのか」

「ず、ずるいです、竜牙さん…！」

「そうですね！ いつもシャルロットさんばかり…！」

「ここは公平にじゃんけんでしょうが…！」

「一夏は私の嫁だ。 故に私によこせ」

「……俺はたとえシャルが妹でなくても、シャルに渡したぞ」

「「「なぜだ（のですの）（んでよ）！？」」「」」

「弟分を殺人未遂の行動をしていた貴様らに渡す馬鹿がどこにいる？ この中で唯一一夏を守ろうとしたのはシャルだけだ。普通に考えればそれが妥当だ」

「確かに、シャルロットちゃん以外は皆一夏君を殺すんじゃないかってひやひやしたもんね」

「うんうん。それが普通だと思うよ」

「殺人未遂の相手に同室にするわけにはいかんしな」

「つと忘れてた。あとで更識締めとかねえとな」

「なぜだ？」

「忘れたか？ あいつが設定した電流の威力を」

「「「「あーなるほど」「」」「」」

実際に受けた一夏、それを見ていた千冬、なのは、フェイト、シグナムが納得した。

「と言うことで、シャルは荷物を一夏の部屋に運んでおけよ」

「うんー！」

物凄く嬉しそうだ。

「んじゃ、俺は戻る。　じゃあな、ヴィヴィオ」

「バイバイ」

ヴィヴィオたちに別れを告げて、白式を持って部屋に戻った。

俺は白式にあるものを組み込んだ。

それは、《剥離剤<sup>リムーバー</sup>》と呼ばれるものの耐性だ。

効果は遠隔コイル。

便利だったりする。

おそらくあいつらはリムーバーを使って一夏の白式を奪うつもりだったはずだ。

次また来た時にでもやろうとするはずだから、先に手を打っておく。なぜこれがあるのかと言うと、これもまた父さんと母さんが残した設計図の一つにあったからだ。

（もしかすると父さんと母さんがスカリエッティの味方についているのかもしれないな……）

俺には信じたくない仮定が生まれてしまった。

Side ㄱ 竜牙 ㄱ out

第70話

生徒会副会長就任（前書き）

五巻終了！

## 第70話 生徒会副会長就任

Side 竜牙

「先日の学園祭ではお疲れ様でした。それではこれより、投票結果を発表する」

俺は生徒会長になってしまっているため、全校生徒の前に立っている。

本来なら更識に押し付けるつもりだったんだけどな。

「一位は、生徒会主催の観客参加型演劇『シンデレラ』」

「……え？」

ぼかんと全校生徒が口を開く。

そして、その数秒後に我に返った女子一同からブーイングが起きた。これだから嫌だったんだよ。

「卑怯！ ずるい！ イカサマ！」

「何で生徒会なのよ！ おかしいわよ！」

「私たちががんばったのに！」

「はい黙れー。苦情言った部活には一夏を譲らんぞ」

俺の一言で全員が黙る。

どんだけ一夏が欲しいんだよ。



「劇の参加条件は『生徒会に投票すること』だ。だが、俺たち生徒会は参加を強制したわけではない。これはお前らが商品に眼を眩ませた結果だ。自身の意思で参加したのだから反論は認めない」  
それでも納得できないのか、女子たちは再び騒ぎ出した。

「はあ……、うるさいぞお前ら。しゃーないからこれを使わせてもらう。……一夏、先に言っとく。悪い……」

一夏に先に謝っておく。  
正直これは使いたくなかったが、このまま終わらせても後々面倒になるだけだ。

「生徒会メンバーとなった織斑一夏を適宜各部活動に派遣する。男子であるために大会参加はできないが、マネージャーなど、雑務でもやらせてくれ。それらの申請書は、生徒会に提出するように」  
本当にすまない、一夏……。

「ま、まあ、それなら……」

「し、仕方がないわね。納得してあげましょうか」

「うちの部活勝ち目なかったし、これはタナボタね！」

各部活動のアピールが始まった。

「まだ黙れ。派遣した部活で、一夏に負担が掛かりすぎる、無茶振りをしすぎるなど、一夏に何かあった場合、それ相応の処置を取

らせてもらうので忘れないように。では、織斑一夏は生徒会に所属、以後、俺の指示に従ってもらう。以上だ」

俺がそう締めると女子たちは拍手やら口笛やらをしだした。

一夏に相当負担が掛かるかもな……。

「織斑一夏君、生徒会副会長着任おめでとう！」

「おめでとう」

「おめでとう。これからよろしく」

「おめでとう。だがすまん」

上から更識、のほほん、虚さん、俺だ。  
場所は生徒会室。

「……なぜこんなことに……」

「あら、いい解決方法でしょう？ 元は一夏くんがどこの部活にも入らないからいけないのよ。学園長からも、生徒会権限でどこかに入部させるようにって言われてね」

「おりむゝがどこかに入ればー、一部の人は諦めるだろうけど」

「その他大勢の生徒が『うちの部活に入れて』と言い出すのは必至でしょう。そのため、生徒会で今回の借置をとらせていただきます」

見事な連携。

一夏は抵抗が無理だと悟り、がつくりと肩を落とした。

「俺の意志が無視されている……」

「あら、なあに？　こんな美少女三人もいるのに、ご不満？」

「そつだよ。　おりむーは美少女はべらかしてるんだよー」

「美少女かどうかは知りませんが、ここでの仕事はあなたに有益な経験を生むことですよ」

やっぱりまともなのは虚さんだけだな。

「本当にすまない一夏。　お前の派遣はする気はなかったのだが、あの場で締めるのはできなかった。　できるだけお前の負担を減らすようにするが、頑張ってくれ」

「その気遣いだけでも俺は嬉しいぜ、兄貴……」

女子たちの文句が出ないように日取りを減らし、一夏に何かあったらそれ相応の処罰を与える。

最悪の場合はその部活に一夏を派遣するのを禁止にさせる。

そつでもしないと一夏は倒れるだろう。

……特に箒たちの手によって。

「もしかしてBL?」

更識がそんな馬鹿なことをほざきやがった。

「ほう、男同士の気遣いをそう取るか。よしわかった。今からそんなことを言えなくなるまでボコボコにしてやるから。覚悟しろよ? 一夏でも十七分は持ったぞから、せめて二十分は持てよ? まあ、その後一夏はまったく動けなかったが。安心しろ、絶対に生かしてやるから」

一夏は俺がしゃべってる途中から震えだした。夏休みのことを思い出したのだろう。

「本当にすみませんでした。許してください」

それを見たのか、俺がしゃべり終わると更識は綺麗な土下座をした。

「仕方がない。これからの特訓をもう少しハードにするだけで許してやるわ」

俺は少しを強調して、いい笑顔で言う。

「(……兄貴、絶対遊んでる……)」

一夏がそんなことを感じていた。土下座をしていた更識は汗をだらだらと流している。

「冗談だ。俺と一夏をからかうのは大概にしとけよ。俺はから

かわれるのは嫌いだ」

一呼吸あけて告げる。

「それと、一夏をからかっていたいいのは俺だけだ」

「兄貴い!？」

「違ったな。 千冬もだったな」

「兄貴い……」

「冗談だ。 それと一夏、お前はしばらくは放課後に毎回ここ集合な。 基本的に一回集まって、何もなかったらいつも通り特訓だ」

「派遣先が決まったらそちらの部活に行くことを優先するようにしてください」

「わかりました」

「ところで……ひとつ、いいですか？」

「? なんですか？」

虚さんにしては齒切れが悪いな。

言いにくそうにしながら、やっと小声で口を開いた。

「学園祭のときにいたお友達は、何というお名前ですか？」

「え? あ、弾のことですか? 五反田弾です。 市立の高校に通

つてますよ」

「そ、そう……ですか。年は織斑君と同じですね？」

「ええ、そりゃまあ」

「……二つも年下……」

「え？」

「なんでもありません。ありがとうございます」

なんとか聞き取れたぜ。

多分一夏の友達に惚れたのだろう。

「一夏君の副会長就任を祝ってケーキを焼いてきたから、みんなでいただきますしよう」

「わ。さんせ」

「では、お茶をいれましょう」

「ええ、お願い。本音ちゃんは取り皿をお願いね」

「はい」

並べられたケーキは旨そうだった。

「それでは……乾杯！」

「かんぱーい」

「乾杯」

「乾杯」

「は、はは……乾杯。 はあ……」

こうして、一夏の生徒会所属が決まった。

Side～竜牙～out

Side～???～

「ああくそっ！ イライラするぜ！」

とある高層マンションの最上階。

豪華な飾りで溢れかえっているその部屋で、一夏にボコボコにされたオータムが憤慨していた。

「うるさいよ、オータム。 もう少し静かに出来ないのかい？」

「うるっせえな！ スカリエツティ！ 黙ってる！」

「ジェイルにあたるな。 自分の失態だろう。 もしあの時ジェイルが助けてくれなかったらあなたは今頃捕まっていた。 そんなこともわからん馬鹿がジェイルにたてつくな」

冷笑を浮かべた少女。

「そうですねよ？ ただでさえ単細胞なあなたがドクターの計画の邪魔なんてされたら堪ったものではありませんもの」

ナンバーズのクアットロも出てきた。

「クアットロ、セインたちの様子はどうだい？」

「高町なのは、フェイト・T・ハラOWNと戦闘を行った子達はダメージがありますが、そこまで大きくないので問題はありません」

「そうか。ありがとう」

「無視すんな！」

「うるさいわよ、オータム」

バスルームから出てきたのは美しい容貌の女性。  
薄い金色の髪が、明かりに照らされキラキラと透明の光を放つ。

「スコール……！」

「怒ってばかりいると老けるわよ。落ち着きなさい、オータム」

スコールと呼ばれた女性はバスローブのままソファアールへと腰を下ろした。

「ところでジェイル、何か反応はないのかしら？」



「その格好のことかい？ 別に気にならないね」

「女としての自信をなくすわね」

「思ってもないことを」

「うふふっ、わかるものね」

「もう見慣れてしまっているからね。　いまさびどっこい思っているよ」  
「はないよ」

スカリエッツィがスコールと仲良く話している姿を見てムツとする少女。

「どうしたんだい？」

「ドクターがスコールと話しているのを見て嫉妬しているんですのよ」

「そうだったのかい。　可愛いところもあるじゃないか」

頭をスカリエッツィに撫でられてご満悦な表情の少女。

「エム、お楽しみのところ悪いけど、ISを整備に回しておいて頂戴。『サイレント・ゼフィルス』はまだ奪って間もない機体調整が必要よ」

「わかった」

エムと呼ばれた少女は胸のクロケットを握り締めて瞼を閉じる。

( もう少し……もう少しだ…… )

ずっと、待っていた。

焦がれたときは、もうすぐ側まで来ている。

( これで私の復習がはじめられる……。そう、やっと )

やっと会うことができる。

( ……織斑千冬…… )

少女の口元は邪悪に歪むのだった。

S i d e ~ ~ ~ o u t

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9964t/>

---

IS インフィニット・ストラトス～神の子と謳われし男～

2011年11月15日21時38分発行